

カルデアの闇 —あらゆる生物の生体データを  
集めてください—

九折

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

人理修復後、クリプター関係も全て片付き平穏な世界になった。

未だ世界各地で起きている問題を解決すべくサーヴァントたちは各々行動する。

藤丸立香も普通の高校生にゆつくりと戻る。

カルデアは未来に何が起きるかわからないため準備を始め、力を蓄える時期だとサーヴァントたちの知識も使わずと平穏が続くように動き続ける。しかし同時にそれはゆつくりとサーヴァントたちを蝕んでいく分岐点だった。

今まで発見されたエネミー、未知の生物、そして人間、たくさん生物のデータを集める必要がある。その任務を請け負ったサーヴァント達は人理のためだと動き出す。

登場中（R—18描写あり）サーヴァント

フローレンス・ナイチンゲール

スカサハ（ランサー）

ジャンヌ・ダルク（ルーラー）

ペンテシレイア

デオン

お竜さん

加藤段蔵

アルトリア・ペンドラゴン（ランサー）

ダ・ヴィンチ（ライダー）

マッシュ

アタランテ・オルタ

酒呑童子

メアリー・リード

エルキドゥ

その他隠しサバあり

登場中の竿役・エネミー

バイコーン

スプリガン

ホムンクルス

ウエアウルフ

グール

海魔

小鬼

兵士

カルデアスタッフ

藤丸立香

魔猪

(注意：明言していないサーヴァントやエネミーは伏せています。)

# 目次

|                                     |     |
|-------------------------------------|-----|
| カルデアの隠された部分                         |     |
| フローレンス・ナイチンゲールのとある1日 (+A)           | 1   |
| フローレンス・ナイチンゲールと特異点前編 (+A)           | 40  |
| フローレンス・ナイチンゲールと特異点中編                | 64  |
| フローレンス・ナイチンゲールと特異点後編 (+ジャンヌ (ルーラー)) | 77  |
| ペンテシレイアと海魔 (+マシユ非s)                 | 112 |
| フローレンス・ナイチンゲールの事後                   | 125 |
| お竜さんの食レポ 前編                         | 142 |
| お竜さんの食レポ 後編 (+D)                    | 158 |
| カルデア修学旅行1 (ナイチンゲール)                 | 176 |
| カルデア修学旅行2 (ナイチンゲール)                 | 191 |
| カルデア修学旅行3 (ナイチンゲール)                 | 208 |
| カスカサハ (ランサー)                        | 225 |
| カルデア修学旅行4 (ナイチンゲール)                 |     |

|                        |     |                     |     |
|------------------------|-----|---------------------|-----|
| ダウン・スタリオンの苦悩1 (アルトリ    |     | 又 (ルーラー) + ジャック) —— | 380 |
| ア (ランサー) 非 Sex) ——     |     | フローレンス・ナイチンゲールのいじ   |     |
| ダウン・スタリオンの苦悩2 (アルトリ    |     | め解消 ——              | 399 |
| ア (ランサー) + デオン) ——     |     | フローレンス・ナイチンゲールと第七   |     |
| ダウン・スタリオンの苦悩3 (アルトリ    |     | 特異点の悪魔 ——           | 424 |
| ア (ランサー) + S) ——       |     | エルキドウのとある日々 前編 (エ   |     |
| 加藤段蔵の搾精機構 前編 ——        | 292 | ルキドウ) ——            | 444 |
| 加藤段蔵の搾精機構 後編 ——        | 315 | エルキドウのとある日々 後編      | 469 |
| 藤丸立香のオナホール (加藤段蔵 + ダ   |     |                     |     |
| ヴァインチ (ライダー) ——        | 336 |                     |     |
| アタランテ・オルタの慟哭 (酒吞童子 +   |     |                     |     |
| メアリーリード (ライダー) ——      | 353 |                     |     |
| 幕間1 (マシユ + エルキドウ + ジヤン |     |                     |     |

# カルデアの隠された部分

## フローレンス・ナイチンゲールのとある一日（＋A）

人理継続保障機関フィニス・カルデアで行われた人理修復により、人類の焼失した歴史は再び幕をあげた。

クリプターとの戦闘も苛烈を極めたが、最終的には和解していき、当初は思いもしなかった平穏な日常が戻ってきたことに、藤丸立香はようやく腰を落ちつけると安堵した。

現在の藤丸立香としての立ち位置は世界を救ったどこか宇宙そのものとの戦争を終えたにもかかわらず本人が望んだのもあって普通の高校生だった。

ただし年齢は通常の高校生とは数年の差が開いており、学業もまたおろそか（そんなことを勉強している暇などなかったことはカルデア関係者は百も承知）であるため、サーヴァントたちを家庭教師として雇い（率先して皆参加）なんとか高校一年生として日本の都内で学校生活を送り始めていた。

もちろん大きな摩擦、差が生まれすぎていて少々同年代の若者と距離ができてしまうところではあったが持ち前のコミュニケーション能力でそこそこ普通の高校生として

学校に馴染んだ。

多くのサーヴァントが「え？とりあえず危機は去ったわけだけど、まあ、まだ世界中色々な紛争もあるし、またいつ何か良からぬものたちが人理を脅かすかもしれないから、情報漏洩だけは気をつけるけど現界したまま自由行動するよ。」

というスタンスでカルデアスタッフの説明も聞かずに霊体化してほとんどが消えた。

もちろん、カルデアも大事故があったり、そもそもコヤンスカヤからの襲撃で様々なところに問題が起きており人手不足、新しくカルデアの所長として正式に就任したゴルドルフも「え？君たち帰っちゃわないよね？せっかくなんだ仕事手伝っていつてくれないも構わないのだよ！ちみい。」と頼る気満々でもあったため、座に帰るサーヴァントの方が少なく、カルデアのスタッフとして仕事をする者、立香に霊体化して憑きそう者、紛争地帯に赴き影で丸く収める者、自由奔放に世界を見て回る者、など多岐に渡って皆各々の行動理念を持って動いていた。

当然藤丸はカルデアがすでに実家のようなもので、ダ・ヴィンチちゃんが都合良く開発した「ど〇でもドア」でカルデアにだけ行こうと思えばすぐにいける環境にはあった。

「それでえ？君はなんで残っているんだい？てつきり『私が解くべき謎はなくなった。帰らせてもらうことにしよう。当然あの男も当然連れていくがね。こつちで悪巧みさ

れては困る』とか言つて2人で帰ると思つてたけどお?。」

小さくなったダ・ヴィンチちゃん、ダ・ヴィンチ・リリイ、ロリンチちゃん、ことダ・ヴィンチは考えられないほど膨大なキーボードがあるデスクに座りながら背中を反らせて逆さまになつた視界で後ろでココインを打とうとしているホームズに話しかけた。「いやね……………、私があつた男を連れて行くこうとする前に、既にいなくなつていたのでね。帰るに帰られない状況なのだよ。」

ココインを打ち終え、ソファにゆつたりと座るホームズを見てダ・ヴィンチはため息をついた。

「そんな姿、マスター君が見たら幻滅だなあ。」

「初歩的なことさ、彼はここに週末しかこない。」

今が平日の真昼間であることから、マスターが来ない事はカルデアスタッフにはわかっていた。

ダ・ヴィンチはココインを打ち終えた同僚に精密作業をさせる気にもならず、部屋にはコーヒーの香りとダメ大人と幼女がいる謎空間が出来上がっていた。

カルデア内には未だサーヴァントが多く常駐している。最たる例はサンソン、アスクレピオス、ホーエンハイム、テスラ、アヴィケブロン、メディア、エジソン、など。そ

して何よりフローレンス・ナイチンゲール。

彼女はバーサーカでありながら、正式な医療を学んだ者であるゆえに世界中から運ばれる緊急処置が必要な患者を治療することに精を出している。

カルデアは様々な実験や検査、開発が行われておりデータを管理、統合し新たな発見、発明をし、人理を守る準備を続けている。

もちろんカルデアに運ばれる患者は匿名性と情報漏洩に最新の注意を払って、行われていた。

「処置終了……………」本来ならば私が最後までやるべきですが、後は通常の医者任せるべきでしょう。」

「了解しました。私は元の病院に患者を移送する手配を至急行います。」

「バーサーカー様は急ぎ、休憩に入ってください。」

「サーヴァントに休憩は不要……………いえ、マスターにも労わるようにと言われていましたね。わかりました。予定を確認次第休憩に入ります。」

あの命を、尊厳をかけた戦いから解放されたからかはわからないが、ナイチンゲールは前ほどの苛烈さはなかった。

口調こそたまに「切つてでも治療します！」と言ったりはするが「いや、切るより縫合の方がこの場合は良い」という判断をしてあまり切つたりはしていない。あまり、ね。

カルデア製白衣を脱ぎ捨てる。

少し鬼気迫る勢いで執刀したためか暑苦しい汚れた白衣を特別なゴミ箱に投げ捨て、いつもの紅蓮の服へと着替える。

ナイチンゲールはそのまま自室へと直行する。

自室は女性らしい小物（各々自室には自分の買ってきた装飾を施しているものが多い）などはなく、質素で無機質な最初貸し出されていたままの部屋だった。

ナイチンゲールは壁にあるディスプレイを操作して予定を確認する。

（今は昼の1時ですが、今日の深夜1時までまるまる12時間余裕がありますね。ダヴィンチ女史の計らいでしょうか……………。）

（なんにせよ、休息をとってさらなる医療従事に取り組みましょう。）

ナイチンゲールは上着を脱ぎ、レギンスも脱いで下着姿になる。

ハンガーに上着やズボンを投げて引つ掛け、部屋にある簡易的な自販機からタバコを購入する。

ありえない、と誰もが思うだろう。

あの医療行為に全てを注ぐナイチンゲールが100害あって1利なしと謳われるタバコを吸っている。

(私は……………マスターと出会い、変わりましたね。)

と少しだけノスタルジックな面持ちになりながら部屋の換気扇の下の椅子にだらしなく座りながらタバコを吸う。

肉体的な健康を相手に必要以上に求める行為は、時に、自分の心を貪る。

バーサーカーとしてのクラス特性が揺るぎ、1人のフローレンスとなった今、タバコがなければやっていられないという時が増えた。

誰のせいでもない。

強いていうなら1人で何もしていない時に、「救わなければ」という意志から「この誰も救っていない無駄な時間はなんだろう?」という思考に陥りやすくなっていた。

(マスター……………自分の時間を持つことの大切さを教えていただきました。しかし同時に以前のようなフローレンスではないのかもかもしれません。)

そう思いながらも「それでもナイチンゲールはナイチンゲールだよ。」と笑顔で無責任なことをいうであろうマスターを思い笑みが溢れた。

下着姿に黒く薄い素材のヒートテックが豊満な胸部によって盛り上がる。

窓の外の暗雲を見ながらタバコを吸うナイチンゲールはこんな姿をマスターには見せられないな。と思った。

ナイチンゲールのように、タバコを吸い始めたものは少くない。

タバコだけでなく、酒や、薬物（先ほどのホームズのように）、よくわからない機械や設備で以前のような「世界を救う」という気良く正しい気高いイメージを持つカルデアはすでにない。

現代は「精神を汚染するような時代」だ。

「幸せに殺される社会」。

結局のところサーヴァントもまた人。

時には概念や現象、人でない人外もいるにはいるが、結局知的生物であることに変わりはない。兵器も使いすぎれば汚れる、巨大ロボットも崩れるし、化け物も病にはかかる。

ただマスターである藤丸立香はその事実を知らない。

ベッドからナイチンゲールは飛び起きる。

(今は何時でしよう。)

時計を確認するとちようど深夜0時だった。

目覚ましなどかけずに起きる予定だった時間にきっかり起きる様は、どんなに変わったと言つてもナイチンゲールらしい。

ナイチンゲールはそそくさとシャワーを浴び、タバコの匂いが見つからないよう保管されている指定服に着替える。

(ふむ、ハロウインの特注礼装ですか。まだ夏半ばですが、まあ涼しくはあるのでいいでしょう。)

次の任務というより予定はデータ収集の任務で、衣服は指定でなく推奨だった。

ナイチンゲールは蛍光色の緑とピンクを基調とした服を慣れた手つきで身につけると専用のボードと注射器を腰につけ、タバコくさい部屋から出る。

(やはり視線が普段より多いですね)

ナイチンゲールが指定された地下研究施設に赴く途中、当然廊下を移動するわけではあるのだが、時刻は0時半、遅くまで仕事していた男性スタッフがすれ違いざま何度も視線を向ける。

(正式な礼装なので何か不備があるようには思えませんが、なんででしょう?)

ナイチンゲールは疑問に思いつつも地下研究施設直通エレベーターに乗った。

しばらくしてエレベーターが止まり自動開閉ドアが開くと広大な研究施設が目に入る。

レイシフトで見てきた多くの生物が様々な実験を施されている。

(マスターはあまり好きそうではありません、ね。)

見るに耐えない非道な実験、というほどではないが共感能力が異常に高い藤丸はこの事実を知るべきではないとナイチンゲールは目を伏せた。

近くの大型電光掲示板に自身の名前を見つけたナイチンゲールは目的地を把握してたどり着く。

そこは大きな無菌室で24畳ほどの大きさの部屋だった。

床は滑らかで柔らかく、クッションを彷彿とさせる仕上がりだ。

そして目を引く存在が、首を鎖で繋がれたバイコーン。

(今日はバイコーンですか。この間はグールだったので比較的簡単でしたが。)

部屋にビーと耳障りでないほどの電子音が響き渡る。

『これより第4回搾精データ収集を開始してください。詳細は以下の通りです。他に何

かあれば個人の判断で行動してください。』

- ・避妊具を使用して25リットルの精液を採取すること
- ・通常の精液を十分採取できた場合、特定の薬物仕様を許可
- ・対象の殺害、傷害を禁ずる
- ・追加の器具が必要な場合は申し出ること
- ・緊急事態の場合は壁のボタンを押すこと

(以前と大差はないですね。)

ナイチンゲールは豊満な胸をぶるんと揺らしながら自分の2倍、3倍ある青い体毛をまとったバイコーンを見上げる。

鎖につながれているエネミーは等しく暴れていることが多いが、このバイコーンは落ち着いておりチラチラとこちらを伺っている。

(さて、任務ですしさっさとおわしましょう。手は抜きませんが。)

ナイチンゲールはバイコーンに臆せず近づいていき、バイコーンの下に潜り込む。バイコーンは腹部という急所に突然現れたナイチンゲールに些か体を揺らし警戒するが、攻撃の意図がないとわかるとそのまま立ち続けた。

(知能はたかそうですね。)

ナイチンゲールはそのまま筋肉質な両太ももの間にある柔らかな部分にそつと手を添える。

「失礼します。」

誰に対してかしこまる必要があるのかはナイチンゲール自身も少しおかしな気がしたが、自然と口に出てしまったものではない。

女性器のようなヒダに、蛍光緑の手袋で覆われたスラリとした指を絡ませる。

するとバイコーンは少し後ろ足でじたんだを踏んだあと、鼻息を荒くした。

ゆっくりと手でさすっていたところが盛り上がる。

そのままナイチンゲールは中から出てくるものがスムーズに出てこれるように促しながら引つ張る。

バイコーンの下腹部からはゆっくりとシワがよった柔らかい筋肉質なものと、弾力のあるしかし中身は硬い楕円形の球体が2つ垂れ下がった。

バイコーンのペニスと睾丸である。

ナイチンゲールはそのまま2つの睾丸をさわさわと撫で回し、細い指先で皮が集まった部分を穿り、ブヨブヨの竿部分をこする。

本来馬は、生殖行為に快感を覚えないが、バイコーンは馬とは異なり魔獣であり、そ

して現代では想像もつかない未知の生体である。それを調べるためにも今回のデータ収集の任務が課せられたわけである。

バイコーンは緩やかな、しかし的確に行われる生殖器への刺激に鼻息を荒くし身体を揺らす逃げようとはしなかった。

(大きい……………すごく熱いですね。)

辺りには独特の生臭さと、男性器のなんともいえない臭いがたちこめてきた。

ナイチンゲールの「献身」的な手淫でバイコーンの生殖器は活性化し、海綿体には一層血液が集まることで肥大化して硬度を上げていく。

ブリュンツ

と、ナイチンゲールの手からまるで解放されるかのように生殖器は弾み、バイコーンの腹部に当たる。

(人間の……………いえ、男性のサーヴァントの腕ほどもある太さ……………、そして長さ。)  
(根本は藍色からゆっくりと色をピンク色へと変わって……………、先端は血液の所為でしょう。かより色が濃く、血管が激しく浮き出ている。)

(普通の馬であれば滑らかな性器ですが、バイコーンは鋭くはありませんが突起物が竿に絡みつくように列をなしていますね。血管も太く厚く……………ボコボコとしてい

ナイチンゲールは初めて見るバイコーンの性器を観察しつつも辜丸を優しく刺激する。

(確か辜丸に優しい刺激を加えると上質な精液が取れるとどこかの文献で見たような……。)

「さて、魔獣に言っても分からないこととは思いますが、映像で記録もされておりますし、『これから第7回搾精データ収集、対象バイコーンを開始します。』」

ナイチンゲールはすでにいつの間にかある特別な避妊具を箱から取り出す。

人間の性器ではまず意味のない大きさのゴム製の避妊具が、まるでお揃いのようにナイチンゲールの礼装と同じ色をしてテラテラと光っていた。

(なるほど、今回はコンドームで採取するんですね。)

ナイチンゲールはびくびくと痙攣するバイコーンの肉棒の先端に、ゴムの輪を先っぽに空気が入らないようにしながら取り付けた。

(……………すでにカウパー、尿道球腺液が大量に出ていますね。人間の男性の射精量より多いとは……………)

気にせず先端からするとコンドームを滑らせ性器を覆う……………のは難しかった。(先端の人間の力りに相当する部分があまりにも高いのでうまく進みませんね。)

仕方ないので多少荒っぽくではあるが、ゴムの口の輪を強く引っ張る。とっさにバイ

コーンが暴れるが、嫌がってはいないようだった。

そのままいくつか突起や、血管を押し込みながら取り付けるのは大変だったが、それよりも、

(長すぎてペニス全体を覆えませんか。)

コンドームの通常の馬用のもので、バイコーンはそれ以上の太さと長さを有しているため、どうしてもペニスの3分の2いったところ、馬特有の円形の盛り上がり部分手前で止まってしまう。

(まあ……………大丈夫でしょう。)

「それではこれより挿入に入ります。」

とナイチンゲールが宣言すると、バイコーンの下の床が開き、馬の前足を置くための台が形成された。

バイコーンは手持ちぶたさのあった立ち方が解消されたのか訓練された馬のように前足をのせる。

ナイチンゲールはローションを取り出すとキャップではなく、キャップを止めるための根元を回転させボトルから一気に大量のとろとろのローションをペニスにかけ両手で輪っかを作りながら先端から根元へ、根元から先端へとこすりあげる。

(潤滑さは十分ですね。)

ナイチンゲールはそのまま自身も人が乗るための台に上がり四つん這いになる。ナイチンゲールは礼装の股の部分をずらし、性器を露出される。

戦闘でよく動くサーヴァントは体毛が服にこすれることが多く自然と毛が生えていないことが多い。ナイチンゲールも普段レギンスを履いて激しい戦闘を繰り返しているために秘所には陰毛はなく、薄ピンク色の肉厚のぷつくりとしたすじまんだった。

もう一本のローションを取り出し今度は普通にキャップを開けて、口を膣口にあてがう。

そのまま力強く容器を握りつぶして中のローションを膣内にムリユリユリユつと注ぎ入れた。

中に入りきらず溢れ出て来たローションを掬い、膣口付近を入念に塗りたくる。

そして体を器用に動かしてペニスの先端を秘所へと押し付けた。

グチュ

当然、恐ろしいほどの太さと硬さを有したバイコーンのそれはなかなか入らない。

（ふっ太いっ……、もちろん簡単にはいかないことはわかっていましたがここままでつとは!!っふっ!）

メリメリメリと、ナイチンゲールの秘所が悲鳴をあげるが、ゆつくりと膣壁を掻き分け、バイコーンのペニス奥へ奥へと挿入っていった。

ぐぶりゆっぶっぶぶぶっ！

一定の域まで入ると今度はつつかえを失ったかのようにスムーズにはいつていく、もちろんすんなりはいつていくように見えて実は恐ろしいほど強く挿入しているのだが。

ほんの少量も隙間がないくらいに押し広げ、こじ開けられ、膣内の細かな気泡や空気が押し出されて淫靡な音が響く。先ほど大量に入れたローションも溢れ出す。

(ようやく子宮口に到達しましたっ………が、まだ5分の1も挿入っていませんね。)

動物とは時に意図せず動く時がある。

バイコーンもそれと同じで、ナイチンゲールが息を整えようと必死になっていると突然暴れ出す。

(なっなにを!!?)

生物の雄として当然の快楽を貪る行為、生殖行動、種の保存、ナイチンゲールの名器とも言える肉厚の生殖器にさらなる快楽を要求するべくバイコーンは全筋肉を使って性を突き上げる。

(ほおっ!!?)

「うぐっ！」

凄まじい振動と圧がナイチンゲールの子宮口に襲いかかり、あまり褒められた声ではない声を響かせる前に咄嗟に口を押さえる。

子宮口は押しつぶされ、じわじわとナイチンゲール自身が愛液を分泌し始める。

よりぬるぬるになっていくとはいえ、バイコーンの剛直は野生の本能に突き動かされ、突き上げた後は、凄まじい速度で引き抜く動作へと移行した。

(危ない……………任務中なのに意識が……………、とりあえおお、!?)

ゴムで包まれているとはいえ、バイコーン特有の突起とボコボコとした血管のせいではっきりがたくさんの膣壁のヒダに引っかかり強い力で引っ張られる。

ナイチンゲールは秘所がめくれるような様子を幻視しながら、秘所から伝達される快樂信号に視界を明滅させた。

ずるるるうおおろろろおっ!ズパンツ!

引き抜かれ、そしてすぐにまた突き入れられる。

「ぐっふうっう、う、おっ……………んっああっんふうー!」

呼吸が乱れ、ピストン運動と連動して抑えてはいるものの、艶かしい声が部屋に聞こえ始める。

本来、通常の女性では衝撃、快樂、傷みを耐えることは難しいだろう。しかしナイチンゲールは強大な精神力でなんとか意識を失わさせず、突かれるたびに増す気持ちよさに

耐える。

(んっ………これは任務ですので、正確な記録を取れるようにっ！でつきるだけっ)

バイコーンは本能を感じ取った動きなのか偶然か、突くたびに子宮口の上を押したり、右側を突いたり、膣壁を暴力的にえぐるなど、様々な刺激を与えてくる。

時折Gスポットなどを刺激してくるこいまいましさを覚えるナイチンゲールだった。

そして緩やかにピストンの動きが大きく、ストロークが長く、速くなっていく。

(そろそろっお………射精でしようか。)

ナイチンゲールはできるだけ腹直筋などを使って秘所を締め上げる。

バイコーンの生殖器はより0.01mmの壁があるとはいえ、鮮明にナイチンゲールの名器の形や柔らかさ、ヒダを感じ取る。もちろん同時にナイチンゲール自身もペニスの感触をより感じ取って愛液をどんどん分泌し始める。

そして最後のひと突きと言わんばかりに盛大に☒き、バイコーンは最高のタイミングで射精する。

ぶびゅっびゅるるるるっ！ぶびゅっびゅううううっびゅるるるっびゅっ！……

ぶびゅるっびゅー………ぶびゅっ………びゅるっ！

「ふうっうっ♡………んふー………ふーっ………っ！」

大きな痙攣、奥へ奥へとずっと押し続けられ、ナイチンゲールの子宮口に強く押し付けられ吐精し続けるバイコーンの生殖器。

あの大きな睾丸ならば当然のことといえる量の大量射精に、子宮口にぴったりと付いていた避妊具はきちんと役目を果たしつつ、そのまま子宮の中で勢いよく膨らんでいき、子宮がゆつくりと押し広げられる。

それに合わせて下腹部はぽっこりとゆつくり膨らんでいった。

一般的に馬の射精量は個体にもよるが100mlから400mlほど。

当然バイコーンは馬に似ているとはいえ馬ではない、ナイチンゲールの献身的な刺激もあり何度も大量に射精し続ける。

ナイチンゲールは突然子宮内で膨らむゴムに新感覚のようなものを味わいながら、絶頂しないように我慢しつつ、息を整え、痙攣で断続的に強い快楽が頭に登ってくるのに耐えながら射精が終わるのを待つ。

3分から5分ほど射精して、自然とバイコーンはパカパカと足を動かして後退していく。

鼻息が荒く、やりきったような雰囲気だ。

未だピクピクと痙攣する膣壁から無理やり引き抜こうとすると、ゴムとバイコーンの生殖器の間に溢れた精液が滑りを良くして、ナイチンゲールの膣口にゴムを取り残した

まま、ペニスが抜かれる。

ずろろつぼりゆんっ！

「ふう、っ！」

引き抜く際に下品な音が響く。

膣口はそのままきゅつと役目を終えたかのようにゆつくりと元の綺麗なすじに戻る。

ナイチンゲールは肘で突っ伏した状態からゆつくりと体を仰向けにして、台に腰を掛け、自身の秘所の状態を確認する。

(んふーっ……………、出血は……………ないですね。凄まじい痛さでしたが……………)。

そのまま、膣からコンドームを引き摺り出す。

ちやんとゴム口から精液が漏れないように注意して引つ張るがなかなか抜けず、強く力を入れてゆつくりと引き抜く。

無理やり緩やかに子宮口が開くのを感じて、「ああ、これがさっきの。」と先ほどの子宮の感覚を把握し直すナイチンゲールはすでに冷静だった。

ずろつでろん

引き抜かれたコンドームは大量の精液を内包しており、辺りにザーメン特有の臭いが充満する。

ナイチンゲールはそのまま大切なデータをできるだけ酸化させまいとすぐに口を締

め、計量台に乗せる。

（536 mlですか……未産婦の場合、子宮内容量は一般的に2〜3 mlですが私は3 ml。179倍の精液……。）

（こんなに量があり……、濃さも……所々ダメになって、白濁液と良く言われますがこれは尿混じり？黄色味が強く濁っているというよりはつきりとしていますね。）

（私はサーヴアントですが、よく現地人の女性がレイシフト中にエネミーに孕まされる話も聞きますし、同じ、魔力をエネルギー源としていることから考えると……完全にありえないとは……。）

世の中に完全というものはない。

絶対にありえないということはない。

例えば通常の人間が、異種の精液で妊娠したり、逆に人間の精液で動物が妊娠しないのは、卵子の周囲にある層を精子が分解するために必要な鍵を持つておらず扉を開けないからである。

もちろんこれは科学の話だ。

（とにかく、上質で健康的な精液ですね。……今ので30分ほどかかりましたがもう少し次はスムーズにいくでしょう。）

ナイチンゲールは精液からバイコーンの生殖器へ目を向ける。

もし仮に通常の男性がこんなにも射精をしたのなら今頃、小さく萎んでいるであろう。性器は未だ硬く、先ほどよりも大きく感じるほどに漲っていた。

(まだまだ吐精せそうですね……少し休憩はしたいですが任務優先でいきましょう。)  
先ほどとは異なる色のコンドームの口を開けて、精液ででろでろになつている性器につけようとするが、一旦やめる。

(……………このままつけると上手くつけれない可能性もありますね。)

ナイチンゲールは一旦ゴムを置くと、びくびくと揺れる性器に優しく手を添えて、両手でペニスのいたるところについた精液をかき集める。

(タオルは……いえ、射精直後は敏感ですし、柔らかいタオルでも痛いこともあるそうですから……………)

ナイチンゲールは今まできっちり閉じていた口を開け、舌をできるだけ露出させて口を鈴口にあてがう。

鼻先に付くバイコーンの体液、下で掬い上げるように精液や分泌液を舐めとりそのままバイコーンの性器を啜える。

顎が外れるように思いながら喉奥まで入れて下で尿道口をこじ開ける。

そのまま精一杯吸引すると、尿道に残っていたダメになった精液がとろとろと出てきてナイチンゲールの口をいっぱいにした。

(取り残されていた精液だけで口がいつぱいに……臭いも……。)

(どこかに吐き出したいですが、あまり床を汚すと足を滑らせる原因になります。……まあいいでしょう。)

ナイチンゲールは一通りペニスを舐めて綺麗にした後、口に含んだゼリーのような精液を噛み砕いて飲み込む。異常な濃さの精液は喉奥でひっきり飲み込むのも一苦労だった。

鼻の奥から充滿する生臭さと、精液の臭いで少し吐きそうになるが、堪える。

一通り元の綺麗な状態になったバイコソンのペニスは口淫によつてさらに激しく脈動し、バイコソンの「早く次を」といったように迫る。

(どこでもオスは盛りやすいですね……。さて任務再開です。)

ナイチンゲールは先ほど置いたゴムをとり、輪っかを広げた。

とある実験場Ⅰ

部屋には電子音が鳴り響き、部屋には一人の身長小さめの男性サーヴァント?が拘束されていた。

服は着ておらず、意識は朦朧としていた。

下半身には体に似合わず雄々しい性器が本体とはうって変わってびくびくと痙攣しながら勃起している。

鈴口からは大量のカウパーが垂れ落ち、睾丸は心臓の鼓動と合わせて振動していた。亀頭は赤黒く晴れ上がり、竿も淫水焼けして褐色色なのに対し、当人は色白の肌で女性にすら見える。

電子音が鳴り止むと対面の壁が扉サイズ分だけ開き置くから、顔の前に布を垂らし、紫を基調としたどこか質素な服を着た女性？が2名現れる。

2人の外見はまるでコピーしたかのようにまるつきり一緒だった。

左手にはノコギリのようなギザギザとした剣のような物を持ち拘束された男性の前で立ち止まる。

おもむろに服を脱ぎ出す2人の女性は色白、血色が悪いとさえ言える白さの肌を露出し、服装からはわかりずらかったがなかなかグラマラスでムチムチとした外見を晒した。

拘束された男性は目を見開き、驚いた様子だがすぐに目をそらす。

しかし性器の反応は正直で先ほどより大きく痙攣し硬さやや大きさがひとまわりもふた回りも変わる。

拘束台はそのまま緩やかに機械音を出しながら男を仰向け状態にし、2名の女性は片方は顔の方に、もう片方は下腹部のペニスに行く。

男は何が起きるのかなんとなく予想はついているとはいえ、相手がなぜそれなのか、そもそも自分なぜここにいるのかを把握できておらず、混乱一色だったが、冷たく細い柔らかい指が性器に触れ、そのまま己が性器を秘部へと持つてかれることに言いようのない情動が現れ始める。

男性器を全く濡れていない性器にあてがい、一気に突き入れる。

当然性器からは少量出血するが気にしていないようだった。

男性は最初こそ痛かったものの、柔らかく暖かいたろとろの何かに包まれ激しく襲う快楽に身を振る。

顔の方に来た女性はそのまま口の穴に向かって用を足し始める。

男は暴れるが、意味のないことだった。

しかしながら、股間は快楽で一色だった。

気持ちがよく、激しくて、どんどん射精を促される。

男の拘束具から漏れ出る嬌声と水音だけが部屋で怪しいハーモニーを繰り広げていた。

現在は午前6時で早朝である。

もちろん南極の時間なので、例えば藤丸が通っている日本の学校では昼前ぐらいだ。あれからナイチンゲールは連続で搾精任務を遂行し続けている。

部屋には独特の臭いが充満し、若干蒸し暑く(意図的に冷房は入れられていない)、床はビシヨビシヨだった。

「んっ♡……んふー……っ♡、んっ♡……んふーっ♡、おー!」  
ずばんっぶりゅんっ! ずろろろろっ! ぶりゅんっ! ずばんっ!

ナイチンゲールは未だ無表情ではあるものの、少し眉を寄せて我慢している顔をしながら、顔を真っ赤にして額から大量に垂れる汗を左手で拭った。

あたりには搾精済みの大量の精液が入ったコンドームが散乱しており、バイコーンと彼女の足元には、愛液と、尿道球腺液、汗、唾液など各々の体液が混ざった小さな水溜りがいくつも形成されていた。

あれからバイコーンは44回射精しており、総計26456ml(26・456リットル)の精液を出していた。

目標値はすでに終わっているのですが、任務を終了してもいいのだが、データは多ければ多

いほどいいという通達があつたのでそのまま継続していた。

そんな量の精液をどこに貯蔵していたのかという疑問はあるのだが、ナイチンゲールはバイコーンの保有魔力が少なくなってきたことから、常時生産し続けているのではないかという結論に至った。

新鮮な精液であることはわかつたので僥倖だ。

(そつれにしてもっ……そろそろ私もっげん……かいつお、♡……ですねっ。)

体力的に持ったのはやはりサーヴァントだったからということだろう。生前の彼女では一発目ですでお陀仏だった可能性すらある。

彼女はまだ一回も絶頂には達していない。

甘イキという意味では何度か達しているが、完全な絶頂にはたどり着いておらず、秘書は大量に愛液をダラダラと垂らし、膈壁は蠕動を繰り返してヒクヒクと痙攣しまくっていた。

なぜ絶頂していないのかといえどもちろん気持ち良くないという訳ではなく、彼女にとつてはこれは任務であり、いわば作業であるからだ。

よって強靱な精神力を持って我慢し続けている。

バイコーンもそろそろ疲弊しきっており、最後の1仕事というように激しく今までで一番雄々しく腰を動かしていた。

(これっでっ………あなたも最後にするというわけ……でっすねう！)

ナイチンゲールは思考しながらも今までで一番強い衝撃を柔らかくなつた子宮口で受け止め意識が鈍る。

ちらりとあたりを見ると、散乱した精液入りコンドームが目につく。

(結局……精液が薄くなることもなく………量も増える一方で……お………こんなに出すんですね……雄は………お♡)

「んふっ……ふっ………お………んふ………ふ………あっ！」

ピストンがどんどん早くなっていき、摩擦ゆえの熱か、それとも生殖器同士の熱の相乗効果かで結合部が熱くなっていく。

ナイチンゲールはその頭よりも大きな豊満な美乳をぶるんつぶるんつと揺らして、最初こそ反応していなかったものの、今は乳輪ごと乳首をぷつくりと勃たせ、汗と体液でドロドロの体を揺らす。

顔に余裕はなく、依然として仏頂面ではあるものの台に突っ伏して少しだけヨダレを口角から垂らしてしまう。

バイコーンは最後のひと突きと同時に☒き、大量射精する。



い衝撃をナイチンゲールは一番敏感な部分で突然食らってしまう。

(なっ!!?)

風船が弾ける衝撃、コンドームがバイコーンの大量射精に耐えきれず彼女の子宮内で盛大に弾け破ける。

想像することは難しく誰もが想定していなかった。常に冷静であった彼女もその例外ではない。

(ゴムがやぶっ!!?け♡!?まっダメですっ……受精……にんし……)

「ああっ!!♡破け!!」

ナイチンゲールは目を向き、いままで耐えていた絶頂を、まるで溜め込んだ水を一気に解放するダムのように決壊させた。

勢いよく彼女の尿道口から大量の潮が吹き出し、びしゅあああああつ!!と床に撒き散らされ、コンドームで押さえつけられていた精液はその枷が外れ、なおかつ彼女の絶頂で腹圧が高まり勢いよく接合部から溢れ出す。

ぶびいつ!ぶりゆりゆびゆわっ!!

バイコーンはそんなナイチンゲールのことなど構いもせずなおもまだ大量の濃い精液を吐き出し続けた。

ナイチンゲールはゆっくりと絶頂の波にのまれ意識を失いかけ、仰け反った背筋を脱

力させ台から落ちる。

床は柔らかいので怪我をすることはないが、そのまままだ射精中であるバイコーンのペニスが強制的に、しかも今は生の状態なので一番鮮明に突起がヒダをえぐりながら引き抜かれスパークのような快楽が脳にぶち当たって一瞬で視界は真っ白になった。

うつ伏せで床に突っ伏す形になる。

うつ伏せになったことで、子宮内にぶちまけられたバイコーンの大量半固形精液が押し出されナイチンゲールが射精しているかのように秘所からは勢いよく精液がモリモリと吐き出されていた。

尿道から未だ潮を吹き続け、徐々に尿に変わっていく。

バイコーンのペニスの先端には破けた精液まみれのコンドームがついており、破けていても大量の精液が溜まっていたが、未だ続く射精の勢いで外れてしまい、ナイチンゲールの右足太ももにべちゃりと落ちて中を散乱させる。

こつてり精液は未だ射精され続け、ナイチンゲールの後頭部の髪や首、背中、腰にまるで排尿するかのように飛ばされた。

ナイチンゲールは薄れゆく意識の中、今日が危険日だったか否かを必死に思い出そうとしていた。

結局思い出せず意識はそこで途絶えた。

とある実験場2

あれから色白の女性2人は拘束された男性をいじめ抜き、今度は尿道に金属製の細長い棒を突き刺す。

激しいつんざく痛みに過去最高に暴れる男性サーヴァント？だが女性たちは意に返さず、そのまま奥まで入れ続ける。

途中、何かにつつかえたがそのまま思いつきり突き入れた。  
ぐりゅんっ！

!!?

つつかえた部分は尿道管と並んでいる前立腺で、そのまま前立腺を引つ掻き、奥の膀胱まで到達する。

腰を思いつきり男性は浮かせた。

前立腺を直接突かれたようなものなので、凄まじい痛みと快感が脳へと上がってきて強制的に射精する。ができない。

当然だ。

尿道には精液が通る隙間などないほどに棒が突き入れられており、勃起しているの  
 なおさら締め付けられている。

大量射精をさせられ続けていたため、大量の精液を射精する訳でなかったのは幸い  
 だっただろう。精子の少ない薄い精液は強制的に精嚢へと戻された。

未知の痛みと快楽のせめぎ合いに発狂しそうな男性サーヴァント？だったが、サー  
 ヴァント故か、怪我をしにくく、感覚は鋭敏で、治りも早い。精神も強靱だ。

そしてそんなことはどうでもいいと、女は棒を膀胱の天井部分にまで押し当てる。  
 棒はすでに鈴口から少し出ているくらいでどこまで深く入っているかわかる。

元は30cmあったので男の性器の長さも考えものだ。

20cmは下らない巨根にもかかわらず前立腺を刺激され女のような嬌声を響かせ  
 る。

そのまま棒の先端を持ってグリグリとかき混ぜるように動かす。

痛みと気持ちよさを混ぜ合わせた刺激が下腹部から届き、暴れるが、暴れる方が逆に  
 痛いと思われ腰を引きながらビクビクと体を震えさせる。

そしてひとしきグリグリとかき混ぜた後、色白の女のもう片方が鈴口の棒をつまみ勢いよく引き抜く。

今までとは比べ物にならないほど深く、長く、多い射精。

!!!!!!!

精子が少ないのか、ほとんど水に近い透明度。

男は射精したと勘違いしているが実際には潮も吹いている。

精液と潮の混合液を大量に勢いよく吐き出し、疲れたように下を向く男性器だが、女が萎縮した睾丸に手を添え揉み始める。

ゆつくりとだがまた硬さを取り戻す己が愚息に嫌気がさす、今度はふにやふにやのまのペニスを持ち上げて、先ほどとは少し違う凸凹のある細長い棒を取り出す。

ゆつくりと鈴口に入れる女。

勃起していないペニスに入れるのは本来難しいのだが、慣れた手つきで入れていく。ただ、先ほどの射精と潮吹きでそれが潤滑剤として機能しているようで、一度入るとスムーズに入った。

もちろん先ほどより凹凸があるので男性サーヴァントが絶叫したのはいうまでもない。

地下研究施設でナイチンゲールが意識を取り戻す。

(……)……そうでした、任務は……(？)

あたりを確認すると、壁には任務終了の文字が表示されており、搾精した精液は回収されていた。バイコーンもおらず精液濡れのナイチンゲールだけが取り残されている状態だった。

(任務完了……ですね。帰還しましょう。)

ナイチンゲールは重たい腰をあげる。

股間からは依然として精液が垂れるが、半分ゼリーのようなもので立ってもそんなに落ちてこなかった。

(とりあえずシャワーはないので、タオルで体を拭いて自室に戻ってからにしましょう。)

露出された性器や胸部などを覆う礼装をきちんと整える。ナイチンゲールは扉をあけて、廊下を進んだ。

地下施設のエレベーターから出てカルデアの通常の廊下を使って自室に向かっている

と、前からカルデアスタッフが数人歩いてくるのが見えた。

現在の時間はちょうど8時頃で朝食を食べ終えこれから仕事へといくものも多い時間帯だった。

ナイチンゲールは一瞬目を伏せてから道の端に寄りすれ違おうとする。

「あつ……………どうもっ!」

ナイチンゲールに気づき1人が挨拶すると皆彼女をみる。

(じろじろと……………見られていますね。特に胸部と……………下腹部でしょうか?)

(この無駄な脂肪のどこがいいのでしょうか? 戦闘では邪魔ですし。)

「おはようございます。皆さんはこれからお仕事ですか?」

ナイチンゲールも無視はすべきでないと少しだけ会話に参加する。

「はっはい今からレイシフトについての更新情報などをすり合わせる会議です。」

「そうですか……………頑張ってください。」

「はいっ!」

ひとときわ気合いの入った若い男性スタッフに少し苦笑した顔になったナイチンゲールはあることに気づく。

(男性器が……………)

若い男性スタッフ以外の2人の股間が異様に出っ張っているのを見て、少し呆れる

が、仕方にと割り切りその場を後にする。

「いやあ……………エロすぎでしょ！」

「だよなあっ！あんな格好で歩かれたら溜まりまくって仕方ねえ！」

「まあ人理修復終わってから地下に娯楽施設も作られたし、今夜行こうぜ！」

「行こう行こう！」

「おい、失礼だぞっ！」

最後の若い男性スタッフの一言でその場は収まった。

「あれ？」

と、若い男性スタッフが声をこぼす。

視線の先の床には真っ白い液体があり、最初こそ男として最初に精液が浮かんだが、白くて半固形状なのでそれはないかと思い、何かの調味料かと思いいその場を後にした。

（危なかったですね。）

ナイチンゲールが声を発した時、腹筋に力が入り、下腹部の礼装の隙間からバイコーンの精液が垂れ落ちたのである。

しっかりとサーヴァントの耳で男性スタッフの声聞いていたのでバレていないこと

に胸をなでおろした。

任務は極秘で、マスターにも内密に行わねばならないらしい。

ナイチンゲールは自室に着くと、シャワーよりも先にベッドに座り、タバコを手に取り火をつけ吸い込む。

(結構疲れる任務でしたが………。いいデータが取れるといいですね。バイコーンの健康状態も良さそうでしたし。)

部屋の簡易的な自販機から今度はジントニックを取り出し、口を開けて、流し込む。

口の中の生臭さがアルコールで上書きされて少しでも気分が良くなった。

ナイチンゲールは普段見ている人や自分にしかわからないレベルでぼっこりと膨らんだ腹部を見る。

(さて、生前の私から算出した危険日は「近い」ですが、まあ「サーヴァント」ですし、「多分」大丈夫でしょう。そもそも経血が出たサーヴァントなんて聞いたこともありません。)

サーヴァントは人間の見た目をしているが、人間と完全に同じ反応をしますかどうかはわかっていない。

そして当然ながら、データ収集の任務の詳細やカルデアで行われている計画の詳細は

各サーヴァント全員に伝わっているわけではない。

よって任務外と思われる時間でも知らぬ間にデータ収集をされている可能性も大いにありえる。

ナイチンゲールは礼装を脱ぎ、自室にこぼさないように股間に手を添えて、シャワー室へと向かった。

## フローレンス・ナイチンゲールと特異点前編（＋A）

「まずは緊急招集に集まってくれてありがとう。」

ロリンチは大きな椅子にもたれながら壁一面に貼られた大型ディスプレイの前で話し出す。

この場にいるのは、藤丸立香、マシユ、ジャンヌダルク（ルーラー）、燕青、ペンテシレイア、ナイチンゲールだった。

「実は特異点の情報収集中におかしな点を見つけてね。」

「それってもしかして……………新たな特異点ってこと?」

マスターがロリンチちゃんの唸り顔に恐る恐る聞く。

「いや、そんな大きなものじゃない。異常なことを観測中に発見したって感じかな?」

ロリンチは観測された時代や時代背景について語りですが、マスター含め大して皆聞いていなかった。

「……………なんだけどお、でね?この映像見て?」

どこかの中東のような街並みで大きな太い道の映像だった。

藤丸はこれのどこが異常かよくわからずマシユの方をみる。

「……………先輩、女性が……………少ないような、というより……………」

「そう、『いいない』んだよね。本来大きな屋台が出てて商店街のように買い物客で賑わう筈なのにどこもかしこも女性がいない。単にここに写っていないってわけじゃあないんだ。町中どこにもいない。」

「でもそれくらいなら……………あ。」

「そう本来女性がいないなら繁殖できないからこの町は衰退する筈だ。なのに子供はいるんだよ。男の子だけだけどね。」

ロリンチはそういうと一度拍手のように手を叩く。

「ほつといても良い問題かもしれない。そもそも歴史上この街はこのまま衰退していつ滅ぶ街なのかもしれない。とにかく現地に行つて調査してみようつて思ったんだよ。」

「そうだね。何か困つていることがあるのかもしれない。まだみぬ魔神柱も関係してる可能性だつてあるし！」

「はい！先輩行きましよう！」

マシユは力強くマスターに向かってうなずいた。

レイシフトを使って転移した先は森だった。

『マスター君聞こえるー?』

「うん!聞こえるよー!」

通信機越しにロリンチとホームズがこっちに状況を伝える。

『いきなり街中にポンと現れると警戒されるから近くの森に飛んでもらったんだ。それでそこをキャンプ地としよう。ちょうど良い場所はある?』

「うーん、あ、少し先に小さな池があるし開けてるからテントはれそう。」

『それは願ったり叶ったりだね!レイシフトのおかげでそっちで何日か過ごしても学校登校日には間に合わせられるから気にしないで!』

「宿題持ってくればよかったなあっ!」

『マスター君にはなんだって勉強さ!』

ロリンチとマスターの提案で拠点が決まって、その日は拠点付近の散策と急速になった。翌日から行動開始になる。

ナイチンゲールはマスターの指示で辺りの散策を単独で行っていた。レイシフトでこれたサーヴァントは少なく時間的余裕はあるが人手は足りない。マスターとマシユは拠点設営、燕青は拠点防衛、ジャンヌとナイチンゲール、ペンテシレイアが三手に分かれて散策を始める。

「……すみません。」

いざ散策に出ようとしたナイチンゲールに声がかかる。

声の主はジャンヌだった。

「どうかしましたか？ 怪我ですか？」

「いえ、……これを。」

申し訳なささと恥ずかしさを交えた様子でナイチンゲールに箱を渡す。

「これは……避妊具ですか？ 何故あなたが？」

「だづいつじやなくてロリンチさんにあの後内緒で呼ばれました。」

ジャンヌはカルデアでレイシフト準備に入る前に名指して呼ばれていた。

「その……ロリンチさんが『今回の極小特異点は男性しかいないから、もしかすると女性に対してアプローチが強い可能性があるんだよね。だから衛生的な意味や、後絶対はないからねサーヴァントも。』というわけで一応準備だけしといてね。」つて言われて。

個人差はあるが男性はある程度性欲を発散させないと理性的な判断ができなくなるという研究結果もある。女性が全くいない世界で男性がどうやって性欲を発散させているのか未だ分からないが、もし全員が男色でないのなら、街に女性が入ることで性的

な要求を迫られる可能性もある。

「そうですね。あるに越したことはありません。必要な対応だと思えます。」

ナイチンゲールはお礼を言いながら箱を受け取る。

「私のは他にあるので大丈夫です。一応ペンテシレイアさんにもお渡ししたのですが、  
い方がわかってなさそうでした。」

そもそも彼女ならやる前にミンチにしそうだが。

2人は少し世間話をした後、別れて本来の散策任務に移った。

しばらくしてナイチンゲールに特別信号が入る。

「はい、こちらナイチンゲール。」

『こちらカルデア異種研究プロジェクトの者です。』

声は女性の声で目は暗くて見えないが、この専用通信を使えるのは特定の人物だけなのでナイチンゲールは周りに人がいないか確認してから声を少し小さめにして話す。

「何か？」

『現在極小特異点にいるとの通達を受け取り、急ですがデータ収集任務をお願いしたいのです。』

「わかりました。」

特に断ることもなく、マスターの指示が優先されることだけは先に伝えて了承する。

『そちらの特異点で遭遇した生物に生殖器が確認できた場合は、できるだけ体液……まあ有り体に言えば精液を採取してきてください。』

「了解しました。」

『また、他にも余裕があれば帰還後に報告書を書いていただけると助かります。』

「承りました。」

『ありがとうございます。他にも現地にいるジャンヌダルクさんとペンテシレイアさんにも協力を仰いでいるので互いに効率よくお願いします。』

そう言うと、通信は切れた。

(正直、マスターの目をかいくぐりながらの採取任務は骨が折れそうですね。)

ナイチンゲールはあたりを確認し散策に戻った。

とある実験場<sup>3</sup>

バッドドラゴンシリーズというものがある。

海外の女性にひどく人気のデイルドなど性玩具を作っている会社で、特にドラゴンの

性器を想像して作られたデイルドなどが有名である。

今日も今日とて拘束されている男性サーヴァント？は以前尿道を開発されてからも定期的に拘束されていた。

今日はいつ伏せでお尻を突きだ酔ような体勢だ。

叫ぶのも無理はない、目の前にバッドドラゴンシリーズのオロチ型デイルドを見せつけられたからだ。

色白の女（後述コクシ）はもう片方（後述カクシ）の正規に手を伸ばすとゆつくりと手を秘部に挿入する。カクシが少しだけピクツと体を動かすが、そのままコクシが手淫を続けること5分、とろとろの愛液がコクシの手を包み込む。

愛液をたっぷりオロチに塗りたくる。

そしてそのままオロチのボコボコとした先端を男性サーヴァント？の肛門に押し付けて、ゆつくりと押し広げる。

なかなかならず、仕方ないのでコクシはそのまま思いつきオロチを肛門に突き入れ

!!!!!!

!?

!!!!

!!!!?

暴れる男性サーヴァント。

恐ろしい痛みが尻を襲い泣き叫ぶがうまく声は出ない。

このオロチは特別製で全長25cm、厚み直径5cmの極太、極長 dildo である。そんなものをよく濡れてもいない肛門に勢い良くつき入れれば通常の人間ならば激痛でシヨック死する可能性もある。

しかし男性サーヴァント？はなんとか耐え痛みから逃れるために切れたかもしれない括約筋を一生懸命しめて外に出そうとする。

しかし当然コクシが力強く押し付けているので一向にだせないどころかコクシはそのままピストン運動を始める。

僥倖あつたのはピストン<sup>!!!</sup>をし始めたおかげで、腸液とカクシの愛液が混ざり合つて括約筋とデイルドの間に入り込みスムーズになったことだった。

痛みからゆつくりと鈍痛になり、なんとも言えない不思議な感覚を感じ取る男性サーヴァント。

そしてコクシはそのままデイルドを回転させて付け根を上<sup>↑</sup>に勢いよく傾ける。

凹凸のあるゴリゴリとした先端が男性サーヴァントの前立腺を潰す。

ゴリゆつ

男性サーヴァントは勢いよく射精……できなかつた。

男性サーヴァントの性器はいつもより赤黒くなっていて根元にはゴム状の硬い縛りがあった。射精管から勢いよく放たれる精液が途中の尿道でせき止められる。

尿道口は詰まらぬ。ゴム付近では2倍3倍に太くなってしまう。

射精したい、この苦しみから解放されたいと暴れるが、コックリングが外されることはなかつた。

コクシはそんなことおかまいなしにズゴズゴとデイルドを動かして前立腺を刺激したり、膀胱を刺激したりして攻め続けていた。

ナイチンゲールがそろそろ散策から戻ろうとすると、木陰からエネミーが現れる。  
 (獣人ですか……ウエアウルフ……)

ナイチンゲールはすぐに戦闘行動へと移行。

足元の木の根に足を引っ掛け踏ん張り、勢いよく突進する。右手には爆弾を持ち爆弾

ごと殴りかかる。

ウエアウルフはタイミングよくガードしたようで左手の棍棒を力一杯振るうが、ナイチンゲールはそのまま身を反転させて回避する。

一旦距離をとって射撃。

ウエアウルフは棍棒で銃弾を弾くが、銃弾の威力で手が痺れてうまく動けなくなる。その隙を見逃さずナイチンゲールは距離を詰め、ウエアウルフの腹部に拳を撃ち込む。ウエアウルフは昏倒し、気を失った。

(比較的弱くて助かりました。さて、……………)

ナイチンゲールは仰向けに地面に倒れたウエアウルフをみる。

ウエアウルフの脚の腱だけを切り、すぐに逃走できなくする。

そして体毛に覆われた両足の間を弄ると鎧の下から、盛り上がった割れ目を見つめる。

(メスでなくて助かりました。探す手間が省けます。)

そのまま割れ目部分を丁寧に刺激しほじると、意識を失っているものの生理現象なのか、下腹部から竿がゆっくりと現れる。

ぶりゅんっ！

(これですね。生殖器は。)

(先端は赤黒く少し尖っていますね。中腹から根元にかけて白くなっていき竿中に細い血管が走っているのがわかります。)

(ウエアウルフは狼っぽいですが犬の性器と違い睾丸が人間のようにはつきりとぶら下がっているのですね。中腹が一番竿の中で太くそこから根元まで緩やかに細くなっていきその後また太い根元がありますね。)

(やはり特徴的なのは先端の突起でしょうか？犬の性器のように少しでっばっていると、かでなく長細く鉛筆のように2cmほど出てますね。)

ナイチンゲールは観察をしつつ性器を刺激してゆつくりと大きくしていく。少しして完全に勃起したのか、膨張がおさまる。

(想定よりも大きいですね。全長17cm、厚み直径5cm……大まかに言えば人間の男性の性器を一回りかふた回りほど大きくした感じでしょうか?)

ナイチンゲールは腰のバックパックから数時間前に渡された箱を取り出す。

中身は「極大(馬など)、大、中、小」サイズが各々3個ずつ入っていた。彼女は「大」をとってウエアウルフの先端に取り付ける。

(先が尖っているので破れないか心配ですが、柔らかいので大丈夫でしょう。)  
輪っか部分をするすると下ろす。

中腹の一番太いところで少してこずったが根元までぴっちり空気を入れずに装着

できた。

ナイチンゲールはスカートをたくしあげて自身の秘部を覆ったレギンス部分を軍用ナイフを使って丸く切る。

(今回の任務で何度もこういう場面はあるでしょうから切ったほうが早いですね。)  
という結論だった。

そのまま仰向けのウエアウルフにまたがりすぐに挿入せずに一旦ペニスの尿道部分を自分の恥丘から下腹部に合わせる形で膝立ちになる。

あたりを確認して他のエネミーがきていないか確認する。

(ペニスの先端がヘソの下あたりでしょうか？私の膣道の長さは一般的な女性は11cmから13cmほどで私は10cm程度なので単純に7cmは余ってますね。)

ナイチンゲールは少しふつと息を吐いてから腰を持ち上げて、右手によだれを出す。

そのままコンドームに塗りたいくらい、ペニスの先端を自分の膣口へとあてがい腰を下ろす。

ゆっくりと下ろすと、最初は抵抗があったが、入口付近で少し上下させると馴染んだのかすると膣壁を掻き分けてペニスがナイチンゲールの性器に飲み込まれた。

(これは結構圧迫感が………ありますね。)

ゆっくり丁寧に挿入したため下腹部が押し広げられている感覚に言いようのない違

和感と火照りを感じる。

そして根元まで完全に挿入すると、ウエアウルフのペニスの先端の突起が子宮口横に引っかかる。

(んっ………これは、ちよつと………)

ナイチンゲールが一旦体勢を立て直そうと引き抜こうとすると、突然背中を掴まれる。

「なっ!?!」

気絶していたウエアウルフが起きたのだ。

ただし先ほどの戦闘でうまく指まで力が入らないのかひっかく力はなく、せいぜい掴む程度。

そしてウエアウルフは現在の状況に違和感を感じるが野生の勘か、種としての股間の快楽に抗うことなく、下からナイチンゲールを思い切り突き上げる。

「お、ぐっ!」

(まずついですね………、敵対心はないようですが私を同種メスと見てついているのか)

ナイチンゲールはとりあえず様子見ということとでされるがままになるが、野生の突きは的確にナイチンゲールの性器を刺激する。

(せっ先端が、子宮口に挿入って………子宮の天井部分を引っ搔いてっう!)



「ふぎっ………んふーっ………ふー！」

ナイチンゲールはすぐに膨らむコンドームを膣内で感じながら射精が終わるのを待とうとすると、突然、ウエアウルフは体を反転させてうつ伏せになりながらで下半身をこちらに向けて体勢になった。

そしてナイチンゲールの敏感な膣口付近がボコッ！と押し広げられる。

ナイチンゲールは何が起こっているのかすぐにはわからず一旦引き抜こうとするが抜けない。

(抜けない？………これは………！)

彼女は1つの可能性を思い出す。

尾結合というものがあり、犬同士の生殖行為でペニスをヴァギナから抜けないように亀頭球という場所を膨らませるものだ。

しっかりと精液をメスに入れるためのものであり、10分から30分ほど射精する。マスターが来ないことだけを祈るしかない。

(これもそうですか………うゝ♡)

みつちりと完全に固定されたウエアウルフの性器は抜けず、そのまま長い長い射精がナイチンゲールの膣内で続いた。

しばらくして、射精が終わったのか亀頭球がしぼんでいき、ずるとゴムから萎んだペニスだけ抜ける。

(くっつきやすいですね……これは……、んっ)

ナイチンゲールは長い間続く射精に微々たる振動がずっと続く快楽を味わって意識が朦朧とし始めていた。すぐに参加しないように未だ膣内にあるゴムの入り口を結ぶ。

ウエアウルフも射精をして疲れたのか、しぼんだペニスをゆっくりと鎧の中に戻してひくひくと体を震わせていた。

そのウエアウルフはすぐさま首を刈り取られ消滅する。

「!？」

ナイチンゲールは重たい体に鞭を打って敵襲に備えるが、影から現れたのはジャンヌダルクだった。

「ナイチンゲールさん、今マスターが戦闘音を聞きつけてこちらにきます。体液や臭いは私が必要とかなるので服や髪を整えてくださいっ。」

と切羽詰まったようにテキパキと動き始める。

ナイチンゲールも乱れていた髪を整え、はだけていた胸部を服にしまふ。途中勃起し

た乳首が硬いボタンの留め具に引っかかってびくつと体を震わせるが、声が出るのを我慢して服装をただした。

避妊具の箱を腰のバックバックにしまい、手についた精液や愛液をハンカチで拭き取る。

ジャンヌは旗を使つて換気しつつ、地面の体液でできたシミを馴染ませて、なぜ持つてるのかわからないが消臭スプレーをあたりに撒き散らす。

「それは？」

「以前、搾精任務のあとすぐにジーク君に会いにいかなくちゃいけなくつてシャワーを浴びてる暇がなくなつて感じですよ。」

ナイチンゲールはそういうことに対して無頓着なところがあるので「今度滅菌スプレーでも持ち歩きますか。」と考えていた。

「おーい！ナイチンゲール大丈夫!？」

マスターとマシユが合流して、ナイチンゲールに詰め寄るが、ナイチンゲールは自然にならないよう一歩離れて

「ええ、問題ありません。ジャンヌさんと片付けました。拠点に戻りましょう。」

「そっかあ〜！良かった！」

マスターは満面の笑みをナイチンゲールに向けて拠点への帰り道を先導し始める。

その後ろにつく形でジャンヌとナイチンゲールが並ぶが、ナイチンゲールはゴムをとっていないことを思い出し、マスターバレないように股間に手を持っていきゴムを引っ張り出す。

もりゆん……とろお

スカートの中から恐ろしいほどの量の白濁液が詰まったゴムが取り出される。

ジャンヌは前を警戒しながらちらりとそれを確認して顔を赤くして目をそらす、チラチラと確認していた。

(バイコーンと違って、一回の射精量が桁違いですね。)

「(あのっそれってさっきの………?)」

ジャンヌがマスターとマシユに聞こえないくらいの声量で話しかける。

「(ええ、ウエアウルフのオス、通常個体ですね。)」

「(一番近い見た目の狼、つまり犬ですが通常射精量は10ml前後です。精子量も5億といったところですが、ウエアウルフは1リットルは射精してますね。ただ馬ほど濃度は濃くないようです。)」

ジャンヌは具体的な数字が出てきて途端に恥ずかしくなるが話は聞いているようだった。

ナイチンゲールはひとしきり精液入りコンドームを観察した後、腰のバックパックに

入れる。あとで拠点の転送装置でカルデア研究施設に送る予定だ。

「(ところでそちらは?)」

「(……………:恥ずかしくって手でしかできなかつたんですけど、小鬼のを少々。)」

「(まあ、この先まだまだ時間がありますし。任務遂行のため頑張りましょう。)」

「(そつそうですなっ!)」

小鬼との情事を思い出したのかジャンヌはすでに赤い顔を一層赤くして汗をかきながら前に戻った。

ナイチンゲールは未だ溢れてくる愛液がマスターにバレないようにと思いながら長い旅が始まったと思い、少しだけ息を吐いた。

—————

#### とある実験場 4

ぼつかりと開いた肛門から不透明の緑色の液体がトロトロとこぼれていた。

拘束された男性サーヴァントはすでにペニスから大量の精液を垂れ流し、下のバケツに溜まる自身の体液に意識が朦朧としていた。

コックリングは耐久限界で破れた。

コクシがゆっくりと歩いてくる。

その姿を見ただけで男性サーヴァントは震え上がり暴れ始める。

コクシは大きな注射器のようなプラスチック製の容器を持っており中は、液体ではないゼリー状のものが入っている。

良く見えないが容量は大きく、１リットルペットボトルほどであろうか？

先端は細いストローほどの穴が空いておりピストンを押し込むとぶびゅつとゼリーが飛び出す。

コクシはそのまま拘束台に近づくとカクシが操作して台を仰向けにして天井の眩しいライトに目がくらむ。

カクシが男性サーヴァントのペニスに触れて刺激を加えるが、流石に勃たない。

ので睾丸をやしく揉んだ状態で肛門からいくつも球体のついたまつすぐな棒を突き入れる。

!!!

たまらず暴れる男性サーヴァント。

おかまいなしにその棒で前立腺付近を刺激して、睾丸を揉みしだく。するとゆっくりと重たい首を持ち上げて勃起し始め１０分もすると完全にギンギンになっていた。

カクシはペニスの表面を強く掴んで根元に引っ張る。

完全に剥けている状態でもおも剥く動作をすることで亀頭が若干腹側に向き尿道口が少し開く。

コクシはそのままカクシが開いた尿道に先ほどのゼリーが入ったピストンをつける。ここまでくれば何をさせられるのかは誰でもわかる。

男性サーヴァントは叫びながら首を振るが、無視される。

コクシは力強くピストンを押し込む。

むりゆむりゆっ！ぐびゆる！

痛くはない、が未知の快感に不安がよぎる「もうおしっこいけなくなったらどうしよう。」だとか「射精出来なくなったらどうしよう。」とか。

尿道口からゼリーが強制的に細い管を押し広げながら入ってくる。ついには膀胱の弁までいき押し広げ膀胱に勢いよくゼリーが侵入。

突然小便をしたい欲求に襲われる男性サーヴァントだが、スムーズに開通したと判断したコクシはそのまま勢い良くピストンを押す。

びゅうっ!!!

おびただしい量のゼリーが一気に尿道を通り膀胱に溜まっていく。

すでに膀胱の量はいっぱいだがそんなのは気にしないコクシとカクシ。

男性サーヴァントは鈍痛と用を足したい欲、そして溢れ出る快楽からもうでない

思っていた精液が睾丸から上がってきて射精管を通る。

だがこれも以前と同じで射精できない。

尿道はゼリーで詰まっており、なおも追加されている。

ギンギンに爆発するのではと思われるほど膨れ上がるペニスにカクシがまたがる。コクシが全てのゼリーを入れ終わって鈴口に蓋をする。

そしてもう一個ゼリーが大量に入った容器を持ってきて、カクシの秘部にあてがい少しだけ注入していく。

カクシはそのままギンギンに膨張した男性器を自身のドロドロになった性器に突き入れる。

中から前立腺と膀胱を圧迫され重い快楽を味合わせられ、外の敏感な亀頭とカリ首、竿をドロドロふわふわの腔で締め上げる。

その瞬間射精管は過去最高に膨れ上がり、尿道を塞ぎ止めていたゼリーは尿道口へと押し上げられ、鈴口の蓋は弾け潮と精液と精子とゼリーの混ざり合った混合液が凄まじい圧力でカクシの子宮口を突破し子宮を押し広げ拡張していく。

カクシもびくびくと腰を浮かしペニスを引き抜こうとするがコクシに支えの足をずら

!!!

!!????!?

され20cm(今は27.5cm)は下らない巨根を全体重子宮で受け止めてしまう。

カクシもまた深い絶頂と痛みで尿道から潮を吹き出す。

男性サーヴァントはあまりの衝撃と快楽と開放感で泡を吹き失神し、カクシは男性サーヴァントに体を預ける形でビクビクと痙攣していた。

射精?が終わると今度は膀胱の中に溜まっていたゼリーを全て出し切り、終わった頃にはカクシの下腹部は妊婦のように膨れ上がっていた。

トドメのようにコクシはカクシの秘書から抜け落ちたペニスの代わりにオロチを突き刺す。

満足げなコクシだった。

――――  
 拠点についてマスターたちは簡易シャワーを交代で使うことにして、拠点の各々のテナントに別れた。

テナントは「ナイチンゲール、ジャンヌ、ペンテシレイア」と「マスター、燕青、マシユ」で使うことになった。マスターは最初マシユに悪いとなんとかしようとしていたのだ

が、マシユは先輩と川の字で寝れることを楽しみにしているとのことであまった。

燕青も「マスターの女にや手なんか出さねーよ。ははは！」と笑っていてマシユが顔を赤くするいつもの定番な会話をしていた。

ナイチンゲールはテント内でカルデア研究施設に精液を送るとペンテシレイアが話しかけてくる。

「おい、そっちはどうだったんだ？」

「こちらはウエアウルフでした。十分な量を取れたように思えます。」

「そうか………、こっちはグールだ。正直くさくてかなわんが仕方がない。」

ペンテシレイアはめんどくさそうなジェスチャーをしつつも、装備に体液などついていないか確認する。

「まあシャワーを浴びれば大丈夫でしょう。私も少し………：獣くさいかもしれません。」

ナイチンゲールは体の匂いを嗅いで苦笑した。

夜は更け、虫の鳴き声が響き一日目が終わった。

## フローレンス・ナイチンゲールと特異点中編

拠点の朝、森の中で科学の弊害もないゆえか空気が澄んでいて気持ちが良いとナイチンゲールは寝袋から抜け出す。誰よりも早く起きたようでもどりは静まり返っていた。(シャワーでも浴びますか。)

ナイチンゲールは服を脱いで全裸になると、人工の簡易シャワーで体を洗う。

(昨日入った時に獣臭さはなくなりましたが、いかんせん子宮口が少し痛いですね。)

昨日のウェアウルフの特殊なペニスで勢いよく子宮口こじ開けられてしまい下腹部に違和感が残ったままだった。少しだけ人差し指で昨日も入念に洗った秘所を弄る。(んっ……………出血などは特になさそうですね。)

ナイチンゲールはシャワーを終えて浴室を出ると、

「ああ、燕青も汗を流し……………」

全裸の藤丸がこちらを見て顔を真っ赤にしていた。

「(ざ)(ざ)(ざ)め(ざ)め(ざ)めん!!」

「いえお気になさらず、お先に使わせてもらいました。」

ナイチンゲールは特に何も慌てることなく、タオルで頭を吹いてそそくさと着替える。

藤丸は半ば放心状態で固まっていたのだが結局、慌てて着替えを持って部屋から出て行った。

(ななななっナイチンゲールのおっぱいめっちゃデカかった！)

(でかああああああああい!!)

(ぷっくりと乳輪が盛り上がっててつかっ? 陥没乳首っていうのかなっ!?!とっとにかくすごかったっ!)

(はっ早く帰って発散してえ……………。)

年相応の慌て方と思考で藤丸はテントでゴロゴロしていた。

(マスターも女体に興味があるんですね。)

と呑気なことを考えながら藤丸が自身の胸部や股間を凝視していたのを思い出し、少し微笑ましく思うナイチンゲールだった。

しばらくして全員の準備が整い、朝日本時間9時に行動を開始した。

最初こそナイチンゲールを見て顔を赤くしたり青くしたりしていた藤丸だったが、ナイチンゲールが全く意に返していないようだったので、考えるのをやめた。

「ところで門まで来たは良いが、入れるのかねえ？」

燕青が身長の数倍ある門を見上げながら呟いた。

「すみませーん！」

藤丸が大きな声で叫ぶと、ゆっくりと門が開く。

中から衛兵のような格好をした2人が顔をだす。

「旅の一行なのですが、地理もわからずに途方暮れていたところ大きな街を見かけまして。」

マシユが持ち前のコミュニケーションで状況をある程度作って伝える。

「ああ、珍しいな。良いだろう。」

衛兵は顔ぶれを確認して、特に怪しい格好でもなかったため入国を許可したようだった。

「あの、こんな簡単に入っても良いんですか？」

「ああ、別に悪さしたって騎士様がたさつと助けてくれる。するのかい？」

「いえいえっ！」

全員が「騎士？」ということで円卓を思い出したが、そのままなかに促されてあっさり入国できてしまった。

街中はロリンチが見せた映像と同じで、賑やかな繁華街ではあるものの全員が男。たまたま藤丸たちを見て女性だと驚く者たちもいた。

「とりあえず、二手に分かれよう！」

一旦解散して情報を集めることになった。

燕青はアサシンなので陰ながら藤丸を護衛することになり、「藤丸、マシユ、燕青」と「ジャンヌ、ペンテシレイア、ナイチンゲール」というようになった。

ロリンチからは特殊な通信端末をいくつか渡されており、現地の者とのみ通信できる機械があるのでそれを使って後ほど集合することになった。

「それで私たちはどうしますか？」

ナイチンゲールとジャンヌとペンテシレイアが藤丸たちと別れてから少しして立ち止まる。

「順当に考えれば、収集任務もありますし、三手に分かれますか？」

「そうだな、情報収集しかり収集任務しかり手分けしたほうが早い。」

2人とも分かれることを提案したので、ナイチンゲールも賛同した。

ナイチンゲールはとりあえず、近くで座り込んでいる少年に話を聞いた。

「すみません、その男の子……ええそうあなたです。」

ナイチンゲールが声をかけると、座り込んでいた男の子は顔をあげる。顔に元気はなく生気もない。

スラム街などの場所を聞こうとしたナイチンゲールだがそれは一旦後回しにする。

(腹部……痣あり、左腕……過去に骨折の経験あり、左足裂傷……。虐待ですか。)

医者として子供がどういう怪我を負っていれば何があつたのかはある程度わかる。

ナイチンゲールは子供の目線になるようかがんで、

「お父さんですか？お母さんですか？」

「……………お父さん、お母さんはいない。」

それもそうか、とナイチンゲールは納得する。

街中に女性がいけないのだから当然、この子の母親もいない可能性の方が高い。

「そうですか…………。」

ナイチンゲールはどうすべきか考えるが結論は出ない。とりあえず、聞くべきことは

聞いておくことにした。

「すみませんが、スラム街など貧しい人たちが住んでいる場所を知りませんか？」

昔からスラム街などには情報が集まりやすい、彼らはとてもしたたかで、情報は生命線だからだ。

「……………あっちの方に行っちゃダメって、昔、お母さん……………ふえっ。」

男の子はスラム街の方を指差してくれたが、母親のことを思い出して泣き出し始める。

ナイチンゲールは咄嗟に精神医療の1つでもある抱擁をして見ることにした。

ナイチンゲールは男の子の背中に手を回して、頭を胸に抱える。

「……………お母さんの匂い。」

男の子は懐かしさから泣き止み、顔をほんのり赤くして心地良さそうな表情になった。

(良かった。もう大丈夫そうですね。)

ナイチンゲールは立ち上がると、足に突然抱きつかれる。

「お母さん!」

「私はあなたのお母さんではありません。」

ナイチンゲールは少し困った顔をして頭に手を乗せ撫でる。まだ6歳くらいだろうか?お母さんに甘えたい年頃だろう。

「……………おっばい。」

この子が何歳の頃に母親から離されたのかはわからないが、この歳になってせがむのは素直に今まで甘えられなかった反動なのではないかと同情してしまう。

ナイチンゲールは通りから見えないよう路地の奥に男の子の手をとって一緒に向かう。

昼なのに薄暗い、あまりいい雰囲気のところではないが、  
「私も用事があるので少しだけですが、どうぞ。」

ナイチンゲールは上着のボタンを外して胸をさらけ出す。

張りのある、色白でとても大きな美乳がぶるんと、今まで圧迫されていたのが解放されたようで勢いよく男の子の目の前に差し出される。

「わあっ！」

男の子は胸に顔を埋めて嬉しそうに抱きついてくる。

（かわいいですね……………んっ）

男の子の頭を撫でていると、男の子は左手で右胸の穴に人差し指を入れる。突然きた刺激に少し身をよじるナイチンゲール。

ナイチンゲールは完全な陥没乳首というわけではないが中に若干乳首が埋まっておりそれをほじくり出されるかのような指の動きに快楽を感じ取る。

「……………おっぱい飲みたい。」

男の子は上目遣いで懇願してくるが、流石に無理な相談だった。

しかし無碍にも出来ず、仕方ないので

「母乳は出ません。が真似事はいいですよ。」

と男の子の口に乳首を近づける。

男の子は嬉しそうに大きく口を開けて乳輪ごとかぶりつき吸い始める。

テクニクも何もない少し痛い吸引にナイチンゲールは諦め、もう少し付き合うことにした。

それから10分、男の子は乳首をねぶりつづけた。

「んふーっう……………んふー……………」

ナイチンゲールも流石に感じてきたのか両乳首をピンピンに勃起させて顔を赤くしていた。男の子は嘸んだりほじったり、引つ掻いたりつまんだり、とにかく様々な刺激を意図せず与えてくる。

(将来が……………末恐ろしそうな子ですっね。)

「お姉さんっ!」

「何でしょうか?」

「……がっ痛くって……………そのっ病気?」

男の子がもじもじとして押さえつけている場所は男性器だった。

ナイチンゲールは仕方ない、とゆっくりズボンを下ろし丁寧に着を外すと、10cmほどの親指くらい太さの皮を被ったペニスが出てきた。

(この年齢にしては……大きいですね。)

ナイチンゲールはそのままゆっくりと皮をむく。

「いっ痛いよお!!」

突然の外気にさらされた敏感な部分は快楽を痛覚と捉え、腰を引いてしまう。

しかしナイチンゲールはそのまま当然恥垢だらけペニスを口にくわえる。

「はああつあ!」

(衛生的にはあまりよろしくありませんが、「サーヴァント」ですし、大丈夫でしょう。)

口に広がる苦さを我慢して飲み込み舌で龟头を刺激する。

「ああつあああ!」

男の子は今まで感じたことのない強い衝撃に体を震わせつつも徐々により快楽を貪ろうと腰を出す。

ナイチンゲールは皮と竿の間を舌で入念に舐め上げて尿道口にした先を押し付けて吸引しつつ口を一旦話す。

(そうですね、現地人の精液も集めるべきでしょう。少々若いので精液は出ないでしょうがカウパーだけでも十分です。)

ナイチンゲールは先ほどより1.5倍ほど大きく、硬くなったペニスを手でゆつくりと扱きながら、もう片方の手で腰の避妊具を取り出す。

一番小さいサイズを取り出して男の子の性器に取り付ける。

「なつなにそれ？」

「これは、感染症を防いだり、子供ができないようにするスキンです。」

ナイチンゲールはコンドームをしっかりとつけると、少し考える。

(これで絶頂させればいいわけですが、口でコンドームをつけたペニスをしごくというのは些かおかしいですし、男の子もいっこうに乳首から手を離してくれません。なら……。)

ナイチンゲールはしゃがんでいた足を大きく開き、尻を比較的汚くない台に乗せて股間を前面に出す。

「いいですか？ここにあなたのペニスを入れてください。」

「ペニス？」

「はい、ちんちんとか男性器とかちんぽとか色々言い方がありますが。」

ナイチンゲールはゆつくりと自分の秘所を広げる。

男の子は言われた通りに右手を使ってナイチンゲールの女性器に亀頭をくつつけた。

最初は大変だろうとナイチンゲールは男の子のペニスを優しく挿んで膣口へ入れる。

「ふっふあああつあああー！」

未知の感覚が男の中に広がり腰を引きそうになるが、ナイチンゲールが両足を使つて男の子の背中をがっしりと固定したので抜きたくても抜けなかった。

「んっいいですよ、そのまま入れて、抜いて、入れて、抜いてを繰り返してください。」

いくら子供のペニスとはいえ10cmもあり、指でも絶頂に達することのできる女性器なのでナイチンゲールはいつも通り通常のセックスと同じ快感が上がってくる。

(子供のペニスつもすごく熱い。)

「おっお姉ちゃん！」

男の子は指と口で乳首を刺激しつつ、腰を動かしてナイチンゲールにこれでもかと密着する。甘い緩やかな快楽が断続的に襲ってきてナイチンゲールも少しだけ息が荒くなった。

「なっ何かっ!?!おしっこでちゃうっ!」

「そのまま奥で出すようにしてください。」

ナイチンゲールは男の子のタイミングを見計らつて、男の子の最後のひと突きに合せて足でペニスを限界まで膣内に押し込む。

一瞬だけ先端が子宮口に触れるが、そのまま男の子は射精した。

「ふあああつああああであるっでちゃうっ!?!あああー！」

ビクビクと震える男の子をよそ目に、ナイチンゲールは驚いていた。

(こんなに若いとまだ精子は作られていないはずですが………射精できてますね。)  
(データが収集しやすくなるのでありがたいですが。)

ナイチンゲールはそのまま少しの間射精の余韻に浸らせていると、男の子は眠ってしまっただ。

(よく頑張りましたね。)

ナイチンゲールは男の子の頭を優しく撫でると、ペニスを抜いて、ペニスについたコンドームを取り外しバツクにしまう。

(すごい………この歳でこれほどの射精量と精子量………もしかするとこの土地に生きるひとそのものが私たちと何か違うのかもかもしれませんね。)

最後にサービスとして男の子のペニスを口で綺麗にした後、服をちゃんときさせて、自身も服を整えてから男の子を最初いたところに戻す。

(本来なら起きるまでいてあげるべきなのでしょう。治安も良くはなさそうですし。しかし時間は有限です。心苦しいですが。)

ナイチンゲールはハンカチで秘所から少し垂れ落ちる愛液を拭き、踵を返して男の子が指したスラム街の方へ向かう。

余談だが服の上からわかるほどに乳首が勃起していることにナイチンゲールは気づいていなかった。

# フロアレンス・ナイチンゲールと特異点後編（十ジャンヌ （ルーラー））

ナイチンゲールが男の子から教えてもらった方角に進むと、どこか湿気っていて不衛生な陰鬱とした街に入った。

（ここがスラム街でしょうか？）

見渡すと橋の下や建物の中の細い路地に人が座り込みうな垂れるように虚ろな目をしていた。鼻にツンとつく悪臭が漂い、どこかで生物の腐敗でも進んでいるのかと思うほどに異臭があたり一面に広がっていた。

すれ違う人々の身なりも汚れていたり、破けていたり、継ぎ接ぎだったりとても良い身分には見えない。

ナイチンゲールはしばらく様子を確認しながら歩いていると目的の場所にたどり着く。

（酒場………いつの時代も情報が集まり、様々な人がいて………それでいて危険なところ）

ナイチンゲールが酒場のドアを通ると、暴風のような喧騒がゆっくりと静まり返り、

店内の客がしきりにナイチンゲールを見つめる。

ある者は新参者を警戒する目、ある者は値踏みする目、ある者は性的に。

バーカウンターの椅子に座ると、バーでグラスを磨いている店員に話しかける。

「すみません……………情報を買っていませんか？」

臆したり、怖がったりする素ぶりを見せることなかれ。

女という立場ですでに軽んじられるのはどこでも同じ。

「……………情報ねえ。なんの情報だい？」

店員はそのはつきりとした物言いと態度から、惚けるのをやめて聞き返す。

「この街にはなぜ男性しかおらず、女兒や女性、老婆が見当たらないのですか？」

その質問を聞きつけると、店内が騒然とし物音ひとつしなくなる。

空気が変わったのを感じ取ったナイチンゲールは警戒度を引き上げる。

店員はドア付近に立っている他の店員に目配せする。その店員は緊張した面持ちでドアを閉め、門を掛ける。

他の客も窓を閉め、カーテンをしめた。

「あんたあ、なんでそんなこと知れたがる？旅人か？」

「はい、旅の一行でこの街に訪れましたが、いささかこの街はおかしい。」

「何か理由があつて、それを知ったとき、あんたらはどうするんだい？」

ナイチンゲールはごまかすことも考えたが、一時間違えれば後はない空気に正直に話す。

「解決します。問題を取り除き本来の「普通」に戻します。先ほど母親を知らぬ少年と出会いました。ああいう子供がこれ以上生まれないようにします。」

辺りから失笑が飛び交う。

店員ですら笑いをこらえきれてはいなかった。

「何か？」

ナイチンゲールは問う。

「いやな？事情はわかった。で？対価は？」

料金説明はされていなかったが、情報料はそれ相応に高いはずだ。

しかもこの対応、空気からして真相はとても深く根強いものなのかもしれない。

「お金はいくらでも支払います。」

すでにナイチンゲールたちは、金などを持ち込み街に入ってから換金してそれなりの額を手にしていた。

しかし腰のバックパックからお金を出そうとするナイチンゲールの目の前に店員の手がでる。

「ははっ、悪いがここの奴らは別に金になんか困ってはねーんだ。」

「では何が欲しいのです?」

ナイチンゲールは腰にお金を戻し踵を返して聞き返す。

「あんただよあんた。」

「私ですか?」

「そう。あんたみたいになべつぴんさんなかないねえよ? そうさなあ………おいつ!

3日でどうだ?」

店員があたりの客に発破をかけるように問いただと、客は歓声をあげる。

賛同の意らしい。

「3日とは?」

「あんたが3日間俺らの相手をするんだ。期限付きの購入つてやつだな。」

「そんなものでよろしいので?」

その回答に少しどよめきが店内を走る。

「おいおい、別に抵抗ねーつつうならいいけどよ。随分簡単に引き受けるねえ。」

「はい、情報は高価です。それが私ごとき肉体で支払えるのであれば安いものです。」

その言葉に口笛が吹く。

「いいねえ気に入った。半分教えといてやるよ。この街に女街ねえのは一箇所隔離されてるかららしい。」あと、これは噂程度に思つとくべきことだが………、なんで

も神秘、特別な力を使ってこの国中の女を手中に収めているって言われているのがこの国の王だ。」

「今はこれだけだが、まあ………、とりあえずお仲間さんに連絡いれろよ。変に突入されて戦闘なんて興が醒める。」

「ありがとうございます。わかりました。」

ナイチンゲールはおもむろに立ち上がると店内の隅に行く。

他の客はまるで宴会でも始まるかのように酒や食べ物をがんがん持つてくる。

通信端末を起動させて藤丸に連絡を取る。

『はいはいっ………ナイチンゲール?どしたの?』

「はい、実はかなり有力な情報を手に入れました。」

『ええ!?!じゃあ一旦集まってー』

「いえ、すみませんが情報量の対価に肉体労働3日分が条件でして、街の復興を手伝わねばならないそうです。なのでこの場で。」

『なら僕らも手伝ー』

「いえ、なんでも医療関係者が欲しいとのことでもあるそうです。」

『そっかあじゃあ難しいね。』

「はい、それで情報ですが、この国の女性は1つの場所に隔離されているそうです。それ

とどうやら魔術の痕跡もあるようです。神ごとく力で女性を手中にしているようでもしかするとこの極小特異点、聖杯が関わってくるかもしれない。」

聖杯という単語が出てきて目を見張る藤丸は、真剣な面持ちになった。

『じゃあこっちは3日間の間にできる限り、解決を模索するね。』

「はい、お願いします。無理はなさらぬよう。」

『ナイチンゲールこそ気をつけてね!』

「……………はい。」

ナイチンゲールは通信を切り、店内に向き直る。

そのままカウンターへ向かって

「そして、私は何をすればよろしいのでしょうか?」

「まあまあそう焦るなって。時間はある。ゆっくりしよう。」

ナイチンゲールはそちらがそれでいいなら、と強いお酒を注文し上着を脱いだ。

「へーじゃああんたら世界中回ってるのか。」

「はい。」

ナイチンゲールはすでにお酒を何本か飲み干しているがサーヴァント故かあまり

よつてはおらず、むしろ複数名飲み比べをして脱落している者たちまでいた。  
「他には？例えばー、母国では何を？」

母国………一瞬生前のことを想像したが、どちらかといえばカルデアのことがほうがいいだろう。

「そうですね。生体データの採取などを。」

「生体データ？」

「はい、有り体に言えば精液ですが。」

その言葉に周りの客が少し驚いて聞き返す。

「じゃあ俺らのデータとかどうよっ!?がはははははは！」

これからそういうことも当然あるであろうと分かり切っているのでセクハラじみた言葉にも対して怒りはわかない。

「そうですね。限度はありますがある分にはいいでしょう。貴重です。」

その言葉に反応してかいなか、ナイチンゲールの後ろから男が現れる。振り向くとちょうど顔付近に男性器が来るようにペニスを露出していた。

「ならよお、俺様のしごいてくれよお。」

「……………わかりました。」

ナイチンゲールは腰から避妊具を取り出そうとするが、そこで制止が入る。

「おいおい、まだ盛んなって。まず2階行こうぜ。」

店員が性器を出した男をたしなめ、他の男性客のその男に先走んなボケとひっぱっていた。

ナイチンゲールは上着を持って、少しアルコールで火照った体を冷ますために第3ボタンまで開ける。

(男性からの性的な視線が強くなりましたね。)

店員について行くと、2階は10人は同時に寝れるのではないかという大きなベッドと様々な器具や容器が壁一面に整えられていた。

「そのベッドで仰向けになつてくれ。」

「わかりました。」

ナイチンゲールは特に拒否をすることなく、靴を脱いでベッドに上がる。

すると先ほどの店員が近寄ってきて、彼女の下腹部に近づいて来る。スカートをめくり上げる。

「レギンスにご丁寧な穴が空いてんのな。切ったのか?」

「搾精任務の効率化のため仕方なく、ですが。」

それを聞くと周りの男たちはニヤニヤと笑い始める。

「それじゃあぼちぼち始めるか。」

店員はそのままナイチンゲールの両足膝を持って左右に開かせM字開脚の姿勢をさせる。ナイチンゲールの後方からもう1人の男がベッドに上がり既に天に向かってそそり立つ肉棒を露出させながら膝枕をするように胡座で彼女の頭を支えた。

ナイチンゲールの顔の真横に肉棒が添えられる形になる。

店員が膣肉を左右へと開き、通常サイズの陰核を人差し指で刺激しつつ、左手で膣口付近を優しく擦り上げ膣壁を緩やかに刺激し始める。

(すぐに挿入をしないのですね。それにすぐく………膣口付近が熱いような。) 彼女は顔の横に添えられた陰茎を見る。

(長さはおおよそ15cm程度、太さは直径3cmほどでしょうか? 成人男性の通常サイズですがこの方の性器は亀頭が少し肥大化していますね。)

そういった観察をしていると、今度は彼女から見て左上から全裸の男性がベッドに上がってくる。すでに自分で性器を扱きながら向かってくる姿は少し滑稽だった。

ナイチンゲールのふつくらとした唇に触れる。

性器を刺激していた手で口に入れられたので、男性器から溢れ出たカウパーがナイチンゲールの口内に入り、しよっぱいなと彼女は思った。

そしてそれを皮切りに、周りでたむろしていた男たちが各々服を脱いだりズボンだけ脱いだりしてベッドに上がってくる。

1人はナイチンゲールの上のインナーを器用に局部だけ切り取り、彼女の大きく、柔らかい、ふわふわの巨乳を露出させる。

インナーはヒートテックと呼ばれる衣装のように、きつくぴっちりと体に張り付く者で、凹凸の少ないものが着用することを想定とされていたが、ナイチンゲールのような巨峰を持ったものが着るとどうしても締め付けられた様子で、ハサミの切り口から勢いよくぶるんつと現れる。

「おしいっ……ははっ」

ナイチンゲールの乳首は半ば勃起しており、乳輪も盛り上がる形になっていた。

おそらく昼の少年との情事でそのまま敏感になったまま収まらなかったのだろう。

周りの男たちは三者三様で、体が大きい者、小さい者、太っている者、身長が高い細い者など様々だ。ただ一様にして性器のサイズは独特で、体が大きいから陰茎も大きいというわけではないようだった。

（あの男性は小柄ですが陰茎が18cmほどありますね、あちらの男性は体が大きいわりに陰茎は短いですが太い。あちらの方は陰茎は長さ太さ共に通常サイズですが睾丸が大きすぎる。）

こういう思考をしている最中、男たちは皆彼女の体を触ったりいじったりしているのだが、依然として店員はナイチンゲールの秘部を緩やかに刺激し続けており、手を休め

ることはなかった。

(んっ……………何か…変な感じが。)

彼女は顔を紅潮させて、顔の横のよく洗われていない男性器の汗臭さを鼻で感じ取った。

「マスターからの連絡でナイチンゲールさんから有力な情報を得たから集まって欲しいと言われましたが……………」

ジャンヌは今完全に道に迷っていた。

当然大通りならともかく、少し寂れたような道にいたので街の方向を示す看板などはない。

人に聞こうにも意識がなさそうだったり、生きているのか死んでいるのかわからない座り込んだ者たちがほとんど。

(いつの時代、どんな場所でもこういうった方々はいるのですね……………。)

ジャンヌは希望も生きる目的もない虚ろな目をした彼らを知っている。彼らと同じ目をして自分に最後の希望を持つてすがつてきた者を知っている。

ジャンヌはこの状況をいくばくかでも打破できる算段がないかと、マスターとの合流を再度考えて近くの比較的話せそうな男の子に話しかける。

「すみません、実は道に迷ってまして。」

「……………あ、っああ……………あ、」

男の子をよく見ると、口からよだれを垂らして、体の挙動がおかしい。手足を震わせているようだった。

ジャンヌは咄嗟に駆け寄り、宝具の回復魔法仕様も考えたが今は藤丸もいないのでどうしようもない。

「大丈夫ですかっ?どこか怪我を!?!」

「あ、ああああ、お、ちんつち、ん……………お、っば……………い、」

「なんですか?大丈夫ですか?」

呼びかけにも反応せず、途切れ途切れの言葉を紡ぐ少年を心配してジャンヌは緊急通信を藤丸に送ろうと一旦少年に背を向けて距離をとる。

端末を操作する瞬間、背中から衝撃が突然襲い前かがみにジャンヌは倒れた。

「なっ!?!」

何かの攻撃かと後ろを見れば、背中には先ほどの男の子が張り付いていた。

目は赤くなって血走っており、身体中に浮き出た血管、極め付けは男の子の体の半分

はあるかというほどの長さの陰茎だった。

(なっなんて大きっ……………正気じゃない!?)

ジャンヌはうつ伏せ状態から仰向けに体を起こそうとすると、男の子が途中で止める。そしてジャンヌの左足太ももを抱きかかえる。ジャンヌは中途半端に仰向けになって右肘で体を支え、左手で少年を汚させないようにしながら引き剥がそうとするが子供とは思えない力強さ。

(つくー強いっ!)

「どうしたんですかっ!? そんなこととしてはいけませんっ! 放してください!」

必死に男の子に話しかけると、

「あ、おっおねえちやつん、ごめつでも……………ぼくつちんちんつが……………いたつ」

意識を朦朧ときさせながら途切れ途切れになりながらも話し始める。

「あだま……………いだつ、頭にっ……………声っ『孕ませっ……………ろ!』って……………わがなんいっけど、こうしたぐっ……………て!」

男の子は腰を前後に動かす。

男の子の肥大化した凶悪なペニスジャンヌの股間に押し付けられ下着の上を力強く擦り上げる。

(んっダメです! こっこんな子供とっなんて!)

ジャンヌはなおも抵抗しようとする。

「あのつなつ名前は!？」

「なつまえ? ?なんだ………け、………ジール。」

「ジール君!欲望に負けちゃダメです!こういうのは一生を添い遂げる相手とすることなんです!だから抑えて!」

ジールはその言葉に一瞬だけためらいを見せる。

ジールも自分がどこかおかしいことはわかっていた。しかし頭には「犯せ!」という命令のようなものが響き続け吐くほどの頭痛と股間の熱さで理性が働きづらい。

ジールはなおも腰を止めることはなくむしろどんどん加速させていく。尿道からはカウパーがとぼとぼと溢れ出し、ジャンヌの女性器を覆っている服を湿らせる。

ガチガチに硬くなった亀頭がジャンヌ肉芽を服の上から引つ掻き仰け反るジャンヌ。

(んああつ!ダメですつ!)

ジャンヌが腰をヒクつかせて動かすと、運悪くジールの亀頭がぴとつとピンポイントで膣穴にフィットする。

「待っ!?!」

ジャンヌの制止も効く事はなく、ジールは欲望のままに思いつき腰を突き出した。

グボオ！

「ああつあつ！おお！！」

路地に大きな音が響いた。かのように思うほどの衝撃をジャンヌは子宮を押し潰されながら下腹部で感じ取る。

ジャンヌの下着の布ごと、ジールは無理やり挿入し、これでもかと奥へ奥へと進める。ジールの肥大化したペニスの中腹に差し掛かつて膣道の収縮も限界になり子宮は押し潰されてジャンヌは背筋をのけぞらせ足をピンと張る。

（あがあつーいぎいー）

ジャンヌが意識を失いかける直前に、ジールはそんな事おかまいなしに今度はペニスを素早く引き抜く。異様に高いえぐる気満々のカリがジャンヌの膣壁をザラザラとした布越しに刺激してくる。

その強烈な刺激に今度は飛び起き、大きな胸を震わせる。

ジャンヌはなんとかジールが引き抜く動作に合わせて腰を引き、完全にペニスを抜く。

ぐぼんっ！

と、勢いよく抜いたので更なる快樂が押し寄せるがなんとか無視して、力が入らない腰を引きながら後退して懇願する。

秘部からは大量のカウパーと愛液ででろでろになった下着が元の位置に戻るために抜けた。

「じっじール君！わかつわかりました！そっその代わりちよつと待って！」

（どつちらにせよ、じール君を放っておく事はできません。仕方ないですがつ）

ジャンヌはバッグから避妊具を取り出す。獣用ではあるがいまのじールの異常に成長した性器ならば丁度いいだろう。

ジャンヌは尚も自分の腹部、しかもヘソの上の方までギンギンになったペニスを再度確認して驚く。

（こっこんなに、成人男性でもまずありえない長さで太さ……：龟头まで太い血管がびっしりと張りめぐらされていて、じール君の体は色白なのに付け根から竿にかけて褐色の黒々しい性器になってる。）

ジャンヌはそのままゴムの輪っかをじールのペニスの先端にくつつけ、慣れた手つきで空気の入らないように取り付ける。

（少しきつそうですね…。）

本来申し訳ななさなど感じる必要はないのだが、聖女だからだろうか、誰にでも慈しみの心を忘れない慈愛のある考え方だった。

「もつもおがまつ我慢で……：できなっ!!」

「まっそんなっ！」

ジールも限界なのかジャンヌを押し倒し、腰を大きく振り上げる。

急にまた荒々しくなつて戸惑うジャンヌだが、そのまま蛍光緑のゴムを取り付けられたビキビキのペニスは乙女のとろとろの肉壺に突き刺さつた。

酒場の2階ではグチュグチュと厭らしい音が響いていた。

音の発生源であるベッドの真ん中の仰向けでいるナイチンゲールは息を荒くし、顔を真っ赤にしているのも関わらず、いつもの無表情さを貫いていた。

ナイチンゲールの秘部は愛液でドボドボで、ベッドに小さな水たまりを作っている。触り始めの頃の冲さよりも1.5倍ほど大きくなった肉芽を未だ刺激し続け、中指と人差し指の腹や背で膣壁を程良く撫で上げる店員。

「いやあ、あんたもつねえ。普通の女ならとつくに堕ちてるんだけどなあ。」

「ふー………んふー………満足しましたか？」

（膣口付近の愛撫が始まって既に5時間。喉が乾きますね。）

ナイチンゲールはそのまま両手にある男性器を刺激し続ける。

物好きがいたようで、ナイチンゲールが避妊具を取り出すと、それを取り付けてフェラをしてほしいと言いつ出す者がいた。

その男の男性器は細長かったが、長さは26cmのやや柔らかめ。コンドームをナイチンゲールはテキパキと取り付け、ゴムごと口に含んで下や吸引で刺激を与え続ける。

まだ射精した者が誰もいないということが異常だった。

そして射精してもいないのに、5時間も勃起し続けられる持続力に彼女は半ば「興味深い」と思ってしまう。

「まさかあ、いい女はご馳走だ。下ごしらえつてもんを怠ったら意味はなくなる。」

「ふー、……。そうですか。ならお好きにどうぞ。」

ナイチンゲールは多少呼吸しづらい上に口淫中に会話しているので流し目で返事を  
する。

「ああ、そうさせてもらおうよっと。」

そう店員が言うのと、

ナイチンゲールは突然腰を上げて体を大きく震わせる。

(なつなになに……。がつ? ああ、つ!)

「お、つ!!」

「おー鳴いた鳴いた。」

辺りからは口笛や拍手が少々。

ナイチンゲールは突然襲った全身の感覚に戸惑い、視界を右往左往させて収まるのを待つ。絶頂したわけではない。至極敏感なところを急にえぐられたような感覚だった。「女の膺にはな？個人個人で最っ高に感じる場所がいくつかある。あんた無表情だから探すのに苦労したけどなあ。」

「かつあ、っ！」

「あんたの場合まんこの入り口から俺の中指の第二関節くらいいったところの上部分を刺激してやればいい。他にもいくつかあるけどなあ。」

ナイチンゲールは自分でさえ知らなかった弱点を握られて少しだけ焦った。そしてビクビクと痙攣していると、口に思いつきり先ほどのコンドームをつけた男がペニスを突き入れてくる。

(い、息がっ!?)

「お、えっんっぐえ×っ！」

「じれつてえからよお、俺は俺で出させてもらおうぜ！」

喉奥をレイプするかの如く激しく突き入れられ、ナイチンゲールは嘔吐感を催し口からよだれをダラダラとこぼす羽目になる。

男はすぐに射精へと導かれ、達する。

ぶびゅっびゆるっびゅー!

口の中に広がる精液臭さと、喉元で膨らむゴムにむせ返るナイチンゲールは、鼻水を垂らしてさらに体を震えさせる。そこを見逃さず、店員はまた手を使って今度は陰核を捻りながら薬指も足して3本指を入れて手マンをし始める。

「まつ待……………おおおっ!はあっ!」

口からペニスを吐き出して、喉の奥に詰まったゴムを吐き出す。

未だ手マンが続けられ意識がぼーっとしてくるが吐き出されたゴムをみて驚く。

(「こっこんなに……………のっ濃度高く、精子が動いてるかのように見えるほど……………プ  
リプリして……………」)

(普通の男性の射精量は1mlから3mlのはず……………これは、10mlを優に超えてっああっ!)

考察中にもどんだん秘部への刺激加速していく。

ナイチンゲールは絶頂をしないように呼吸を整えながらなんとかゴム口を結ぶ。

「驚いたろ。俺らはみんな特殊な体質でよお。巷では絶対に孕ませることが出来る集団とまで言われてる。」

「同種、つまり人間の女は俺らの精液を子宮で飲み込んじまえば絶対孕む。異種族もほとんど孕ませちまう。まあ大抵は奇形児ができて死にたえるがな。こん中には動物の

メスに入れたほうが気持ちいいって言う奴が数人いるしよお。」

1人の男がナイチンゲールの首筋に針を刺す。

咄嗟に動こうとするが首を固く押さえつけられる。

(力がつサーヴァントの私をつ?)

サーヴァントの力を持つてしても剥がせない強さに驚く、首筋に目を向けると注射器で何かを注入されていた。

「んっごっこれ………は?」

「特殊排卵誘発剤、お前さん普通の人間じゃないよなあ?」

その言葉に目を少しだけ見開くナイチンゲール。

「まあ別にどんな人間だっていい、穴があつて、産めるならなあ。」

(私はサーヴァントですから、たとえつ………あ。)

ドクンつと心臓が跳ね上がる感覚。

「たとえてめーが妊娠できなくつてもその薬は超強力な媚薬となる。あらゆることに調整次第で使える万能薬さ。とりあえず感度が上がつてるなあ?」

店員はガニ股びらきで潰れたカエルのようにひくひくしている彼女の体の臀部を持ち上げて、後ろから細長い棒を取り出す。

「キッツイだろうが狂うなよ?大抵の女はこれで発狂する。今からこの細い棒で子宮口

をこねくり回す。」

その宣言をぼうつとする意識の中、今までにないほど熱くなった自分の秘所を鋭敏に感じ取りながら聞く。

2つの大きな果実は左右の男たちに弄ばれ、吸われ、抓られ、引つ張られ、しごかれる。大量のこつてりとした精液がナイチンゲールのお腹に射精されへソに小さな水たまりを作っていた。

あれから15分間休まずジールはジャンヌの蜜壺を食った。

「あつ♡ああつおぐつお♡だつめつ……………止めつあ♡♡」

路地に嬌声が響き、ジャンヌの淡いピンク色の菊門にジールの大人の拳ほどに肥大した睾丸がパンパンと当たる。

「ぎぼじいいいっ！おねっちゃん!!気持ちいい!!!」

「まつ待つへっ!」

「止まらないっ……………よお!」

ジールは既に完全に奥まで達しているにも関わらずまだまだ奥まで入れようと全体

重をかける。

「かつはあ！」

内臓が押され、肺から空気が漏れ出るジャンヌ。彼女は普段の威厳ある聖女の顔ではなく、頬を紅潮させ、口から唾液を垂らして汗でびしょびしょになった服をはだけさせ、されるがままだった。

「お姉さっん!!でっでるう。」

「へえあ!」

射精の宣言で、突くのをやめるようにいう間も無く、ジールは今現在挿入できるところまで目一杯挿入して射精する。

ぼびゆるっびゆるびゆるびゆるっ!!びゆぶううう!!びゆるびゆるー!!!!

「あっあああ♡あっおっおっおっおっ おほおっ!お……!!!!」

子供とは思えないほどの量と射精の圧力。

鈴口から勢いよく半固形ザーメンが遠慮なく排出され一気に膨らむコンドーム。道で膨張するゴムに絶頂中のジャンヌは追い撃ちを食らって腰を思いつきり上にあげ、ジールの男性器がずろんっ!と引き抜かれる。

ジャンヌは意識が朦朧としており視界は明滅して青い空が光り輝くようにバチバチとしているように錯覚する。

ジャンヌは脱力状態でも、ゆっくりと顔を下半身に向けて秘所に詰まったコンドームの口を掴む。

なかなか出てこないが無理やり引き抜く。

にゅろん

ホカホカの使用済みコンドームがジャンヌのくぱくぱと痙攣する膣道から現れる。

（ごっごっごんなに!? クリーム色でほとんどゼリーみたい濃い……、量も50mlはっ……こんなっこんなの膣内で射精されたらっ）

誰でも女性であれば、そんな精液を見て当然身の危険を感じてしまう。

ジールはそのままゆっくりと起き上がると、仰向けで使用済みコンドームに驚愕しているジャンヌに覆いかぶさる。

「ええ?」

ジャンヌは放心状態でジールを見ると、未だ目は血走っており先ほどよりもっと苦しそうだつた。

「おねっちゃん……もつと、ちゃんつと……今のより、もつと長く溜めてつて……声が……」

一般的に男性は射精をする絶頂に達する前に刺激を与えるのをやめて、緩やかにまた

快樂の波が収まるのを待つてから、また刺激を加えるということをやり返けると、その後の射精で射精量が大幅に上がる。

それを知つてかしらずかジャンヌは恐怖すらしした。

(ただでさえ15分ぐらいのピストンでこの量……これ以上長くなつて!?)

ジャンヌが逃げようと手を地面についた瞬間、ジールはジャンヌの両足膝をつかんでマンぐり返しの体勢にさせる。

勢いよく挿入される極太ちゃんぽにジャンヌは白目をむく。

「ぜったい孕まつせる!!!」

ジールはジャンヌの後頭部をがっしりとつかんで下を口に突っ込みながら腰を思いつきり落として子宮を押しつぶす。

地獄のような快樂のピストンが始まりジャンヌにはそうすることもできなかつた。

身体中がプルプルの精液で包まれ、塗りたくられている。

水分補給は精液か尿。

あらゆる器具でいじめ抜かれたナイチンゲールの女性器はピクピクと痙攣し続け、空

気の動きでさえも刺激してしまう。

膣口からは白く濁った愛液がドボドボと垂れ落ち、まるでご馳走を目の前にしてよだれを垂らす獣のようだ。

「俺の役目はここまで。」

ナイチンゲールに一日中ずっと手マンをし続けた店員は既に消えた。

目の前には褐色の肌をした筋骨隆々とした男が立っていた。

「おぐっ!!?」

突如腹部に衝撃が走る。

(殴られた………のでしょう………か? ああ、あ、っ!)

殴られたわけではない。殴られたかのような強さで下腹部の子宮めがけて注射器を突き刺さされたのだ。

「おい、これで何本目だ。」

「……………確か4本目だったかと。」

「随分とつええなこの女。」

褐色肌の男はナイチンゲールの精液ででろでろになったレギンスを破き、下半身を観察する。人間はここまで出せるのかと驚くぐらいに大量の愛液が水たまりを作って、秘部はまるで早くよこせというように淫らだった。

「さて本番だ。」

「あ……………なだは？」

「まだ理性があんのか。俺はこの店のオーナー、アレンだ。」

「今からお前をこれで犯す。」

アレンが示すのは彼の剛直。

黒々しく、ボコボコと鍛えているかのような見てわかる張りや硬さ。カリ首は2cmほどもあり、亀頭はナイチンゲールの拳ほどもあるだろう。

尿道は太く一度に出せる量がいかにほどなものかわかってしまう。太い血管が張り巡らされておりもはやスラリとした人間の性器の面影はない。

異常な発達を遂げた男性器の下にはソフトボールほどの大きさの睾丸がありゆらゆらと揺れていた。

とんととナイチンゲールの下腹部に竿を乗せる。ペニスの付け根の尿道口がボツキして2倍ほどの大きさになった陰核を潰し、ナイチンゲールは絶頂しそうになるが咄嗟に両手を力一杯握りしめた。

「……まで挿入する。」

そう宣言される。

ペニスの先はナイチンゲールのヘソを5cmほど飛び越し、鈴口からトロトロとガマ

ン汁を垂らす。

「残り1日半が期限だ。1日中ハメさせてもらうが俺は絶対に射精しない。きっかり1日後まで我慢して我慢して射精する。」

そういうとアレンは大きな鍛えられた腕でナイチンゲールの腰をしつかりと持ち上げて固定する。

ぶにぶにの2つの恥丘を少し押し広げ、アレンの鈴口がナイチンゲールの膣口とキスをする。

「んっ！ふー！ふーっ！」

ナイチンゲールは息を荒くして、少し触れただけでも絶頂してもおかしく状態でも屈することはなく、無表情をギリギリまで歪ませてくるであろう衝撃に備えた。

「二気に入れるつてのも悪くはない。だがここは味わうべきだ。」

アレンはそういうと、すさまじい力でゆっくりと挿入し始めた。

メリメリツミチツ

と、肉が無理やり引き伸ばされ、今の今までキュツとしまっていた膣道がゆっくりと大きく口を開ける。

(あっあああっ♡んっふいーっふいーっふいーっふいー)

3分ほどかけてゆっくりと挿入するものの、

アレンの男性器の3分の1に差し掛かったところで、止まる。

「ここがお前の口か。」

アレンはそのまま先ほどよりも強く押し込む。

ぐみゆりゆんっ

「おっっっ」

こらえきれず口からおかしな声が出てしまうがそんなことを気にしている余裕は流石にナイチンゲールにもなかった。

アレンはその後5分かけて完全に己が分身をナイチンゲールの中に納めた。

彼女の腹部はおかしな形に盛り上がり、接合部からは大量の愛液が溢れだす。

本来なら裂けて内臓破裂で死ぬ。しかし実のところナイチンゲールのようなサー

ヴァントでない普通の女性もここまでは入るのだ。

理由は前座が恐ろしいほどに長いことだ。

長時間かけて女性器をほぐす。

内臓の凝りをなくし、血行をよくする。

そうすることで女性の体は恐ろしいほどに柔らかくしなやかになる。

「じゃあ俺も気持ち良くなりたいたいし動くぞ。」

挿入されて放心状態の彼女はそれでも、叱咤して目の前の男に顔を崩さず、

「あっおぐっ……どっどうぞ。契約ですからからお好きにつああっ！」

その言葉を聞くとアレンは腰をがっしりとつかんで一気に引き抜いた。2cmほどもあるカリが引つかかり膣壁をえぐる。

酒屋の2階どころか周囲の家にすら響くほどの矯正が聞こえたそう。

あれから2時間、ずっと変わらないペースでジールはジャンヌの性器を食っていた。彼女の性器はナイチンゲールとはまた違った包み込みのあるふわふわな名器で、所々硬いひだもありいいアクセントになる。

「あっ♡おっおっほ♡ほおおおっおっあお♡お!!」

スパンツぐりよろろっ!ズパンツ!ずろろっぐちゅん!!!

「おねーちやつん!出るっそろそろっもう無理い!」

「らっらめれすう!私には想い人おお♡があ!!」

「僕でいいでしょっ僕っ!」

「だめっ膣内はらめれすっ!膣内はジールくんのじゃっなっ♡」

「だめっ!!出すう!孕ませるっ!」



びしゅあああああああつ!!!

「ああ、あ、あ、おおえっ♡あああつお、お、お、っ!!!」

長い長い射精が終わり、ジャンヌのビクビクと痙攣し続けるまんこからジールは疲れ切った顔で性器を抜く。

そのまま2人とも意識を失ってしまった。

「おらっそろそろ出すぞ!!」

アレンとのセックスが始まってちょうど1日後、ナイチンゲールはもはや息をするのが精一杯だった。

アレンの腰使いが早くなる。

ナイチンゲールは絶頂状態をずっと継続しているような上がっている感覚に半日苛まれ、体は完全に脱力しておりアレンに抱きかかえられる形で生殖行為をしていた。

「ぐっ出るー!」

膣内の感覚が鋭敏すぎて、アレンの精液が尿道を押し広げてナイチンゲールの子宮に運ばれて行くのが手に取るようにわかる。



でおびただし量の精液がたまり、直腸に流れ落ち、反射的に肛門が引き締まる。

ナイチンゲールは今まで我慢していたツケを支払い、下半身が壊れたかと思うほどに絶頂し、腰を限界まで上げ、背中を弓なりにしてのけぞりながら尿道から潮と尿を噴出する。

目は上へぐるりと向き、顔は真っ赤で、絶頂の反動か鼻から鼻血を出してしまい、何度も痙攣してベッドでのたうち回る。

アレンは痙攣で揺れる腰を全く揺らさないほどに強く固定して射精中でもありながらなおも奥へと突き入れるが、本人も限界なのかすぐさま引き抜いた。

「ずりゆるろろろつぐりゆんっ！」

途中亀頭が子宮口に引っかかるが、無理やり引き抜く。

ナイチンゲールの下腹部はぼっこりと膨らみ、なおも潮を吹き続けていた。

アレンのペニスは役目は終えた、と硬度を落として下を向く。店員もペニスを引き抜く。

3分ほどして痙攣が収まるがナイチンゲールは失神していた。

「おい、俺の後で締まりが悪いのはいつものことだが、使うか？」

アレンの呼びかけに周りの男たちが「もちろんだ！」と答える。

ベッドに投げ捨てられたナイチンゲールはその衝撃でまた潮を少し吹き出す。

そんな彼女を気にも止めず、男たちが入れ替わり立ち替わりナイチンゲールの熟れたぐちよぐちよのまんこに性器を容赦無く突き入れた。

「おおっすげえ！店長が挿入した後なのにすっげえ締まる！」

ナイチンゲールの子宮はしぼむことなく、アレンの精液を輩出しないまま、ぴつたりと閉じ膣口もいつものまま閉じていた。

アレンほどではないが、通常より少し大きい男の男性器をなおもまた啜え、締め上げる彼女の性器は、彼女の意思と関係なく愛液を追加していった。

## ペンテシレイアと海魔（+マシユ非sex）

「ナイチンゲール、大丈夫かな？」

「さあねえ、ま、バーサーカーなんだし大丈夫だと思っただけだねえ？」

マスターである藤丸が宿屋の窓に腕を組んで空を見上げつつつぶやく。

燕青はその言葉に嘲笑気味に屋根で返事をする。

「でも、そろそろ3日経つけど一行に連絡がこないし。それに……。」

ジャンヌダルクも連絡がつかないでいた。集合するようには言ったのだが、了承した後連絡がない。

ペンテシレイアはつい先ほど遅れて合流したが、「……………、先に湯浴みさせてもらう。」と言ったつきり。

「まあナイチンゲールはバーサーカーでも結構理性的だし、自己回復もできるからなんとかなるかなあ。」

「先輩、私が少し様子を見てきましようか？」

マシユが心配そうに提案する。

藤丸は少し考えた後、燕青を護衛につけようか迷う。しかしマシユが「大丈夫です。」

と言ったため、30分したら戻るように伝えて許可した。

マシユが外出した後、燕青が窓から入ってくる。

「俺じゃなくてよかつたの？」

「うん、マシユもかなり強いし、30分程度ならすぐ駆けつけられるから。」

燕青はそつかあ。と言ったつきりベッドに入る。

藤丸も燕青の横に入って、目を閉じる。

「……………、マスターは好きな女とかいないの？」

「へえあつ!？」

「いや、ガールズトークならぬボーイズトークだよお!せつかく男2人つきりなんだ。」

燕青は寝たままくるつとこちらを向く。

藤丸はワタワタと焦って、うーん、と悩んだ後、

「まあ、好きっていうかなんていうか、……………マシユはいい子だね。」

「おおおつ!!」

「うへっ恥ずいわあ」

「告らないの？」

「無理無理っ振られて今の関係が崩れるくらいならやめとく。……………それに、マシユはもつと多くのことを知って普通の女の子みたいにたくさん経験して、そこからじゃない

と。」

「無垢な子を騙してる気分って?」

「……………まあね。」

藤丸は少し恥ずかしそうに天井を見ながら答える。

燕青は自身のマスターのそういう公平なところがやはり美徳だと思い、ボーイズトークを続ける。

「ナイチンゲールさんとジャンヌさん、大丈夫でしょうか。」

マシユは宿屋から出ると大通りで人を探す。

やはり女性はおらず、仕事帰りか、男性達が酔って騒いでいるだけだった。

そこにはナイチンゲールやジャンヌの姿はなく、男性特有の汗臭さが充満しているだけだった。

(先輩も心配してるし、ここで私が見つけられれば褒めてもらえたりっへへへ)

マシユはそう思って大通りを通りつつ路地を除きながら進み始める。

少し先を歩くと、大きなお店の路上でテーブルや椅子を出してるところの前を通る。

「ひやつ！」

マシユは尻に突然違和感を感じて飛び上がる。

どうやら酔つ払つた男性がマシユの尻を驚掴みしたようだった。

「おお、ごめんなねーちゃん。綺麗な尻ですよ。つい。」

「きつ気をつけてください！」

マシユは少しだけ抗議してからそそくさとその場を去るが、大きな声を出したためか他の人の視線が気になって、人気のない路地に入つて息を整える。

(男性はそういうものだと思いましたが、あそこまでは。)

突然他人の身体に無断で触る行為を平然とやってのける精神にマシユは信じられないところぼした。

息を整え路地を見るとあたりには座り込んだものや倒れているものがある。

最初こそこの街に来て心配で声をかけたりしたが、薬で中毒を引き起こしていたり、酒によつていたりなどどうしようもないもので、哀れみの目を向ける。

マシユが大通りに向かおうと振り返ると、大きな男が目の前に立つており、マシユの鼻先に男性器の先端がくるように立っていた。

「なつなにをつっ!？」

マシユはすぐに距離を取ろうとするが肩を掴まれる。

男はなにもゆうことなく、マシユの頭頂部を片手で鷲掴みにして口に男性器を無理やり突き入れた。

「お、っ、えっげえっ!?!」

男性器はそのままマシユの喉を通過して食堂まで到達する。

マシユは一瞬で嘔吐しそうになるが逆流したいの中身は性器でせき止められているので吐くことはなかった。

(マシユこんな熱いつ!?!?くさいいつにがつ!?)

初めて見る男性器、初めてさせられるイラマチオ、マシユはなかばパニックになりながらも抵抗を続ける。

しかし、男はそのまま無理やりマシユの頭を前後に動かして、口淫させる。

ぐっぽっぐっぽっちよぐっぽっ!

マシユは呼吸ができず、顔が真っ赤になり息ができずにこのまま死ぬのだと思う頃に、突然口内にどろどろの白濁液が溜まり、その味と臭いに驚愕して、咳き込み鼻から精液が逆流してツーンと痛みを感じた。

(せっ精液!?!しゃっ射精されたんですかっ!?!これがっ男性のっ!!!?)

マシユが驚いているうちに男性はそのまま手を話してマシユの口からペニスを引き抜く。仕事は終わったというばかりにゆつくりと柔らかくなっていき下を向く男性器、

しかしながらそれでも先ほどの大きさは大差ない。

マシユは口から精液を吐き出し、咳き込みながら男性の方をみる。

(おつゝほつ……………はあつ……………あれつが、男性の……………先輩にもついでる……………)

マシユはよくわからない陶酔に近い状態になっていたが、酸欠によるものだ。

口の中は精液の味と臭いと男性の性器の混ざり合った異臭がして吐き気を催すがなんとか我慢する。

男性はそのままでこかへと歩いて行ってしまふ。

マシユは追う気力も無く、呆然としてただ吐き出した精液が装備に垂れるのを見て、

(男性の……………精液はこんな……………粘つ……………いんですね……………。味も…臭いも……………)

と考えていた。

そこから10分後、装備に垂れた精液と口まわりについた精液をハンカチで拭き取り、その場を後にする。

少して藤丸達と合流するが、何事もなかったかのように振舞って湯浴みに行った。

余談だが、マシユはハンカチを洗うのを忘れて後日カピカピになったハンカチを捨てることもできず持ち歩くはめになり、藤丸に気づかれなにか気が気でなかったそう。

藤丸達は、ナイチンゲールからの連絡が経ってから4日後の朝、戦闘していた。

燕青は海魔の攻撃を左手でいなすと、右手で正拳突きを放ち海魔のボディを打ち砕く。

ペンテシレイアはマスターに攻撃力強化の魔術を施され、モーニングスターでもう一体の海魔を叩き潰し、圧死させた。

「ふう、戦闘終了。かな？」

「お疲れマスターあ！今回もいいサポートと支持だったぜっ！」

燕青は藤丸とハイタッチして肩に手をおく。

「マスター、この海魔たちの死体を片付けておく。貧民街とはいえ放置しておくのは良くない。マスターたちは他にエネミーがないか探しておいてくれ。」

「りようかーい！ありがとうね。」

「気にするな。」

ペンテシレイアは倒れた海魔の死体を担ぎ上げると貧民街の近くのゴミ捨て場に行く。人気はなく、誰もよりつくことはなさそうだった。

ペンテシレイアは何度かあたりを確認して、海魔の二体をゴミ捨て場に置き、もう一体を近くの廃屋に持って行った。

途中海魔が大きすぎたため素手で扉を壊すということはあつたが概ねスムーズに部屋へ入れることができた。廃墟に入ると、ペンテシレイアは腰のポーチからコンドームを取り出す。

(こんな生物の体液も取らねばならないのか。)

(幸い、海魔は身体中に粘液がついているし、生殖器も見当たらないからこれでいいだろう。)

ペンテシレイアはそのままコンドームを広げて、海魔の粘液を中に入れる。

十分に入ったと思われたその時、突然海魔が動き出す。

「まだ生きっ!?!」

ペンテシレイアは咄嗟に蹴りを入れるが空振りに終わる。そして足を高らかに上げた状態になってしまい海魔に足払いをされて床に腰を打ち付けてしまう。

その隙を見逃さず海魔はペンテシレイアの下半身に絡みつき腰や足に触手を伸ばしてがっしりと固定した。

「ぐっ放せっ!!」

ペンテシレイアは必死にもがくが抜け出せない。

海魔は口のような中心の大きな穴から太い触手を出す。

ずるんっ

その触手は途中でぱっくり割れると中から生殖器のような形をした粘液まみれの管が現れる。

(まさかっ?)

ペンテシレイアは初めて見る海魔の生殖器らしき器官におぞましさを感じる。

そんな彼女を無視して、海魔はペンテシレイアの装備をずらすこともなく、上から無理やりおしつけて挿入。

ぐりゅつどちゅんつ

腔内で衝撃を感じ取ったペンテシレイアは一瞬遅れてくる痛みと快楽に背をのけぞらせ、絶頂し、尿道から短く潮を吹く。

(なっ!?!ななっあ、いっぐっ!?)

ペンテシレイアは挿入と同時に絶頂したことに驚きながらもじんじんと熱く、敏感になる己が性器に目を向ける。あまりの強さに装備は自然と脇へ逸れ生身で挿入されていた。

海魔はペンテシレイアが絶頂していることなど気にもせずそのまま高速でピストンを繰り返し、子宮をズコズコと押しつけて何度も何度も腔壁をえぐる。

たまらず彼女は愛液をすぐにトロトロと分泌して溢れ出る快楽に耐える。

(なっぜっ!?!まさか、こっつの粘液がっ?)

海魔の粘液が異常に粘っていることに普段戦闘で絡みつく粘液とは違うものだと気づく。しかし気づいたところで時すでに遅し、粘液の効果はすでに彼女の下半身を支配して、今もなお侵食を強めている。

ピストンが突然止まり安堵するペンテシレイアだったが、突然子宮口を撫でられビクツと腰を震わせる。

そのまま子宮口に細い触手が侵入し子宮内で大きく膨れ上がる。

(まっさかっ!?)

ぼしゅつという音が聞こえるかのように、ペンテシレイアの子宮にトロトロの精液がぶちまけられる。サラサラとしていて水っぽい精液は子宮口からあふれ出すことはない。触手で栓をされているため子宮内にたまり続ける。

「お、おっい、ぐっいっぐっい、ってじまうっ!」

海魔の粘液で恐ろしいほどに敏感にされた性器、突然の子宮内爆発、そして海魔の鋭い歯が彼女のビンビンに勃起した肉芽を引っ掻く。

ぶしゅつしゅああああああつ!

アーチを描いてあたりに撒き散らされる女の汁。

天井まで飛び散り、彼女は歯を食いしばり紅潮した顔でビクビクと痙攣する。

海魔は3分ほど射精を終えると、今度は2本の細長い触手を使ってペンテシレイアの

ほぐれた熟れた膣壁をこじ開ける。

ぐばあ……

スースーと空気が子宮口に触れてピクツと反応するペンテシレイア。

(こっつ今度はつふうっ!!………なっ何を!?)

未だ絶頂の波から冷めない彼女だったが、

海魔の口からさらなる太さの触手が現れて驚愕する。

「そっそんなものっ」

言い終わる前に有無を言わず挿入。みちみちと性器が悲鳴をあげる。たまらず口から下品な声を漏らす helper が助けるものは周りにはいない。

子宮口に太い触手がぶつかると子宮口を無理やりこじ開ける。

そして海魔の根元が動いた。

ひくひくと痙攣しているペンテシレイアは気づかなかったが、触手の中を球体が通過している。その球体が子宮口にあたり無理やり押し広げ、ぼんつと子宮内に入ってしまった。

!!!?)

ペンテシレイアは上半身を反射的に起こす。

言いようのない異物感に肚に何かを卵を埋め込まれたのだと悟る。

(私をつ母体についっき♡)

ぽっこりと膨らんだお腹に海魔はさらに射精をしようとするが、最後の力を振り絞ってペンテシレイアは拳で海魔を殴りつける。

しかし海魔には効かない。足場の悪い、威力の出しにくい姿勢で打った女の打撃に有効な力はない。しかし床にはあつた。

廃墟だった床はもろく、崩れ去り、海魔とペンテシレイアを地下に落とす。

ペンテシレイアは咄嗟に床をつかんで落ちることはなかった。

「ふぎいっあああつでてるっ♡」

腹筋に力を込めた上で強制的に海魔と分かれたことで子宮内の卵が受精する前に膈内を通して秘部入り口周辺までくる。

ぶびっぶぐりゅっぶぼっ

下品な音を鳴らしながら両手の使えないペンテシレイアは力強く腹圧をあげる。蹠ん張ると同時に尿を漏らしてしまうが、それでもなお続けると、

ぷりゅっ

と卵が女性器から排出され地下に落ちていった。

ちよろちよろと尿を垂らしながら登り切るペンテシレイアは顔を赤くして、はあはあと荒く息をしていた。

「はあっ……はあっ……なんとかつなつたっ……ん♡」

ペンテシレイアはハンカチでドロドロの秘部を綺麗に拭き取り、そのままハンカチを丸めて無理やり膣内に押し込む。

(精液があるなら後でコンドームに入れよう。今は……無理だ。)

ペンテシレイアは股間部分の装備をもとに戻して、その場所を後にした。

---

「遅かったね、大丈夫だった?」

藤丸がペンテシレイアに駆け寄ると、彼女は一步後づさり、

「そつそのゴミ捨て場に行つてきてな? 少し臭うかもしれないからできれば湯浴みに行きたい。」

「あつごめん!……そうだね一旦戻ろう。」

「ああ……すまない。」

ペンテシレイアは自身の性臭に嫌気がさした。

## フローレンス・ナイチンゲールの事後

後日談と言えいいだろうか？

結局のところ、ナイチンゲールが5日間帰ってくることはなかった。

4日目の夜、ジャンヌダルクが少しふらつきながら帰ってくる。

「大丈夫?!」

藤丸はすぐに回復の魔術を使おうとするが、ジャンヌが待ったをかけた。

「だつ大丈夫です……………、少し疲労が溜まっているだけなので。」

ジャンヌは服が少し汚れているものの、怪我はなさそうだった。藤丸はひとまずジャンヌに湯浴みを提案する。

「……………とりあえずジャンヌが帰ってきてよかった。」

「だねえ、このまま何も進展がなかったにせよ合流して情報交換ができないのはまずいしさあ。お、アマゾネスのねーちゃんも帰ってきたかな？」

燕青が向く方を見ると、買い物荷物を持ったペンテシレイアが宿屋に入るところ

だった。

2階からでよく見えなかったが、いつもは整えられた髪が少し乱れていることに気付いて不思議に思った藤丸だった。

「おかえり。」

自室のドアを開けると、「ちようどよかった。どうやって開けようかと。」と、ペンテシレイアはタイミングよくドアを開けてくれた藤丸に感謝をして部屋の中に食料を置く。

燕青はその中身を、日持ちするもの、早く食べたほうがいいものに分け始める。

「ああ、マスター朗報だ。」

「ん?」

「実は聞き込みを買い物ついで行ってきてな?」

と、乱れた髪に気づいたのか彼女は頻りに指で髪をとく。

「なんでもここから500mほどの場所に大きな教会があつて、その地下に女性たちが囚われていると聞いた。」

その情報を聞いて藤丸は喜び、ジャンヌが戻ったら行こう、と言ったところでナイチンゲールのことを思い出して心配そうに顔を歪める。

「……………あやつなら大丈夫だろう。」

「うん……きつと忙しく!」

藤丸の通信機器が部屋に鳴り響く。

燕青とペンテシレイア、そしてマシユはこの部屋におり、ジャンヌは湯浴み中。

「もしかしてナイチンゲール!?!」

藤丸は通信機器の調整をすぐにして窓の近くに行き通信環境をできるだけよくする。

藤丸以外の3人も深刻な表情で藤丸を見つめた。

『……………き……………えますか……………?』

「何っナイチンゲールだよねっ!?!大丈夫なの!?!」

『まっ……………スター、聞こえていますよ。』

通信が安定して、砂嵐のような音が聞こえなくなっていきナイチンゲールの声が鮮明になった。

「よかった!心配したんだよ!?!」

『申し訳ありません。実は、いろいろトラブルっん!……………がありました。』

ナイチンゲールが一瞬ビクツと震えるが、彼女の周りは暗く何も見えない。

「トラブルっ?大丈夫!?!」

『はい、もう解決っした……………んっふっ……………ので大丈夫です。』

ナイチンゲールは未だ何度か言葉を途切れさせるが、いまは彼女を信じるしかない。

藤丸は現在の状況と先ほどの朗報を交えて彼女に伝える。

「……………だから合流したいんですけど。」

『私は、後々合流したいと思います。申し訳ないでっ……………ですが。』

彼女も彼女でていつばいな雰囲気を感じ取った藤丸は仕方ないと諦めて、合流場所を指定する。

『わかりました。後々そこで合流しましょっ!!っん。ん。!!?』

何かつんぎくような音がした後、突然ナイチンゲールからの通信が途切れる。ただ話している感触では特に戦闘しているような緊迫感はなかったので単に通信状況が悪くなったのだと思う藤丸だった。

「というわけでナイチンゲールは来れないみたい。でもみんなで力を合わせて頑張ろう  
!。」

「おうっあつちもあつちでもしかするとこれから戦う相手とすでにヤつてるかもしれないね  
えしな!。」

「……………そうだな。行こう。」

「私も先輩を絶対に守ります!。」

その声と同時に少し湯気がたつたジャンヌがにこやかに入室してくる。

何かあったのか、と状況がつかめておらずキョトンと首をかしげる仕草に藤丸はドキ

りとしてしまった。

アレンからのえげつない射精から半日して、3日経ったところ。

ナイチンゲールは精液だった。

身体中いたるところに射精され、腹、背中、首、脇、腕、太もも、足裏、髪、顔、尻、股間、全てが黄みがかかったザーメンが彼女をおおっている。

すでに熱は冷めナイチンゲールはもはや動く気力もなく、ただ冷静に受け入れていた。

(そろそろ、3日経ったはず。)

周りの男性たちは流石に疲れたのか、座り込んだり寝たりと様々だった。

「そろそろっん……………期日では？」

ナイチンゲールは重たい腰を動かして、顔についた精液を拭い目の前の店員に話す。

「あんだタフだなー。まっ期日通りだよ。」

「そう……………ですか。」

ナイチンゲールの下腹部はでっぷりと膨らみ、秘部からは大量の精液がとめどなく溢

れ出している。正直彼女はすぐにトイレにいつて精液を排出したい気分ではあった。特に腸内にある大量の精液を出したかった。肛門を引き締めるのも限界である。

ナイチンゲールは手を滑らせないようにしながら腰をあげて膝たちになると、重力に従って身体中の精液が垂れ始める。

「水浴びをできるところは？」

「階段降りて右に曲がったところだ。」

「それにしてもあんたの肚には今オーナーや俺の含めてあらゆる男の精子がいるわけだ。」

「……………ええ。」

「妊娠の恐怖なんてないのか？」

「私は人間の精液ではおそらく妊娠しません。というより妊娠できるかわかりません。」

「精液ね。そうだ。リップサービスのにもっと下品な言い方で自分の状況でもいってくれない？」

「……………まだコンドームが余っているのでそこに精液を入れていただければいいですよ。」

「いいぜ。」

ナイチンゲールは取引成立だと自身の体を眺める。しかし何が下品な言い方で、この

男がなにを求めているのかいくら考えてもわからなかった。

そんな彼女に助け舟を出す。

『私のとろとろの熟れたおまんこは、あなた達の大量こつてりザーメンでいっぱいになってその中には何十億もの精子が泳いでいるかと思うと受精してしまうのではないかと緊張して排卵してしまいそうですっ！』とか。せめてこれからザーメンって言うのはどうよハハ。」

ナイチンゲールは少しため息を吐きながら、少し甘い声を混ぜて、

「私のとろとろの熟れたおまんこは、あなた様の大量こつてりザーメンでいっぱいになってその中には何十億もの精子が泳いでいるかと思うとつ受精してしまうのではないかと緊張して排卵してしまいそうです。」

ぐばあ……。

と言いながら腰を突き出して自身の性器をこれでもかと思ふと開く。

膣内からはクリーム色のダマになった濃い精液がドロドロと溢れ出していた。

ナイチンゲールは一通り終わると、体勢を整えて店員にコンドームの箱を渡すとそそくさと階段を降りていった。水浴びに行ったのだろう。

(精液……ドイツ語でザーメンですね。言語が通ずるタイプの搾精対象であれば興奮度が増すのかもしれませんが。それで採取量が増えるのであれば効率的です。状況によりけりですができるときはしてみましよう。)

ナイチンゲールはそう考えながら水浴びを始める。

(ふむ、シャワーのような機能のある設備がありますね、ありがたい。)

水を出してゆつくりと体にかけていく。

未だ若干敏感な身体中に冷水がかかって少し体をビクつかせる。

我慢して下腹部を見るナイチンゲール。

(「こんなに出されてしまいました」が「サーヴァント」ですし「大丈夫」でしょう。)

(とにかく今のうちに出せるだけ出しておきましょう。)

(すでにマスターは黒幕を追い詰めているかもしれないし。)

ぶびっぴっぴっぴっ!

腹部を物理的に押しつつ、腹筋に力を入れて膣と肛門から精液をひり出す。

ぶりゅっぶぼふうっ!!!

勢い余って放屁が出てしまい、流石に聞かれていないか心配になってあたりを確認するが物音はせず一安心する。あれほどのことをしたので今更ではあるが、それとこれとは別である。

度々手で体についた精液もこすりながら落とすのだが、水と絡まってべたつき、取りづらい。やはり局部や胸部が一番汚れて降り擦る時にヒリヒリとして体を震わせる。

(未だ感じやすくなっている状態のようですね。打たれた薬のせいでしょうか？あの薬も一本ほどもらえたりできると任務も捗る可能性が。)

一通り体を洗い終わって浴室を出ると、服がないことに気づく。

ないというのは紛失という意味ではなく、敗れたり、汚れてたり、汁まみれになってたりと着れる状態にない。

(魔力が十分で、しばらくすれば自動修復されますが、3日間活動して魔力も枯渇気味、難しいでしょう。なにか……………。)

ナイチンゲールは近くの男性用バスローブを見にまとう。

石鹸の匂いとアレンの匂いが混ざっていて少し不快だったが洗いたてなようで柔らかく着心地がよかった。

彼女が店内に戻ると店員がバーで、初めてあった時のようにグラスを磨いていた。

「何か、服を取り扱っていませんか？」

「ああ、あんたのはくっさいザーメンまみれだもんな。」

(あなたたちのせいでしょう。)

と責めなくなったが言わないでおいた。

「近くにも服屋はあるが、一応客が脱ぎ捨ててった女物の服がある。ちゃんと洗濯して保管されてるから清潔だぞ。」

「わかりましたそれをもらいます。」

ナイチンゲールは店員に倉庫に連れて行ってもらい、倉庫内に積まれた様々な女性服から適当なサイズの合ったものを選ぶ。

「あんた、何でそんなタフなんだ？」

「私は通常の間人ではありませんので。」

「いや、精神的な話さ。こちとら化け物なんて珍しくもない。メスは快樂を与えてやればすぐに堕ちる。」

ナイチンゲールは上着を着てはサイズが合わず着なおし、そのまま返答する。

「私は人を治療します。たとえ切つてでも風邪を治します。殺してでも生かします。全力で無茶なことをやり続けます。いつしか、拒否という選択肢は消えました。」

ナイチンゲールはちようどいい服を見つけて、見た目も派手ではないものを身につける。

「へえ。」

「それと……、」と続ける。

「女性はあるあなたが思うより強いです。私の知り合いは何度しにかけても自身の先駆者を守り続けました。快楽に負けることもあるかもしれませんが、それでも根本では否定して、最後は勝つでしょう。」

「そーかい。」と少しふてくされたように店員は倉庫から出て行きバーに戻る。

ナイチンゲールは下着にスパッツのような伸縮性の高いものを履き、ブラジャーは流石になかったので、ランニングシャツにレースが入っているものを。

そして上から白いワンピースを着て腰を紐で縛り背中ではリボンを作っていた。

靴は現代のランニングシューズのようなものの中敷だけ硬いものを入れて履く。肩掛けバッグの紐を取り外して、腰のひもに金具を取り付けて簡易的なウエストポーチを作っていた。そのバッグの紐を二周させて太ももにしつかりと止めてナイフ入れを作る。

革製のこげ茶の革手袋をつける。

(戦闘面ではカバーでできるでしょう。ロングスカートは暗殺向きですが動きずらいですね。)

ナイチンゲールは倉庫から出ると、通信端末を起動させる。電源を切っていたため通知はわからなかったがマスターたちから何度か連絡がきていることに、安堵と罪悪感を

感じる。

ナイチンゲールはすぐに外に行ってマスターに連絡をとる。

「聞こえますか？」

ナイチンゲールが通信機器で話しかけると、つんぎくような音で声が聞こえる。

『何っナイチンゲールだよねっ?!大丈夫なの?!』

「マスター、聞こえていますよ。」

マスターの心配するような言葉を聞いて「まったく。」と少し苦笑して微笑む。

『よかった!心配したんだよ!』

「申し訳ありません。実は、いろいろトラブルっん!……がありません。」

臀部に違和感を感じる。

後ろを見るとスカートを剥き、尻に勃起した性器を押し付けていた。

「(何をしていますのですか?)」

「(いや、お仲間と話すあんたが可愛くってな。ついでにほら。)」

男が示す方を見るとコンドームが取り付けられていた。

(先ほどのですか……まあ先ほどのおびただしい量からとつてもらえればよかったです。新鮮な方がいいでしょう。こんな時にはやめてほしいですが。)

ナイチンゲールが一瞬ビクツと震える。流石に服を汚すのは同情したのか店員はきちんとワンピースとスパッツを遠くまで簡易的に移動させて膣内に挿入する。

『トラブルっ？大丈夫!？』

「はい、もう解決っした………んっふーっ………ので大丈夫です。」

正確には解決中だが、些細なことである。

幸い周りは暗いのでマスターには見えないはずである。そう願って。

『………だから合流したいんだけど。』

藤丸の現状を聞いて思ったより信仰が遅いことに残念だと感じつつ、かといって足止めされていた彼女が責めることはできない。

「私は、後々合流したいと思います。申し訳ないでっ………ですが。」

今はこの獣を処理しなければならぬと思ひ、膣内をきつく締め上げる。

それが拍車をかけたのか勢いよく店員は突き入れてくる。

藤丸から合流場所だけ聞き取り、通信を終えるための言葉を伝えようとすると、ちょうど思いつき腰を打ち付けられて先端が子宮口に直撃し、とっさに通信端末を切る。

「わかりました。後々そこで合流しましょっ!!っん。ん!!?」

ごびゅっびゅるる!ぶびゅる!ぶびゅるっ!

コンドームの中にあれほどにも出したにも関わらず変わらない濃さと粘度で精液が

射精される。

ナイチンゲールは絶頂寸前で我慢して、前方へ出て、性器を引き抜く。

コンドームはナイチンゲールの秘部にきつく閉められそのまま膣内に残ってしまったのでゴム口をひっぱって取り出す。

でゆるつりゆっ

素早く口を締める。

「ふうっ！ やっぱあれだけやってでも締まり良いなあんたのまんこ。」

「こんなにせいえっ………ザーメンをいっぱいおまんこに出してもらいありがとうございます。うございます。………まあ後でにして欲しかったです。」

「ごめんごめんっついな。」

「………私に数度打った排卵誘発剤？を2本ほど譲っていただければ穏便にしましょう。」

「いいぜ。気に入ったか？」

ナイチンゲールは近くの布で少しでた愛液を拭き取りつつ、服を直す。

「いえ、研究させてもらいます。」

「そーかい。そういうことにしとく。」

（いえ、本当にそうなんです。）

ナイチンゲールはそのまま、コンドームをたくさん入れたポーチの蓋を閉めると、きびすを返す。

「それでは失礼します。」

「……………タフだねえ。まつ墜とせなかつたのは残念だが子供が見れることを楽しみにしてるよ。」

（私は「絶対」妊娠しません。）

ナイチンゲールはそのまま酒場を後にする。

少し腰が痛い。歩きづらさを感じるが休んでいる暇はない。あの頃の野戦病院よりは全然マシだと叱咤してナイチンゲールは駆け出した。

――――  
結局のところ、事の真相。

この街に起きている現状とは、女性がいなくなる、というわけではなく、女性が寄り付かない地という事だった。

藤丸たちが駆けつけた時、教会の地下には何百、何千の女性たちが捕らえられていた。死ねば家畜の餌とされ、産み落とせるだけの子を産む。男なら解放、女なら子供を産む

機械の教育。

その現状を見た藤丸は嘔吐し、意識を失ってしまふ結果となった。

藤丸の手に負えないと判断して、サーヴァントたちだけで事にあたり、この国の領主を暗殺。

究極の男尊女卑を強いられた国はもとも少ないが男性の中からもこれはおかしいという声は何度も上がっていたそうでゆっくりとだが女性たちは元の家に戻されるものもいて、ひと段落というところだった。

もともとこの地の男は性欲が強く、繁殖力も高い稀な民族が多くいたらしい。そこから「女は子供を産む機械で幸せは男が享受する」という胸糞悪い思想へと変貌していったらしい。

格して、この国が平和になったのか、それともより悪化したのか、内紛が起こったのかはともかく、藤丸たちは聖杯を発見。

王の玉座に置かれていた聖杯は強大な魔力と王の強力な性欲によって、市民を洗脳し、女性を見れば性交渉をしたくなるような結界を街のいたるところに貼っていたらしい。

曰く、脳内に声が聞こえ、命令されるように本能に従って目の前の女を犯す。そこに罪悪感はない。

聖杯を回収した今、結界は解除され、多くのゴタゴタがゆっくりと解決され始めた。「これでよかったのかな？」

「私たちにこの国を管理する能力はありません。聖杯を回収できただけでも僥倖でしょう。特異点の反応も収束しているそうです。」

『そうだよマスター君！早く帰ってきたまえ！』

通信機器のホログラム映像にロリンチがにっこりとしてマスターへ話しかけていた。

「そういえばナイチンゲール、その服は？可愛いけど。」

「いえ、戦闘で破損したので代用を。カルデアに戻れば魔力が回復して服は自然と生成されるでしょう。」

「そっか。まあじゃあ帰ろっか！」

「はい！先輩！」

レイシフトを開始して藤丸たちは極小特異点を去った。

## お竜さんの食レポ 前編

藤丸たちが突然発生したレイシフトから帰ってきておおよそ2週間。藤丸たちは以前の生活に戻りまた何かあったらカルデアに戻ってくることになった。

ダヴィンチちゃん曰く「おっけー！マスター君も忙しいだろうしとりあえず学校戻っていいよおー！あっ学校のここにどこ●でもドア置いとくからっ！何かあったら、ね？」とにこやかにレイシフトから帰ってきた藤丸たちを労った。

燕青は隠れてマスターについていくということだけ伝えて藤丸と一緒にピンクのドアに消えていった。

カルデアに戻るとナイチンゲールの服も元どおりに戻っている。

もう少し拝みたかった藤丸だったがそれは流星に言えない。

「さてお竜さんは何をしようか？」

本来であれば彼女はライダーである坂本龍馬の宝具として彼と一緒に行動している

はずなのだが、坂本龍馬は今日のとある場所に出払っており別行動をとっていた。史実的には離れずに常に一緒に居たかったのだが、いかんせん「いいいや、これは……そう！紳士の嗜みとか以蔵さんもいるし……ほら、夫の帰りを家で出迎えるのも人間の女房みたいで僕は好きだなあってね。」と言われてしまい、うまく乗せられてお竜さんはカルデアにお留守番していた。

少しカルデア内を散策して、カルデアの頭の良さそうな人がいるイメージの部屋に来る。

(確かここにはばんのーのてんさい？ってやつがいるんだよね？)

「入るぞおっ！」

お竜さんが入室すると部屋の中は煙で一杯だった。

「ああつごめんね今喚起するから。」

そういつたのはタバコの煙を勢いよく吐いたロリンチちゃんだった。

お竜さんは人間ではなくいつてしまえば野生の生き物に近いため、鼻が利く。しかし龍馬も普段タバコをキセルで吸っているので別に慣れてはいたが前が見えないほどに充滿しているのは流石にと思ひ喚起には賛成だった。

「…………おまえ、そんななりで吸って大丈夫なのか？」

お竜さんが思うのも無理はない。

ロリンちゃんの外見は小学生であり、流石にお竜さんもそんな若い子供がタバコをふかしているのを見た事はない。

「まあ、いろいろ忙しくつてね。それに万能なんだから当然タバコも吸えるし味も知っておかないと、ね。流石に体には悪いかもしれないけど所詮この体はまた作ればいいから。」

「……そんなもんなのか。」

「そんなもんだよつ。それで？何か用があつたんだよね？」

「ああ、実は暇になったからカエルを取りたいんだがどこかいける場所ないか？」

「うーん、正直君はあんまり出歩いて欲しくないんだよなあ。」

お竜さんは外見がセーラー服で思いの外黒髪が長いこと以外には絶世の美女という過言はない。しかし彼女は浮いている。それ以外には絶世の美女といっ

人間関係の意味ではなく、物理的に浮いているのでそれを部外者に見られるのは非常にまずい。

「えーと人間みたいに歩ける？」

「ん？まあ出来なくはないがめんどくさいから嫌だ。」

彼女はエツヘンと胸を張る。

「もし浮かずに歩けるのなら、外出許可、もといカエルがいそうな場所に連れていけるけ

ど？」

「……………よし人間。お竜さんは寛大だから歩いてやろう。」

「それは良かった。他に————」

その他に行くつか禁則事項を伝える。例えば現地人と交戦するとか、緊急事態になつたらポータルまで戻ってくるようにだとか。今まで龍馬に止められていたことと大差ないためお竜さんは聞き流していた。

「じゃあ早速飛ばすよ？」

「レッツゴーだ。」

お竜さんはまだ見ぬカエルに会えることを楽しみにしつつ転送された。

カルデア内には様々な施設が新設されちるが、カルデアの局員たちのように一般の間が生活するために必要な物を揃えるべく小型のスーパーや薬局などがある。

完全に自動で決済でき、また犯罪を起こしてもすぐにバレるので無人化されている。

なので男性職員や女性職員、その他各サーヴァントもあまり知られたくない物を購入することもできる。

そして今昼過ぎ、お昼の休憩が終わり皆が仕事に戻って人が空いてきた頃。

誰もいない薬局で1人の女性サーヴァントが悩んでいた。

(これ………で、いいんでしょか。)

聖女ジャンヌ・ダルクは手に持った箱を見つめる。

妊娠検査薬である。

(私の時代にはこういったものはありませんでしたが。)

実を言うとジャンヌはレイシフトから帰ってきて、少し体調が芳しくないことを感じ取っていた。サーヴァントは基本健康状態を維持される。それは彼らが人によく似た人ではないモノであるからだ。しかし最近になって至る所で今までに起こったことのない事象が確認されている。

曰く排尿、排便することを当たり前のようにやっていたことのあるとき気づいたり、サーヴァントであるのに魔力で回復できない疲労があつたり、勃起が治らない男性サーヴァントがいたり。

そこでジャンヌは体調の悪さをロリンチちゃんに伝えると、彼女は困惑していろいろ問診などを含め科学的側面、魔術的側面からいろいろ検査をしてみると言われ、それに従い今様々な検査が終わったところだった。

そして未だ結果は出ないが、暗に女性として原因不明の体調不良の時に疑われる確認

を示唆された。

そこで自身でできる確認というものを今やろうと思ひ薬局に來た次第である。

(いえ、「サーヴァント」は生理がありませんし、何か気づかないうちに毒攻撃でも受けてしまったのかもしれませんが。これはあくまで確認です。)

ジャンヌは自分に言い聞かせ、渡されているパスを使って検査薬を購入。

彼女はあたりに人がいないのを確認してからその場を去った。

(どこだ?)

最初にお竜さんが見た景色は鬱蒼とした木々の生えた蒸し暑いところだった。

聖杯の知識によつてある程度亜熱帯と言われるところだと当たりをつけたのだが、先ほどのロリンちゃんの話をはば全く聞いてなかつたお竜さんは少しだけ公開していた。

(寒いと動けないから……あつたかいいいのだが。)

お竜さんは早速デコボコした木を浮遊して、というところでハタと気づき、

「そうだった。歩くんだったなあ。」

と素直に歩き始める。

なんの装備もつけることなく成人女性が密林に入ればただでは済まない。

害のある虫やヒル、大きなクモに、害獣、そんなものが多く住む場所だ。もちろんサーヴァントの体をそんなもので傷つけることはできない。特にお竜さんは人型ではあるが真の姿は龍。硬質な肌は意図的に受け入れない限り蚊の針やヒルの歯など通さない。

お竜さんはそのまま適当に当たりをぶらぶらと歩き水辺を探すことにした。  
水辺ならばカエルなど山ほどいるはずだと考えて。

しばらくすると大きな沼ともいけともいえないような場所に来る。

「おおー、結構げんそうてき？な場所だな。龍馬もくればよかったのに。」

そう言いながら当たりを見るとカエルを何匹も見つける。

すぐに飛びかかってムシャムシャと食べ始める。

(変な味だけど美味しいな……：絶妙な辛さ。)

お竜さんがすぐに食したカエルは人間社会では劇毒を持つカエルだがお竜さんには特に問題なかった。

「ん？」

ムシャムシャとすでに6匹のカエルを食していると目の前に体長20cmほどの大きなカエルが現れる。流石に大きすぎて丸呑みにできないお竜さんは髪を使って切り

刻もうかと思つたその時、四方八方からの気配を感じ取る。

（魔獣？んーこれは……………）

お竜さんはすくつと立ち上がると、あたりの茂みから褐色よりも濃い、ハサンのような肌の色をした部族じみた服を着て槍をこちらに向けて迫っていた。

お竜さんは食べてしまおうかと思つたのだが、流石に人間に危害を加えるのは龍馬に禁止されていたし、どこでロリンチちゃんを監視しているかもわからない。

（龍馬に告げ口されたら怖いしな。）

「おー、ピースピース！お竜さんはお竜さんっていうんだぞ。」

そう言いながら手を挙げると、あたりの男たちは慌てて武器を突き出す。が、1人の初老がお竜さんに近づいて来る。彼はジェスチャーで周りの男たちに武器を下げるように言っているようだった。

「……………お主は何者だ？」

言語が通じることにお竜さんは驚いた。

カルデアでは翻訳礼装というものを用いて各特異点で現地人と会話することを可能にしているのだが当然お竜さんはカエルを取りに来ただけなのでそんなものは持たされてない。

そして当然お竜さんは多言語を操ることなど不可能であり、つまりこの初老の男が日

本語を喋っているのである。

「……お竜さんは旅してる。ここにはカエルを取りに来た。」

お竜さんがそういうと、初老の男は恐る恐る近づいて来たもう1人の槍を持った男に話しかける。

「……一時的に村に来てもらっても構わないだろうか？」

「そこにカエルはあるのか？」

「……多種多様な生き物がいる。カエルもたくさんいる。」

「ならいいぞ。ついてってやる。」

初老の男は警戒しつつもその不遜な態度を逆に信用して仲間達に会話の内容を翻訳しているようだった。

男たちの警戒が少しだけ緩み、しかしすぐにでも槍を構えられるようにしていることにお竜さんは少し好感が持てた。

お竜さんにとって人間は脆弱で縋って来る虫にしか過ぎない。それでもその弱さを補うために警戒を怠らない戦士はまだマシだ。

お竜さんは縄で縛られると思っていたが前に3人後ろに3人左右に1人ずつの体制で歩いて行くことになった。

「なんで日本語わかるんだ？お前。」

「……ワシはもともと日本の民俗学者でな。文化人類研究をしているのだが、その過程でこの部族に出会いしばらく一緒にいるうちにこの部族とともに生きることとしたのよ。」

「ふーん。」

「お前さんはあれか？修学旅行か何かで迷ったのか？旅と言っておつたが一人か？」

「いや？お竜さんはカル……、まあ遠出してカエルとかの食料を集めてきやんぷして。ちよつと遠出しすぎたけどな。」

「……………そうか。」

おそらく服装から学生か何かかと思つたのだろう。実際お竜さんの服は日本の学生が来ている服に似ている。というよりは元になったものだが。

お竜さんと初老の男サトウはしばらく話すうちにそれなりに打ち解けたのかある程度警戒は薄れていた。もちろんサトウの部族の者らへの説明もあつたからこそではある。

お竜さんの前を歩く男がしきりに振り向きながらチラチラとお竜さんを眺めていた。

（なんだ？お竜さんの溢れ出る美貌に当てられたか？）

その男は若い男で引き締まった、というよりは細い痩せ型な体系だがしつかりと鍛えられた体であった。髪は後ろでチャラチャラとした煌びやかな飾りで留められており、

優しげな顔つきだ。

実際お竜さんの自賛的な考えは的を得ていた。

というのも、お竜さんは天然で無神経な言動であまりそういった話に向かないがカルデアスタツフにも何人かファンがいるほどに美しいみたい目をしている。

「こいつは？」

「ああ、その子は族長の息子であるシャバナという。今日が初の哨戒任務だったな。」

サトウはお竜さんの顔を少し見ているからシャバナに現地語で語りかける。

「見慣れない美しい人だと驚いたらしい。部族は他の人間と関わり合いが薄いからな。珍しいのだと思う。」

「ほうほううわかってるじゃないか人間。」

お竜さんは褒められたことに内心気を良くして前の青年の頭をワシワシと撫でる。最初こそ周りの男たちはお竜さんが何か行動を起こしたのかと思いきや、攻撃的な行動でないことと部族の長の息子が頭を撫でられているのを見て少し苦笑していた。

「さて、もう少しいくと集落に着く。着いたら最初はおとなしくしていてくれ。悪いようにならないよう長に説明する。」

「おー頼んだぞ人間。」

「人間？」

お竜さんの言い方に少し疑問を持ったサトウだったが、少し変わったやつでなければあんな服装でこんな場所には来ないだろうことを考えて特に気にしないことにした。幸い言葉は通じないのでサトウがうまく翻訳すればいいだけである。

---

ジャンヌは自室に着くと、ベッドに腰をかけて机の上に薬局のビニール袋を置く。旗や装備をしまい、私服に着替える。

重たい腰をあげるといふ表現は気が進まないことをやり始めるときによく使われる表現ではあるがいまのジャンヌはまさに二重の意味で腰が重かった。

(ええ、確認ですしありません。)

ジャンヌはビニールから検査キットを取り出す。

(これにおしっこを……………3秒間ですか。)

ジャンヌは前もって水をリリットルほど数時間前に飲んでいたので結構尿意がありそこは問題なさそうだった。

備え付けのトイレに座りいつもは足を閉じるところ少し開いて検査キットのキャップを外して尿当てる部分を秘部近くに持っていく。

持ち手に尿がかからないように注意しながら、下腹部に力を入れて膀胱を圧迫する。  
「んっふう……………あっ……………ん。」

チヨロチヨロと便器にジャンヌの尿があたり静かな部屋に響くことを少し恥ずかしく思いながら検査キットに狙いを定めていると。

「ルーラー、少しいいか？」

「ふえっ!!？」

ジャンヌの部屋にジークが訪ねてくる。

慌てすぎて少しキットがずれるがすでに5秒程度かかっているので十分だ。ジャンヌは急いでキャップを被せてトイレの棚に水平の置く。しかし先ほど飲んだせいだろうか、まだ排尿したりなかった。

しかしぐつと尿道を引き締めてなんとかこらえる。

「はあっ……………んくっ……………、じっジーク君すみませんっ!どうしました？」

「入ってもいいだろうか？」

「あーちよつと体調悪いので。」

「やっぱりか。さつき薬局を出ていくのを偶然見かけて。……………何か俺にできることはあるだろうか？」

やっぱり彼は優しい、とジャンヌは自然と口角が上がる。

しかし今部屋に入られるのはまずい。部屋には薬局のビニール袋やレシートもある。彼が変に勘ぐる可能性は性格からしてありえないことではあるがそれでも恥ずかしい。

しかも今はあまり身なりとして会える状況でもない。

咄嗟に嘘をついてしまい少しだけ罪悪感を感じざるおえないジャンヌだった。

「いえっお気持ちだけで！明日っそう明日にでもどこか行きませんか？」

「ああ、ルーラーの体調が良くなっていれば一緒に行こう。」

ジークも少し嬉しそうにしていたことにジャンヌは共感し喜色を示す。

「じゃあまた明日。」

「はいっ」

ジャンヌはすでに1分、つまり検査キットの結果がわかる時間を過ぎていたことに気づいて秘部をトイレトパーパーで綺麗に吹いてから下着をあげて身なりを整える。

(大丈夫なはずです。たまたま体調が……………)

ジャンヌが検査キットの結果を示す場所に目を向ける。

そこには赤紫の線がはっきりと示されていた。

中編に続く

## お竜さんの食レポ 後編 (+D)

お竜さんが連れてこられたのは開けた芝生に広がるいくつかの家が立ち並んだ集落だった。お竜さんは「むかしの人間も皆こんな感じの村でお竜さんを崇めてたな。」と、思う風景だった。

サトウたち一行が村の囲いの切れ、門に差し掛かると警備の男たちが近寄りサトウと話し始める。何を言っているのかわからないお竜さんだったが緊張や排他的な目を向ける者たちに、いつになっても人間は馬鹿だなど思う次第だった。

色々な手続きが終わったのかすんなりと5分10分で村に入ることができた。

中はそれなりにまともな家が立っており、自然と一緒に生きているという共生関係のような良さをみて少しいいなど思ったお竜さんだった。

村に入っただけでしばらくすると大きなホールのような場所に案内される。その先には椅子に座った老人がこちらをね踏みするかのように見ていた。

「お竜殿、こちら村長のドーゲルさんだ。」

お竜さんは特に礼をするわけでもなく不遜に立ち尽くす。しかしドーゲルはにこや

かに座ったまま、部下を制止してサトウにふる。

「ようこそ、と言っている。しばらくこの村に居ていいとのことだ。」

「それは願ったり叶ったり? だぞ。」

「それで今日、夜に歓迎の祭をしたいと言ってる。」

それを聞いてお竜さんはカエルの料理はあるのかと楽しみに思っていた。

「カエルがあるなら行く。」

その言葉をサトウが村長に伝えると村長はにっこりと笑って、「酒とカエルをふんだんに使った料理をたくさん出そう。」と言った。

それからお竜さんは自由行動を許可されたのだが、なにぶん言葉が通じないので付き添いとしてサトウが側にいる事になった。

「ところで、お竜殿はどんな旅を?」

「んー? でつかい蛇倒したり、機械兵倒したり……あ。」

超常の存在や力を明かしてはならないということは大前提のはずで、しかしお竜さんにはそんな事どうでも良かったのか言ってしまう。

もちろん取り繕えばどうということはないのだが、嘘というものが好かないし、そもそも取り繕う話術も持ち合わせていない。

「……………やはりお竜殿は定命のものではないと見える。」

神妙な顔をしてサトウが言い放つ。

「お前、知ってたのか？」

サトウの口ぶりから想定内だった事がうかがえた。

「ええ、そもそもそんなセーラー服でジャングルにいる方がおかしいですし、何分宗教や信仰などを研究している身。お竜殿はどこか雰囲気は通常のそれとは異なりますゆえ。」

「お竜さんは高千穂に封印されし大蛇だぞ、人間。」

「……………詳しくはありませんが、人では無い、ということですね。」

「ならどうする？」

返答次第では村の人間を全員食べてしまおうか。と考えるお竜さんだったが流石にそんなことをすれば龍馬がただ事では済まさないであろうことも考える。

結局逃走してカルデアのポータルに戻るしかないかと思案していると、

「……………いえいえ、私は個人的な疑問として聞いただけです。むしろあの村はジャングルの主アナコンダを崇拜しています。なのでより歓迎されるかもしれません。」

「……………おもしろいな人間。サトーだったか？村長に伝えてもいいぞ。」

アナコンダと大蛇と一緒にされるのは憤慨だが、人間の小さな目線と器ではそんなも

のかといまは割り切ることにする。それよりも建設的な提案をしてきた目の前の初老の男に少し興味が湧いたお竜さんだった。

「考えておきます。」

緊迫した空気が弛緩する。

美しい空気、まとわりつく熱気が急激に冷えていたことをサトウは感じ取り目の前の存在が神秘であった事に「この年でも未だ知らぬことはたくさんあるものだ。」と一人ごちた。

白い空間に電子音が鳴り響く。

機械的な音声、己も人でないことを思いつつしかし彼女は電子的なもので構成されていないために電子音声ではない、絡繰で、自らの音声との違いを聞き分ける。

人は、人が作り出すものはここまで進化したのか、と。

己の製作主に伝えたい気持ちがあふくが彼女はその意思を汲み取ることは未だできていなかった。

『〓回、搾精任務を開始してください。』

「心得た。」

彼女の前には一体のホムンクルス。

通常の個体であれば白か青であるはずなのに目の前の個体は真っ黒だった。

股間にそそり立つ剛直は何度も震え、痙攣するたびに大きさと熱を増しているかのようだった。血管のようなものが大きく浮き上がり、興奮状態にあることは誰にでも明らかだった。

「失礼する。」

ホムンクルスは完全に体を固定されており、彼女は戦闘状態になることなくホムンクルスの生殖器に近づいて行く。

(データと一回りもふた回りも違う。陰茎の長さは15cmと成人男性と変わらない。体格比からすれば小さい気もします。しかし太さが異様です。断面の直径が5cmほどでしょうか?)

からくりによる正確なデータ収集。

彼女はそのまま竿部分に己が無機物でできた手を優しく添える。

すると突然ホムンクルスの竿から透明な液体がとめどなく溢れる。

(これは? につ尿道球腺液と呼ばれるものでしょうか?)

尿道球腺液は雌の膣内をアルカリ性にするために分泌される。精子は酸性に弱いか

らだ。

(ホムンクルス殿のぎーめん?とやらは非常に弱いのでしょうか?)

およそ500mにもなるだろうか?大量の粘液で彼女の機巧でできた手はヌルヌルになり、スムーズな陰茎への刺激を行えるようになった。

そのまま彼女はシリコン性の柔らかい半透明な器具を取り出す。

(おなほーる?というものだと言ったのでござるが、これに挿れればいいのでござるか?)

すでにドロドロなので彼女は亀頭にシリコン素材の穴をあてがい遠慮なく挿入させる。

ホムンクルスは突然暴れるががちりと拘束されているため全く危険はなかった。

最初こそつかえたものの、現在進行形で分泌され続けるカウパーでオナホール内はぐちよぐちよになりスムーズに突き当たり一歩手前まで入っていった。

一歩手前なのは輪っかになった硬いゴムのような部分であり、彼女はそこが人間でいうところの子宮口に相当することは想像できた。

(私にはない構造ですが、人間の女性であればどういう感覚を持つのでしょうか?)

彼女はそのまま前後にオナホールを動かすが、いかなせん加減がわからず、落とさないよう強く握りながら高速でしごき上げる。

ホムンクルスは今日一で体を震わせた。

ごびゆるっ!!ぶびゆるっ!びゆるるるるっ!

成人男性の射精の量、濃さ、粘度を上回る精液がオナホールのカウパー内に放たれる。しかしカウパーのあまりの多さに精液はホール内壁に当たるとはなく周りを透明なカウパーで包まれ中心が白くまとまっているなんとも珍しい光景が見て取れた。

(マスターや小太郎殿の射精とは全然違いますね。)

彼女は忍びゆえに隠れて己が主人を護衛することも時たまある。

その過程で夜に自慰行為をしている姿を何度も見てきた。

アサシンで気配遮断を持っているものはほとんどマスターの自慰行為を知っている。もちろん彼が思春期であり健康優良児であることもわかっているのでおかしなことは微塵も思っていない。

小太郎についてもおぼろげな過去の記憶からの照合ではあるがこんなものではない。かっただけだ。

彼女はそのままなんの遠慮もなくオナホールからホムンクルスの生殖器を引き抜く。

ぼりゅんっ!

と、下品な音が鳴り響き、竿からカウパー対精液が8:2の混合液を噴出して顔や髪にかかってしまう。

(生臭いニオイ……後で洗浄しなければ。)

床から出てきた、カゴにでろでろのオナホールを置くと、電子音とともに回収された。『以上で搾精任務は終了です。次の伝令までお待ちください。』

「御意。」

部屋から音もなく消える。

部屋には未だ尿道球腺液を垂れ流し続ける半勃ち状態の性器を携えた黒いホムンクルスがうなだれていた。

夜。

お竜さんの目の前では30代から40代の女たちが火を囲うようにして踊っていた。

お竜さんはカエルをまるで作業のように一心不乱に頬張りぼーっと夜空を見上げていた。

(日帰りのはずが一日止まっていくことになるなんて、お竜さんは聞いてないぞ。)

ムシヤムシヤ

「失礼。どうですか？」

「つまらない。」

「そうですか……………、これ、この村の酒です。」

お竜さんはサトウの差し出してきた酒を見る。フタを開けるとあたりに甘い匂いが広がりその匂いが何なのかすぐに当ててしまった。

「これはカエル酒？」

「はい、少々人間には毒なのであまり作りませんが、貢物として保管されていたものです。」

「もらう。」

お竜さんはサトウから乱暴に酒瓶を取り上げるとラツパ飲みし始める。

「あつえ？だつ大丈夫ですか!？」

「……………とーぜんだ。お竜さんは大蛇だからな。」

「なら……………いいのですが。」

しばらく祭りが続き、お竜さんの目の前にはカエル以外の料理も並び試しに食べて見ると予想外に美味しいものばかりだった。龍馬にもぜひ食べさせたかったが、自分をおいていったことを思い出すと少し腹がたったお竜さんだった。

サトウも妻がいるのか1人の女性と普通のお酒を飲み交わしながらイチヤイチャし

ているのを見てふと、さみしさを感じた。

「……………少し、催してきたな。」

「あつならその先にある家の裏手に行くといいですよ。」

「ん。」

サトウも流石に「そりやあれだけ飲めば物の怪でも用を足したくなりますね。」と納得してお手洗い（というほど設備がすっかりしているわけではなく、結局囲いのあるポットン便所のようなものである。木製の。）の場所を伝える。

広場から離れるとあたりの喧騒がなくなったせいとお竜さんは1人夜空を見上げながら龍馬との思い出を反芻していた。

（龍馬のやつ……………まったく。）

教えてもらった場所に着くととても静かで、お竜さんはさつさと用を足そうと小屋に入る。

ほろ酔いだからだろうか、流石に大蛇でも特別性のお酒には少し驚いたのか中に人がいることに気づかなかった。

「！」

中にはシヤバナがいた。

「お前………しやばな?とかいう。」

お竜さんが日本語を喋っても彼には伝わらないが、「シヤバナ」という固有名詞がお竜さんから発せられたことよって彼は喜色を示していた。

小屋の中で何をしていたのかは薄暗くてわからなかったが、お竜さんはいったん小屋から出ようとする。流石に先客いるのに用をたす気は無い。

しかし振り返った瞬間後ろから抱きつかれる。

「おい人間、ペタペタ触るな。食うぞ。」

不快感というものはない。強いていうなら下等生物が上位の存在に触れた。人間でいうところのハエが体にくっついたから払うくらいの気持ちで後ろをチラリと見る。

シヤバナは息が荒く、手をお竜さんの腹から上へと持つていきお竜さんの巨乳ではないが形の良い胸に添え、愛撫する。

(まったく。身の程を………まあでも力エルをたらふくもらったし、貢物もあつたしな。ふむ。)

「酒と龍馬のせいだぞ。」

お竜さんは己がセーラー服のスカートに押し付けられた硬いものを感じた。

シヤバナを壁に押しつけ、民族衣装を落とす。

すると、勢いよく上へ向かって男性器が打ち上がった。  
(むっかなかな。)

シャバナの性器は黒々しく、根元には短いちりじりの陰毛、皮が完全に剥け先端には赤黒く充血した亀頭がぬらぬらと液体を垂らしていた。

ギンギンに腫れ上がっており、心臓の鼓動と合わせて上下にビクビクと揺れる。

(これが人間の生殖器？ 確かな魔羅とかいったな……いやちんちん？)

お竜さんは特徴的な長い舌を口からニユルツとだし、亀頭をちろちろトナメあげカリ首を舌で一週させる。

(味は…… 苦いな。しよっぱさと酸っぱさ。)

シャバナは突然の口淫による快楽で咄嗟に腰を引くが、瞬間カリ首がザラザラの下に引つかかって射精してしまう。

びゆるびゆるっ!!びゆる!

黄ばんだ白いぎーめんがお竜さんの口内に放出され、勢いよく口から解き放たれたためにお竜さんの色白の鼻先や目元、おでこ、髪にドロドロの精液が付着する。

(すごい量だな。それにすごい臭いぞ。)

お竜さんは付着した精液を拭うこともなくびくびくと未だ硬度を保ったシャバナの男根に目を向けた。

(まあこんなもんだろ。感謝しろ人間。)

そのままこやから出ようとしますが、シャバナがお竜さんのセーラー服の背中を掴む。何をいつているかわからないが後ろから再度抱きつかれる。

(ずずうしいな。ちんちんごと食いちぎって……………。)

両手は腹から直接下着をつけていない胸へと当てられ親指と人差し指で乳首をつままれる。鼻は後頭部に擦り付けられ、精液とお竜さんの臭いが混ざり合った体臭をシャバナは興奮剤として深呼吸していた。

腰はカクカクとお竜さんのレギンスごしの秘部に押し付けられ陰核を刺激していた。(死んでも交尾がしたいのか?……………愚かな人間め。……………しかしこれほど求められるのも。)

お竜さんは実際酔狂で付き合ってやることにした。

実際感じてはいないものの執拗に乳首を刺激され勃起し始めた頃あいだった。

「おい人間、これはサービスだからな。」

お竜さんは体を仰向けにして近くの台に腰掛けるとレギンスを脱いでまたを広げる。

シャバナは一心不乱にお竜さんに正常位の体勢で抱きつき、黒々とした極太ペニスを擦り付ける。しかしいくら挿入しようとしても入ることはなかった。

(こいつ童貞? ってやつか。龍馬が以蔵がどうのここのっていつてたな。)

お竜さんはシャバナのペニスの根元を持って己が濡れそぼっていない秘部につける。シャバナは何も考えず思いつき腰を前へと押し付けた。

ずりゆんっ！ぐりっ！

「はおっ!!？」

お竜さんの口からおよそ普段の余裕はなくおかしな声が小屋で響いた。

(一)……… れっはっ?)

お竜さんが柄にもなく声を出してしまったのは、シャバナの男性器によるものだった。

シャバナの男性器は暗闇であまりわからなかったが、上方向に竿の中腹から反り上がっている。

恐ろしい角度で曲がっている極太チンポは勢いよく挿入され、お竜さんの膈壁の天井部分を思いつきり抉ったのだった。

災難なことといえば、お竜さんの性器の感じやすいところはその場所だった。

「まつ待っああっ！ほおっ!!」

若さからくる早く力強いピストンに野生の交尾を感じ取る。

仕方のないことではある。

言ってしまうえばシャバナは初めて女性と交わった。まさかこれほどにまで気持ちの

良いものとは知らずに半ば狂乱に近い興奮度だった。

童貞殺しではあるのだがさらにお竜さんの膣内は特殊だった。人間の女性より細かで弾力のあるヒダに、粘度の高い粘膜と分泌液、きつく締め上げる筋力。

お竜さんの腰にがっしりと腕を巻きつけて完全に固定し、腰を鍛え上げた筋肉で動かして女を食る。

お竜さんは目を白黒させて、程よい刺激と莫大な快樂で首をのけぞらせて長い舌を宙に出す。

(こっちはっ！よっ予想がっいだぞっお竜さっ。りよっ龍まつ!?)

こんなところにいるはずはないことはわかっていても咄嗟に龍馬に助けを求めてしまってお竜さんだった。がすぐにスパークで上書きされてしまう。

「はっふうっ♡ああっあっあふっ♡にっんげんっちよっ待っあ♡♡」

何度も何度も膣壁を抉られ、だんだんと愛液を垂らし始め、さらにはこねくり回される。

口元にシャバナが口をつけ、だらしなく飛び出た長い舌をじゅじゅつと吸いながら、まるで弱点を探すかのように様々な膣内の場所を掘る。

勢い余ってお竜さんはスカートをめくりあげながら尻を突き上げるような体勢になりシャバナが全体重を使ってピストンする体勢になってしまった。

「●□▲☆!!●□▲☆!!●□▲☆!!」

何を言われているのかはわからない。

しかし本能で感じ取るものがある。

(たっ種付けする気かっ?!だっめだぞ!お竜さんの子袋はりよっ龍馬のっ!)

どんだん早くなる打ち付けに、子宮口は崩壊寸前で下腹部が熱くなり、あたりに淫靡な音が鳴り響く。

「●□▲☆!!」

シャバナが歯を食いしばって、最奥に鈴口を打ち付けるとお竜さんの意思とは裏腹に子宮口がムリユッと開き大きな亀頭が子宮内に侵入して曲がりちんぼのせいで上へと無理やり持ち上げられる。

「ひぐっ!」

びゆるるっ!びゆるるるるっ!びゆるるっ……びゆる……びゆる……びゅううう!

「あっほおっ♡お、お、お、お、お、っ♡……あ、っ♡」

そのまま勢いよく射精。

大量の精液が子宮内で爆発。

同時に絶頂し、尿道から勢いよく潮を吹く。

亀頭でいっぱいな子宮は行き場のない精液を体外へと排出する。

ぶびっぶりゅっ♡

結合部から真っ白の濃厚なぎょめんが溢れ出し、肛門を撫でながら尻を伝って、足元の脱ぎ捨てられたピンクのレギンスに白い水たまりを作る。

持ち上げられた子宮で下腹部がもっこりとしているお竜さんは白目を剥きひくひくと体を痙攣させていた。

シヤバナは疲れ切ったのか横に倒れ、その拍子に少し柔らかくなった性器が引き抜かれる。

お竜さんの膣口からは黄ばんだドロドロの精液がダメになってぼとぼとこぼれ落ちる。陰核はビンビンに勃起していた。

小屋で脱力する2人。

しかしそこに来客が来る。

「お竜殿、随分とお時間っ!?!……………」

小屋の近くで半開きになっている扉から中を除くと脱力した2人を見つけたサトウ。

最初こそ介抱することを考えたが、サトウは己が長年使うことができなかつた息子がギンギンに反応していることに気づく。

このチャンスを逃す手はないと魔が刺すようにニヤリと笑う。

物の怪だろうが何だろうが、穴があつて興奮できれば男はそれでいい。

サトウは一旦小屋を後にする。

今すぐにも犯してしまいたかつたが、我慢していた。

理由は祭りに飽きたり、暇そうにしている若い男衆をたくさん連れて来ることだつた。

お竜さんは失神から冷めたものの下腹部から断続的にくる激しい快樂の余韻に浸つており意識が朦朧としていた。

小屋に誰かが来るのが見え、己が体に乗つかつて来るがどうでもよかつた。

その日、お竜さんは村中の男たちに何度も抱かれ、何十回と絶頂し、大量の生氣あふれる精液を身体中、体内外いたるところに射精された。

## カルデア修学旅行1 (ナイチンゲール)

カルデアでは現在切迫している状況だった。

本来、パトロンであるゴールドルフ新所長から供給される莫大な維持費、研究費などが切れつつあることが伝えられた。

そもそも全私財を投入してコヤンスカヤに乗せられたとはいえカルデアを購入した時点で先はなかった。それを何とかゴールドルフ新所長の手腕でいたるところから資金をかき集めてはいたのだがいかんせんカルデアは人類の英知の結集するようなもので金は消え去っていく。

もちろんまだ何とか大丈夫であるが、未来が不安定であるということをやんわりとカルデア関係者は伝えられた。

というものの例えばカルデアスタッフはここをやめてどこに行くというのか、サーヴァントもカルデアのような環境でなければまず存在すら危うい。

それとは別にカルデアでは新たにある取り組みが行われていた。

カルデア内に存在する1000人は入れるであろうホールでナイチンゲールは登壇していた。

視界には子供、子供、子供、子供……。

今日から二泊三日のカルデア修学旅行である。

何ですかそれは？とナイチンゲールは今でも思っていたりする。

カルデア修学旅行とは、特定の条件で選ばれた10歳以下の小学生ら複数人にカルデア内を一部開放して様々な体験をしてもらう体験学習である。

もちろん一応その「特定の条件」とは、例えば魔術に関係のある一族の出であったり、親族が大金持ちであったり、特別な理由で親元を離れている子供達など、多岐にわたる。

ナイチンゲールは緊急レイシフトから帰還後1日休憩を経て、今まで通り緊急の患者の処置をしてはスタツフに

「もう何日も休んでいませんよね？」と言われしづぶ自室でタバコをふかしながら体を休める毎日を送っていた。

しかしつい先日、ロリンチちゃんに呼び出され、子供達の面倒を見て欲しいという依頼を持ちかけられる。

「どこが悪いのですが？切りますか？」と、ロリンチちゃんに詰め寄ったのだがどうやら手術などが必要というわけでは無いようだった。

何でも「財界のお偉いさんの子息」「巨額の費用を持ったパトロン候補の魔術師家系の子息」など流し目で「金か?」「そう金。」という無言の会話が2人の中で成立していた。しかし僥倖という意味であって、カルデアの財政難より以前からそういう催しを計画されていた。

発案者はなんと藤丸立香であり、「せつかく偉人たちがたくさんいるんだつたら直に合わせてみたい。」という何気ない発言を良しとして計画立てていたものがついに実を結んだところだった。

当のマスターは文化祭でない。

ナイチンゲールは結局断ろうとしたのだが、他の安全そうな学のあるサーヴァントは他の任務や旅で出払っていて、適任なのがナイチンゲールしかいなかった。もちろんカルデアには他にもサーヴァントはいるのだが、いかんせん子供に合わせるのはやばいやつしかいなかった。

なし崩し的にお願いされ、「緊急の患者がいなければ。」という条件で「あとはカリキュラムとか予定とかはこつちで組んどくからっ!」と押し切られてしまった。

ナイチンゲールは本日のカリキュラムに目を通す。

算数や国語、保健体育、理科など偉人でなくても基本教えられるだろうものが多い。

しかしやるからには全力で、苛烈に、胸を張って。

ナイチンゲールは踵を返した。

「さて、今日から二泊三日の間皆さんの担当である、フローレンス・ナイチンゲールです。」

簡単な自己紹介から入ると、未だ遊ぶ子、真面目にこちらを見る子、怪訝な目を送る子など十人十色だった。

小さな女の子が申し訳なさそうな顔をして手をあげる。

「先生、ナイチンゲールって絵本で見たことあるよ。」

「……ええ、そのナイチンゲールです。」

そのナイチンゲールとはまた違う可能性も示唆するべきだが子供に細かいことを言っても意味はないと判断して肯定する。しかし少しだけ本になっているということに言いようのない痒さのようなものを覚えた。

「すごいー!」

「絵本の中の人!?!本当!?!」

「えーっ!」

一部の話を知っていた子供達はナイチンゲールに押し寄せてくる。

ナイチンゲールは素直で純粋な子供たちに、いつの時代、例えば国が異なろうとも国の

宝である彼らを嬉しく思った。

「さて、まずはこの修学旅行の概要と進行を説明するので皆さんそこに座ってください。」

ナイチンゲールは子供達をなだめて、席に座らせる。

話を聞いていなかった子供達も空気を察知したのかしぶしぶ席に座る。

やっと話ができる彼女がふつと息を吐き、スクリーンに映し出される子供でも理解しやすく作られたパワーポイントを操って会を進めた。

影の国の女王、スカサハはタワン・ボグド山に訪れていた。

理由としては、世界各地で魔術的特異点が発見されてから世界は不安定になっており、その亀裂から魔物が生まれるケースがある。それによって魔術とは全く関係のない人々が各地で襲われるケースが相次いで報告されている。

ただしそれは人でもなんとかして対処できるものでもあり、カルデアが急ピッチでかかる仕事でもないため、スケジュールさえ合えばサーヴァントを送る体制をとつていた。

「あの万能の天才曰くこの辺りのはずだが。」

全身黒に近い紫の全身タイツとも言える服をまとった美女が木がほとんど生えていない山肌で岩に腰をかけていた。

横には真紅の槍が地面に突き立てられている。

あたりを確認しても魔獣らしきものは見当たらない。仕方ないのでスカサハはある行動に出ることにした。

槍を手にとり、走り出す。

その槍を勢いよく地面へと突き立て、反動を利用して空高く体を打ち上げる。

オリンピック選手など歯牙にも掛けないその驚くべき跳躍で上空から周囲をかなりの距離まで確認すると煙が上がっている場所を見つける。

(あそこか?)

定かではないがなににせよ何か事故なら助けてやらないこともないと考え、スカサハは優雅に音もなく地面に着地すると駆け出した。

しばらく走ると、煙を上げていた村に着く。

村、と呼ぶにはあまりにも寂しい。あたりは焼け焦げ、家は破壊されている。通りの真ん中では村の男たちだろうか? 体をズタズタに引き裂かれ事切れている死体がい

つもあつた。

死体を起こすと首や胸、足や背中など多くの切り傷がついていた。

(しかし鋭利な刃物というよりは圧力で無理やりついていたいわば「擦られた傷」。石斧のような。)

スカサハはあたりの壊れた家も散策すると、家の中には女子供が圧死していた。隠れながらそのまま家が壊れたかのような死に方にさらに違和感を覚える。

そして何よりも大きな陥没した地面。そこには小さな子供達が原型をとどめないほどに潰されていた。

スカサハが飛び散った内臓を見て痛ましいなと思った頃合いで地響きが伝わる。

方向は反対方向の山。同時に人の喧騒や怒号、悲鳴が聞こえる。

すぐに急加速し最速で向かうと、そこには大きな石像のような体躯に数mはありそうな大きな鉞を振りかざす巨人がいた。

「スプリガンかつー！」

スプリガンはその巨体からは考えられないほどに動きのはやい魔物だ。

手には石を削って作ったような大きな斧を持っており、重い攻撃を繰り返す。

スカサハは神速とも言える速度で石鉞の矛先、子供に覆いかぶさった母親と子供のもとへ駆けた。

しかし間に合うことはない。

肉の塊が圧迫され弾ける音とともに真紅の液体が飛び散る。

その様を見た村人たちは半狂乱になり恐慌状態になった。しかし彼らも狩りをする戦う者、幾人かはスプリガンを倒すために臨戦態勢に入る。

「助太刀するっ！動けるものは避難しろ！」

彼らに振り下ろされる無慈悲な攻撃をスカサハ槍に当て、斜めに持ち替えて逸らしながら叫ぶ。

当然スプリガンを生身の人間が相手にすればひとたまりもない。

彼らもスカサハの動きと、その突飛な見た目に避難が優先だと考えて、散開してまだ生き残ってる村人を先導する。

スカサハが槍で攻撃を反らすとスプリガンは空いている右手でスカサハの脇腹を殴りつけるが、彼女は側転の要領で回避し、手で体を軽やかに支え逆立ちした状態でスプリガンの顎を蹴り上げる。

しかし全くと言っていいほどダメージがないのかスプリガンはそのまま拳の甲でスカサハを弾き飛ばす。間一髪のところで槍を合間に挟んで衝撃を緩和するが吹き飛ばされて近くの石積みみの塀に衝突。辺りを白い煙が覆う。

村人を避難させつつ見守っていた男はスカサハが死んだものと顔を歪ませるが、その

煙を撃ち抜いて勢いよくスカサハが槍を突き出しながらスプリガンに飛びかかる。

スプリガンは石銃を盾にしつつスカサハの一撃を回避。

石銃に槍がぶち当たり大きな音が響くがどちらの武器も健在だ。

スカサハは刺突が当たるものと踏んでいたが避けられてしまったことに目を見開く。

(こいつっ！)

スプリガンはその巨体を素早く宙に上げ、飛び蹴りをスカサハの横つ腹に打ち込む。しかしスカサハは槍を地面に突き刺し重心の軸とし、体を強引にひねってなんとかわす。

あまりの威力に空気が割れるようなドアンツ!!という音を吐き出しながら、スカサハは避けられなかった未来を想像して汗を一筋垂らす。

しかし強引に軌道を変えたために完全に避けることはできず、あばらから太ももまで挟り擦られ、服は悲鳴をあげ破れ去る。

細やかな装飾をされていた衣装は汚れ、損耗する。

スカサハは一旦上に飛び上がり距離を取る。

スプリガンは余裕があるのか距離を取り、屋根の上に飛び乗ったスカサハを見上げ睨みつけていた。

(なんだこいつは……明らかに動きが。)

このスプリガンが特別な個体であることは見て、感じて、戦ってわかる。しかしこの劣勢は様々な要因によるものでもある。

例えばスカサハはランサーのクラスであるが、スプリガンはスカサハにとって不利クラスのセイバー。もちろん実際の戦闘においてクラスの不向きなどあまり当てにはならないがクラス特性を考えてもあまりよくない。

また、アーチャーなどの援護もなく、何よりマスターがいなかったため強化や支援の魔術もなく、ルーンなどを使いすぎると活動限界に至る可能性すらある。

むしろほぼほぼ体術、槍術のみでいまの攻防を繰り広げていたことはやはり影の国の女王たる姿だった。

スプリガンはそんな彼女の思考など知ったことかと、短い足をあり得ないほどの速度を出して飛び上がり屋根ごとスカサハを鉋で弾き飛ばす。

「ぐっ!!?」

スカサハまたも槍を挟むが、彼女自身が耐久という点を捨てているために槍の衝撃が内臓を殴りつける。

一瞬の視界のブレ。

すぐに第二撃の殴りつけがスカサハの腹部にクリーンヒットする。

「おっおえつつっあっ!!?」

口から血と唾液を吐き出し、胃の中身が逆流する。

鼻から胃液が垂れ、ツーンとし、意識が遠のく。

しかしそこで倒れ伏すなどスカサハではない。

彼女は殴りつけられた反動を利用して、スプリガンの腕輪から生えている棒に掴まり背を弓なりにして反転、スプリガンの頭部に体を持つてくる。

真紅の槍を思いつき顔面めがけて突き刺す。

今日一の速度で繰り出された槍を、回避することは不可能だ。

しかし、それを悟ったスプリガンは体をそらし、回避することは諦めて急所を避ける。スプリガンの右肩にスカサハの槍が突き刺さり赤黒い血液が飛び出す。

スカサハ自身驚愕するが攻撃をもらった状態で無理やりアクロバットなカウンターへ移行したゆえか体勢を崩し地面に体を叩きつけて転がる。

(ぐっあー！)

スプリガンは肩に刺さった槍を無理やり引き抜く。

「はっ槍を奪われるとは………私も鈍ったものだ。」

「おぼおっ！」

口から一拍遅れて昼に食べた肉料理が吐き出される。

ドロドロになった食べ物と異臭に嫌気がさす。

スプリガンは何を思ったのか槍をスカサハに投げる。

その投擲はスカサハを狙ったものではないことはすぐにわかった。膝を着く彼女の前に突き刺さる。

「はっ情けか何かか?……いや、貴様も勇士か。」

勇士がなぜあんなことをと思うがそんなことは正直どうでもいい。

不利な状況とはいえ自身を殺しうるかもしれない存在にスカサハは疼く。高ぶる。

「少し舐めていたな。………行くぞ。」

スカサハは姿勢を低くして槍を構え、その場から消える。

-----

ナイチンゲールは国語の授業を終え、一時休憩に入る。

次は保健体育の時間だった。

「ダ・ヴィンチ女史。次の内容は?」

「ああつお疲れ。………まあ人体の構造と性教育かな?」

「………性教育などは学校でするものでは?」

「それもそうなんだけど、魔術関係の家柄だと血の争いとかいろいろあつて複雑なん

だって。学校で性教育してもらったはいいけど、家に帰ったらメイドに手を出した。なんてあるらしいよ。」

結局現代の学校で性教育はだいぶ格差が生まれる。

そもそも男子と女子を部屋で分けてDVDなどの公式映像で説明する程度だ。そんなことで正しい教育が行えるわけがない。

それはナイチンゲールもわかっていた。

「だから一応進捗と器具は用意したからがつつり、しつかり教えてあげてくれたまえ。」

「もちろんこの万能の天才が教えてもよかつたんだけどなにぶんこの体じゃあ、ね。」

下手すれば生徒に間違えられるし舐められてしまう。

「……わかりました。全力で当たらせてもらいます。」

「うんうん！頼りになるね。」

そういうとロリンちゃんはそのままホールを出て行った。

しばらくして授業時間が開始される。

「さて、今日は後保健体育で終了です。頑張りましょう。」

「はいい！」という声を聞いて少し口角が上がるナイチンゲールだった。

ナイチンゲールは先ほどのロリンちゃんとの話を終えた後、特別な服装を指定され

更衣室に行つて着替えていた。

「といつても普段の赤い衣装は変わらずスカート周りに少しメカメカしい器具を取り付けただけだった。

ナイチンゲールは裾の赤いボタンを押す。

するとプロジェクターから映像が投影される。

投影された映像はナイチンゲールの体の断面図だった。ある程度デフォルメはされているがリアルタイム映像である。

「はい、まずこれは私の現在の体内です。」

そういうと子供達は一様に顔をしかめる。

「先生え、ちよつと怖い。」

「大丈夫です。例えば貴女、貴女のお腹もこういうった作りになっています。」

ナイチンゲールは棒でのご付近を指す。

「ここからお菓子とかご飯が体に取り込まれます。」

そういうとナイチンゲールは腰のポーチからキャンディを取り出す。それを全員に見やすく協調しながら口に含む。

すると投影された断面図の食堂をキャンディが通っていく姿が映し出される。その光景に思わず子供達は見入り、「おおー！」と声を漏らす。

キャンディは胃の中に収まり胃液につかる。

「ここで食べたものは消化されます。そしてここから小腸、大腸を経て便となり体外に排出されるわけです。」

「うんこじやーん！」

「ちよつと！下品なこと言わないでよ！」

「でもそーじやん！」

「もー！」

子供がくだらないことで喧嘩しているのをみると苦笑してしまうがある意味自分の便のことを考えられているのかと思うと複雑だった。

ナイチンゲールはそこからゆっくりとたっぷり時間を使って体の構造を説明している。

本来であればこんな長ったらしい話を聞いても子供は飽きてしまっただろう。しかしロリンチちゃん作「断面図みえるんです2号機」のおかげで実際にどういう風になっているのかをわかりやすく教えられるため興味津々といった様子だった。

何時間かして、数度休憩を取りつつ、筋肉の構造や、血液の循環などを丁寧に教えていく。中には難しくついていけない子もいたが、あくまでこれはきっかけ作りなのでナイチンゲールは気にしていなかった。

## カルデア修学旅行2（ナイチンゲール）

「さて、ではこれから男と女の体の作りの違いについて教えようと思います。」

「せんせー！男子と一緒になんですかー？」

1人の頭の良さそうな女の子が質問する。

「はい、人手が足りませんし、お互いの体を理解することは大切です。」

そういうと女の子は仕方ないといった様子で納得したようだった。

ナイチンゲールはスクリーンに映された基本的な男性器を棒で指す。

「まずここが陰茎と呼ばれる部分です。主に性的興奮で血液が集まることにより海綿体が膨張。勃起します。」

男性器が投影されると女の子たちは目を逸らしたり、覆ったりと恥ずかしそうにしていた。のだが目の隙間から覗いたり、チラチラと覗き見たりはしていた。

男子たちも少しそわそわしている。

「ここが睾丸と呼ばれる部分です。男性の遺伝子、つまり情報を持った精子を量産する器官でここで精液として尿道を通って体外へ排出されます。それを射精と言います。」

アニメーションで精液がどういう動きで射精されるかを丁寧に説明し続ける。

中にはもじもじと自身の性器を触る男の子だったり、ズボンガバツと広げて中を確認したり反応は様々だったが、掴みはバツチリだったようだ。

「ここが亀頭、ここが射精管、ここが前立腺です。」

「さて、簡単に男性器の説明をしました。続いて女性器の説明に入ります。」

すると画面がパツと変わってナイチンゲールの性器が映し出される。

「これは私の性器ですが、まず始めに男性と同様女性も成人になっていくにつれてこの辺りに陰毛が生えます。これは個人差があります。」

「せんせー、なんで先生は生えてないんですか？」

「……私は普段よく動きますが、衣服が擦れると次第に薄くなつていくことがあります。」

実を言うとサーヴァントたちがムダ毛をあまり見せないのは単に戦闘行為に勤しんで、摩擦していた結果でもある。しかし例えばエドワードティーチのように脛に毛を生やしているものもある。彼らは摩擦よりも生えるほうが強かったりするだけでもある。

「続いて……ふむ。」

ナイチンゲールはブーツを脱ぎ捨てると、レギンスを下ろし教壇に腰をかけて脚を開く。

「みなさん席を立てて集まってください。」

ガタガタと主に男子が集まりナイチンゲールを中心に周りに子供達が集まる。彼らの視線はナイチンゲールの秘部に釘付けだ。

ナイチンゲールはそのまま恥丘を掻き分けて、指を差す。

「ここが尿道口、ここが陰核です。陰核は別名クリトリスや肉芽と呼ばれ、大変敏感な場所です。そして尿道口の下にある穴が膣口です。ここから赤ちやんが出てきます。」

男子たちはもじもじとして女の子たちは顔を真っ赤にする。まさか実物をマジかで見るとは思っていなかったのだろう。

そのまま両手の人差し指で膣口をできる限り開く。

「中が膣内と呼ばれるところで、暗くてあまり見えませんがスクリーンのあそこが子宮口です。そしてその上の逆三角形になっている部分が子宮と言われる場所です。」

「せっせんせー横の丸いのは?」

「それは卵巣と呼ばれる女性に2つある卵子を作る器官です。卵子は先ほどの精子と結びつく受精と呼ばれる現象で赤ちやんの元受精卵となります。」

「つまり性交渉、セックスとは男性器を女性器に挿入して刺激し、射精を経て精液が子宮に出されることでタイミングが良ければ子供が生まれる行為ということ。タイミングはまた後で教えます。……どうぞ。」

「そつの……えと。」

1人の男の子が恐る恐る手を挙げている。

身なりはよく貴族のような良質なものを見にまどつてゐるが、自信がなさげな子だつた。

「どうしました？なんでも聞いてください。」

「あのつ……触つてみたかつて……。」

顔を真つ赤にして申し訳なさそうにする。

女の子たちは信じられないと騒ぎ出しますますその男の子は顔を真つ赤にする。

「……特別に良いでしょう。ただし女性器も男性器もとてもデリケートで重要な器官です。乱暴に扱つてはいけません。」

「はっはいっ！」

男の子は最前列に來るとナイチンゲールの秘部にくつつくのではというくらいに顔を近づける。ナイチンゲールはできるだけ見えやすいように中指を足して両手で計4本の指を使つて膣口をこれでもかと広げる。

男の子は優しく右手の人差し指を膣口に触れさせる。

「んっ……」。そう、優しく。でも私は慣れてゐるので遠慮なく良いですよ。ダメだつたら止めます。」

そういうと周りの男の子もゆっくりと性器を触り始める。恥丘を撫でたり、陰核を指の腹で触れたり様々だ。

膣に指を入れたところでスクリーンを示すとスクリーンには指の形で膣道が押し広げられていつているのがすぐにわかった。

「わっわわっ！すごいっ！」

あまりに驚いたのか男の子は遠慮なく奥まで指を挿れる。元から手が小さいこともあって痛みもないのでナイチンゲールはやりたいようにさせた。

「ぬるぬるでつぶにゆぶにゆだっ！気持ちいいっ熱い！」

「おい僕もっ！」

「喧嘩しないで交代交代で。」

ナイチンゲールは緩やかな刺激で少しピクリと腰をひくつかせる。

「ここが小陰唇、こっちが大陰唇と呼ばれます。」

女の子たちも他人の性器はやはり興味があるようで男子がいじっているのをじっと見つけて顔を真っ赤にさせていた。

しばらくして、

「そろそろ次に行きたいと思えます。次は………まったく。」

ナイチンゲールが少しため息をつく。

理由はロリンチちゃん提示した次の内容だった。

先に渡されていた箱を開けると中にはジョークグッツなど様々なアダルトグッツが入っていた。

「さて、これはいわゆる大人のおもちゃと言われるもので、男女ともに性的欲求不満に苛まれた時に解消するために用いられたり、恋人や伴侶との交遊で使われます。」

ナイチンゲールが男性器の形をした蛍光緑のデイルドを手取る。

「例えばこれは大人の男性器を模したもので、主に女性が自慰行為のために使います。」

ローションのキャップを開け、デイルドに垂らす。

そしてデイルドの先端を膣口に当ててゆっくりと押し込む。

ミチミチ

「ふくっ……んっ！」

膣道の中腹で一旦止め、引き抜き、また挿れる。それを繰り返しながら

「このようにして性器に刺激を与えます。女性の場合は快楽の……気持ち良さがいっぱいになると絶頂しえます。その際、大きな絶頂であると人によりませんが尿道から潮を吹くこともあります。」

スクリーンを見ると膣道を指とは桁違いな太さでかき分けるデイルドが見えた。

ナイチンゲールが解説していると先ほどの自信のなさそうな男の子がもじもじとして秘部の指を加速させる。

よく見ると仕立ての良いズボンの股間部分が盛り上がっている。

ナイチンゲールは秘部から手を離すと男の子のベルトに手をかける。

「えっなに?」

「じつとしていてください。」

ベルトとズボンのボタンを外すとスツとズボンが落ちる。男の子はナイチンゲールの秘部からとつさに手を離して抵抗するがバーサーカの膂力に勝てるはずはない。

子供のブリーフパンツは誰が見ても盛り上がっており、シミを作っていた。

流石に周りも気づいたのか彼の股間を凝視する。

女の子たちもチラチラと覗くが、数人は他の男の子の股間も盛り上がっていることに気づく。

ついにパンツも無理やり降ろされると、ビョン!と男の子の性器が硬くそり立っていた。

(年齢の割には大きいですね。)

「お名前は?」

「えっへ!? あっああっ!? あ……………エド……………です。」

突然恥ずかしい格好にされたことへの混乱と困惑、返答の緊張が織り混ざってしどろもどろになるエド。

「エド、あなたの陰茎……ちんちんは先ほど説明した勃起という状態です。年齢の割には良いものを持っていますね。自信を持ってください。」

「へえっ!?!はっはい!」

「一般的にあなた達10歳では6cmが平均です。エドは今現在8cmほどなので立派です。」

「先生、おつきい方がいいんですか?」

「いえ、それは場合によります。男性器が大きい人もいれば小さい人もいます、同様に女性器の膣道の長さは人によって千差万別です。その人その人に合ったサイズというのがあるので一概に大きい方がいいというわけではありません。しかし、統計的に男性器の大きさを男の価値と比例して考える文化は多く存在しています。なのでエドはもつと自信を持っていいですよ。」

二度も言われて嬉しくなったエドはより男性器の張りが上がったような気がした。

「女性でも例えば胸が大きい方が女性として魅力的、という価値観が存在します。おっぱいを大きくしたいという女性はたくさんいます。」

ナイチンゲールはエドに向き直り対面した状態で足の間にエドの胴体を持ってきて

反転させ体を密着させます。

「エド、事後承諾ですが協力してもらいますね。」

「ふあつふあい。」

エドの後頭部は豊満な乳房で包まれて心地よさと女性のいい香りで半ば陶酔気味になる。

ナイチンゲールは優しくエドの竿を持ち、

「これは包皮と呼ばれる部分でいまは皮を被っていますが、若いうちから剥くことを推奨します。ここが先ほどいった亀頭、そして……………」

ゆっくりと皮をむく。

エドは突然襲った激しい痛みに暴れるが、すぐに痛みじゃないことを悟る。これは強烈な経験したことのない快楽だとはつきり認識する。

空気が今まで触れることのなかった敏感なカリ首に触れて、スースーとした感覚と皮を引つ張られる強い刺激、スパークのような気持ちよさで視界が明滅する。

「ここには子供では仕方ありませんが垢がたまります。」

ナイチンゲールは用意して合った柔らかなタオルで優しく拭き取る。

「ひいっ!!?」

強烈な刺激に腰をひくエド。

そんなエドに構うことなく、先ほどのデイルドに使ったローションを男性器に垂らす。

「冷たっ!？」

にゆるにゆるになったエドの性器を遠慮なくナイチンゲールは扱く。

入念に皮の間や尿道口、付け根から睾丸まで塗りたくる。

「これが尿道球腺液と呼ばれるカウパーです。精子が生き残りやすい環境にする粘液です。」

エドの鈴口からトロツと溢れた透明な液体を解説する。

そしてゆつくりと根元から先端へ、先端から根元へ手を動かし刺激する。

「あっあああっ!?!せっ先生!?!だあっ!!」

エドは初めて性器を刺激されて、パニックになりながらもペニスをさらに硬く、熱く、大きくして耐える。

(すごい硬さです。普段よほど素晴らしい健康状態で生活しているのかもしれませんが。) ゆっじにゆっじ

静まり返ったホールに水音が響き渡る。

子供達の目は正規に釘付けで先ほどの頭の良さそうな女の子は唾液をぐくりと飲み込んだことすら気づいてはいなかった。

「あつなっつか来る、でっ出ちやうよお！おしっこ!? あああつああ!!」

初めてのことだらけで当然とも言える素早い射精。

誰も早漏だと思ふことはない。

それほどにまで丁寧で的確な刺激をナイチンゲールは与え続けていた。

皮を根元まで引つ張り上げ真つ赤になった龟头からクリーム色の濃い精液が一拍遅れて、尿道を無理やり広げながら射出された。

びゅるっびゅっ!

白濁ではない半透明さのかけらもないクリーム色の液体がエドの目の前の黒髪ばつっんの女の子の鼻筋にかかる。

女の子は驚くこともなくびゅくりしたまま固まっていた。

ぜーぜーと息を荒くして体を震わせながら、粘度のある液体を初めて通した尿道から得られる快楽を最大限に味わう。

びくんっ!

引き気味だった腰は射精と同時に前方にこれでもかと突き出され痙攣したままピクピクと性器は震えていた。

(量は平均の3mlほどですが、濃さがすごいですね。初めての射精でしたし溜まっていたのでしょうか?)

「ぜっぜんぜいっ……っこれ！」

エドの精液を顔で受けた女の子は嫌悪感を感じるよりも興味が上回ったようで、顔についた精液を拭って手に付いたクリーム色のプルプルした液体をナイチンゲールに突き出す。

「はい、今のが射精で、この液体が精液と言われるものです。」

「これが………精液。」

周りの子達も徐々にくたびれ始めるエドの性器と女の子の手の精液を交互に見て驚いていた。

ナイチンゲールは濡れたタオルで綺麗にエドの股間を拭き、女の子の顔も拭く。

そしてクスコを取り出すとエドを横において、自身の秘部に挿入する。

「そしてこの精液がこの………んっ………ここにはいつて女性の準備が整っていれば受精し赤ちゃんができます。ただ受精しただけでは妊娠はしません。しっかりと着床すればです。」

ナイチンゲールはきつく締め上げる膣を腕力で強引にクスコで広げる。

そのおかげでナイチンゲールの子宮口も子供達には見えた。

「これは余談ですが男子は尿道に精液が残ることがあるのでしつかり出し切ってください。………エドはちよつと余裕なさそうなので、あまり衛生的に良くはありませんが仕

方ありません。」

と前置きを入れて、ナイチンゲールはエドの性器を口に含み、尿道に残った初射精の余りを吸い出す。キュツと締め上げられ放心状態だったエドはビクツと腰を揺らしてナイチンゲールの頭に手を添えて引き剥がそうとするが叶わない。

じゆるっじゆるちゆるっ

尿道を意思と関係なく精液が通過して、再度悲鳴をあげるエド。

その光景を見て、男子も女子ももじもじと股間を弄り始めた。

恐るべき攻防。

スカサハとスプリガンはお互いほとんど動くことはなく、目で追えないほどの速さで武器と武器をぶつけ合う。槍を横薙ぎに払うと鉞で斜めに逸らされ反撃される。さらされた力を流用して逆から攻撃すると開いた隙に蹴りが飛んで来る。

スカサハは身体中いたるところに裂傷を負ってもはや服の原型は無い。

スプリガンもスカサハ程ではないが身体中に穴や切り傷があつた。先の右肩への刺突でやっという勝負なつたところだつた。

「はっやるなあ勇士よっ！」

スカサハは決め手にかけると判断して思い切った賭けに出ることにした。

スプリガンの縦斬りを槍で強引に弾くと、数メートル交代する。

（このスカサハに距離を取らせるとは。）

そのまま独特の姿勢の低い体勢をとる。

後ろに持っていた手にはもう一本の真紅の槍。

「刺し穿ち………突き穿っっ！」

一本の槍をスプリガンに投擲する。

当然スプリガンは石銃でガードするが衝撃はなく体が固定される。

座標固定のようなものだった。

「『貫き穿つ死翔の槍』っ!!」

大きく豊かな胸部を揺らしながら大きく息を吸い込み飛び上がる。空中では魔力収

束で赤く輝き槍に集約されていった。

第二宇宙速度で放たれる紅蓮の槍は目に見えぬ、しかし赤い閃きでスプリガンに命中する。

地響き、空間の割れる音、矛盾を修正する作用で歪み爆発する。

すでに避難が完了しているが完了していなければタダではすまなかったであろう大

威力の衝撃。

スカサハが心配で何人かの戦士たちは村人を安全な場所に送ってから戦闘を緊迫した雰囲気で見つと見ていた。

目の前で起こったありえない攻撃は目を疑うが、ほとんど全裸で乳首や秘部を隠そうともせず地面に着地した美女を見てこんな状況でも男の本能が揺さぶられた。

ごとり、と音がする。

スプリガンは完全に消し飛んだはずっ！とスカサハは自動で戻って来る槍をキャッチして構える。

土煙と砂埃が晴れると、右肩から先をなくしたスプリガンが顔を覗かせる。

(狙いが甘かったかっ！)

スカサハはダメージによる狙いの甘さと早期決着を図った数秒前の自分に怒鳴り散らしたかった。構えてはいるものの、宝具を放ったことで大幅な魔力低下により膝をつく。

「はあっ！はあっ！………お前たちっ私はいいから逃げる！」

言葉は通じなくとも言いたいことはわかる。

男たちはうなづいて消えていった。

スプリガンは大量出血をしながらも立ち上がると、スカサハにゆっくりと近づいて来

る。

（もう………動けん。）

しかしてまさかこんなところで自分を死に至らしめる存在に出会えたことに少し笑ってしまった。のだがスプリガンが目の前に来て少ししても一向に何も起きなかった。

スカサハは地面に膝立ちでスプリガンを見上げるとそこには大きな棒があった。

（これは………生殖器………か？）

もはや笑うしかない状況。

あんなにも死闘した魔物が性器を出している。

しかし、同時に悟る。

（種の保存………結局、強い雌を探していた………わけか。）

スカサハは震える膝を気力で止め、立ち上がる。

ちようど顔付近に来たスプリガンの性器は異臭を放っていた。

（雄臭い………魔物が風呂に入るわけもなし。）

スプリガンの性器は黒々しく太く、長く、硬かった。

人間の男性の性器に形は似ているが、ボコボコと小さな出っ張りがありまるで鬼の棍棒だった。

「お前は私に発情しているのか。」

確かにスカサハの見た目はほとんど裸体で大きな乳房と乳輪がさらけ出され、濃い紫色をした薄い隠毛が生えた秘部が女を強調している。

スプリガンの雄臭さをもろに浴びてしまったスカサハは頭をガンと殴られたように、ふらつく。

(なんだ?何かデバフが?)

ゆっくりと乳首が勃起し、秘部が疼く。

(……………ふ、結局私も「雌」というわけか。)

スカサハは目の前の勇士のペニスに口づけをした。

## カルデア修学旅行3（ナイチンゲール＋スカサハ（ランサー））

翌日、ナイチンゲールは算数の授業を終えて、2度目の保健体育の授業に移行した。教室には事前に子供達に裸になるように伝えてある。

ナイチンゲールもホールの女性更衣室で服を脱ぎ、腰の側面に少し厚みのあるシールを貼る。昨日、予想外に

「断面図みえるんです2号機」の有用性を実感したナイチンゲールはそのことをロリンちゃんに伝えると、彼女も張り切り切りだして「もつと実用的にする！」と徹夜して渡されたのがこの「断面図みえるんです3号機」

肌色のシールでほとんど目立たない。

ナイチンゲールが部屋に入るとホールの両壁側に男の子と女の子が別れてもじもじとしていた。

しかしナイチンゲールが号令をかけるとししぶしぶ彼女の周りに輪を作って集まる。

「さて、今日は実際の性交渉を試してみたいと思います。」

「ええっ?!」

全員がざわざわとして驚愕の声を各々あげていた。

「まず、一般的な正しい性行為の仕方を知ってもらいます。これは一見するととても恥ずかしいものに見えますが大切なことです。」

その言葉を聞くと子供達は黙った。

「それではサラさん、エドの前に立ってください。」

呼ばれた生徒が2人前に出る。

誰もが、そして本人たちもこのペアで性交渉をおこなうと理解した。

「まず女の子の性器は柔らかく伸びやすいですが、よく濡らしておかないと怪我をする可能性もあります。またサラさんは処女であることを確認していますので処女膜と呼ばれるものが存在します。」

そこから事務的な説明、これからどういう段階を経てセックスに至るのかを丁寧にわかりやすく、時には自分の体も使って彼女は解説していった。

処女と言われて言いようのない恥ずかしさを感じたサラだったが、そんなことは気にもとめずナイチンゲールは授業を進める。

「今回は初潮などで妊娠する可能性もあるので、エドの性器にコンドームと呼ばれる避妊具を取り付けます。」

子供用の、しかもエドのサイズにぴったりなコンドームをすでにフルボツキに達しているペニスに被せる。その上から入念にローションを擦り付けて、同時にサラの未だ男を知らない小さな性器もとろとろにしておく。

「あつえと、僕でごめん。」

エドはサラと目があつて気まづくなり謝罪するが、サラは仕方ないしこの後何をするのか想像して恥ずかしくそんなことを気にしている様子は皆無だった。

ナイチンゲールはエドとサラを密着させてエドが上になるかたちで正常位を取らせる。

「これが正常位と呼ばれる体位です。」

そしてついに挿入へと移行する。

エドの性器は同年代の男子と比べて明らかに大きい。

サラは無理やりこじ開けられる己が陰部から発せられる痛みと異物感に顔を歪めつつも、ちよつぱり敏感なところを刺激された快楽で息を荒くして天井を見上げる。

「はあつあつ！ ああ！」

サラは胸で両手をきゅつとして、足をエドの背面にしてしまう。エドもそれにつられてさらに奥へと突き進む。

彼らの距離はすでにゼロに等しく、サラの子宮口にエドの龟头が当たる。

エドはすぐに、気持ち良さを我慢できずに射精欲に突き動かされる。「もっもうダメだあ!!おしっこでちやうつ!」

まだ慣れていないのか、それとも覚えていないのか射精を排尿と勘違いして悲鳴をあげた。

サラも突然の射精発言に「子作り」を意識して徐々に痛みが敏感な部分を擦られている刺激だと気づき始めよだれを垂らす。

当然、子供がセックスで気持ち良さを感じるなどほとんどない。2人は童貞と処女で、昨日性教育を初めて受けたばかり。大人は性行為の気持ち良さを知っていることで、例えば前戯だったり、女性は痛みを感じても我慢していれば気持ち良さが来ることを理性的に理解している。

子供は純粹で少なくともサラは本当であれば痛みを感じて嫌がるはずなのだ。

また、エドも昨日初めて包茎の子供ちゃんぽを大人のペニスのように向かれ、痛みを伴った。

その敏感な部分を昨日今日で、コンドームを装着され、愛撫され、キツキツの女性器に入れられる。男性ならわかるかもしれない。その痛さを。

しかし2人は現に絶頂が近く、ありえないほどに体液を放出している。

それはなぜか？

理由は簡単でずるいものだった。

ナイチンゲールとロリンちゃんなど関係者は昨日の夕食に、以前緊急特異点で発見された万能薬を希釈し調整した液体を混ぜていたのだ。

ロリンちゃんも技術開発研究部から渡された未知の薬にいぶかしげだったのだが、自分で成分を調べて危険がないことはわかったらしい。しかも「私にすら作り出せない薬を作っただつて？……ははーんいいだろう！その喧嘩買った！」と息巻いていた。

ナイチンゲールは自分が回収した薬だとわかつているので内心健康被害を想定していつでも緊急治療を開始できるように夕飯では目を光らせていたのだが、全くといっていいほど問題はなかった。

夜に、「体が熱い」などの訴えはあったが皆体温が1度ほど上がっており、熱を疑ったが、新陳代謝が激しく、健康状態がいつもより良く、ナイチンゲールは「むしろ悪いところが良くなっている。」という結果を出した。

結局その日は寝かしつけて、今日に至る。

(医療に携わるものとしてあまり気乗りはしませんでしたが、円滑に性行為ができているのであればまあいいでしょう。)

ナイチンゲールはエドの背後に回ると突然肛門に指をそえる。

「えっ!?! いっ!?」

エドは突然臀部に伝わるむず痒さに驚くと同時に、痛みでビクツと腰を前に出す。サ  
ラの子宮口付近に思いつき亀頭が当たって嬌声が部屋に響く。

ナイチンゲールは医療用手袋をつけた女性らしい細い指をエドの菊門に突き入れて  
括約筋をおし拡げる。前もってエドにはトイレに行くよう指示していたのだが流石に  
腸内洗浄はしていない。

それでも幼い直腸は無理やり押し広げられる。

中指を第二関節付近まで挿入すると腸壁の奥にコリコリとした固い部分が指先に当  
たる。

「ん!?!」

ペニスの根元をぐいっと上に押し上げられるような重くて鈍い快楽が下腹部を殴り  
つける。エドは変な声を漏らしてしまう。

「昨日説明した男性の前立腺という部分を刺激しています。ここを刺激されるとさらな  
る刺激と強制的な射精感を感じるそうです。」

ナイチンゲールが説明しながら、今度は人差し指も肛門に挿入る。

エドは悶絶しているが腰の動きは止まらない。

そのまま人差し指と中指でまるで将棋を指すように強く前立腺をつまむ。

それだけでエドは射精を迎える。

睾丸から上つてきた精液が射精管を通り尿道を突き進む。

あまりの量に尿道は2倍3倍と膨れ上がり、所々つかえるが無理やり通って鈴口から射出された。

びゆるつぶびゆるるるびゆるっ！

そしてすでに絶頂状態でありながら、ナイチンゲールはとどめを刺すかのようにバーサーカの力を使って、ギリギリ痛みの生まれない壊れない強さでエドの前立腺を潰す。

グリユンツ！！

「！！?!?!?」

ぼびゆる!!ぶびつびゆるいびゆるうううびゆる!!!

声にならない叫びで発狂しながらエドはすでに射精中であるにも関わらず、強く、多く精液を絞り出す。

突然のエドの発狂と、薬、そしてただでさえ平均より大きな男性器がさらに膨張してサラを絶頂へと導いた。

「ああつあつ！はあああついついつく!!」

のけぞりながら痙攣して前髪を震わせながら、呼吸困難に陥るサラ。

人生で初の絶頂と、驚きでちよろちよると尿を漏らしてしまう。しかし衝撃的な性交

渉で誰もそんなことを気にしてはいなかった。

エドも尿がかかっているにも気にする余裕はなく未だ小便のように出る精液に精気を吸い取られるかのようにぐったりとして意識を失った。

「さて、ということですからみなさんにこちらが選んだ相手と性交渉をしてもらいます。男性は必ずコンドームをつけてください。一応授業終了後に女性には避妊薬を渡します。」

「相手を思いやり、馬鹿にする事なく、真面目に取り組んでください。」

彼女がそういうと放心状態で目を見開きながらサラとエドのセックスを見ていた子供達が我に帰る。

少女たちは秘部に液体を垂らし、男子たちは股間をギンギンに硬くさせていた。

その部屋にはすでに雄と雌しかおらず、彼らは動き出す。

スプリガンの性器はその体格からは考えられないほどに小さい。

もちろん小さいといってもそれは人間からみれば巨根の部類だ。根元から計って30cmほどで、一番太い部分の厚さが6cm、細い部分で3cm。竿は岩のように凸凹

で宝石のように滑らかだ。石でできた異形のデイルドと言ったほうがいいかもしれない。

カリの高さは高いところで2cmほどで、竿の周りを根っこのようなものが包み込んでいる。先端には大きな小指代の穴とその穴の周りを円形に取り囲む無数の棘。棘というほど鋭利ではないがなかなかザラザラとはしている。

色は紫色に近く、血などは通つてなさそうだがビクビクと震えているところから岩ではないことはわかる。

根元には隠毛のような細い根っこが無数に生えており茂みのようだった。

鞆丸は竿に比べて非常に多く、2つ合わせてバスケットボールほどに大きい。

特徴的なのが人間の男性のペニスでいうところの尿道の根元付近から、男性の親指ほどの太さの突起が存在していた。

その長さは13cmほどだったが団子のように球体が4つほど並んでいる。

スカサハは「まるで尻に入れるおもちゃのようだ。」と思った。

流星に太すぎて顔を近づけてから口淫は難しいと悟ったが、彼女の豊満な乳房で竿を挟み込んで尿道と思われる部分を下で舐めまわしてみる。

(昔の勇士は喜んだものだが。)

スプリガンは快楽を感じてはいるようだったが不満そうだった。

スカサハは仕方ないと、自身のすでに濡れそぼった秘部に手を当ててかき回す。彼女の秘部は多くの男を、雄を抱いてきた。

それゆえにすぐに愛液を分泌し始め、トパトパと地面にシミを作り始める。陰核は完全にポッキして1cm台にまで赤く自己主張していた。

でろでろになった手で竿を包み塗りたくる。

小指でスプリガンの尿道につぶつぶと出し入れすると中からその太さゆえに蛇口のように透明な粘液がとめどなく溢れてくる。

スカサハはそれを舐め取りながら唾液と混ぜてさらに塗りたくる。

そのまま近くの塀に体を乗せ、スプリガンの方へ腰を突き出すと、スプリガンも腰を大きな手で掴みがつしりと固定した状態で生殖器をスカサハに擦り付ける。

竿は腹部の方へ乗っかったり、尾骶骨の方へ落ちていたりしながら、ピトリと秘部に先端を押し付けた。

仰向けになったスカサハはくるであらう衝撃に耐えながら、自身の性器が裂けないことだけを考えていた。

大きな口から灰色の下を出し、樹液のような臭い匂いを放つ唾液を垂らしてスカサハに口づけをする魔物。

ぐぼんっ！

無理やりこじ開けられ、限界まで拡張されたスカサハの女性器は一瞬で悲鳴をあげ、尿道から大量の潮を吹く。

ぐるんつと目を向いて仰け反り、腹をもこつと膨らませるスカサハ。

「お、っほおっ?!」

女とは思えない下品な声を漏らしながらの絶頂。

スプリガンの性器は4分の3ほど挿入され、子宮を押し上げてスカサハの腹筋を殴打する。竿の下の突起は肛門へ無理やり侵入し、直腸を抉る。

もし仮にスカサハが男であれば完全に前立腺を破壊されていたかもしれない。

獣のように腰を振るスプリガンは興奮からか血を大量に回し、肩から大量に出血するが構うことはないといった様子だった。

止血よりも子孫を残すことを優先して、目の前の強かな雌に、強い仔を産んでもらう。同種の雌はいつの間にかいなくなつた。

そもそも自身はなぜここにいるのかわからない。

しかし人と呼ばれる害悪を滅ぼす欲求に駆られる。

力を振るうが虚しい。

子孫を残さねば、自分の代で終わってしまう。繁栄を！繁栄を！

目の前の雌は強い。  
やられる。

だが……最後に、最後に、この雌をつ！

スプリガンはもはや死ぬ気で腰を振るう。

スカサハは薄れゆく意識の中、それでも見事と思っていた。

これほどにまで、体の中を蹂躪される生殖を今までの男たちで経験したことはない。

ただただ成熟し、女として開発され尽くされた性器から送られる暴力的な気持ち良さに脳が支配される。

(ふぎっ……すっすっすっぎる!?これほおっどっ!とはー)

子宮はすでに押しつぶされ、スプリガンの鈴口周りにある棘で子宮口は知らない快楽を味わっていた。膣内はこれでもかどドロドロに分泌液を垂れ流し、泡だて、接合部からこぼれ落ちる。

肛門は引き抜かれるたびに、強制的に排便させられているような感覚を味わい腸液を垂れ流す。もはや括約筋はほぐれ過ぎていた。

竿の太い部分が無理やり引き抜かれ腸壁を持つていく。

スカサハは膣がめくれていないか不安になりつつ、素早く大きい快楽の波が己を絶頂

に導こうとしていたことを悟った。

(だっただえだっ！まっだいいいっ！?)

まだいくわけにはいかない。

女として、セックスという勝負に負けるわけにはいかない。今まで全戦全勝の無敗記録を切らすわけにはいかないのだ。そして、少しでも村人が遠くへ逃げられるように時間を稼ぎたくもある。

それは半ば言い訳ではあるが事実でもある。

もはや目の前の雄は遠くまで行けない。

しかし仲間がいる可能性が皆無でもなければ、何かしらの回復手段を持っていることだっでありうる。

しかし人間の雄に全戦全勝の記録を持つスカサハであつても目の前の雄は雄としての強さが桁違いだった。

性器の質も段違い。

下腹部は殴られながらキunksキunksと「この雄の仔を産む」「早く種子をよこせ」と暴れているかのようだった。

そしてスプリガンがついに射精感を覚え、腰をより速く、奥へと突き進む。

スカサハは我慢という形で理性を保ち絶頂をせき止めていたが、決壊してしまった。



色だった。その中に薄く濁った液体、精子が詰まっている。

ただでさえペニスの形に盛り上がっていた彼女の張りのある美しい腹部がゆっくりと盛り上がる。

スプリガンはこれが最後だと意気込みながら括約筋を締め、出せる限り盛大に射精し続ける。それはすでに生命の譲渡のように最大の射精。

おおよそ蛇口のような太さの尿道口から1分間射精され続ける雌は、ただの人間であれば挿入の段階ですでに事切れていただろう。生きていたとしても内臓破裂だ。

スカサハはぐったりとして意識を失った。

スプリガンも役目は終わった。と満足そうな顔をして紫色の粒子となりうつすらと消えていく。

水袋の栓が消え、下品な水音を立てて、スカサハの秘部からサラサラとした琥珀色の精液が垂れ落ちる。

ナイチンゲールはその後子供達の拙い性交渉の補完をしつつ、絶頂から復活した女の子たちにピルを渡す。

「先生、これは？」

何度か射精して慣れた男の子がペニスにかぶったコンドームを指差して近づいてくる。歩く振動で上下に揺られてぷらぷらとしていた。

コンドームには大人顔負けの真っ白い精液が大量にたまっている。

昨日も説明したが、平均的にこの歳の子供が一回に出す精液量は2mlから3ml。しかし目の前のマークスは一度の射精に7mlほど出し、それを同じコンドームの中で3回射精したので25ml手前の量を溜め込んでいた。

(これもあの薬のせいでしょうか？なんにせよおびただしい量と部屋に充満するにおいて。)

「それは口を縛って私に提出してください。あとで処分します。」

当然研究施設から提出を求められていた。

結局程のいい人体実験であることにナイチンゲールは罪悪感と怒りを覚える。

「んっ……………ふう。」

マークスから使用済みコンドームを預かると、つい口から声を漏れ出してしまふ。

先ほどからナイチンゲールのサーヴァント内随一(あのサーヴァントには負けるが)を誇る豊満なバストをいじり続けている男の子による刺激からくるものだった。

(クラウスは母親がいらないそうですし、仕方ありません……………)

クラウスは何度か女の子とセックスをしてコツを挿んだのか彼女たちを鳴かせていたのだが、あまりに性欲が強いのか自粛して少し落ち込んでいたところをナイチンゲールに慰められていた。

そこから体に触る許可を求めてきたのでため息をついて了承して1時間。ずっと胸部を揉みしだき乳首周りを指で撫でたり、ナイチンゲールの埋れた乳首を掘り返したり、つまんだり軽く引つ搔いたりなどやりたい放題だった。

ナイチンゲールのおっぱいは汗ばみ、乳輪を盛り上がらせて完全に乳首を勃起させている。

それでもなお続けるクラウスに「なぜそこまで触りたいのか？」と聞くと、少しだけ身の上話をされ、お母さんと喧かれてしまい。

仕方なく継続許可していた。

結局その授業中にならずと触り続け、その授業は終わった。

二泊三日のカルデア修学旅行の二日目が終わわり、明日の朝、彼らはここをさることになる。

ナイチンゲールはせめて修学旅行で教えたことが何かの役に立つように願いながら号令をかけた。

## カルデア修学旅行4（ナイチンゲール）

皆が寝静まった頃、ナイチンゲールは報告書をまとめていた。

例えば修学旅行の担当を任されていたとしても、緊急治療のいる患者はいくらでもいる。任務が重複するとしても彼女は「殺してでも救う」ことこそが存在意義だと思っ

ている。報告書というよりは診断書に近いが、適切な対応が行えるように事務的なことも彼女自身がしなければならぬことの1つだ。

深夜もカルデアは稼働し続けているが、子供達が泊まり込んでいる場所は消灯済みである。

ナイチンゲールは昨日のように寝付けない子供たちがいないか見回りに行くことにした。

良い気分転換という意味でも。

その日の夕飯には再度調整したあの薬を入れてあることはロリンちゃんから聞き及んでいた。というのも性交渉というのは大変体力を使うので、授業後子供達はぐっ

りしていい流様子でそれを見かねて入れたのである。

ナイチンゲールは子供部屋の1つに行くと、子供達を起こさないようにできる限り音を消す。こういう時はアサシンのクラスだと良かったかもしれないと思った。

子供達は栄養剤を摂取したとはいえ、やはり疲れているのかぐっすりと思っていた。

ナイチンゲールは苦笑して部屋を後にする。

5部屋ほど回った後、最後の部屋をみようとして廊下を歩いているとお手洗いの電気がついていることに気づく。

（警備員さんが消したと言っていたはずですが。）

ナイチンゲールは一応警戒しながらトイレに入ると男子トイレの洗面台にクラウスがいることに気づく。

「もし……、何をしていますっしやるのですか？」

驚かさなないように声を細めて手を洗っているクラウスに話しかける。クラウスは声をあげなかったものの大変驚いた様子でナイチンゲールを見やる。

「あつごつごめんなさい。」

「いえ謝らなくとも良いです。さあ部屋に戻りましょう。」

夜にお手洗いにいくことなど別段珍しくはない。

ナイチンゲールはクラウスに近づく。

しかしクラウスの手を取ろうとすると、途端に鼻に異臭が注ぎ込まれた。

(これは……………)

ナイチンゲールの察するとおりクラウスも彼女の反応で気づかれたと悟ったようだった。

「その……………ちんちんが……………」

恥ずかしそうに、そして申し訳なきそうにしながら彼はもじもじとする。ナイチンゲールはクラウスの寝間着のズボンに目を向けると股間は大きく盛り上がり、ピシヤピシヤに濡れていた。それは女性のような分泌液ではない明らかに白濁液だった。

最初、自分でトイレで処理していたのかと思つたが、すつとスポンを下ろすとゆつくりとだが尿道から精液が漏れ出していた。

(……………これは？ 射精をずつとしているということでしょうか?)

「大丈夫ですか?」

正直そんな症状は聞いたことがないが、未知の薬を投与しているのだから何か変化が起きていてもおかしくはない。しかし常に射精し続けているのであれば恐ろしいほどの快楽であるはずだ。正気でいられるのだろうか?

「ちんちんに違和感を感じるけど、痛くはつ……………ふう……………ない。」

一安心。

しかし見るからにクラウスは息が荒く、苦しそうだ。このまま寝かせるのはどう考えてもおかしい。ナイチンゲールはできるだけハンカチやタオルでクラウスのペニスを包み込んでナイチンゲールの自室まで連れて行く。

途中でタオルとハンカチは完全に精液を吸いきって、溢れ出し、廊下に漏れ出す。

あとで拭くとして、部屋まで案内した後にパンツの中のタオルとハンカチを回収してビニール袋に詰める。

クラウスのペニスは未だピクピクと動いて尿道からトロトロと精液を溢れさせていた。

ベッドに座るようになってからふと、服が汚れるのを避けるためにナイチンゲールは裸になる。

クラウスの服を脱がせて下腹部を確認する。

（特に体におかしなところはりませんね。ただ股間以外という意味ですが。）

クラウスのペニスは完全に勃起しており、そして何より今気づいたのが睾丸だった。昼に見た彼の睾丸の2回りも大きく肥大化しており、ガンを疑ったがこんな短時間で疾患が現れることはありえない。

「もしかすると、クラウスは精子を大量に生産しているのかもしれませんが。」

「そつそれじゃあ………どーすれば？」

この世の終わりみたいな顔をする。

ナイチンゲールは彼のペニスに触れ、彼女のベッドをすでにでろでろにしている精液で滑らせながらしごき上げる。

「生産量を上回る射精をさせます。一種の賭けですが。」

そのままコンドームを装着して手淫と口淫を織り交ぜて射精に導く。溢れるほどに精子が生産されているのだからすぐに射精を迎えてしまう。もちろん実はナイチンゲールの的確な刺激のせいでもあるのだが。

「はあっつでつるー！」

「遠慮せず何度でもイってください。」

すでに4回の射精を迎えてコンドームは大きく膨れ上がる。

(一回の射精で20mlほどを4回………生産されるのは良いとして、供給はどこから?)

ナイチンゲールはとりあえずコンドーム一つにつき5回射精させることにする。幸い部屋には予備の5個入りの箱があと3箱ある。

ナイチンゲールはそのまま医療用手袋を装着して左手で昼のエドにやったようにクラウスにも前立腺への刺激を開始し始める。目に見えて射精量が増えるが根気よく続けることには長けている彼女だ。

意識を取り戻したのはいつ頃だったか、スカサハは体を起こすと、見知らぬ部屋にいることに気づいた。一瞬カルデアかと錯覚したがどう考えても民族的な家だった。

最先端技術のかけらもない土壁で、体は綺麗に吹かれている。体には黄ばんではいるが清潔なタオルがかけられていた。

ドアがゆつくりと開く。

警戒して槍を探すと部屋の隅に立ってかけて合ったが、いかんせん体が動かず、気力が削がれる。やりづらいが徒手もできるので一旦構える。

ドアを開けた主は褐色の肌をしたアジア人女性だった。

声をかけてにこやかに笑いかけてくるので、話は通じないが敵意はないことを悟る。状況的に見れば助けた村の生き残りだろうか？

スカサハはつい、「ここはお前たちの村か？」と問うがすぐに言葉が通じなかったことに気づくが、

「ええ、貴女が元の村で倒れているのを戦士が見つけてここに連れてきたの。」  
とよくわからない言語で頭に直接声が聞こえるように話しかけてくる。

突然のことで驚くが、この感覚をスカサハは知っている。

(カルデアで翻訳されるやり方にそっくりだな。)

ここに翻訳礼装はないはずである。

しかし実際に言葉が通ずるのは便利なので理由は後回しにする。

「ちよつとここで待ってて？村長を呼んでくる。」

アジア人女性性は微笑むと部屋を出ていった。

(とりあえず安心して良さそうか。)

スカサハは痛む腰で立ち上がってよたよたと歩きながら部屋の隅にある槍を掴む。

(あのスプリガンは消滅したのだろうか？)

自信を犯し尽くし、種子を植え付けてきた魔物。スカサハに嫌悪感はなかった。村人を無残に殺した怒りはあるが彼女の歴史からすれば珍しくはない。むしろ永遠とも言える人生で唯一性交渉……いや、交尾で任された相手に敬意すら感じる。

あいにくと「サーヴァント」なので「絶対」妊娠はしないが、あの雄の種子なら受け取っても良いと思ってしまうほどには完敗といった感じだった。

自嘲気味に笑っていると、部屋に何人か入ってくる。

若い男2人に、年老いた男1人、後ろに先ほどのアジア人女性。

若い男のうち1人は戦闘中にこちらを見ていた男だった。見覚えがある。

「礼を言わせてくれ。」

スカサハは意識のない中回収してくれたことに感謝する。

しかし村人たちは動揺して逆に感謝の言葉をたくさん述べていた。色々話し合つて結局のところお互いに助け合ったと言うことで丸く収まる。

しかしやけにスカサハは後ろの男2人からジロジロ見られていることに気付き、違和感を覚えた。すぐに答えはわかかったので良かったのだが。

今は魔力が枯渇状態で、霊衣もほぼない状態だ。

スカサハは大きな胸を存分に晒し、秘部すら隠すことなく胸をはって語っていたのだ。もちろん特に恥ずかしくはなかったが、相手が気まずいのであればとタオルを体にまく。

もつとも男たちが気にしていたのは下腹部が大きく膨らみ、下半身から時折垂れている琥珀色の液体がなんともいやらしく見えたからだだった。

スカサハの膣はあれほどの暴力的なピストンを受けたにもかかわらずしつかりと締まり、逆にその締まりのせいで子宮に大量に含まれた精液を止める結果となっていた。（そういえば……、けんきゆうぶ？というやつから精液を集めるとか任務があったな。）

それを思い出して、このままカルデアに戻るまで精液が残っていれば提出するのもや

ぶさかではなかった。なんせスカサハを討ちうるほどの強さを持ったスプリガンの種子だ。

価値は大いにあると彼女は満足げにうなづく。

スカサハは一応、アジア人女性に何か秘部を押さえつけるものはないかと聞いてひと段落した。

---

ナイチンゲールがクラウスの射精を手伝い始めて3時間。夜の帳は南極のカルデアをも包み込み静寂を作り出していった。

その静寂は一室から漏れ出る水音に邪魔され続けている。すでに三箱目の最後のコンドームになっていた。最後のコンドームは7回分溜め込んでいるが流石に限界そうだった。

(まさかこれほどとは………今から薬局に……いや、在庫は?)

薬局に行く間も精液を垂れ流し続けるのであれば、あまり意味はない。

クラウスはゼエゼエと苦しそうに呼吸をしているが、射精するたびに少し落ち着いているようだった。しかし異常なのはペニスだった。

クラウスの性器は別段年齢から見て平均的なサイズだ。しかしそれは「だった。」と言  
い切られる。

今現在の大きさは優に17cmを超え、太さも硬さも増すばかり。同年代の子の2倍  
以上のサイズにナイチンゲールは未恐ろしさを感じていた。

最初の子供らしきがあるツルツルのぴよこんと勃起した陰茎とはうって変わり、血管  
がもこつと浮き上がり浅黒く亀頭は濃い紫色のグロチンポとなっていた。

ナイチンゲールは未だ治らない常時写生に終止符を打つべく、最後の賭けに出る。

「クラウス、辛いでしようが最後の賭けです。私が良いというまで射精を我慢しな  
さい。」

「でっでもつずつと……出ちゃって……はあっ！」

「頑張つて我慢してください。死ぬ気でっ！」

鬼気迫るナイチンゲールにクラウスは無茶だと思いつつぐつと尻を締め上げてとに  
かく射精を止める。ゆっくりと溢れ出す精液は止まったのだが、クラウスはすでに限界  
に近い。

ナイチンゲールはそのままクラウスにガニ股でまたがると、

「射精を止めることだけを考えて集中してください。その間大好きな乳房を触つても  
良いからとにかく我慢してください。」

「はあえっ！わかつああっ！」

ナイチンゲールはすぐにペニスからパンパンに膨らんだコンドームを外し口を縛る。ベッドの足付近には精液でできた水風船が大量に転がっていた。

除菌シートで優しくクラウスのバキバキのちんぽを拭き取る。

綺麗にした状態でゆつくりと先をナイチンゲールの秘部に当て、腰をおろした。

クラウスの口から悲鳴とも思える嬌声が漏れ出す。

ナイチンゲールは予想外の硬さと大きさに一瞬はを食いしばるが膣を締め上げて腰を上下に動かす。

ばんっばんっ！ばちゅんっ！

部屋には肉と肉がぶつかる音が響き、クラウスは顔を真っ赤にしながら射精を我慢する。

「むっ無理だあ！無理っ！」

「頑張りなさい！」

無茶ぶりであるが、クラウスはきつく尿道を締め上げてなんとか射精をせずに我慢する。途中何度か限界が訪れて射精しそうになるが、ナイチンゲールがそれを見計らって腰の動きを止めてなんとか保っていた。

何十というピストンを経て、徐々に限界が近づく。

ナイチンゲールの狙いは、完全なる精液の排出だった。

精子はとめどなく生産され続けている。いくらコンドームをつけて手淫や口淫で射精させてもすぐに補填されてしまう。しかし完全に一発で精子を枯渇させればその反動で生産は元に戻るのではと考えたのだ。

正直理論もへったくれもないもうこれしか思いつかないという感じではある。

それでもナイチンゲールは目の前の患者を治療するまで続ける。

なんとかするのが医療だ。

クラウスの睾丸は射精されない事で、射精管を精液が逆流、生産され続ける事で精液がぶつかり合いどんどん尿道への圧力が高まる。

「む、無理無理無理い！もう無理！」

ナイチンゲールは本当に狂乱に陥りそうなクラウスを案じて、すぐに髪を止めていた紐をペニスの根元に巻きつける。

きゅっ

血液の循環が滞るのを無視して強く縛り上げる。クラウスは鈍痛で痛みを感じるがすでに尿道を占める力は抜けており快楽でどんどん上書きされていった。

腫れ上がったペニスがナイチンゲールの肉ひだと擦れ合って膨大な気持ち良さの拷問が始まる。





しかし幸い、一気に精液が放出された事で辜丸はしぼみ、ゆつくりとペニスも元のサイズに戻ってゆく。しばらくすると常に溢れ出ていた精液は止まっていた。

もちろん絶頂と同時に2人は意識を失ったので、下腹部が少し盛り上がった状態で朝を迎えたナイチンゲールが性器からカピカピになったクラウスのペニスを引き抜き、見て知ったのだが。

クラウスの寝顔は年相応で安らぎを得たような状態だった。

ナイチンゲールは朝起きて、膣から垂れてこない精液を肚を物理的に押す事でできる限り排出して、シャワーを浴び、できる限りクラウスを寝かすことに専念しつつ部屋を片付けた。

(はあ………ひどい目に会いましたね。)

クラウスの精液を提出ボックスに入れる。

精液は時間が経つと酸化して粘性を失うが、未だコンドームの中の精液はプルプルしており彼女は精子の生命力に驚かされる。

結局出発の30分前、ギリギリまで寝続けたクラウスは起きると顔を真っ赤にして泣き始めたのでナイチンゲールは頭を撫でて手を引いた。

皆遅れて集まったクラウスに訝しげな目を送るが、最後はセックスした中だという事で仲良く話しながら帰っていった。

# ダウン・スタリオンの苦惱1（アルトリア（ランサー）非 Sex）

ランサー・アルトリアIIペンドラゴンは昼休憩をとっていた。

その日は休日だったので藤丸がカルデアにいる日であり、歴史の授業の課題との戦いを食堂で繰り広げていた。

幸い、3桁にもなるサーヴァントを従えているマスターなので実際の人物がいることが多く大変助かってはいたのだが、この場にはいないサーヴァントも多いためにインターネットや本を使って課題を進めているようだった。

彼女が率先的にマスターに話しかけることはほとんどない。もちろん用事などがあれば別だが彼の周りはいいつも女性だらけで自分が行くことで彼の負担が増えることは避けたい気持ちだった。

「アルトリアっ！」

食堂の端で大量の食事を取りつつ、食器を片付けようとしたところで藤丸から声がかかる。なにやらアーサー王伝説について少し聞きたい様子だった。

本来であればセイバーのアルトリアに聞くべきところではあると思つたが彼女はあいにく山形県芋煮大会に足を運んでおりこの場にはいなかった。

自身が役に立つかは不明だったが、マスターの要望とあればできる限りのことはしようとして食器を片付けて彼の横に行く。

藤丸の横にはマシユ、清姫、燕青、エリザベート、マルタ、頼光がおり各々会話しつつも彼の近くから遠ざかることはない。

「……の……と……なん……だけ……ど……」

A4用紙に細かい字が記載されていてアルトリアは前かがみに前へ出て問題文や内容を見る。

答えられるところ、わからないところなどいくつかあるし、なぜこんな問題かと馬鹿げてる部分もあるが現代の教師にそこまで求めて意味はないのはわかる。

順々に藤丸へ丁寧な説明を展開し始めた。

藤丸は今日一落ち着きがない瞬間を迎えていた。

(えっでつか!?!………でかい(確信))

藤丸が見たのは顔の横に垂れ下がった乳袋。

その大きさやたるや藤丸の頭部を超えて、重さで壺衣が弾けそうであった。もちろん

絶対にバレないようにしつつも股間に血が集まるのを感じながらほのかに香るいい匂いを堪能していた立香だった。

「〜ので、そう言ったと言われていきます。」

1つの解説を終えて、藤丸の方をみると彼は顔を真っ赤にしてもじもじとしていた。理由はわからないが体調が悪いわけではなさそうなので放っておくことにする。

「あつうん。そつそうなんだ！」

変な反応をして心ここに在らずのような態度に苦笑して、立香が次の問題で最後だからと指し示した。

問題を見るとアルトリアは少し苦い顔になった。

それは意図的ではない、正史に、つまりアーサー王伝説には当然語られていない部分も多くある。その中であまりおおっぴらに言いたくないことだって幾つもあった。

(そういえば……………)

と、少し物思いに耽り始めるアルトリア。

彼女がなにを思い出したのかといえ、ある一戦でのことだった。

厳しい戦いに勝利し、勝ち鬨をあげたもののその声に応えるものはなく、あたりには散っていった兵士たち。戦争で生き残っても帰る家がなくなつた兵士。

そして継戦して休む間もない戦時中の記憶。

――

「……………敵は？」

「はい、予想の10倍はいます。ぜつ絶望的状况ですつ。」

報告に上がった偵察から帰った兵士は顔を青くしながらアルトリアに報告する。膝は震え上がっており膝をつかせていることに申し訳なく思う。

本来円卓の騎士の1人に任せるべきところをわざわざアルトリアが出てきた。

その時に運悪く挟み撃ちにあってしまう。

「……………下がれ。」

「はっー！」

仮の拠点でテントから部下を出す。と同時にため息がこぼれ落ちた。

士気の低下が著しい。明日適と相對する。

その不安は明確にアルトリアにも伝わっていた。だからと言って逃げるわけにはいかないし逃げ場もない。

その日とはとにかく英気を養ってもらうしかなかった。

しばらくして夜も更けた頃、アルトリアは催したので仮設されたトイレにたった。

満月の美しい夜空、あたりは鈴虫の羽の音が心地よい音色で響いていた。

しばらく歩いていると声が聞こえる。

木陰に隠れ、敵襲、闇討ちを警戒するが自軍の兵士たちだった。なんでもあした死ぬかもしれないと悟り、隠し持っていた酒を数人で飲み愚痴をこぼしているようだった。

アルトリアは一瞬それでも騎士道かと憤るが、同時に仕方なさも感じてしまう。

「俺やお……………3日後に結婚する予定だったんだよ。」

「それは……………きついな。」

「婚前交渉は不純だとかで全然やらせてもらえなかつたけどよ。今はとにかく、会い  
てえ。」

「……………明日、死ぬよな?」

「……………あの騎士様だつて深刻な顔してた。無理だろ。」

絶望的な状況にやけを起こしている。酒の力もあるだろうが。

アルトリアは木陰からゆつくりと出ると、兵士たちは近くの武器を取り彼女に向けるが、上司だと気づくと途端に顔を青ざめる。

酒を持ち込み、飲み明かし、あまつさえ上司に武器を向ける。

「落ち着きなさい、咎めはしません。」

その言葉が真実かはもはやどうでもよく、精神的に疲れ果てた兵士達は立ち尽くす。

「きつ騎士様!」

微妙な空気を壊したのはこの場で一番従軍歴が短い若い男だった。

目はもはや正気ではない。

「騎士様かどうか！抱かせてください！」

何をいつているんだと、他の兵士すら目を見開き思考停止にすら陥りそうだった。

アルトリアも流石にそんなことを言われるとも思っていなかったのだからとすると。

しかし同時に彼女自身焼きが回っているのか、それとも地震の不甲斐なさに罪悪感を感じているのか、自然と怒りはわかかなかった。

「もつもう2週間だつ射精してなくてえあつあのつ頭がおかしくつ！」

「すすみませんこいつあまだ分をわかっちゃねえガキでしてすすみません！」

若い兵士の先輩が彼の頭を掴んで一緒に跪き謝罪する。

騎士に逆らえば反逆罪は免れない。

しかしアルトリアはその謝罪にしばらく反応することなく黙っていたのだが必死になつて謝る3人を見て、ため息をつき、

「……………いいでしょう。性器を出しなさい。」

そこからは、もはや愚かしさと腹立たしきで嫌になる。

兵士たちは許可がなぜ出たのかなど考えることもなく決壊し、アルトリアを組み敷いて己が剛直を取り出す。長らく湯浴みをしていない男性器は汗臭さと雄臭さを内包し

アルトリアはむせ返るが許可を出したのは自分なので嫌悪することはなかった。

下腹部の装備だけ外し、男を受け入れる。3人を同時に相手をするのは骨が折れたが、騎士としてそのくらいの体力と根気はあった。

中でも一番大変だったのは一番若い男で、2週間貯め続けた濃厚な精液と精力でアルトリアを失神まで何度も導いていた。

アルトリアがなぜその記憶を忌まわしいと思っっているのかと思えば、結局あれは一夜の過ちのようなもので己の精神の弱さを露呈させた瞬間であつたからだ。

民を守る騎士が男根に善がる姿は客観的に言つてアルトリアには許し難かつた。

もちろん今は藤丸と出会い旅をして思考が柔軟になつたので、ああいうことも受け入れることはできた。しかし苦い思い出はいつになつても嫌なのだ。

――

そしてこの「彼の生涯で一番己自身に恥ずかしいと思わせた状況を想像してみよ。」という問題を作つた教師は半ばボコボコにしてもいいのではないかと思つてしまう。

長考に入つたアルトリアに訝しげな視線を送る立香は、「大丈夫？」と声をかける。

「えっええ、いくつかありますが、問題は想像してみよなのでマスターが想像して描くのが一番かと思います。」

「そうだよなあ。……………ありがとう。」

立香はアルトリアにお礼を言うと、その問題は後回しにしてまた他のサーヴァントを呼び始める。彼女は役目は終えたと食堂を出ることにした。

食堂を出る際に1人の女性から声をかけられる。

「すみません。」

「……………なんででしょう?」

「お願いしたいことがあるのですが、場所を変えて歩きながらでも?」

「……………いいでしょう。」

アルトリアは首肯して女性スタッフについていった。

少しして食堂から完全に離れたところで口を開き始める。

「カルデアは現在あらゆる人理破壊に対処するために様々なデータを収集しています。」  
「その対象にはサーヴァントしかり、魔力で生み出された生き物も適用されています。しかしながら私たち通常の人間では困難なことも多々あつて人手が足りていません。」  
「ほう。」

「なのでアルトリアさんにも色々手伝って欲しいことがあるのですがよろしいですか?」

アルトリアは女性の真剣な眼差しで頼む姿勢に好感を持ち、快諾する。

「それで、貴女のように召喚されたときに一緒に魔物や動物などを引き連れてくる人もいます。そういった方々にはその生物の指定された情報を提出して欲しいのです。」

「具体的には？」

「アルトリアさんの場合はダウン・スタリオンさんだと思いますが、唾液や尿、血液、それでこれが最も必要としているものなのですが精液をお願いしたいんです。」

「精液というところだけほんのりと恥ずかしそうに声をすぼめて言う女性スタッフにアルトリアは初々しさをを感じる。科学的なこと、魔術的なことでの研究はアルトリアのあずかり知らぬところだが、別段精液を集めろと言われて恥ずかしいと思うことはない。」

「もちろん自身の体液を出してくれと言われてれば恥ずかしいとは思いますが。もちろん必要に応じて提出はする気ではあるが。」

「そしてこの研究や実験はマスター藤丸立香さんには内密にお願いしたいんです。」  
とそこで少し違和感を覚える。

それを察したのかスタッフは補足する。

「はい、騎士王様に隠し事を強いるのは大変遺憾ですが、彼の性格からすると…。」  
と言われて察する。

確かに彼は優しく、それでいて思春期真っ只中の子供だ。目の前の成人女性でさえデリケートな問題だと恥ずかしがっているのだからできるだけ隠し通せるところは伏せるべきだと思う。

騎士の矜持や高潔な精神など等に散っている。先ほど食堂で思い出した記憶も意図的に隠したわけなのだから大したことはないだろう。

「わかりました。極秘任務了解です。」

「ありがとうございます！」

いつになっても感謝されることは喜ばしいことだ。

「きちんと報酬も出ますし、様々な特権も扱えるようになりバックアップもしつかりとされるのでよろしく願います！」

そう言うのと忙しいのか女性スタッフはアルトリアに「特注の端末です。」とタブレットを渡して。パタパタと走っていった。

アルトリアはイマイチ電子機器の使い方がわからなかったが、そう言うところに配慮されたUIになっており慣れれば簡単に扱えた。

(今日の任務は?)

カレンダーのアプリで確認すると翌日の深夜1時に指定の場所にドウン・スタリオンを連れて一緒にきて欲しいと記載があった。アルトリアは2時間前にアラームをセッ

トして自室へと戻った。

「ナイチンゲールう〜。」

藤丸立香は婦長の部屋の前までできてノックする。隣にはマシユが同伴していた。

室内から足音がして一拍遅れて「どなたですか？」と聞き返される。

「僕だよお〜。」

「……………どうぞ。」

自動ドアがシュツと音を立てて開くと彼女の質素で遊び気の無い部屋が視界に飛び込む。生活するための最低限の内装、カレンダーやテレビはあるようだが女性らしい小物などはなかった。

「ご用件は？」

「暇だったから遊びに来たんだ。お邪魔だった？」

「いえ、ただ後4時間後には任務があるので。」

「じゃあ少しお茶しようかな。」

「こんにちはナイチンゲールさん。」

マシユが挨拶した後、立香は台所に行きお茶を準備しようと動き出す。彼女の部屋は最近来ていなかったもののかなり前に何度かお邪魔しているので間取りも何がどこにあるかもある程度わかつてはいた。

「いえ、私がやります。客人をもてなすのは部屋の主人でしょう。」

そういつて立夏と交代して台所に行く。

立夏はその理論もよくわかるので甘えることにしてマシユと一緒にソファでくつろぐ。

そして立香はすることがないので部屋を見渡していると対岸のソファの下にあるものを見つけて驚愕する。

(あつあれつて!?!まさかつてっデイルドでは!?)

女性の部屋であればもしかすると珍しくはないかもしれない。しかし彼女がそれを持つているというのはなんとも想像できず、そしてソファの下に片付け忘れているというの珍しい。

紅茶を持って来たナイチンゲールに咄嗟に言つてしまう。

言いながら失言だと気づいてはいたものの男として言いたくなくなつてしまうのはまあ仕方のないことだつた。

「あつなつナイチンゲール!そつそれつ!」

「せっ先輩!」

マシユも立香が示した方を見て一瞬で察してしまい、そんなことをほんにの前で言っ  
てしまう立香に驚いて、小声で「そこは気づかないふりをつ!」と注意する。

「……ああ、すみません。」

ナイチンゲールは特に気にした様子もなくソファの下に転がっているデイルドを掴  
んでとる。照明の下に出された張り型は鮮明に立香とマシユの目に焼き付いた。

30cmはあるのではないかというほどの長さ、太さ4cmほどで、竿部分は引つか  
かりが列をなして腔壁をえぐるような形になっており、血管のようなうねりが無数に表  
面に這っていた。深緑色から先端へ青くグラデーションを交えて変わって行く色彩。

まさにジョークグッズという見た目をしていた。

付け根は吸盤になっており大きな膨らみが鞞丸をあらわしている。

どう考えても人外の形をしたデイルドは根元から透明なカテーテルを伸ばしており、  
挿入中に擬似射精させることも可能な一品だとマシユは判断した。

「以前ある理由で性を拡張しようと思ひ、ダ・ヴィンチ女史に製作してもらったのはい  
いのですが、数度使っても全く私の性は緩むことがなく、結局断念して洗うことも忘  
れて放置してましたね。もしかするとバーサーカーは筋力の補正でもあるのかもしれ  
ません。」

洗っていないので乾いてはいるがナイチンゲールの膻分泌液がついていることに気づいて立香はズボンを張らせた。

マシユももじもじとしてどこか居心地が悪そうだ。

「滅菌処理して捨てようかと思っただけですが使えますか？」

ナイチンゲールは飄々とマシユに提案する。

話を急に振られて首をブンブンと振って拒否をするマシユ。

そこからデイルドをナイチンゲールは浴室に一旦置きに行く。

「……なっなんだかすっごいことを聞いちゃったよ。」

「はい……あんな大きい……ナイチンゲールさんもスるんですね……。」

2人は小さな声でこそそこそと話すが顔を真っ赤にしたマシユを見て立香は初々しきを感じ、さらに己が息子を硬くした。

もらった紅茶が冷めるといけないと思い、ミルクを入れて砂糖をスティック状の包装を破いて入れた。

ゴミを捨てる際に近くのゴミ箱に入れようとした瞬間、

「(まっマシユ!)」

小声でマシユに詰め寄る。

急に近く々に立香の顔がきて戸惑うが、一緒にゴミ箱を除くとそこには、0.01mと書かれた空箱が3箱入っていた。

「!!!?」

2人はその事実には驚いて後ろから来るナイチンゲールに気づくことはなかった。

「……………ああ、避妊具の箱ですか？先週色々あります。」

「(色々って何!?)」

2人は声を揃えて(声は出てない)叫んだ。

ドウン・スタリオンの苦悩2 (アルトリア (ランサー) +  
デオン)

緊急時には迅速に返すということを条件にドウン・スタリオンを研究施設に預けておおよそ2週間。時たま様子を見に行くと言気そうだった。

話を持ちかけられたその日の任務は正式な部屋での講習だった。

また、新たな情報としてジャンヌダルクの件も頭に入れておいて欲しいとのことだった。正直信じられないとアルトリアは思ってはいるのだが頭の片隅には置いておくこととする。

アルトリアは部屋に戻ると冷蔵庫から酒を取り出した。

甲冑を解き、ベッドにだらしなくしなだれかかりながらビールをあおいだ。

片手には以前もらったタブレットで動画サイトの配信チャックする。

コメント欄には配信者に媚び諂った言葉が飛び交い、スーパーチャットなどお金をいくらか受け取っているのが見えた。

「いふいふ……。」

配信者がロデオマシーンで遊んで転げ落ちるのを見て不覚にも笑みが溢れてしまった。口から少しビールが垂れてしまつて、Tシャツの裾で拭う。

しばらく配信を見て楽しんでいると、LINEからの通知でバナナに「今から行つてもいい？」と立香からメッセージが飛んで来た。

急いで飛び起きて、乱れた髪を整え、LINEを開いて返事をする。「はい、歓迎いたします。」そう返信したものの、部屋は下着を脱ぎ散らかし、ゴミ箱はティッシュだらけ、空のペットボトルと空き缶が散乱している。

急いで換気扇を回して、ゴミ袋を展開。

仕分けなどしている余裕はない。パンパンな袋はクローゼットに投げ入れる。

床や机にこぼしたままのビールが固まっているのを発見し、急いで部屋中の汚れをタオルで拭き取る。

仕上げにファブリーズとやらを散布して思わずため息をはいた。

ピロン！と軽快な音が鳴り響く。

タブレットを確認すると「後5分くらい。」と来たので未読無視して、換気扇を止め、シーツを新しいものへと変える。

着替えている時間はない。

何度かTシャツで拭いたため少しアルコールの臭いがする。着替えを取り出そうとクローゼットを開けるとゴミ袋を入れていたことを思い出し舌打ちをした。

アルトリアはそのまま霊衣を発動して甲冑を顕現させた。

なんとかそれで外見はごまかせる。

ビー！と電子音が部屋で木霊する。

「はいっどうぞでー！」

そう飛び上がりながら言うと言身のマスターである立香が扉の前で立っていた。隣には当然のようにマシユがいるがいつものことなので気にしない。

ただにおいてに敏感な年頃の女の子にビールを飲んでいた事がバレるのでは？と一抹の不安はある。

「これ、日本の有名なお菓子屋さんで売ってるケーキ。」

立香が差し出した白い箱を受け取るといい匂いがあたりを包んだ。

中は白いクリームがふわふわなスポンジを包み込み、赤い果実が鮮やかに配置され、一種の芸術のような見た目をしている。

アルトリアはお礼と疑問を口にするが、

「この間の問題、先生が高評価をつけてくれて。アルトリアのおかげだよ。」

そうはつきりと目を見られながら言われると少し恥ずかしいものがある。騎士王と

して感謝の言葉は有り余るほどもらっていたもので慣れて入るのだが、対面して同じ視線で感謝とプレゼントをもらうとなんともくるものがあつた。

未だドア越しで喋るのもなんなので3人で一緒に食べましょうと部屋へ向かい入れた。

正直どこか優雅な場所でお茶をしたいがそうもいかない。

「アルトリアはどこか出かける感じだったの？」

そう聞かれるのも無理はないと思つた。

自室でガチガチの甲冑姿をしていれば当然だ。

「いえ、ただ今服を洗濯に出しておりました。」

「そつか、まあ鎧でも服でも関係ないよね。さあ食べよう。」

「アルトリアがいれば万事おつけー」と、つぶやく己がマスターに「こういうところが人氣の秘訣でしょうか？」と周りの女性サーヴァントたちの恋心に同情するアルトリア。

キッチンから金色の装飾が施された食器を3人分セットで持つてくる。

埃が被つているので洗つて綺麗に吹いてからだ。

1人の時にこんな食器など使うこともなく、100均で売つていそうな安価な皿を普段から使つているためか管理不足が伺えた。

「アルトリアさんらしい綺麗な食器ですね。」

「そつそうですか？それは良かった。」

内心、焦るところはあるが最近だれてきた自分を律するべきだな改めて理解した彼女だった。

しばらくして紅茶とケーキを食べ、3人でホールケーキを平らげてからはしばらく談笑していた。

汚れた食器を洗いながらアルトリアはバレないように小さなゲップをし、

「そうですね、あの頃は色々大変でした。しかし円卓の騎士たちが皆頑張ってくれたおかげで取り越えられたことは多いと今でも思います。」

「へえー。まあ色々すれ違いがあったとはいえ騎士つてのは強いんだね。」

「ええ。………：そういえばマスターは学舎の方はどうなのですか？」

アルトリアは思い出したように食器についた泡を洗い落としながら聞く。

「うーん、楽しいよ。どこか長閑で、クラスメイトも年齢の差を気を使ってくれて。」

「日本の若者は優しいのですね。」

「一概にそうとも言い切れないけど、良いも悪いも生きてるって良いなって思っ、さ。」

立香が少し含みのある言い方をしたことにアルトリアもマシユも気づいてはいる。

そもそもここに立っている事は異聞帯を切り、本来の人理を取り戻したことにある。

言ってしまうえば立香は目の前で多くの死を見続けて、多くの命を「なかつたこと」にしたのだ。そんな経験をした若人が高校に通っていて価値観の違いに影響が出ないわけがない。

「そうですね、マスターはもつと我欲を出したほうがいいのかもしれない。」

「我欲？」

「はい、せっかく人理を取り戻したのです。少々無理で無遠慮で冒瀆的な願い事をしてもバチは当たりませんよ。」

「……………騎士王がそんなこと言っちゃっていいの？」

少し苦笑いしながら立香は微笑んだ。

立香だって立派な一人の人間で我欲はある。

（僕は我欲を隠すのが上手いだけなのかもしれない。）

そう立香は思った。

例えば、立香は3日に1回自慰をしている。戦闘続きで緊迫している状況に関わらずともに肩を並べて戦った女性サーヴァントをおかずに吐精している。

それは列記とした我欲であるし、例えばお金がないけどあの雑誌が欲しいとか、街ですれ違った女の子の胸の大きさを想像したり、それこそ普通にいる10代の男の子の思

考となんら変わりはない。

だからこそ、多くの女性サーヴァントから言い寄られても靡かないのは罪悪感のようなものを感じているというのもある。

「マスターは私のことを真剣に考えてくれるから好きです。」とはつきり言われても、「いえ昨日貴女が僕のちんこで善がる姿を想像して射精しました!」と思ってしまう。

「そうですね。実はこれは秘匿しておこうというので決定したことがあるのですが、あくまで独り言ですよ?」

アルトリアは食器を片付け、手を洗う。

「以前サーヴァントたちで作ったグループで話し合ったことなのですが、曰くサーヴァントたちは貴方「藤丸立香」を認めたからこそついてきているわけです。であれば貴方が多少人道的、道徳的に間違った行いをしてもそれを尊重するべきであるという意見に達しました。」

「それはどういうことですか?」

マシユが疑問符を浮かべた顔で紅茶を口に含む。

「つまりは、マスターが何をして拒否をしない………「なんでもするよ?」的帰結になりました。」

「なななっとななっなんでも!？」

「はい。」

立香がベッドのスプリングを使って1mほど飛び上がる。

まあ健全な男性が女性に言っただけでほしいベストワードではある。そして当然立香にとつて最初に想像するのは「脱童貞」である。

結局のところその話は「善属性のサーヴアクトでもマスターの意思なら悪を許容できるか？」という哲学的議論に発展していったのではあるが。

「まあ、なのでもう少しわがままになってもいいんですよ。」

「まっまあ覚えとくよははは。」

「せっ先輩はもつと私を頼ってもつ」

一瞬暴走しそうになったマシユが顔を真っ赤にするが、アラームが部屋に鳴って、部屋の空気がふわふわしたものからいつもの平常へと変わった。

「ああ、すみません私のですね。」

アルトリアはベッドに置いて充電してあるタブレットに目を通す。

アラームはやはり任務の事前通達で今日の夜に研究施設にきてほしいとのことだった。

アルトリアはこの日常という光景がひどく気に入ってはいるのだがそれを終わらせ

ないといけないことに少し残念さを感じて2人に振り返る。

「申し訳ありませんが用事ができたので色々準備しようと思えます。」

「そっか?何か大変なことか?」

とつきに「いえ、研究施設へ行かねば。」と答えそうになるが当然守秘義務がある。騎士の誓いは破れない。

アルトリアはなんとか適当な理由をつけることにする。

「いえ、けつ……結構いい感じの男性に会いに行かないとけないので。」

いい感じの男性ってなんだそれは、とアルトリアは額から汗を垂らす。

もちろんドウン・スタリオンの事なので健康的な(いい感じの)雄馬(≡男性)を言い換えたのだがとつきなことに変な言い回しになってしまった。

当然「ふーん。」とはならない。

(ふあっ!?おっお男!?アルトリアがっ!?僕以外の男!?スタッフか!?)

と内心恐ろしいほど動揺する立香だったのだが外面には出さず、

「そっか、楽しんできてね。」

と爽やかなスマイルを繰り出していた。ここではつきりと動揺を示していればそれなりにアルトリアも勘違いに気づいて訂正するなり、恥ずかしがったりしてもう少し仲良く慣れた可能性はあるのだが。童貞チキンのクソ餓鬼には無理でした。

立香とマシユは準備がある、言外に「申し訳ないがご退室願えるか？」とのことと悟つて速やかに部屋を後にした。もちろんアルトリアは申し訳なさそうな顔をおしながらわざわざお礼とケーキをご馳走になってと感謝の意を示していた。

「ふう……………」

アルトリアは霊衣を解いて先ほどの少し汚れたTシャツ姿に戻る。

あつと声を漏らして棚の上に引つかかったパンツを見て「やつべ。」と思うが、立香たちが気づいた様子は見れなかったので胸をなでおろす。

下着を取り洗濯機に投げ入れて、冷蔵庫の中の飲みかけのビールを口に含む。

「……………しゅわしゅわ、抜けちゃいましたね。」

彼女は少ししよんぼりとした。

退室した2人。

「アルトリアさんやはり気品あるいいことを言ってくれますね。」

「うっうん。」

（正直入室した瞬間にパンツが棚の上に引つかかっていることに気づいてそれどころじゃなかった。）

立香は隣のマシユににこやかに笑いつつ、

「そっか、じゃあマシユにお願いがあるんだけど。」

「はい！何なりと！なんでも！」

「えっ今何でもするって言ったよね？」

そんな風に2人で交互に笑いながら談笑している姿を見て通りかかった黒ひげは

「えーなんですかそのリア充っぷりいー。拙者ジエラシー感じますぞ。」

「帰って後輩モノエロゲしよーつと。確かT o H e a r tの松原葵さんは後輩として攻

略対象だったはず。デユフフ。」

『これより再度、耐久実験を始めます。』

電子音声が白い部屋で響き渡る。

金属の器具で固定された場所にぐったりと拘束されたデオンが居た。

口のポールギヤグからは大量によだれをこぼしており耳まで真つ赤だった。彼の体の柔らかさが見て取れるように大きく並行にまで開かれた脚部。まるで感じて言うところの「土」の状態でデオンは下腹部からくる鈍痛に耐えていた。

彼の股間の少し下にはゴムで覆われた金属のハンマーのようなものが備えられた。  
カチンツツ！という音が鳴り響く。

デオンは薄れゆく意識そのトラウマとも言える音を聞き、今自分が最大限できる抵抗。痛みに備えることを強くする。

ばんつ！

!!!

部屋にまるでヘラクレスが地面を蹴り上げたかのような大きな音が響き渡った。

デオンの普段の可愛らしいスタイル、声音とは思えない野太い絶叫が鳴り響く。

彼の股間にぶら下がった500円玉ほどの大きさの睾丸は下から勢いよく打ち上がってきたハンマーに押しつぶされ、悲鳴を上げる。

デオンは下腹部から一拍遅れてくる鈍痛と、睾丸そのものからくる激痛で目を白黒させ口から胃液を垂れ流す。

『これより愛撫を開始します。』

機械的な音声とともにドロドロの粘液を吐き出し続けるオナホルのような器具がデオンのガチガチに勃起したペニスに覆いかぶさる。

何の抵抗もなく亀頭が飲み込まれいやらしい音とともにピストン運動が開始された。

!!

!

あまりの刺激の強さに幾度となく絶頂に至るが、尿道口から白濁液は出ない。

彼はすでにその日ありえないほどに射精をさせられており、もはや供給が追いつかない状況にあった。

5度ほど空撃ちさせられて絶頂し続けたペニスは本来柔らかくなつてうんともすんとも言わないはず。しかし、

そうこれだ。とデオンは目を見開く。

下から上がってくる注射器には青い半透明な液体が入っている。

注射器の先端が睾丸へ突き立てられ中身が注入される。

最初こそ痛みを感じていたのだが、もはや注射の痛みより半分潰れかかった痛さの方が何十倍も痛かった。

注射器の中身は8mlほどだが、その全部が本来5mlほどしか容量のない精巢に注入されている。実は今ほどデオンの睾丸は大きくなく、実験が開始された頃は1円玉サイズではあった。それが数度の実験でここまで大きくなっている。しかも中は液体で埋まっているわけではなく睾丸自体が大きく急速に成長しているのだ。

そしてこの注射器のせいでおそらくバキバキに勃起しているのではないかとデオンは考えていた。実際正しい。

6度目のピストンが開始され、すぐに絶頂へと達する。

(まったくイくつイっ!!?)

6度目の絶頂を迎える瞬間股間にハンマーが打ち付けられる。過去最大の強さで。今まで睾丸への刺激は全て『耐久実験を始めます。』で統一されていた。それが不意打ちするように突然絶頂と同時に起こった。

デオンは白目をむく。

右の鼻の穴から血を垂れ流して、固定されているにも関わらず腰を大きく上に飛ばし体をえびぞりにしながら射精した。

最初の頃の2、3m程度程度の射精ではない。

500mlペットボトルが何本も満杯になるかのような精液を放出する。

実を言うと精液は空になっていたわけではない。薬で大量に生産させられ、しかし射精管に行く前で塞ぎ止められていた。

睾丸への強い打撃と、今までのツケが一気に解放されて爆発的な射精を迎えた。

ガクガクと体を痙攣して失神したデオンは口から泡を吹き出す。

『対象の射精を確認。実験終了。』

部屋に響いた音声を確認できるものはどこにもいなかった。

アルトリアが時間になり、研究施設に着くと、電光掲示板らしきものに行先が表示されていた。すでにドウン・スタリオンはその場所にいるらしくアルトリアは足早に進む。

彼女の服装は第3再臨にマントと武器を取った姿だ。

彼女の大きくこぼれ落ちそうな乳房にすれ違う男性職員が目を奪われる。

そんなことを気にする事なく部屋にたどり着き入室する。

白く大きな部屋、床は弾力のある仕様。

部屋の中にはドウン・スタリオンが佇んでいた。

「元気にしてるか？」

軽く嘸くことで返事をする愛馬にアルトリアは満足する。

ビーツと電子音が部屋に鳴り響く。

『これより第3回搾精データ収集を開始してください。詳細は以下の通りです。他に何かあれば個人の判断で行動してください。』

・避妊具を使用して15リットルの精液を採取すること

・14リットルを超えた段階で次に移行します

・特定の薬物を使用します。ご理解、ご協力をお願いします（対象の安全は保障され  
ます）

アルトリアは内容を確認して少しダウン・スタリオンの顔色を伺う。しかし彼は特に  
気にすることもなくむしろ

「これから何始まるんです？いいですよー」というようにやる気を見せていた。

「さて、では始めます。」

アルトリアはそういうと屈んでダウン・スタリオンの下腹部に向かう。盛り上がった  
皮膚の集まった部分がありその場所をさわさわと触る。

とても柔らかく揉んでいて気持ちが良いがダウン・スタリオンはすぐにびくりと腰を  
震わせると普段の強かな嘸きをだす気高き雄馬とは異なる、弱々しい鳴き声を漏らす。

しばらく触れていると内側から弾力のあるピンク色のホースがゆつくりと顔を出す。

アルトリアは初めてみるダウン・スタリオンの生殖器に驚くが、尿道口と思われる部  
分を人差し指で軽く撫で上げ先端をさする。

ぬろんっ

大きな嘸きとともに完全に飛び出た性器は縦に跳ね上がりアルトリアの顔にペチン  
と当たった。

(す……………いい臭いですね……………これほどは。)

「立派ですよ。」

アルトリアはそのまま完全に勃起したペニスを横目に箱を取り出す。

ドウン・スタリオン用特注のコンドーム。

(とても大きく……………太い。長さは80cmは降りませんね。ビクビクと震えていて……………)

ごくり、と唾液を飲み込んでコンドームの封を切り、先端にくつつける。

ドウン・スタリオンの生殖器は基本的な馬の性器と変わりはないが、大きさも太さも桁違いで熱く、木のようにガチガチに硬い。人間の男性器のように亀頭に相当する部分はないが、血管が太く浮き上がり尿道口を取り囲むように大きく盛り上がっている。

コンドームを取り付けるのも大変だったが意外とすんなりいけたのは尿道球腺液がすでにゴム先に溜まりに溜まっているからだった。

アルトリアは驚いてドウン・スタリオンをみると彼にはすでに品性のかけらもなく鼻息を荒くして己が化身から白き欲望を出したそうにうずうずとして様子だった。

アルトリアはそのまま服の隙間から豊満な白い乳房を取り出してペニスを挟み込む。

接触部分には粘液がついて水音が肺に響く。

(……………んなので感じますかね?)



を持っていたり、精液の量が多くとも歴戦の伝説の馬ならおかしくはなかった。

本来馬の精液はサラサラとしており、1mlあたり2500万の精子が存在する。しかしドウン・スタリオンの精液は質が桁違いに違う。

アルトリアが知る由もないことだが、この時の彼の1mlあたりの精子量は10億人間の10倍の精子量であった。

(具体的な精子の数……はわかりませんが……濃い。)

プルプルの精液がゴムをおきく膨らませ、アルトリアの顔にぶつかる。

「あつつい。」

その熱量たるやアルトリアは一瞬で目を持っていかれてしまう。

(こっこんなっ……多すぎる。)

ゆつくりとコンドームを外す。

パチンと外れて彼女の力で持ち上げるが、重い。

ずつしりとしたこってりザーメンは知らず知らずのうちにアルトリアの膣道や子宮を刺激し始める。

『ドウン・スタリオン射精量325ml……1mlあたり10億の精子。』

床から出てきた軽量台にコンドームを置くと具体的な数値を示されてアルトリアはびくりと体を震わせる。今の彼女を駆り立てている恐怖はメスとしての恐怖か、それと

も先の未来のアレか。

臀部を持ち上げ雄々しいペニスにいやらしく濡れそぼった秘部を向ける。

蛍光ピンクのコンドームは熱くはちきれんばかりの獣の性器をなんとか包み込む。

秘部に先端が触れるとあまりの硬さに陰核を刺激され、尿を漏らしそうになった。

(入るわけが……だが。)

今のアルトリアを支配している感覚は罪悪感も入っている。

ドウン・スタリオンと一緒に死線をくぐった相棒だ。家族といつてもいい。しかし生物として当然の繁殖を彼は行えず、一緒に戦いの中で散っていった。

男として、雄としてどれほど精を吐き出したかったのだろう。アルトリアがいたから雌馬など考えもしなかった。だから今こそアルトリアができることは彼を気持ち良くさせて精液を出させてあげることだ。

(入らないではない、いれっ!!?)

「……………おっほっ!!!!」

アルトリアが逡巡していることなど知らん、と言うようにドウン・スタリオンは一匹の雄としてすでに我を忘れて目の前の「雌」を犯そうとしていた。

アルトリアは騎士あるまじき嬌声をこぼし、腹を殴られたかと思ひながら痛みと、わ

ずかな気持ち良さに耐える。

ボチュッボチュッ！

遠慮などない野生的な腰の動かしはアルトリアの「女」を思い出させる。

暴力的に押しつぶされた子宮が熱を持ち、卵巣をじんわりと刺激。

アルトリアの秘部はだばだばと粘液を垂れ流しまるで涎のようだった。

「あつあ、あ、あつ！おっおっおっお、ほおっ！あおっ♡」

腹部は大きく盛り上がり子宮が移動して胃を押し上げる。

「お、っ！おぼりよっおげっろろっろろ……おろろっ！」

口から胃の内容物が飛び出る。

鼻をツーンと痛みが襲い、アルトリアはチョロッと漏らしてしまう。

口から溢れ出たのは白いドロドロの液体にぐちゃぐちゃになった赤い果実。その吐瀉物は最初こそ異臭を放っていたが、上からとめどなく溢れる液体で上書きされすぐに気にすることはなくなった。

びくんつとアルトリアが大きく跳ねて、

びしゅわっしやああああああつぷしやああ！！

と、潮を吹く。

「ほおっ！おおおっほ♡」

これほどにまで大きい絶頂は味わったことがない。

昔の怖がる兵士を鼓舞するために行った慰安。大乱交中に何度も絶頂をしたが潮を吹くことはなかった。

絶頂したことにより、筋力Bの腹圧がダウン・スタリオンの陰茎を締め上げる。雄馬の激しいピストンでつぶつぶの膣壁はまるでヤスリのように刺激し、恐ろしい快樂を男根に与えた。

ぶびゆるっぼびゆるびゆるびゆるっ!!ぼびゅっ!びゆるるっびゅう!!ぶびゅっ!

もはや噴火といていいほぼ固形の寒天ザーメンがコンドームを膨らます。

しかしきつくびゅちりと隙間のない膣内では行き場を失い、子宮口を無理やり押し広げ子宮内で膨らみ始める。

「はぎゅっ!」

愛馬の無慈悲ともいえる大量射精に絶頂状態から回復することもないままさらに子宮を押し上げられる圧迫感と異物感、おびただしい快樂情報で頭をガツンツ!と殴られる。

射精量はそこまではない(人に比べれば天と地ほど差はあるが。)にも関わらず長い写生が続くのは濃度が濃すぎて尿道で何度もつかえるからだ。

ぐびゅーっ!と音を聞く。

そんな射精を鼻水を垂らしながら意識を保ち続けるアルトリア。

(ぎっ騎士だっ！私ほっほおっ♡)

一通り射精を終えるとドウン・スタリオンは腰を引く。

しかし抜けない。

当然だ。ほぼ固形のザーメンがゴムを膨らませ子宮で栓をしているからだ。しかしバイコーンの時のように外れることはなかった。彼の男性器の付け根。馬特有の輪っか状の盛り上がりによろど口が引つかかるように設計されている。

そんなことはおかまいなしに強く引く抜く。

「まっまっ♡ふぎいっ!？」

ぶりゅん!!

無理やり子宮口を押し広げられ引き抜かれる馬ザーメン入りコンドームは破けることなくそのまま男性器に張り付く。

秘部がめくれないか心配で震える体を起こして確認するがピッタリと綺麗に閉じ涎を垂らし続けていた。

『ドウン・スタリオンの射精量363ml………1mlあたり1億の精子。』

(やっやはり……んっ♡……こっちのほーが)

びくんびくんと秘部をひくつかせながら、膣を使った搾精の方が量も質も良いことが

わかる。

アルトリアは再度コンドームを取った。

ドウン・スタリオンの苦悩3 (アルトリア (ランサー) + S)

「お願いだ!」

男の声はある倉庫の一室で鳴り響いた。

男と対面しているのは高身長な女性。いや女性サーヴァント。肌はこんがりと褐色で美しい張りのある美肌。頭にはクラゲのような飾りをつける。服装はイランを思わせる装飾。

「ですからお断りを……。」

「あつあんたを戦場に連れて行かないようにあのガキに口添えする!」

「……………」

「以前あいつを俺は助けたことがあるっ! その時の貸しを返せって言えばっ!」

「……………はあ、死にたくありませんしいでしょう。ただし。」

女がいった条件はゴムをつけ射精を1回だけすることだった。

男は快諾しすぐにズボンのベルトを緩め始める。

女は腰からコンドームを一つ取り出し、口にくわえる。男根の先端をそれに合わせて口淫しつつコンドームを取り付ける。

ぐっぽっ！ぐっぽっ！

コンドーム越しに弾力のある下が男の力を刺激して危うく射精しそうになる。

女は右手で竿の根元を抑えながら口淫を続けるが、左手で己が霊衣の黒い衣服を横にずらし秘部をいじる。すぐさま濡れ始めるのを感じ、自身の体に嫌気を感じる。

「まっストップっ！出るからっ！」

男がそういうのですが、口から性器を抜き去る。唾液でドロドロだ。

交換条件さえなければこれで射精へと導き一回分としたが、男が口添えすることで先に連れて行かれない可能性が増えるのであれば約束は守る。

霊衣の余りの白い布を床へ敷き、仰向けになる。

男はそのグチョグチョに濡れそぼった褐色の秘部に目をやり、まるで宝を見つけたかのような高ぶりを感じながら先端を肉に押し付ける。

重厚な柔肉を押し広げ、挿入される男の化身を彼女は嫌悪のある目で見つめる。

男とは昔からそういうものだどわかつているがそれでも嫌悪と同時に憎悪する。

「んっ……………」

この体になって何度か男と体を重ねたが、やはりなれるものではなく、サーヴァント

故か秘部は全盛期の頃のまま程よくきつく、名器のままだ。

男は敏感な場所を包み込むとろとろの女性器に早くも射精感を催すが必死にこの幸せを感じ取ろうと長引かせる。

静けさを保っていた倉庫には水音が鳴り響いて、荒い息がどこか不気味さを出していた。

「ふっ……ふっ……ふうっ……んうっ……。」

憎悪を持っていても快感を感じないわけではない。

これが愛した人ならどれだけ良かったのか。最もそんな者はいないが。

しばらく腰を動かしていた男は目の前の果実に目を奪われる。ぶつくりと膨れた唇に口を押し付け中に触手ごとき下をねじ込む。

両手は大きな2つのメロンにすでに吸い付いていた。

口から首筋へとしたでなめあげると目の前の女は「ひっ」とこぼす。それを満悦するが決して感じてのことではない。

彼女は昔の処女殺しの王を思い出して悲鳴をあげたのだ。

そしてその恐怖こそ思い切り柔らかかった臍肉を締め上げた。

「おあつでえっ!?!でるっでるでるでるっでるっ孕めっ!」

避妊具をしていることを忘れるくらいにつんぎく快樂が男を支配し、いつもの数倍濃

い精液がゴム越しとは言え彼女の秘境にぶちまけられる。

子宮口で膨らむゴムを感じ取り少しイキそうになったのを我慢しながら彼女は顔を背けた。男が男根を抜き去ると、5mlほどの精液を内包したゴムが先端にくっついたまま肉厚まんこから引き抜かれ愛液を垂らす。

「ふうっ最高だった。」

男はそういうと携帯端末を取り、写真をとる。

「何をっ!」

「へっこれをカルデアにばらまかれなくなければ……は?」

男が女を脅しながらスマホの写真フォルダをみようとすると、手が無い。

スマホごと手が消失していた。

あたりには鮮血が撒き散らされ、少し遠いところに肉塊と光を発する機器が転がっている。

「……殺す気はありませんでした。死にたくないのです。ですがあなたは……。」

キヤスターは非力だ。しかしサーヴァント対サーヴァントならの話でサーヴァント対人なら圧勝など当たり前。彼女は股間からとろりと愛液を垂れ流しながら大きな胸を揺らして、

「死んでください。」

「ふぐおっ♡」

強力な突きでS字結腸手前を殴打され、豚のような鳴き声を上げる。

括約筋が切れるのではと思われるほどに大きく開かれた肛門は雄馬の無慈悲なピストンで押し込まれる。

すぐに引き抜かれ括約筋付近の腸壁が引き摺り出されめくれ上がる。

そしてすぐにまた穿たれる。

膣道からではない、腸から子宮を何度も潰され小便を漏らしてしまふ。しかしそれでも愛馬が気持ちよくなるよう精一杯締め上げると、ドウン・スタリオンは大きく嘶いて一拍遅れた射精を腸内で果たす。

子宮のような狭いところではないので順調に膨らむゴムではあるが、それは人ならばの話で、膨らみすぎたゴムは大きく腸壁を押し広げ、そのままS字結腸を埋め尽くし、下行結腸をパンパンにした。

「お♡おほおおっ!?!おー!」

およそ普通に生きてきて、いや、たとえ戦場で戦うような苛烈さを極める人生を送ってきたとしてもそんな場所を押し広げられることなどない。そんな感覚に耐性のある者などいない。

アルトリアは白目をむいて崩れ落ちる。

『14リットルに到達しました。次に移行します。』

事務的な音声とは裏腹に、部屋の中の雄と雌は息を荒くしている。中でも雌はこれでもかと膣分泌液を垂れ流し、乳輪ごと大きく乳首を勃起させ、突っ伏しているのだからおかしな光景だ。

「ふぎいっー」

ゆっくりと抜かれる生殖器を感じながら、非常に大きな便を無理やり穿り出されているような感覚が絶頂状態にあるアルトリアに襲いかかる。

ぶりっ

ほかほかの精液が今ドームに包まれ、コンドームが腸液に包まれて体外に出された。

慣れた手つきでゴムをペニスから外し口を締めるが、電子音声などに意識を避けるはずもなく、床から出てきた注射器に目はいかない。

ダウン・スタリオンも絶頂の余韻に浸っており、睾丸に葉を打たれていることなど気

にも止めていなかった。

もちろん先の「ある実験」で痛みを感じないように設計され直したのだが、青い液体はドウン・スタリオンの精巢にちゃんと注入される。

その一部始終をぼーっと眺めていると、空気がかわった。

「なえっ?」

先ほどまですでに大きく太く、自然界の雄として最高の品質を持った男性器がより激しく脈動し、ひとまわりもふたまわりも大きくなったようなそんな錯覚を感じ取る。

実際、男根を包んでいた血管は2倍に浮き出て、硬度はさらに上がり、睾丸も肥大化していた。

ドウン・スタリオンの息は非常に荒い。

「だっ大丈夫でっ」

顔に突き出されたペニスは先ほどよりも熱く、次をねだっているかのよう鈴口からカウパーをドロドロと出し続ける。答えるようにコンドームをつけると、彼女の準備を今までちゃんと待っていた彼はアルトリアの秘部にあてがい思いつきり突き入れた。

「お、っ!」

部屋に汚い声が鳴り響き、パンつと弾ける。

それは人と人がセックスする時の太ももの音によく似ていたが、今回のそれは亀頭が

子宮口にぶつかり押しつぶし、中の微量な空気が一瞬で体外に排出された音だ。

アルトリアの鍛え疲れた腹直筋は今までなんとか耐えていたものの、貫かれ、腹は大きく盛り上がる。

今までのセックスはもはやスローセックスに見えるほどに早いピストン。

「ま、待っ♡ぎっ！」

あまりの大きさと力強さに膀胱は押しつぶされ、中に残っていた尿が強制的に出される。尿道に痛みを覚えるが血は出ていない。

「ひっひきゅうがっ!!♡こわっこわれっ♡おっ！」

徐々に早くなるピストン。

気付く余裕はないが、ダウン・スタリオンはとにかくこの股間のほとぼしりを解消し、たくて己が主人のことなどオナホとしか思わないほどに抜く。

ズツパンツ!!ズツパン!!

ドクンつと音がなり、ズクズクつと睾丸が収縮、莫大な量の精液、そしてダウン・スタリオンの特性「精液の濃さ」が合わさり、すでにみっちりとの隙間なく広がった秘部をさらに押し広げ尿道が太くなる。

「はっ!!」

子宮は性器で貫通されていないものの、子宮口手前で尿道が一旦膨らんで止まる。

(ぐるっーぐるぐるぐるっ!!?くるー!)

ぼっという音とともに決壊。

ぼりゆりゆりゆりゆりゆりゆっ!!ぼびゆるびゆるっびゆる!!ぶびゅーっ!!びゆる!

びゆるびゆるっ!!ぼびゅー

!!!!!!

!!!?

声にならない叫びとともに膣内は高温の精液で満たされる。コンドームで隔てられていなければ火傷したかもしれない。あまりの濃さと量に突き入れていたペニスごと逆流して体外に水圧で押し返され引き抜かれる。

ぶりっ!!

先端にはおびただしい量の精液が内包されたゴムが悲鳴をあげるかのようにバチンツとギリギリのところを竿から外れた。

しかし濃さゆえか口から溢れることはない。

そしてまだ終わらない。

未だぼとぼとと精液を垂らし続けるドウン・スタリオンは未だ暴れ馬のように足を鳴らし、失神しているアルトリアの秘部へ再度ガチガチの剛直を突き入れた。

「へえっ!!!だっだにをっ!!」

それに応えられるような理性など本当の雄には残っていない。  
わかつている。

すでに16リットルは出している精液は全て主人に届いていないことを。目の前の主人を、雌を孕ませたい一心で腰を突き動かす。

ぶちゅんつぶちゅんっ♡

幸いすでにドロドロにほぐれている性器は痛みなど生じさせなかった。心身状態で叩き起こされたアルトリアはコンドームを装着していないことにパニックになるが、そんなことどうでもいいだろ!?!と交尾を続けるダウン・スタリオンに感化され、なんとか意識を保ちながら口で否定し始める。

「わ、まって待てっ、ゴムをしてないぞっ!?!」

「おっぐ!?!♡こっんなの射精されたらっ!」

「雌馬をつあてがえなかったのはわるがっ!?!」

「貴公は勇敢でえっ!?!おっほ♡気品あるっ?」

そんな言い訳をしつつアルトリアはもう頭で考えることを放棄し始める。なるようになれ。何が騎士か。

そこには雌を受け入れた汗と涙と愛液とカウパーまみれの肉壺がいた。

大きく嘶くダウン・スタリオンは強く強く奥へ奥へと進み続ける。常時トロトロと精

液は出されているがそんなものは先ほどの余り汁だ。

ピストンが早くなつて一気に子宮を殴り潰されるアルトリア。

(くるっあれがっ♡)

先ほど同様に一拍遅れて尿道が膨らむ。メリメリと秘部が悲鳴をあげるがそんなことはどうでもよかつた。

「でるっでるのですか!? 射精せつ! 射精せつ! 孕むっ孕んでしまっつ!」

ぐびゆるっぼびゆるっびゆるびゆるっびゆりゅっ! ぼびゆるっびゆびゆーー  
びゆる! ぐびゆるっぼびゆるるるるるるるるる!! びゅうううううー!!  
びゅっ!

「ああああっあっ♡あお、お、お、おほおお、おお、♡………お♡」

ありえない量の射精を腹部で感じ取る。

勢いよく流れこむ馬の精液。

子宮口をいともたやすく通り越し、子宮を風船のように大きく膨らませる。

普通の女ならば子宮破裂で大惨事であることも、サーヴァントではそういかない。

大量の半固形寒天ザーメンはアルトリアの子宮を強姦し、あまりの多さに行き場をなくし逆流。

すでに本当に隙間なく埋まっている膣道をこじ開けて体外に弾ける。

ぶびいつぶりゅつぶぷつ

目は上へと裏返り、下をこれでもかと突き出しながら限界まで乳首と陰核を勃起させる。すでに先ほど強制排尿され膀胱に液体はないはずであるにも関わらず大量に潮を吹く。

子宮内で精液は未だ射精され続け、腹圧で卵管をこじ開け始める。

卵管采からはみ出し卵巣にぶち当たる。

アルトリアはもう確定的に確信した。

受精した。と。

そこで彼女の意識は途切れた。

## 加藤段蔵の搾精機構 前編

加藤段蔵は機械人形である。

現在は基本的にカルデアの暗部の指示に従って活動している。もちろん己が主人の令とあらばそちらを優先するのだが。

カルデアが人理修復を果たし、異聞帯も切除してサーヴァントたちに与えられたのは自由だった。もちろん活動源である魔力がなければ生きてはいけないのでカルデアから離れる事ができる者もいれば、常駐しなければ活動不能になってしまう者もいる。

カルデアで供給された魔力を保持して外に行き、使い切ったら戻ってくるというスタイルが今の彼女の任務サイクルだ。

ただ「自由とは……何をすれば。」と段蔵は首を傾げていたのだが、漆黒の衣服をまとった集団が自室に現れ、「手伝って欲しい。」と言われた。

最初こそ訝しんだものだが、曰く「藤丸立香は狙われている。藤丸立香の安全のためにも護衛や暗殺を願いたい。」とのことだった。

殺人をすることに段蔵個人としては抵抗はない。が、マスターはそんなことを望むはずがない。と話す。

「確かにその通り。しかし、多くの死線をくぐり抜けて、深い悲しみと絶望と恐怖を知った子供が一体この世界にどれほどいる？」

「彼に……、一人の青年藤丸立香に、普通の人生を与えるべきでは？」

「汚れ仕事もするだろう。時には残酷なことだつてあるかもしれない。幼い子供を殺すかも、年老いた者を殺すかも。だが……藤丸立香が守つたこの平和になつた世界はそんなもので壊されてもいいと加藤段蔵は思うのか？」

口をつぐむしかなかった。

黙っていること、隠していたことを彼は悲しむだろう。見ず知らずの人を立香を守るために殺したと知つたら苦しむだろう。だが、彼はそんな大変なことを考えなくてもいいほどに頑張つたではないか。

加藤段蔵はマスターに自身の意思に従うように何度も言われた。

(段蔵は、マスターに隠し事をするにぎやる。)

彼女は漆黒の衣服をまとつた、自信を「責任」だと名乗る男の手をとつた。

それからは別段おかしいと思うことはなかった。

暗部も気を使って、人の暗殺任務は回さないでくれていた。

主に段蔵が相手をするのはやはり魔物や魔獣。人に対処できない「矛盾の亀裂」から生み出された存在を排除することだ。

時には同じアサシンのサーヴァントと合同で任務をこなすこともある。この間は拳法を用いる無頼漢と一緒に仕事をした。

結局のところ、平和になったら「混沌・悪」を持つサーヴァントなどどうしようもない。人理を守るためなら正義もやぶさかではなかったがやはりマスターに隠れて悪事は働くものだ。

特にアサシンなど「人を殺すことを生業」としている者は鞍部に所属するしかない。

段蔵はろんどん？と呼ばれる場所のカルデア支部の屋根にいた。

景色を見るのは心地よい、風に当たるのは素晴らしい。

時折、電子タバコを摂取したくもあるが、この後の任務に臭いは邪魔になる。

「主殿や小太郎殿は元気にしておられるのだろうか？」

段蔵は腕を空へと伸ばしゆるくると回して外装を見る。

人とは違う。

シリコンのような柔らかな質感ではあるが熱もなければ血管もない。

「ダ・ヴィンチ殿や暗部の方々にアップグレードしてもらったものの違いがわかるものもあれば、よくわからないものもあります。」

ぐいっと内部機構を動かすと、腕が関節と逆方向に外れ折れ曲がり、肘から円筒の棒

が生え、周りをくるくると小さな金属が回転している。  
ウイーンと機械らしい音がする。

「輻射波動なるものを取り入れたら……ごぎつたが……」  
段蔵は思い返す。

〈回想〉

小鬼たちから囲まれ、退路は断たれた。

残存魔力は6%を切った。状況は絶望的でもある。暗部の援護は後5分はかかるだろうと思いい小鬼の振りかざした棍棒を回避。

飛び上がった状態で体をひねりコマのように足を大きく振り回す。周囲の2体の小鬼が弾き飛ばされ壁に激突し沈黙した。

しかし背後から武器を捨て段蔵の後頭部に抱きついて、頭部を殴りつける小鬼。「がっ!?!」

たまらず視界がぶれ転倒するが諦めることはない。

諦めたらそこで終わりだと主殿は立ち上がっていたと思い出す。

肘打ちを繰り出すと小鬼の股間に命中する。

「いっおあっ!?!」

率丸を潰され悶絶する小鬼を尻目に立ち上がろうとする。しかし正面から小鬼がまた捨て身で飛びかかってくる。

とつさに再度右腕の肘で反撃しようとしたところ、偶然衝撃で内部機構が発動。

肘が開き、飛びかかってきた小鬼の股間に触れた瞬間、小鬼は爆発四散した。

内側からまるで膨れ上がるようにボコボコと緑色の肌を沸騰させ赤い液体の花火と化する。

あたりの小鬼はたじろぎ、警戒心をあらわにしていた。

しかしながら、残存魔力が急激に低下したことで意識が薄れる。

(ぐっまだ……あつるじ……ど……の)

そこでスリープへと移行してしまう段蔵。

次に目を覚ました時、3人の男が取り囲んでおり1人が傷ついた四肢をガムテープで応急処置をしているところだった。

「目を覚ましたか。鬼は片付けた。」

「がっ……感謝しまする。」

「いや、増援が遅れてすまない。急だがここを急いで立ち去らなければならない。」

段蔵は10%に回復した残存魔力でなんとか体を起こし、体勢を整える。

(はて?)

両足の間から白い粘液がぼとぼと垂れ落ちる。

体の周りには大量の白濁液がいたるところに付着しているが可動に影響がなさそうなので拠点に戻ったら洗淨することとしよう。と彼女は考えた。

「おいつ行くぞー！」

「御意！」

〈回想終わり〉

そんなことがあつてこの右腕の機構の性能は高く評価している。しかしどう考えてもえげつない武器であることは明白なのでなるべく使わないようにしようと思った。

腕を元に戻して、背中に取り付けられたスラストを展開する。

「これも移動しやすくなりもうした。しかし隠密には向かないでござるな。」

他にもはや「カラクリか？」というほどに改造されまくった己が機体に苦笑する。中でも腹部に内蔵された機構が個人的には有用ではあつた。

以前の搾精任務では手でオナホールなるものを使って魔物から精液を採取していたのだが、他のサーヴァントより搾精効率が悪かつた。

しかしそれを訴えた1週間後、改造するから一時的にスリープになって欲しいと言われ、目覚めた頃には少し体重変化を感じたが何が変わったのかわからなかつた。

聞くところによると「性行ユニット」なるオナホルの身体内蔵版を取り付けたらしい。

なんでも「人間の女性器を超えた究極の魔動オナホル！」だそうで、通常の女性器の機能に加え、妊娠も可能になっており（オンオフ可）、膣道を振動させたり、回転させたり、蠕動させたり色々できるらしい。

「まあまだ使つてはござらぬが。」

ただ、なんとなく、なんとなくだが主殿が喜んでくれるだろうか？ 迫られた時、ちゃんと相手をする事ができるようになったと思ひ嬉しさ？ のようなものは感じた。

段蔵は休憩時間は終わりだと、その場から姿を消す。

「そういえば、先輩。この間加藤段蔵さんと出かけたと聞きましたが。」

マシユが立香の一人暮らしの家で食器を洗いながら話を切り出す。

もちろん口調は穏やかで純粋な疑問のような声音だった。立香はベッドで寝転がってT w i t t e r を眺めていたのだが、話を突然振られて先週を思い出す。

「あー、『世界の人形展』っていう展示会に行ってきたんだ。」

「人形ですか？」

「そう。なんでも「私のような絡繰でできた人形がたくさんいるとか。」ってワクワクしてたよ。」

洗い物を終えたマシユは食後のコーヒーを準備する。

「まあ一緒にメカエリちゃんとかも来たから、大変だったけど。」

大変だったことを表すために今の情報を追加したわけではない。実際にメカエリちゃんも来てはいたが、それよりも何か底冷えする怖さを纏ったマシユに怯え、2人っきりのデートではないということを伝えたかった。

幸か不幸か一応その情報は役に立ったようで、マシユからの凍て付く波動は消え去った。

「段蔵さんも綺麗な女性ですし、街中は大変だったんじゃないですか？」

「うん、何度か不良に絡まれたけど僕が守られたようなものだったよ。」

『『主殿お下がりくださいっ！………：跡形もなく消します。』って言ってて焦ったなあ。』

「ははは。」

マシユは苦笑いしながらコーヒーの入ったカップを机に2人分おいて座った。

そういうえば、とマシユが思い出したように語る。

「ダ・ヴィンチちゃんさんが何やら『あの絡繰にどうやってせい●△く器をお!!?くそお!』って暴れてましたが、絡繰とはやはり加藤段蔵さんのことなのでしようか?」  
「うーん(せい……なんとか器……ロリンチちゃんが怒るほどの………ハッ!!)」

その時ベッドで寝転がっていたぐだ男の股間に電撃走る。

(まさかっ段蔵ちゃんに生殖器を!?)

超絶煩惱A++を持つ彼に死角はない。

すでに立香の中では段蔵の腹部が映し出され、膣道や子宮がああ無機質な絡繰に内包されていることを想像してピクリと股間が反応する。

(うおおおおおおおおお!!)

藤丸が悶えている頃、段蔵はロンドンのカルデア支部地下施設の加藤段蔵用休憩室で血を拭き取っていた。粘つく魔物の血は時に魔術の研究の触媒として使われることは多いがその分はすでに提出してある。

(そういえば内部機構の確認を「暗部の蔭」殿に話してごらんな。)

深夜の真つ暗な部屋でドロドロのタオルを洗濯機に放り込み、服や髪が汚れていない

か確認して部屋を出る。

確認というのは、段蔵の義体は基本的に改造を暗部の任務によって変えているので、任務によって手や足に内蔵されている機構が変わったりする。

ただ宝具発動時は魔力によって内部機構が一時的に召喚時の状態に戻り、発動を可能としているらしい。

部屋を出て少し進むと、突然声をかけられる。

「だっ段蔵さん！」

背後から声をかけて来たのは少し腹部を大きく携えた30代くらいの男性スタッフ。体型的に不衛生な見た目をしているかのように見えるが、風呂上がりのようでとても清潔なように見えた。

何度か話したことのある男だと思いつつ、男は段蔵を見て顔を赤くしてぼりぼりどこめかみを掻いていた。

「……確か、クレイ殿。」

「はいっその実は……。」

話があることはわかるが、あたりをちらちらと見て気まずそうにしているのを見て、段蔵は察し、「場所を変えましょう。」と言って、男の手を取り近くのプリンター室に行った。

中は暗く、明かりをつけても電球一つで薄暗い。

紙の独特のいい匂いが鼻腔をくすぐった。

「して用とは？」

段蔵は急いでいるわけではない。というよりも暇でやることがなかったので同僚に聞きに行こうとしただけであり、何か目の前のクレイの用があるのであればそちらを済ますべきだと考えた。

「あつあのお……………」

男がなかなか話さない。

段蔵はクレイを見て別段嫌悪感はないが、言いずらそうなら待つてあげるのが道理であると思ひ黙る。段蔵にとって目の前のクレイという男は取るに足らない同僚だが、何度か話しかけられ悪い人でないことは記憶している。

生憎と話の内容まで覚えていないが、「落ち着いてください、時間はありますので。」とフォローだけする。

（発汗と動悸の乱れが感じ取れます。医療班を呼ぶほどではありませんが大丈夫でしようか？）

段蔵は息の荒いクレイを見て心配する。

「……………じつ実は以前から……………段蔵さんのことを……………綺麗だなんて。」

その言葉に含まれた真意を一泊遅れて理解する。

しかし特に思うことはない。マスターも外見を美しいと思ってくれていることは知っていたので果心殿は美しくあれと作ったことはわかっていた。

時折向けられる男性からの視線もそういうものなのだろうと理解している。

「それは段蔵と夫婦の関係になりたいということでござるか?」

「めっ夫婦!」

「違うのでござるか?」

「やっ違うくないけど? ……お付き合いたくう ……て。」

顔を真っ赤にしつつも汗をダラダラと流して、焦る目の前の男性に苦笑しつつも真剣な表情で答える。

「段蔵は主殿、藤丸立香殿に召喚されしサーヴァント、故に交際はできませんぬ。」

非情とはいまい。

はつきりと断ることこそ告白に対する礼儀である。

告白とは恥ずかしいものと思われたり、ばかにされることもあるが、生物の子孫を残すことの第一歩である。

(段蔵は忍。伴侶は持てませぬ。人でもござらぬ。)

「そっそうですか ……あのっ!」

もう諦めたようで、駄々をこねると言われる最近の男性より好感はもてる。

「……………最後につだっ抱きしめてもらってもいいですかっ!？」

おそらくもう恥も外聞もないほどに半ば興奮状態なのだろうと判断した。恥ずかしかつていた男性がこういつた行動に出るのは自暴自棄になった証拠だ。

段蔵は正直、この人間の女性ほど柔らかくはない無機質な体で抱きつかれて嬉しいのか疑問ではある。絡繰の体は硬く、人とはかけ離れている。

しかし、告白を断った手前、殿方に恥をかかせているのだ。多少の願い事叶えてやらねば果心殿にも顔向けできない。

段蔵はそつと抱きしめる。

むしろ彼女こそ柔らかさを感じた。

小太りなためかやはり腹部が柔らかい。背中に手を回され身長差で軽く持ち上げられる。髪の毛の臭いを嗅がれているがそれくらいどうということはない。

(……………これは。)

段蔵の腹部に硬いものを感じる。

ベルトではないはつきりと主張するそれは、明らかなる男性器だ。

聖杯の知識や房中術などからもそれくらいの判断は容易だった。

段蔵は特に嫌がったり、体を離したりする事なく、右手をクレイの股間に持っていき、素早い動作で性器を外気に触れさせる。

クレイは「えっ!? あっはえ!」と戸惑って腰を反射的に引く。

弾力のある人工的な皮膚で覆われた右手で赤く腫れ上がった亀頭をグリグリと刺激する。カリ首を指で包み回転させる。

クレイが声を大きくするが構わず左手で玉袋をさわさわと刺激し始める。

「なっただっ段蔵さんっ! なんでっ!」

「殿方は勃起するとお辛いと聞き及んでいまする。」

と言うが、実際には気まぐれでもある。

抱きしめて欲しいというのだからエスカレートする可能性もある。カルデアは人員不足で言ってしまうばブラックだ。そんな世界を守る仕事をやっているただの人間であるスタツフは一体いつ精を吐き出しているのか。

ガス抜きの意味でも合理的判断に基づくものだ。

少し痛くない程度に手入れされた人差し指の爪で鈴口をカリカリと撫で回し、中指と薬指で皮の内側、敏感な部分をゴシゴシと抜く。

(15cmほどの、外国人では珍しくないむしろ少し小さいサイズではあります。し

かし比較的柔らかいとされる外人ペニスに比べて非常に硬いでござるな。）

（カリ首は0.5mmほどですが亀頭は非常に大きい……ということは竿も太いのでござるな）

「ああつ！そごわ、つうつ。でるでる射精るっ！」

クレイがすでに限界を迎え、大きく腰を震わせる。

段蔵はタイミングを見計らって右手の平でがっしりと竿を掴み、カウパーでダラダラになった男根を速く扱き上げる。

左手はスツと玉袋の付け根から尿道に沿わせて撫でる。

クレイは反射的に腰を強く前に出し、腰を仰け反らせて絶頂に達した。

ごびゆるつぶびゅっ！びゆる！

溜まっていたのであろう、濃い白濁液が段蔵の腹にぶち撒けられ、重力に逆らって胸まで飛び散り首筋でベシヤリと止まる。

クレイは急な刺激と、性的興奮で息も絶え絶えという様子だ。

（4mmほどの射精。精子量も多そうにござる。）

段蔵は腹部のボディスーツに染み込むクレイの精液を見つめながら、ビクビクと痙攣し続けるペニスを手で綺麗にする。

その際、敏感な状態だったのでクレイが気持ち良さから逃げようとするが叶わない。

一度射精したにもかかわらず、治る気配はない。

(未だ治る気配はないでござるな。……………アレを。)

段蔵は背後にある作業台に腰をかけると霊衣を解く。

クレイは未だ射精が終わって息も絶え絶えといった様子だが目の前の愛しい人が裸体となったことで目を見開く。

血色の悪い陶器のような白い肌。血が通っていないのだから当たり前ではあるが、明らかに「女」を感じさせる脚線美。スレンダーに似合わない大きな乳房には程よい大きさの乳輪と未勃起の乳首。

腰骨に相当する部分の上は金色の外装で覆われているが、人工皮膚とのギャップを際立たせている。仰向けになり腰を深く曲げて膝裏を抱える体勢をとる。

臀部と秘部をはつきりと見せるスタイルだった。

本来であれば腹部からの延長で股間は人工皮膚が覆つてあるだけの状態であるが、改造が施されたいまの段蔵は異なる。

股間には肉厚の盛り上がった恥丘と、その間にはみ出た大陰唇。

陰毛などは毛穴すらなく、子供らしきも感じる。

特異な点として、大陰唇ならびに陰核含め膣道から子宮まで明るい水色で鮮やかに彩られていた。

およそ人の性器の色ではないが、逆に人ではない機械人形の性器であることを如実に主張しており肉欲を掻き立てる。

「クレイ殿、どうぞお使いください。」

段蔵はまるで自身が物であるかのように、クレイに語りかける。

しかしどの男が見ても今の晒された性器を模した機構は立派な「女性器」だ。

クレイはすでに返事をする余裕もなく息をより荒くしながら硬くなつたペニスの根元を親指と人差し指の間で上から押さえつけた。

部屋には生臭い精臭とイカ臭さが充満してドアの隙間から漏れ出す勢いだ。

ぐつと亀頭をクレイは秘裂に押し付ける。

通常のような熱さや体温は感じられず、それこそオナホールに触れたような柔らかさだけ感じる。

めりめりつみちつ

「ぐつひあ……あああつぐ。」

前戯などしてないのでスムーズには挿入らない。

何よりクレイの大きい亀頭が余計につつかえ、恥丘ごと強く押し込まれそうになる。人間の女性なら激痛で顔をしかめるかもしれないが段蔵は意に返すことなく受け入れる体勢を解くことはない。

そして最初こそ入り口でつつかえたものの、大きい亀頭が完全に飲み込まれるとスリーブに埋もれていく。

ぐぶっぐむりゅっにゅっずりゅっ

「はあああああっ!?!ああっ!」

嬌声はやはりクレイで、男根から送られる未知の快樂に目を白黒とさせ膝を小刻みに震わせる。

細かな肉襲と、少し大きい弾力のある肉襲がランダムに隙間なく敷き詰められており所々コリコリとした部分がありカリ首や皮の向けた部分を締め付けつつ刺激する。意地悪なのは膣道は直線になっておらず、横から断面図を見たとすれぱうねうねと蛇のように波打つ膣道になっていた。

そして追い討ちをかけるように、

(完全に挿入完了。膣道をランダム動作に切り替え、搾精モードへ移行)

膣道が前後へ蠕動し、緩やかな回転を右回りに、左回りに、右回りにと繰り返す。おおよそ人間の膣の動きとは思えないがそれでも「1つの生き物のように動く膣」とは有名だがこれに勝てるものはないだろう。

必死に腰を前後させるクレイは一瞬だけ竿が外に出るのが休息と思うほどに膣内は快樂地獄だった。

ぐちよぐちよと、厭らしい音をプリンター室に響かせ、肉とシリコンがぶつかるパエ  
ンツ！という音が不規則に紡がれていた。

段蔵の膣口からは潤滑液が垂れ落ち、クレイの尿道球腺液と混ざり合って机に小さな  
滝壺を作る。

(男性器の肥大化を確認。……そろそろ絶頂に達しそうでござる。)

段蔵はより大きくなる男性器に耐圧の数値を確認して、ピクリと肩を震わせる。

段蔵は感じていないわけではない。

微弱ではあるが確かに快楽情報を受け取っており、処理に困ってはいる。顔や態度に  
出さないのは処理速度内に収まっているからでありそれを超えれば今のような平静さ  
は見られないだろう。

また人ではない感じ方もあり、耐久値を著しく超える圧力や圧迫、耐熱限界や対衝限  
界を迎えるとエラーを吐き出し混乱や困惑、陶酔、朦朧など不安定な状態にもなる。

滅多になることはないが。

「んっふ。」

口から小さな声を漏らす。

だいぶ前に行った発汗機能の取り付けで額から一筋の汗を垂らす。

顔は依然として無表情で紅潮することもないが、感じてはいた。

女性経験の少なそうなクレイの動きはとても褒められたものではないが、しかしその「愛しき雌を貪る意欲」と「がむしやらかな肉欲」でたまに変なところを抉って段蔵を鳴かせる。

「だつえっ！でっ射精ますっ！！でっ射精る射精る射精るううっ！！」

クレイはもはや声を抑えることはなく、天井へ向かって顔をあげて腰を勢いよく突き出す。

ぐりゅっ！！

大きい亀頭が子宮口に思いきり衝突し子宮を少し押しつぶす。

「どうぞ段蔵の胎へと種子汁をお出しく下さい。孕む機能はオフにしてあるので存分に膣内射精を。」

そんな言葉を囁かれれば誰であろうと決壊する。

その肥えた肉体の全体重をかけて段蔵に乗っかってこれでもかと奥へ侵入し、勢いよく射精した。

ぶびゆるっぶびゆるるっ！びゆるっ……びゅっ……びゆるっ！

2回目とは思えない濃い白濁液が段蔵の最奥、子宮に流し込まれる。

射精と同時にキュツと膣を締め上げたので溢れることはない。

「んっ………ふぎっ！」

段蔵の意思とは関係なく陰核と乳首は完全に勃起しており、衝撃で変な声が漏れ出た。

(んっ……ふう、射精を確認。……6ml、たくさん出ましたね。……精子数約8千万。)

段蔵は自身に乗っかり脱力するクレイの背に手を回し耳元で

「よく射精しました。貴方と交際はできませぬがこれからもよしなに。」

と囁く。

「はあっ……ああっありがとうございます。ごさついます。」

クレイはなんとか返事をして体を持ち上げる。

膣道から若干柔らかくなった己が化身を無理やり引き抜くと、カリ首が膣口に引っかかって痛みすら感じる快感に腰を震わせた。

ぶりゆん

引き抜いた瞬間、段蔵の水色の淫靡な口とペニスの間に糸が引き、いかに濃い精液だったかがうかがえた。

精液は完全に子宮と膣道でキャッチされており溢れ出てくることはない。それほどの精液量でもない。段蔵は特に気にすることもなく布で秘部を軽く拭く。

ピロントツと部屋に軽快な電子音がなつたと思えば、クレイが慌てる。

「大丈夫でござるか？」

「へっあついや、呼び出しをくらつて。」

「では段蔵に構わず行つてくだされ。……また今度。」

クレイは驚いた様子で段蔵を見つめるが大きく首肯した後、服を整えてプリンター室を後にする。誰だつて振られた相手と性交渉をするなら一回きりだとは思ふ。

しかし段蔵にとってはこれくらいで士気が上がるのであれば、遠くはあるが立香の喜びにも繋がるかもしれないと思つた次第で、求められるのであれば断る理由はない。

クレイが出てすぐ、突然ドアが開く。

「おっおお！ほんとだ！」

「でも段蔵さんじゃないか？」

「大丈夫か？」

男たちが数人狭い部屋に入ってくる。

段蔵は特に慌てることもなく腹に先ほど巻かれた種子を拭き取っていた。

「段蔵さん、お願いがあるので。」

1人の男が段蔵に話しかけてきた。

申し訳なさそうにしながら顔を赤くする。

段蔵は男たちの盛り上がった股間を見て、気づかないほど馬鹿ではない。

ため息を吐いたり、嫌な顔をすることもなく、大きくその白い大きな太ももを持つ両足を開いて、

「どうぞ段蔵をお使いください。」  
と向かい入れた。

## 加藤段蔵の搾精機構 後編

加藤段蔵は基本的に感情の起伏が薄い。

何も考えていないわけではないがまるでボーっとしているかのような時もある。もちろん主人である藤丸立香との会話は弾むように努力しているのだが。

クレイの相手をしてから既に3時間経っているのだが、それでも段蔵は男たちの相手をしていた。

大きく乳房揺らしながら、義体に乗る男をみる。

（褐色の肌、以前何度か任務を手伝った………。クレイ殿より長い男性器に血管が盛り上がって内壁を刺激し続けております。）

既に段蔵の子宮口にゴツゴツと先端を当てて、一心不乱に腰を動かしていた。

（あれから8人の男性スタッフの相手をしたにござるが、どの殿方も大変溜まっておら

れたのですね。」

「ふっう!!でってるっ!射精すっ射精しますっ!」

「どうぞ段蔵の膣内でお達しくだされ。」

とタイミングよく両足を閉じ、男の背中に回す。

男は思いつきりできるだけ奥に腰を打ち付けて絶頂。

子宮ユニットが変形し、子宮ユニット内に溜まっていた前の男の精液があふれ出たところ、さらに濃い精液が追加される。

男が痙攣しながら性器を段蔵のオナホールから抜くと、おびただしい量の精液が垂れ落ち、彼女の足の付け根のシャフトを汚した。

「あつすみません。」

「いえ、お気になさらず後で洗浄すれば大丈夫でござる。」

「そつうですか……、あの膣内に……。」

「段蔵は卵管に隔壁を設けてあるゆえ、任意でオンオフが効くでござる。それに段蔵の子宮ユニット内容量は20ml程度でござるが、既に優に超える量のザーめんを受け取っているので仕方ないでござるよ。」

補足説明を淡々とする段蔵は己が子宮内を確認する。

「……34mlほど子宮ユニットから膣道まで埋め尽くしております。様々な男性ス

タツフの方々の精子が入り混じってまるで戦のようでござるな。」

その戦は果たして卵子を求める戦いのようなものだろうか？と射精したばかりの男性スタツフは、段蔵の紡ぐ卑猥な単語群を想像して、ぐったりとした性器をピクツと反応させる。

段蔵は腰の忍具をしまうポーチからフィルムケースサイズの透過素材でできた容器を取り出した。キャップを取り外して、秘部からこぼれ落ちる男たちの混合液を容器がいつぱいになるまで汲み取り、キャップをしめる。

段蔵の性器は愛液など余計な情報は取り除くことができるので、このまま直接精液を採取しても問題はない。

そう、段蔵もまた恒常任務として「生物の精液を採取してください。」という任務を請け負っていた。

ただし、「暗部の任務を優先して大丈夫です。」とも言われていたので率先的には行つてはいなかったが。

(8人の男性のザーめんが混じっていて、大変だとは思いますが、精子の性能比較を混合液内のできるので需要はあると考えます。)

2 本分精液を封入してポーチにしまう。

周囲の男性たちは退室することはなかったが、完全に1人2回以上は射精しているの  
で息も絶え絶えといった様子だ。何度か写真や動画を撮ろうとする輩もいたが、3人目  
の男性が「そういうことはするな。俺らの処理をしてくれてるんだぞ。」と諫めたので驚  
いた。

実を言うと、段蔵もスツと腰の後ろに苦無を隠してはいた。

半ば携帯端末を破壊する気でいたのだが、それには及ばずに済んだので良しとする。

段蔵はひとまず終了かと判断するが、精臭が充満して息苦しいプリンター室の扉が  
ゆっくりと開く。まだ男性器をしまっていないなかった男性スタツフは慌ててズボンをあ  
げるが、すぐに入ってきた男が見知った者だと知ると乾いた笑いを漏らした。

慌てたことが恥ずかしかつたのだろうか？と段蔵は思った。

部屋に入ってきた男は身長が2 m以上ある筋肉質な巨漢だった。カルデアの白い清  
潔そうな衣服以外の体が出た部分。手や首、顔などは真つ黒で彼の国柄を何と無く察す  
る。

顔には大きな四角いメガネを装着しており、体格とは似合わないが理知的なイメージ  
を持つ。

「おお、アンドレ！」

先ほど、同僚をたしなめた白人男性が片手をあげて声をあげる。

「こんにちは、お呼ばれされて来たのですが？」

「ああ、実はあの加藤段蔵さんが性処理をしてくれるらしい。」

あの、とはどういうことか横で座り込んでいる男性スタッフに聞くと、なんでもロンドン支部では加藤段蔵に対して好意を寄せる人が多いらしい。

「このカラクリでできた段蔵にでござるか？」

「はっはい、忍び装束の内太ももから見える白い肌、ポニーテールに纏めた美しい黒髪、体のラインがはつきり見えるボディスーツに反プレイするかのように自己主張の激しい大きいおっぱい、安産型とも言える大きな臀部。」

そう熱く語るスタッフに少し苦笑し、困った顔をする。

「そしてやっぱり所々仕事で大変なところをカバーしてくれる気遣い！……いつもありがとうございます。」

「いえ、当然のことにございます。また回復したらいつでも声をかけてください。」  
段蔵は下を向いた男性の出しっ放しのペニスにちよんと人差し指でつつく。

「話は聞かせてもらいました。……………私も3週間ほど……………お願いできますか？」  
「もちろん構わぬが……………」

段蔵が少し渋る声音をするのは、単純に汁だくになった秘部だ。

ぶびゅつと未だ時折溢れる精液は彼女の事務的な対応に反してエロさを際立たせるが、いくら同じ男性でも他人の精液を嫌う気持ちはあるのが普通だ。

しかも精液の熱は完全に失われ冷たくなっている。

もちろん今までの男性スタツフたちにも同様の質問は投げかけたが、「そんなことより段蔵さんと性交渉がしたい。」と構うことなく剛直を突き立ててはいた。

「大丈夫です。」

「ならば……………」

と段蔵は軽く、秘部を手で擦り溢れ出る精液をどかして、足を180に開脚する。

盛り上がった恥丘は既に何度もピストンの衝撃を吸収しているにも関わらず、弾力を失わせない。

陰核に相当する部分がピクピクと痙攣しているのを見て、アンドレは股間を膨らませた。

段蔵は開いた両足の膝をクイッと曲げて足先で器用にアンドレのズボンのジッパーを下げる。

ぼろんっ

一定のところまで開くと、勢いよく剛直が飛び出た。

本来はパンツにもボタンなどついていないのだが、小便をする際に締め直すのをめんどく下がつて外したままの男性は多い。

(「……………大きいでござるな。)

アンドレの体軀から予想できる性器のサイズは、その予想を上回る。

今までの男性とは比べ物にならないほどに大きく、黒々とした、男の象徴は目算25cmにも及ぶ。太さは6・5cmにもなり、クレイより大きい亀頭にカリ高、女泣かせの性器といった感じだ。

根元の下には大きい黒い野球ボール大の玉袋が血管を浮き上がらせ、精子を熟成させているように見える。

あたりには濃厚な雄臭さが充満し、段蔵はむせ返りそうになった。

「すみません4日ほど風呂に行けず。」

「……………構わないでござる。多少不衛生でござるが…………。」

アンドレは申し訳なく思いながら、そそり立つ男根を手で押さえつけ、段蔵の秘裂に押し付ける。

めりめりっみちっ♡

潤滑油と大量の精液で滑りやすくなっているにも関わらず挿入できない。

(人間の女性ならば悲鳴をあげっ……であるうデカ魔羅……。)

アンドレはその理性的な対応をゆっくりと解き放ち、息を荒くして、力強く男根を押し込む。

みちみちつめりっ♡

シリコンやゴム素材、謎の柔らかい素材を使った膣口が悲鳴をあげ、これでもかときく口を開ける。開けるといふよりはこじ開けられているのだが。

そしてゆっくりと男根を膣口が飲み込み始め、竿が段蔵のオナホールに埋まる。

「ふいつ……ぎっ……」

あまりの圧迫感と異物感で段蔵は一瞬エラー落ちしそうになり、おかしな声を漏らす。そんなことを気にする事なくアンドレは先ほどとは打って変わって別人のように遠慮なく動き出す。

段蔵を、それこそ物のようにながっしりと腕で固定して、体全体を使って腰を突き出す。

あまりの勢いに壁に背中を密着させられて圧迫される。

すでに大きな亀頭は段蔵の子宮口を殴りあげ、押しつぶした。

接合部からドロドロの白濁液が勢いよく吹き出す。

アンドレが射精した訳ではなく、先ほどの男たちが吐き出し続けた精液のカクテルが段蔵の潤滑液と混じって押し出されたのだ。

「おっ……………ぎっ……………」

アンドレの極太チンポは竿の中腹付近で止まる。

1回目の突きではここまでが限界である。むしろよくそこまでといった様子だ。

無理やり押し広げられ、子宮を持ち上げられ潰された段蔵は、外見だけ見れば少し顔を青くし、汗を垂らす無表情な人形だが、内心ではエラーを吐き出し続けていた。

『……………アラート……………耐圧限界値を突破しました。』

(……………われますつる……………ぎっ……………おつきすぎでござつる。)

他にも小破損反応や、漏水などエラーが起き通達が階差機関を占めるがそれをいちいち確認することはない。

そんな中アンドレは一度突き挿入ただけだということにも関わらず感動を感じていた。

彼が呼ばれたのは、単純に女を抱けないでいるからだ。

普通の女性が、いやたとえセックスをやりまくっている女性の性器ですらアンドレの

化け物を飲み込むのは一苦勞で、交際してもいつも初夜で逃げられる。

女を買ってもむしろお金を払われて逃げ出される始末。

「すつすごい！俺のを飲み込んでっ膣内がっうねってっ！あああああつ！」

アンドレはいつもの冷静な口調など忘れて、腰を一瞬で引く。

『／／アラート／／弾性限界34%』

（ふぎっ！……………引き摺り出されるかっ！……………思いました。）

「……………ぎっ……………」

アンドレが無表情で対応する段蔵にまるで今までの恨み辛みを吐き出すかのような振る舞いをし始める。

「くそっなんでっ……………いつも俺はっ！！」

ずろろろっ ♡

「……………。」

「あの女っ「私夜すごいんだく。」とか言っておいていざやるときにっ逃げてっ！」

ずりゅっぱんっ ♡

「う……………。」

「この間なんてっ遠目で女どもがっヒソヒソとっ！」

ずるるるっろっ?!

「……………んっ……………」

「絶対女スタッフに知れ渡ってんじやっねーか!くそっ!」

じゅぶんっごりゅん?!

「ふお……………」

何度も何度も20cmほどの長いストロークであるにも関わらず、素早いピストンに合わせて愚痴をこぼす。引き抜かれエラーを吐き出し、穿たれてよりエラーを生み出させる雄々しい性交渉はもはや自慰行為のようだった。

段蔵は流石に耐久値のことも考えて、停止を提案する。

「あつぎっ……………アンドレ殿……………ひとたび休息をつ。」

「段蔵さんも嫌だっつか!」

アンドレは正気でないように腰を動かしながら怒鳴る。

「い……………いえ、ですが段蔵におっしやられても。わかりかねます。」

「段蔵さんもあの肉便器の味方を!」

「そうではないでござる。」

「……………くそっオナホみたいに動きやがって!このオナホっ!」

「確かにオナホールでござるがっ。」

なんとか平静を保ちつつ会話してはいるが、蓄積したエラー下腹部に違和感を持たせる。

まずは潤滑液が異常に分泌され、陰核が腫れ上がる。

トロトロと垂れ落ち、床を汚す。

段蔵は内心、これもまたストレス解消かと思いい理不尽な態度に怒りが湧くことはなかったが、できればやめてほしいと思う事もあるので多少口答えをしていたのだが、

「おいつリュウヤっ！お前もこのオナホ使えって！」

アンドレが段蔵を軽々と抱えながら腰を動かしつつ反対に向き直る。

リュウヤと言われた男は部屋の隅で、段蔵が犯されるのをずっと見続けていた男性ス  
タッフだ。

「だが、段蔵さんをひどく扱うなんて……。」

周りの男性たちが豹変するアンドレに文句を言わなかったのは純粹に恐怖からだ。以前アンドレがキレた時は手がつけれなかった。その矛先が自分に向かうと思うといくら感謝している段蔵でも助け舟は出せなかった。

「うるさいっはやく挿入しろ！」

「わっわかったよ。」

リュウヤは15cmほどの男性器をズボンから取り出す。

先端はすでにカウパーでよだれを垂らしており、ずっと我慢していたことを伺えた。

「りっリュウヤ殿、こちらをつ。段蔵は排便しない故、綺麗でありますっ。」

段蔵はアンドレの首に回していた手を自身の臀部に回し、精液で濡れた手で己が菊門をこじ開ける。

白い肌色の美しい尻からゆっくりと色を水色に変える括約筋付近の皮膚は、大きく開かれひくひくと呼吸しているようだった。

リュウヤはもはや我慢のダムを決壊させ、段蔵のことなど考える事もなく男根を突き入れた。

「ぶぎっ………。」

あまりの異物感と腸壁をえぐられたことでさらなるエラーを感じるが、段蔵は事務的にアンドレには休憩を提言する。

しかし、アンドレに頸部を掴まれ、さらなるエラーで発声できない。

「こっの！オナホっ！肉便っ器！」

罵倒を交えつつ何度も何度もピストンを繰り返す。

段蔵の膣道は無理やりこじ開けられ、耐久限界を迎えそうになると、潤滑液を大量に

漏らし、なんとか破壊されないように努めていた。

尿道と思われる穴からはまるで人間の潮吹きのような液体が何度もぷしいっと吹き出しており、アンドレとリュウヤの興奮を掻き立てる。

まんこと尻穴を大きく押し広げられて、股間部分の外装は悲鳴をあげるが、彼らには関係のないことだ。

アンドレが子宮を殴りつけ、リュウヤがカリ首を肛門付近で引つ掛ける。

リュウヤがS字結腸手前の突き当たりを押し上げて子宮を後ろから殴りつけ、アンドレが肉襲を挟りながらカリ首を膣口付近で引つ掛ける。

時たまタイミングがずれ、極太黒人ペニスで押しつぶされた子宮が、さらに腸側からリュウヤの突きが子宮の背中側を刺激し、段蔵に乱数を強制的に追加する。

(ぐっ……………このままではっ……………壊れ……………)

蓄積されたエラーが膨大な信号となって滞り、段蔵は息を荒くする。

「おらっオナホっ！3週間っ溜めたザーメン金タマから上がってっ来たぞ!!」

「僕もっももっもうっ！」

2人の動きが急激に早くなる。

加速度的に増えていくエラー。

「おいっ！どれだけの男から搾り取ったんだオナホっ!？」

アンドレがまるで他の男と比べるかのよう問いを投げかける。まさに自分こそが優れた男だと認めさせたいのであろう。

発声器官の修復を急ぎ、なんとか答える。

「おっ………きよっ今日が初めてでござ………る。お2人をあわっせて10になるかっ  
とっ。」

「はっこんなっ名器いっさぞ大量に搾ったんだらうなっ?」

「合わせってっ………ぎっ………40mほっど。子宮っにつ」

アンドレはそれを聞くとにんまりとしてどんどん腰を速くする。

(よりっおおきっ………く?)

段蔵は胸をぶるんっつと揺らし髪を乱れさせながら肥大化する2つの男根を感じ取る。

『／／エラー／／耐圧限界42%・対衝限界32%………』

「これからご主人様は俺だっ!」

「ちっがいまする、主殿はっ………藤丸っつりっ立香ど………のでえ………」

「言えっ俺がお前の主人だっ!」

アンドレは段蔵の額に自分の額を強く当て、顔を舐め回す。

ずりゅっごばんっ??ずろろろっ??

「それっは無理でござ……る。主人殿はっりつ……か。」

「ならその主人様はこのこと知ってんのか!? ああつ?」

ぶちゅんつごりゆつ??ずるるうるろ??

段蔵はどきりと無い心臓が動いたような気持ちになる。

マスターに、主殿に、このことを知られる訳にはいかない。

『// //アライト// //耐圧限界48%』

周囲の男たちは、あの恐ろしいえぐい性器を段蔵が完全に飲み込んでしまうのを見失う。付け根までズツポリと飲み込み、よだれを垂らしまくるオナホールは誰もが女性器だと認めるだろう。

水色のやわ肉が引き抜かれるたびに少しだけ外に引き摺り出され、すぐに内側に押し込まれる様子は男として滾らせるには十分だった。

彼らの今まで疲れ切っていた男根は完全に勃起し、ゆっくりと周りの男たちがずばんつずばんつと腰を打ち付けられている段蔵に近づいて、ペニスを抜き始めた。

段蔵の白い尻には、突きに合わせて大きな睾丸がべしんつと何度も当たる。

「ほら言えっ「段蔵はアンドレ様のっ性処理用オナホールです。いつでもご自由にお使いくださいっ!」って言え!」

「う……だっ段蔵はっ??アンドレ殿のっ??」

ラストスパートといったようにアンドレとリュウヤは腰を強く押し付け、段蔵の2つの性器を掘る。

『／／アラート／／耐圧限界51%・・・至急性器の修復を行ってください。』  
 「性処理いつ用おっ！おっ。っオナホールにごさるっ！」

リュウヤが悲鳴をあげた。

「ダメだっでるでる射精るっ射精るっ」

「俺もだっ射精すぞっ！3週間分！こっつりザーメン！射精す！おおっ。っお!!」

精液がそれぞれの尿道をこじ開けて体外へと、段蔵の青色の子宮ユニットへと、吐き出され始める。

『／／アラート／／耐圧限界60%・・・至急性器の修復・点検を行ってください。』  
 「いづでもっご自由に……………お使いぐだっされえっ！」

ごびゆるっ??びゆるびゆるっぶびゆるっ??ぶびゆるっ??びゆるっ??  
 とびゅっびゆるるるびゅっ??びゆるっ……………びゅっ??

エラーの集合体、大量の不明な情報が段蔵の階差機関を埋め尽くし、段蔵はエラーで強制シャットダウンに達する。

眼球は白目を向き、秘部は漏水、大量の潤滑液を垂れ流し、不規則に腔壁を内部機構が動かして2人の男根を刺激し続ける。

尿道と膣内から透明な液体が漏れだして、まるで人間の絶頂のようだった。

アンドレのペニスからありえない量の精液が人とは思えない濃さで吐き出され、空の子宮ユニットを膨張させる。

リュウヤは濃さこそそれほどではなかったがアンドレ並みに精液が多く、腸壁に精液をぶちまけて腸内にザーメン×腸液のカクテルを作り出していた。

周囲の男たちも同時に順繰りと射精して段蔵の髪や、額、口、鼻、頬、腕、脇、胸、谷間、足、太もも、首、腹、背中、横つ腹など精液が付着していないところを探すほうが難しい。

強制シャツトダウンにより段蔵の意図的なシャツトアウトが無くなり、ビグンツと義体が2つの男根の動向により反応する。

アンドレとリュウヤは人生最高の射精に膝を震わせ、ゆっくりと性器を引き抜いた。

めりめりつぐぼんっ！

むりむりつむりゆんっ！

肉棒が引き抜かれると秘部とケツ穴から勢いよく溢れ出す。

ぴっちり口を閉じたまんこから嘔吐するようにダマになった尿混じりのザーメンがこぼれ落ちる。

肛門はなんとか括約筋が頑張っているようだが、時折放屁と同時にぶびゅつとサラサラの精液が排便されていた。

机の上に脱力した義体はまさに人型オナホのようで、ザーメンと尿の臭いを混ぜ合わせた下品な空気を生み出す人形になっていた。

霊衣はザーメンを吸い取り、臭いが取れるか心配だ。

部屋の男たちは息も絶え絶えといったようで、静まり返る。

段蔵をあのように扱ってしまったリユウヤ含め、多くの男性陣が賢者モードになって罪悪感にかられるがアンドレだけは、ぐったりとしたペニスについた己が精液を段蔵のマフラーで拭いながら乳房を揉みしだいていた。

「へっ！へっ！このオナホは俺のもんだっ！」

彼は目の前の壊れかけの人形を持ち帰ろうと肩を乱暴に掴む。

「そうはいかない。彼女は暗部に必要な人材だ。」

その言葉が部屋に、まるで部屋ごと声帯になったかのように響き渡る。男たちは脱力していた顔をまるで死を突きつけられたかのように緊迫とした顔へと変貌させた。

部屋の真ん中に漆黒の服をまとった顔を隠した存在がたたずむ。

アンドレは背後に突然現れた不審者に「なんだお前っ!？」と言う。前に腹部に膝蹴りをくらい、後頭部を警棒で殴りつけられた。

意識を強制的に刈り取られる巨漢は、その体重を感じさせないほどに軽々と担がれる。

「君たちもあまり乱暴に扱われないことだ。このことは内緒だ。彼女にも。さもなければ、君たちは、……明日を迎えられなくなる。」

男とわかるその底冷えする声は、誰もが無言で首を縦に振り続けるには十分だった。

射精した直後からか、それとも「死」を目の前にしたからかペニスに縮みあがり、3

c mほどになっていた。もちろんどちらが理由かなど言うまでもない。

気づけばアンドレを担いだ男は消え去っていた。

部屋はゆっくりと弛緩し、呆然とするものがほとんど。

その静まり返った部屋に透き通るような女性の声の切り口を開く。

「……………加藤段蔵……………起動確認。」

(義体……………深刻な破損なし。軽微破損あり。……………魔力修復可。)

(腔道の磨耗軽微、子宮ユニット内、人種精液30ml(内精子量40億)……………卵管隔壁

…エラーにより数十分前から解放済み……受精反応……無し。)

(膀胱内……空。 ……乳房破損……軽微。 ……腸内、人種精液20ml(内精子量16億)排出可能。)

目を向ければ上半身を起こし、義体状態を口にして確認を取る段蔵に姿が見えた。シャットダウンから復帰したのだろう。

秘部から未だ垂れ落ちる精液を3本目の容器に入れて、キャップを閉めている。

「スタッフの皆様方、大変見苦しいものをお見せしたことを陳謝するでござる。アンドレ殿のが見当たらぬが、彼にも謝罪していたとお伝えいただければ幸いにござる。」

いえむしろ、こちらが感謝と謝罪したい。と誰もが思ったが、それよりも、すでに4時間経っていることを誰かが口にして、各々の仕事を思い出し急いで片付けし始める。

段蔵も秘部から雄汁をひりだして、衣服や義体を洗淨するために立ち上がる。

一緒に片付けようとしたのだが、スタッフで片付けるの一点張りで、甘えることとし、その場から一瞬で消え去った。

プリンター室は精液の臭いと、汗臭い雄たちが取り残され微妙な空気がしばらく彼らを覆った。

後に苦情が寄せられることとなる。

## 藤丸立香のオナホール（加藤段蔵＋ダ・ヴィンチ（ライダー））

マイルームというのは当然鍵をかけることができる。

もちろん電子錠なのでピッキングなどはできない。ただ例えばサーヴァントの歴史や能力の史実に「鍵を開けることができる」などが存在するのであれば、鍵明けを昇華した何らかの魔術で概念的に開けることは可能かもしれない。どこかの名探偵とか。

話は逸れたが、鍵のかかったマイルーム、いわゆる藤丸立香のカルデアにおいての自室は現在を鍵をかけているというわけだ。開け放たれるということをお願いしたいわけでもない。

「ふっ……くっ！ふっ！……ふっ！」

部屋には大きな吐息から二酸化炭素が大量に充満している。彼の者は荒い息で、運動をしていた。

ベッドの上で自分を慰める行為を。

（家に帰れば、マシユがいるっ！夜も最近は何部屋は違うとはいえ同じ屋根の下あ！悶々とするがしかしシコってバレたくはない!!ああああああつ）

藤丸立香は溜まっている。

精液がとか精子がとかではなく、悶々とした気持ち溜まっているのだ。マシユは時折シャワーを浴びていたり、際どい服装をしたりといささか股間にくる。

彼の苦悩は思春期の男子にはきつい。

もちろん彼はすでに二十歳近いので「思春期？」かはわからないが。

ベッドで寝つ転がりながら、マシユっぽいエロ画像をスマホで見つつ右手で扱う。

小さい頃から皮オナしかしたことがないが素早い動きで絶妙な刺激を与える。

（うおおおおおっマシユっマシユうううっごめん!ごめんよお!いつもエツチな目で見てごめん!尻も脇もぴっちりスーツも最高です!ありがとうギャラハット!（「ええんやで」あああ!そろそろ!!）

立香の絶頂が近い。

5日ぶりの射精を考えると、射精した瞬間は素晴らしい快感で満たされるだろう。それを思うとさらに興奮する。



「SINOBIヤベエ！」

立香は驚きつつも急いでベッドの横に転がったカルデアの制服のズボンを掴み履こうとする。のだが、段蔵がびしっと手を出して制止する。

「主殿っただっ段蔵で処理するのはいかがか？」

「……………っえ？」

静まり返るマイルームに、ベルトとズボンがどきりと床に落ちる音が木霊した。

カルデアの司令室にはダ・ヴィンチ（ライダー）が悩ましげに座っていた。

いつもいる名探偵は、数学の天才とライヘンバツハの滝の観光に行つてくるとかでない。仕事が多いから悩ましげにしているというわけではない。もちろん上記を逸した仕事量ではあるのだがこれくらいならば1人で捌ける。

彼女（彼女？）が頭を抱えているのは目の前のカルデアスタッフについてだった。

なんでも「ロリンちゃんには僕の女神です！好きです！付き合ってください！」という告白を1週間以上毎日続けられている。というか彼だけでなく多くのスタッフに毎

回言い寄られる。

「だからね？ 私は忙しいのー。誰かと一緒になって時間取られるわけにはいかないんだよ。」

「そこをなんとか！」

「何度それをいうんだ！ 無理なものは無理いー！ だいたい私は中身おじさんだよ？ 中年のおっさん。わかる？」

「それでも好き。」

「……………はあ、変わりもんだねえ。」

「そんなくらい可愛いので。」

そこまで立て続けに褒められると悪い気はしない。断るということは通常の人にとってはいわゆる罪悪感を持ってしまう原因でもあつて。もちろんダ・ヴィンチも少しは罪悪感がある。いわゆる相手を否定する行為に等しいわけだからだ。

それでも気を悪くせず好きだと言ってくるのは、いわば根性の賜物か、愛は盲目というか。

ダ・ヴィンチはため息を吐く。

もちろん本来の成人女性型でも言い寄られることは多かった。そしてどちらも女性型なのだからそういう「性のトラブル」も想定はしている。

「うーん………わかった。」

「付き合ってくれるんですか!？」

「あげない。」

「そんなー!？」

そういうと、ダ・ヴィンチは足が床に届かない大きな椅子から飛び降りて男性スタッフの正面10cmのところ立つ。男性スタッフの胸板下に頭がこつんとぶつかる。

ダ・ヴィンチは少し良く分からないことをした後、ゆつくりとチャックを開ける。

「えっええっ?」

チャックを開けて男の下半身にある柔らかい肉棒を取り出す。

「ほうほう………ふーん。へー………すんすん。」

下に垂れ落ちたぶよぶよの性器はダ・ヴィンチの小さな手に持ち上げられる。

ダ・ヴィンチは思いのほか大きく重いペニスを見て驚きつつ、ゆつくりと硬くなるペニスを自分の鼻に押し付けて臭いを嗅ぎ始める。

(勃起していないのにこのサイズ………かなりいいものを持つてる。………臭いも汗臭さと雄臭さがまじって………懐かしい。私のもこんな臭いだった。まあここまでおつききなかったけど。)

そう思いつつフル勃起に達した男のペニスを見て目を丸くする。

（でっでかいな。日本人男性は膨張率がすごいと聞くがこれは……17cmくらいあるんじゃないか？太いし、血管の浮き出具合がえげつないねえ。）

ダ・ヴィンチはそのまま小さな子供の口をできる限り開けて亀頭を口に含む。

「うおっおお!!」

男性スタッフは突然の口淫に驚いて咄嗟にダ・ヴィンチの大きな頭をがっしりとつかんで腰をひく。

ダ・ヴィンチはそんな反応などわかり切っていたのか、引いた腰の分だけ口を前に出して逃げられないようにしつつ小さな左手で付け根をつかんで、入れられるだけ口にペニスを含む。

（うぐっ……苦しいけど……焦ってる可愛い顔はいいね。お……舌にカウパーが垂れてきてしよっぱいなあ♡）

下を触手のようにぐねぐねと動かしカリ首を刺激する。

カリ首に溜まった恥垢はすでに舐めとって胃の中だ。正直少し嫌悪感と衛生的な問題は考えるが目の前の男が少しでも興奮するように動く。

ダ・ヴィンチは結局のところ今日はこの男を一発イかせて諦めさせることにしたのだ。

「おおっ！すっ（い）い！」



たまりを作る。

誰が見てもわかる絶頂を見ることなく男は射精の気持ち良さで嘸下の刺激で生まれる快楽に膝を震わせて背中から鳥肌が走る感覚を味わっていた。

30秒ほどして、快感がゆつくりとひいて、ペニスを引きづりだす。

途中カリ首がのどちんこに引っかかってびくつとダ・ヴィンチが震えるが無理やり引き抜く。

鼻にツーンと感じるダ・ヴィンチは口から溢れ出る精臭に酔いながら床に崩れ落ちる。絶頂が治りきらず受け身を取らずに床に寝転がる。

男も引き抜いた直後歯が亀頭に当たって「ふおっ!」と言って尻餅をつく。

部屋は生臭さと汗臭さで充満し、ダ・ヴィンチは意識を失った。

段蔵の提案を食い入るように快諾しようとした立香だったが、待ったを理性がかける。

「ごめんすっごい酷い質問だけど、段蔵ちゃんって……できるの?」

自分で考えても最悪な質問の仕方だし、質問内容も最低だが、特に不快感を感じる段蔵でもなかった。

もちろん改造の話はなんとなく知っている立香だったが聞けるような空気であるのなら聞きたいところではある。

「段蔵には子宮ユニットが追加されており、女性器に相当するものも取り付けられています。人間の女性とは違う素晴らしい快感を提供できるはずでございます。」

「そつそうなんだ。」

「しかも、妊娠のオンオフが効くため生でのご奉仕も可能でございます。」

「ふあっ!?!ににに妊娠!?!」

「左様にごさる。詳しくは卵管隔壁が設けられており、意図的に開けない限りは受精しない仕様でございますな。もし受精することがあるのであれば例えば「加藤段蔵自身が開ける。」「エラーで不具合が起きて開いてしまう。」「物理的に突破される。」くらいのものでしよう。」

段蔵は指を3本立てて示す。

「卵子は段蔵の義体情報を元に作られる人間と変わらぬもので、人間の女性とは異なり常に補充される形でございます。」

生々しい性的な用語が女性から発せられるのはくるものがあり、立香は興奮を隠せな

い。そして以前聞いた話の予想が当たっていたことに内心喜びと焦りも覚える。

誰だつて気になる女の子が子供を作れるということを意識したときは「他の男」という存在を想像してしまうものだ（個人の意見です）。

「でも段蔵ちゃんはいいの？」

「主殿……いえ、マスター困ったことがあればこの段蔵に！」

「じつじゃあ……お願いしようかな。」

立香はそう言うのと、シーツを整え、己が下半身を恥ずかしそうに隠す。

男根は先ほどの会話で硬さを取り戻しビクビクと震え続けていた。

段蔵も霊衣を解き、裸になる。

ベッドに仰向けになって脚を開くように伝えたと、立香のペニスがよく見えた。

（ふむ………マスターのペニスは包茎………11cmほどですか。日本人の平均値を下回っていますが男性が性器が大きいからといって決まるわけではござらぬ。太さも2.7cmほど………辜丸も全体的に小さい。）

段蔵が分析できるのは、やはり多くのカルデアスタッフと交わっているからというものもある。結局クレイの告白を断って、アンドレに絶頂させられてから、3週間は経っているのだがほとんど毎日声をかけられる。

休息を必要としない段蔵だからこそできる芸当ではある。

それに魔力がエネルギー源である彼女にとって精液は恰好のエネルギー源である。射精させるためにエネルギーを使い、射精でエネルギーを得る。

もちろん完全なプラマイゼロではないが、手間ではない。暗部の仕事が無ければ頼まれば許可する程度だ。

「段蔵ちゃんの性器……綺麗だ。」

立香が凝視するのは段蔵の股間。

透き通った白い肌から鮮やかに水色へと変わる少しはみ出た大陰唇。肉厚で中身を隠そうと頑張る両脇の膣肉は段蔵の細長い指で強引に開かれる。

ぐばつと子宮口まで見えるのではと思うほどに広げられた膣口は潤滑液を分泌して立香の性器を貪りたそうによだれを垂らしていた。

「段蔵の性器は常に清潔になるよう設計されております。」

そう言うことを言いたいわけではないんだけど立香が思っていると、ぴとつとガチガチに勃起した包莖ちんぽを段蔵はまんこに押し付ける。

にゆるっ

とほんのちよつぴりの抵抗を踏まえた上で根元まですぐに飲み込む。

「ふおおおっ！おおおお!!すっ………(っ)おっ!?!」

藤丸立香は驚嘆する。

あまりの刺激に今にでも射精してしまいそうだった。しかし我慢できたのは人類を救ったマスターとしての矜持だ。

段蔵はきちんと挿入されたか確認してから、何度も立香の性器の長さに合わせた的確なピストンを開始した。膣内は様々な動きが展開されちんぽを飽きさせない。

「うぐおっおお!」

立香はあまりの刺激に必死に耐えることしかできず、脚をピンと伸ばして、シートに爪を立てた。

段蔵はたんつたんつと一定のリズムで動き続け、子宮口で先端を引つ掻くように腰をグラインドさせる。

（計測……………11. 4 cm、太さ2. 6 cm、カリ首4 mm……………クレイさんにも及びませんが、マスター……………私はマスターとこういつたことができて……………なんでしょう胸がふわふわします。エラー?）

『／／ノーマラート／／耐久限界3%、漏水なし』

「だつ段蔵ちやつちよつととストつぶ!」

立香が突然暴れるので一旦腰を落とす、停止する。

段蔵は何かまずいことをしたのかと不安になるが立香の言い分は真逆だった。

「すすすすごく気持ち良くて……………射精ちやいそうだから……………一旦待つて。僕初

めてだしつき。」

初めてだからこうなるのも仕方ないんだという言い分を言い訳に使っている立香に気づきつつもそういうものか、と納得する。

「段蔵ちゃんも初めてなのによつていいね。」

（マスターの初めてを私がもらってよかつたのでしょうか？……いえ、私はカラクリな訳ですから厳密にはマスターは未だ童貞なのでは。）

「段蔵は初めてではござらぬが。」と、言おうと思つたのだが、「誰とやつたのか？」と聞かれた場合、極秘任務の搾精任務がバレる危険性を考えて否定も肯定もしないことにした。

「……気持ちよくなつていただけなのであれば、段蔵も嬉しい？でござる。そして。」

そう、そしてこれは性処理だ。

射精しそうならば我慢することなどない。

そう、段蔵は腰を動かし始める。

「だつ段蔵ちゃん!?待って!?でるでるっ!」

「マスター存分にお出しくだされ。」

「でも段蔵ちゃんっ!?膣内っ! たっしかに大丈夫なんだっろうけどっ!」

こういうのは結婚とかそういうのを考えてから、と言うほど立香は紳士ではないが、それでもたまたまオナニーを見られて、手伝ってもらえることになって、そして膣内射精とは急展開すぎないか？と思う彼だった。

「大丈夫にごさる。オフにしてあるので受精の心配はないでござる。……ですがマスター、マスターにならこの段蔵っ。」

その言葉をはつきりと感じ取り感情の高ぶりを抑えられない立香。

腰を激しく動かし、ポニーテールが大きく揺れる。

膣内をきつく締め上げ腰をズン！と落とす。

多くの男性に様々な使われ方をした女性器は人間であればゆるゆるかもしれない。それでも段蔵は形を変えることなく、締りの良い膣をさらに締め上げて立香のペニスをしごき上げる。

そんな動きに耐えられるはずもなく、立香は射精する。

「でるっでるでるでるでちゃうっでちゃうよ膣内につ段蔵ちゃんに射精すっ！」

びゆるっびゆるっ………びゆる

子宮口に当てられた立香のペニスから精液が吐き出され段蔵の子宮に流し込まれる。

（射精を確認………3ml（内精子量2億）、サラサラとした精液で………この量ならば隔壁を開けていても受精はできません………ペニスが急激に収縮。）

『／＼／＼ノーマラート／＼／＼耐圧限界4%』

ずるつと段蔵が腰をあげるとふにやふにやになった男根が立香の下腹部に倒れ、体液で皮膚を汚す。段蔵の女性器は潤滑液で多少てらてらと光っているが、ぴつちりと閉じ、沈黙した。

段蔵は既に子宮口から抜け落ち膣道で止まる精液への意識を閉じ、マスターに目を向ける。立香は過去最高の射精を迎えた直後で、腰を抜かしており、息も絶え絶えといった感じだった。

「だっ 段蔵ちゃ……ありがと。 段蔵ちゃんも……ぜー……気持ちよかった？」

「……もちろんでござる。 またしたくなったらお声がけくださいれば即座に。」

「よかった。 ……ぜー……凄かった。 過去最大の射精だった。 ふー……。」

「……。」

「段蔵ちゃん、一応ちゃんと責任は……取るから。 できちゃってたら……：ジャンヌのこともあるし。」

ジャンヌダルクが妊娠した話は既に広まっており、人の口には戸を立てられないということが如実にわかる。 ゆっくりとお腹を大きくし始める彼女に隠す手立てはない。

「マスターはお優しい。 段蔵もまたマスターと……交わりたいでござる。」

段蔵は少しだけピロートークを楽しみながら、暗部の任務があるために部屋を後にす

る。正直気持ち良さがどうというよりはマスターの役に立てたのなら良しということにした。

段蔵は霊衣を着なおし、秘部を覆う布が濡れることを考えたが結局任務終了まで汚れることはなかった。

アタランテ・オルタの慟哭（酒呑童子十メアリーリード  
（ライダー））

アタランテ・オルタは怒っていた。

山の中を駆け回り、走る。4足で走る様はまさに獣といった風体だが、彼女の美しい肢体から人間の女性だということはわかる。すらりとした体つきに似合わない筋肉質でハリのある体は男を魅了することだろう。

彼女が怒っている理由はこの山にある。

この山は子供を贄として捧げ、村の豊穡を祈願する風習を未だ続けていた。

そして神と言われるほどの存在がいるのが事実として確認されたのでカルデアがこの地にサーヴァントを超越することになったのだが、最初は彼女アタランテ・オルタがくるはずではなかった。

当然といえば当然で、どう考えても彼女にこの「子供を贄とする」というものは禁忌

に等しい。ことが丸く収まる可能性もあるのに全てを滅ぼしそうである。

「どごごだあつ!!」

彼女の顔は憤怒に染まりきり、美人とはかけ離れたまさに殺人鬼のような恐ろしい形相だった。

彼女が怒っているのは、件の村人に対してだった。

カルデアで誰を向かわせるかという話になった時たまたま近くを彼女が歩いており、獣ごとき耳で聞き取りスタツフを脅しながら転移させた。

そして周期的観測から今日、また贄として神に子供を捧げられる。

子供は10歳程度の女の子で、差し出したら2度と帰ってくることはない。

また、神ではないものの膨大な魔力を持った存在がこの山にいただけはわかった。まさに神だ。

彼女1人でどうにかできるかは微妙だが、今日のおなごだけでも助けたいと彼女は山の中を駆け回る。

彼女が2時間駆け回った末に、小さな生命力を複数感じ取ることができた。

（あ、どごごがああああああ!!?）

おおよそ生物が出せる速度ではない速度で、周りの木を弾き倒しながら村へ到着する。溢れ出る土煙、地響き、村の者はそれこそ神の怒りを買ったのだと思っただろう衝

撃が走る。実際そうだが。

「お、いつ！長を出せえ！」

アタランテ・オルタの右手には若い男が頭をがっしりと掴まれていた。首がつかつているのが幸いか。

村に現れた化け物に勝てるはずもないのは誰もが察してはいる。しかし村の男たちが槍を持ち、構える。

「……待たれよ。」

そうしわがれた声があたりの緊張を解く。

老人の声、しかし声は不思議と響き、誰の耳にも届いていそうだった。

「お前が長かつ!!」

アタランテは掴んだ男を思い切り周囲の兵士に投げつけ問いただす。

「そうじゃ……ボルガという。」

「要件は一つだ。子供はどこだ?! 贄となる子はあ!!」

そのことを伝えた瞬間村はシンツと静まり返る。しかしそれは「何をいつているんだお前は?」というような優しい穏やかなものではない。ただただ触れてはいけないことに触れた寒々しい空気だ。

「……お主が誰か知らんが。教えるわけにはいかぬ。」

「この場の者を殺してもいいということかあつお前含めてえー！」

死の圧力を、戦士でなくとも感じるほどの殺気があたりに充満する。母親は震え上がり、戦士たちの膝は笑う。しかし村長はしばらく黙った後、「ついてきなさい。」とだけ言つて御付きが賛成せずとも下がらせアタランテと一緒に歩き始める。

10分ほど歩いて、少し高い丘部分にたどり着く。

「……お主からは子供を大切にする者の優しさと、我欲をなんとしてでも突き通す暴虐さを感じ取れる。……理由は？」

「……私は子供たちが笑つていればそれで良い。どこだ……どこにいるっ！」

「今日贄とされるのはルテイという少女。……この村は昔から森の中にあるにも関わらず運に恵まれなんだ。」

「……運だと?」

「災害が起きて村半分が土の下に、山頂の水が汚染されて飲み水がない、謎の疫病で女だけ死ぬ、食物が腐る不思議な病原菌、獣の大量発生、数をあげたらきりがなが、これがほぼ同時に起こり続ける。」

「……………」

「昔、ある少女が山上で祈つたそう。毒ガスが出ているのを知りつつも神に一番近い場所ですつたそう。年齢10。女の子が死んだ年、災害はピタリと止まりそれ以降一度

も村人が理不尽な死を迎えたことはない。」

「だからと言ってっ！」

「……ここに住むものは仕方ないと思っておる。女の子の両親も泣き崩れながらも差し出した。」

「……ここに住まなければいいだけだろうっ！」

「あんたは土地に生きる者の使命を知らんのか？」

そんなのはアタランテにもわかる。

彼女もずっと昔はその地で生きるという矜持を持って生き続けた。

しかし……しかし、それは子供の命を捨てる理由にはなり得ない。そう思ってしま  
う。未来を潰したくなんかない。と。

「……わしらだつて辛いんじゃない。」

「……。」

「ルティも喜んで身を捧げようとしておつた。」

「！」

アタランテは老人だということなど構わずに胸ぐらを掴み持ち上げる。彼女の膂力  
なら小石を持ち上げる程度に等しい。

「そんなんっそんなわけないだろう！」

アタランテはそういうと老人を老人とも思わないほどに地面に落とし、走り出す。

地面はえぐれ、尻もちをついたばかりの長に土がぶちまけられた。

逸話によれば山頂に行けばいいというのはわかる。

急がねばならない。

ガスが今でも出ているのかは定かではないが、日没が近い。夜など生身の女の子がいていいはずがない。

彼女のあまりの早さに空気は弾け飛び、木々はなぎ倒されまるで逆再生された土石流のようだった。

アタランテは走る。

昔救えなかったロンドンの子供達をもう2度と裏切らないために。

本日日曜日、カルデアの食堂では様々なサーヴァントが食事をとっていた。もちろんサーヴァントは食事を不要としているのだが、彼らもまた人間で、生前は同じご飯を食

べるいち人間だったものが多い。

鬼もまた酒やつまみ、肉を食らっては人を困らせていたので、もう人を食べることはないにせよ食堂に来て仲の良い者とご飯を食べ続けるといふこともある。

「ほれえ……ないんも食べへえ？」

聞いているだけで胸焼けがしそうな甘い緩やかな声、これが清純な室町時代の乙女とかであればまだ理解がある。

しかし目の前のおなごは人ではない。

身長150cmにも満たない小柄な女の子はニツコリと笑ってこちらを覗く。

自身の上腕に頭を擦り付けてきながら肩にツノが当たって若干痛い、差し出されたスプーンの上の角煮を頬張る。

「あーんっ。」なんてあまいものではないが、付き合わねば後々面倒だ。

「ええこ、ええこ。」

頭を撫でようと少し体を伸ばして、無理にでも頭に手を載せようとする姿は可愛らしいが実際は飼われている猫のようなものだという自負はある。

「その大きな瓢箪には何が入ってるんだ？………毒か？」

「これえ？……あんさんには毒かも知れんなあ？この間あんさんが寄越してくれたもん。」

酒呑童子が瓢箪を傾け、いつもの盃より小さな白い盃に口を向けると、瓢箪の中からどろっとした白い液体がゆっくりとこぼれ落ちる。途端に周囲に生臭さが広がった。

彼女のいつもの甘い匂いとは違う、まさに「雄臭さ」。

「あんたも飲む?」

「……また今度、な。」

酒呑童子はそのまま盃に入った真っ白な白濁液を飲み干す。喉に通りにくいよう何度かえずいてはいたが、飲み終えた頃には美味しい果実を頬張ったかのように穏やかで心地良さそうな面持ちになった。

「……ふはあ……ざーめんとかゆうたつけ? 異国の言葉はわからんけどもお、美味しいで?」

そうそれは僕が贈った物の一つ。酒ではない。

あらゆる生物の雄種が出す精液を混ぜ合わせた精液のカクテル。その数や50種類。流石に精液を飲んで楽しめるほどいかれてはいないので、断っておくが、よく飲めるなあとは思おう。

「おーい! 酒呑童子いー!」

2人で談笑し続けていると、近くに人類最後のマスター藤丸立香が駆け寄ってくる。曰く彼は今日本の歴史問題を解いている最中で、当時の伝承などを調べる課題を設けら

れているらしい。

「あつこんにちは。」

ふむ、礼儀正しい。

「こんにちは、人類最後のマスター君。僕は……ナインと呼んでくれると嬉しい。」  
「僕？」

隣で酒吞がニマニマと見つめてくる。

「うるさい、一人称が安定しないのは仕方ないんだ。」

「ふふ、かわええ、かわええなあ。」

と小声で小突き合う。

「あつ僕は藤丸立香です。ナインさんは酒吞童子とお知り合いです？」

「ああ………お「尻」愛かも知れない。ともかく世界を救ってくれてありがとう。」

「そんなつ、僕じゃなく英霊たちのおかげです。」

立香はかしこまって自嘲する。

その様にナインは顔をしかめながらも「酒吞に用事があるんだろう？」と話を促して、彼女に別れを告げて席を立った。

「悪いことしたかな？」

「ん、気にすることあらへんとおもんけどねえ？」

酒呑童子は遠ざかっていくサインに少し寂しさを感じるが、マスターの用事もあることだしまた後で会いにいけばいいかと割り切ることにした。

瓢箪の口を閉めて、他の瓢箪から酒を口に含み、フツと霧状にして吐き出す。

あたりの生臭さを消し、酒の甘い香りが周囲を塗り替えた。

アタランテ・オルタが駆けつけた頃、山頂には一人の少女が倒れており、その脇に大きな縦3m横5mほどの大きな毛玉があった。

アタランテの存在に気づいたのか、少女と毛玉がこちらに向く。

それはとてつもなく大きな牙を持った猪、いや、どこかで見たことがあると悟りアタランテは考えを改めた。

（魔猪か！）

すぐに少女の元へと駆けつけ、魔猪から引き離そうとするのだが、動く瞬間違和感を感じた。それは少女、おそらくルティの手。

彼女の小さな手は魔猪の剛毛をがっしりと掴んでおり、まるで親子のようにしつくり

とくる。

「……………大丈夫なのか？」

「お姉ちゃん誰？」

「私はルティを救出しにきた……………他国の者だ。」

それを聞くと訝しげな顔をして疑ってくる。

「村長に問い詰めた。この村の事情を知った。だが私は納得できない。だからルティを連れ戻しにきた。贄などにはするものか。」

その言葉に嘘はないと判断したのか一段階ほど警戒が解かれる。

「ルティ、お前が犠牲になる必要はないんだ。」

その言葉を聞いた途端ルティの表情が変わる。ルティは先ほどまで怯えたそれこそ年相応の女の子の顔だったのだが、すぐに激憤した。

「犠牲!? 犠牲じゃない! 私は捨てられた……………騙されてるねお姉ちゃん。」

「なに？」

「どうせ「私が自分から身を捧げた」とか「全ては村のために」とか言われたんでしょ？」

「ちつ違うのか？」

「全然違う。私は生きたかった。将来はこの街を出てお花屋さんで必死に働いて、幸せに暮らしたかった。でもそれを語ったらみんながいじめる。「お前はここから出てはな

「らない」「お前は村を滅ぼす気か」って。しかもお母さんもお父さんも「なんてことを言うんだ！」って私を殴った。それから……………」

ルティは溢れる涙を拭うこともせず憎悪でいっぱいな顔をして叫ぶ。

「夜寝てたらっ！いつも優しくかったお兄ちゃんが突然私に襲いかかってきた。股をいじってきてすごく痛かった。やめてって言ったのに、助けてって言ったのに扉の外にはお父さんとお母さんがこつちを見て笑ってたっ！それからずっと今日まで犯されて踏みにじられて、ようやく解放された。山頂で私は「人」から解放された。」

ルティの慟哭はどこにでもありふれた事実だ。

子供が犯され続けて、奴隷のように扱われ、無残な死にざまを遂げる。珍しくはない。しかし目の前の子供を救いたいと思う一人のサーヴァント……………一人の人間にはあまりにも禁忌だった。

「……………その猪は？」

「この子はね？私。……………私達。……………昔からそうやって子供が、いらぬ子供が集まってできた憎悪。」

「憎悪？」

「そう。……………お姉ちゃんは心底……………私たちを哀れんでくれてるんだね。」

「……………私は君たちが苦しい思いをしているときにそんなことを想像することもなく

生きていた。」

「別に誰だって他人の不幸は見えづらいつて思うよ。でもこの子を殺さないで。」

「……………君は？」

「私？私はね、今、人に見えるかもしれないけど、すでに生きてはいないよ。」

「その子供の憎悪の1つが出ているに過ぎないということ……………か。」

「そう。じゃあねお姉ちゃん。私は最後に「普通の大人」と会えてよかった。」

その言葉は周りに反響して消えていく。

彼女の頭の耳はそれを明朗に感じ取り、深く、深く心に重たいものがのしかかった。

「……………結局私は子供の憎悪の集合……………またジャックを救えなかったのか。」

アタランテは夕焼けを見つめる。

その目に光はない。

魔猪に近づくと、それこそ神ごとエネルギーを感じる。

(これが……………、この子が観測された存在か。)

魔猪はアタランテを見て、目を細め、アタランテの顔を舐める。それはまるで子供がお母さんに甘えるように優しい動きだった。

アタランテはもはや無気力になりつつあったが、そこで途端に腐ったような臭いが獣

ごとき鼻を殴りつけてきた。

最初こそ敵襲か何かかと思いきや戦闘態勢に移行するが、違う。

（……………あれはっ……………せつ生殖器っというやつか!?)

魔猪の股間にはその体軀に見合った大きさの男根があった。

まさに獣ごとき不衛生極まりない見た目と臭い。しかしその臭いは獣と化したアタランテにはひどく動揺する臭いではあった。

女として嫌悪する気持ちを、覆い隠し潰すような深い獣欲。

（くっ目を背けられないっ!?!……………あつ）

気づけば魔猪のペニスの竿部分に頬ずりしながら、よだれを垂らしていた。普段であれば不潔と思うことも今ならば逆らえないとわかる。

アタランテは迷うことなく口に魔猪の性器を含んだ。

（おつ大きいっ……………でかい。しかもなんだこの形……………コンクリート用のドリルのような……………）

口内で下をドリルの刃のような部分に沿わせて、刃と刃の間に溜まった恥垢を舐めとり飲み干す。先端からはとろりとしよっぱいカウパーが垂れ出てきてむせる。

性器の5分の1程度しか口には入らなかつたが、目線の先のものに気づいて驚く。

(なつあつあれは!?………辜丸………か?デカすぎる。)

アタランテの視線の先にある2つの大きな玉。

ボーリング玉ほどの大きい黒い辜丸はまさに精液タンクと言つてもいいほどの容量を見てわからせるほどだった。

ぐちゅつぱつ

アタランテは十分唾液ででろでろになったペニス辛口を離す。

己の秘部のムズムズについて手を持っていくと、黒い下着のような霊衣はすでに愛液を吸い取つて水浸しになっていた。

一本の毛も生えていない秘裂は下賤な獣のように獲物をよこせと強く鳴いた。

(こつこつこれでは私が欲しがっているようではないかっ!)

アタランテは恥ずかしさのあまり我に帰つて魔猪の排除を考えるが、この魔猪こそが子供達の依り代だと思ひ出すと、手を止めるしかなかつた。

母から捨てられた子、父から捨てられた子、愛情を知らぬ子。

彼女は自分が母親のように、子供たちが貰えなかつた愛情を少しでも受け取れるように振る舞うべきでは?と思つてしまう。

アタランテは自然と地面に膝をつき、尻を後ろに突き出して、媚びるように股の霊異をずらす。

左手でドリルチップを支え、己の秘められた部分にあてがう、

魔猪はすでに獣のように（実際獣だが）鼻息を荒くして、腰を前へとゆっくり突き出した。

メリミリツにゆつにゆるろろっ

アタランテは神話において男を知らないわけではない。

ゆえにその性器と性器の交わりが普通とは異なる挿入の感覚であるとすぐにわかった。

「ふぐっおっおおおおおっ!」

最初にぴっちり閉じていた膣肉が押し広げられる。そのまま無理やりにこじ開けられるわけではなく、細長いペニスドリルが土へと埋没していくようにアタランテの膣道を掘り進めた。それはまさしく抵抗のない挿入というように気持ちが良い。

もちろん長さは容易に人の域を超えているが、捻って膣道をえぐられるなんて誰が思おうか。

本来ピストンなどせずに射精をするのだが、魔猪はもはや目の前の雌に遠慮することはなく、腰を勢いよく突き入れては引き抜き、突き入れる。

「おっほおっほっ……おおっ……ふぎいつふおおっ!」

突き入れられるたびに子宮口をこじ開け子宮に侵入してくる先端部分。引き抜くた

びに今度は子宮口を引き摺り出そうと引つ張り上げてくる。

そして竿のドリルの刃が膣壁を滑らかにえぐり、いまにも山を失ったナツトのようになつてしまふ。

急いで分泌される愛液は白く濁り、泡立つ。

どちゅつぐりゅ！ぐりゅんつずによるろ！どちゅつぐりゅつ！ぐりゅんつによるろっ！

素早いピストンがアタランテを快楽の白き海へと誘う。

頭は劈く刺激で意識を保つのでやつとだった。

霊衣が衝撃に耐えきれず、第二再臨の白いブラジャーのような衣服からこぼれ落ちる美乳。

淫らに揺れ、乳首を膨張させる。

「あつぐつおとおおんっ♡おっ!?!お、お、っ！」

時折子宮口に入らず、子宮口周りの窪みに先端が引つかかり刺されたような痛痒さが卵巣付近を刺激する。

魔猪のピストンはより速く、正確になつていき、最初こそ10回に3度ほどの子宮侵入出会ったのが、今では100%入ってくる。

陰核は喜ぶように勃起して充血していた。

（ま、まずいっ………んおっ墮とされるっ!?)

自分から受け入れてしまった罪悪感ももちろんあるが、それとこれとは別で、膣内に射精されるわけにはいかない。ジャンヌダルク事件のことも当然知っているので女性サーヴァントたちの安心はなくなった。もちろんマスターと子供が作れる可能性を喜んでものも多いが。

（ごっこのままではっ！だっがダメだあっ！）

わかつている。

魔猪の精子がどれほどのものかは知らないし、繁殖能力があること自体今知ったのだが、とにかく膣内で射精をされるという行為は簡単に明け渡してはいけない女としての特権だ。相手が誰であろうとも、きちんと段階をつとアタランテは思う。

しかし同時にこの雄々しさある生殖行為、交尾は逃げづらい。

体勢の話ではない、獣としての話だ。

普段の正常なアタランテであれば回避できたかもしれない、途中で辞めることもできたかもしれない。しかし今の彼女は攻撃力を得た代わりに獣のような気性の荒さ、獣のような性格になってしまっている。

強気雄にこれほどまで性を貪られているのに、途中で逃げ出すことなど獣としてNOだ。





るっ！

「ま、っどっどれだけっあ、♡ぐおっおっほ♡」

アタランテの下腹部は前座ですでにポッコリと体のラインを少し崩す程度膨らんでいたが、再びその盛り上がりを大きくし始めた。

30分ほどかけて、本射精が終わりを迎える。

アタランテは総計6度の絶頂を迎えていた。

当然だが前座でほとんど尿も潮も使い切っており、絶頂しても何も吹き出ささないが、尿道は未だパクパクと餌を求める鯉のように痙攣していた。

あまりの絶頂に踏ん張りすぎて何度か放屁などを出してしまうが、事前に大の方の用は足していたので、実が出ることはない。しかし肛門は踏ん張られたことで盛り上がった。

彼女の腹部は妊娠したように大きく膨らみ、いやらしい見た目へとなっていた。

もとより、肌の露出が多い再臨姿ではあったが、それに加えてマタニティー的な「女」を感じさせる見た目にエロさが際立つ。

ぶぶっぶりゅっ！

「あゝ♡」

最後の攻撃というように子宮口に、硬いガムのような精液を吐き出して栓をすると、魔猪は腰を引いて、無理やり性器を引き抜いた。

「ずよろろろろろつにゆるんっ！」

「んひいつ!?え、♡」

彼女は四肢に力が入らず地面に突っ伏した形で膝たちのまま顔面から倒れこむ。痛さを感じる余裕もなく失神して地面で鼻血を拭くこととなった。

魔猪はアタランテの分泌液が付着した性器を体内へゆつくりと格納すると、まるで幽霊のようにゆつくり消えていった。

「メアリー、元気にしてたか？」

「うんボクはいたって普通だね。まあむしろ退屈かな。」

ナインが食堂を後にすると、廊下でメアリーに出会う。顔に入った大きな傷、女性として隠したとしても同情されるであろうそれを彼女は見せつけるように顔をナインへ

と向ける。

メアリの小さなおっぱいがおでこに当たって股間が少し反応したのは内緒だ。

「少し、当たっちゃうね。」

メアリがいうのは頭につけたうさみみのようなアクセサリーのこと、肩車をしているいまのままだと天井にかすってしまうということだった。

「降りるか？」

「……いや、ボクはできればこのままがいいな。」

「俺もその方がいいね。メアリのたんのおまんこが首筋に当たって気持ちいい。」

「……えっちなだね。」

仏頂面でそういうことを言うのはいいけども、恥ずかしさを隠すのはやっぱり下手くそなメアリーだった。やはり女の子扱いされているのはむず痒い感じかな？

ナインはメアリーの足首を掴んでこねくり回すと、くすぐったそうに笑って頭をぼかぼかと殴られた。

「いたいたい。サーヴァント強すぎる。」

「いたずらするからだ。」

「へいへい。……それで、ジャックは？」

「……もうあっち行ってる。早くきてってうるさかったよ。」

ナインはそう聞くと、仕方ないなあと思いつながら走り出す。目的はやはり殺人鬼幼女の元へとだ。動きが早くなったことでメアリーの股に首が食い込んで思わず「ひうつ！」と声を漏らすメアリーを見計らって、体の下に荷重がかかる際にタイミングよく足を下へと引つ張る。

振動に加えて、足を引つ張られたことでメアリーの股間にダイレクトに衝撃が伝わり、彼女が悲鳴をあげたのはい言うまでもない。

ナインは頭をボコボコにされたが。

アタランテが目を覚ますと、夜だった。

山頂は冷え込むが、サーヴァントにとつては大したことはない。しかもあの凍土の地を駆け抜けた彼女ならなおさらだ。

しかしもう一つ、彼女を寒さから阻害していたのは、腹部にある魔猪の精液だ。射精されてから意識を失つてすでに2時間ほど経っていたが、未だ熱く、みなぎる生命力。

（ひうつ！んなに………しかも♡）

下腹部を押ししたり、なんとか腹筋を締めようとするがなかなか大概へと排出されない  
精液。子宮口に栓をされているのだから当然と言えば当然である。

おおよそ1週間ほどはこのままになることだろう。

(こんなにつ受精したらっ♡……………いや、それより。)

アタランテは震える足を叱咤し立ち上がる。

精液のせいで前方向に荷重がかかって倒れそうになるがうまく感覚を取り戻す。幸  
い魔猪の魔力を多く受け取ったのか、今ならば1人で魔神柱を倒すことができそうな  
どだった。

「私にはやるべきことがある。」

アタランテはずれた霊衣を元に戻し、できうる限り体を綺麗にしてから、周囲を見渡  
す。

魔猪は見当たらない、気配も感じ取れないがこの山に存在していることはなんとなく  
わかった。

アタランテはその場から加速する。

腹部が重く、動きづらいがしばらく動いていけば慣れ始めた。

またから精液が溢れ出てこないのは僥倖とも言えるかもしれない。

(私はっ私はいっつらを許さない。)

魔猪と交わり、夢の中で憎悪と対峙したような気がする。

復讐は何も生まない？空虚だ？

いいや違う。復讐は残った者の責務だ。心の安寧だ。そしてルティの怒りだ。

アタランテは腹を丸くしながら4足で山を駆け下りる。

村へと向かう。

村ではお祭りのように火を灯し、豊穰を祝っているようだった。

村の真ん中の火を灯した矢倉にミサイルのようなものが着弾する。

村人たちは悲鳴をあげ、何があつたのか、誰かわからないか、と声を張り上げる。各々

何かトラブルかと思ひ動くが、叫び声があたりへ木霊する。

村の灯火は消え去り暗闇の中次々と静まり返る。

鉄の匂いと肉が潰れ、裂かれ、弾ける音。

一目散に散開する村人たちは各々四散していった。

村長は何が起きているのかわからないが急いでできうる限り走って逃げる。

後ろに誰かいる。

暗くてよくわからないが背格好から女であることはわかる。妊婦だろうか？

「お前は嘘をついたな。」

その声で誰だかわかる。

昼に見た体型とは異なっているが、特徴的な響きやすい声だ。

「お前は嘘をついた。……………子供を殺したな？」

「ちがつあれはあのガキがあつあああつああ」

大きな丸い肉塊が宙を舞った。

それは花束のように空で満開に咲き誇り、鮮やかな薔薇のようだ。

# 幕間1 (マシユ+エルキドウ+ジャンヌ (ルーラー) +ジャック)

部屋は薄暗く、湿度が高い。

豊潤な女の香りが充満している。

「んつくふ……………はあ……………んふ……………」

荒い吐息が流れておおよそ1時間、彼女は2度の絶頂を迎え、それでもなお溢れる性欲に嫌気を感じつつ、携帯端末、スマートホンの画面に表示された好青年を見て自慰に耽る。

「せんぱい……………はあつ……………せえんぱつ……………あほつお……………せんっんひっあ……………」

全裸で横たわるベッドはすでに汗と雌汁でびしょびしょになっており、なおも左手で陰核を摩って快楽を得ようとする。

右手には13cm代の黒い棒は彼女の蜜壺を穿ち、大きくこじ開けていた。幅2.5cmほどのそれは、すでに彼女の処女膜を破りきり、最奥を撫でたのはかなり前の出来

事だ。

アマゾネス経由の大手通販会社から匿名で購入した、おもちゃは男性器を模しており、平均的サイズの代物だ。

最初こそ、挿入することに戸惑いや、アブノーマルさを感じた彼女ではあったがとある女性の部屋で自身より余程アブノーマルなデイルドを見つけてからは躊躇うことは無くなった。ただただ想念を描く想い人を脳内で想像しながら前後に左右に動かし続ける。

頭の中では彼が自分の名前を何度も口にしながら腰をふる姿を想像して悶える。

「だつめですよ？せつんぱっちゃんとお……：……膈外じゃつないつとお……。」

そんな媚びた言い方では強請っているようではないかと誰しもが客観的に思えてしまいが、あくまで妄想だからこそだ。実際の交渉ではきつと拒絶するはずだ。……たぶん。

ぐつちよっ♡ぐつちゅ♡くちゅっ♡

特有の粘性を持った液体がかき混ぜられる激しい水音は部屋の外まで聞こえることはないと確認済みだが、声は必死に抑え続けていた。

左手を陰核から放し、乳房の先赤く腫れた敏感な部分をカリカリと引つ掻く。

「ふうっ！……あああっあっ♡」

咄嗟に出た声をすぐに右手で抑える。

口に若干自分の愛液が入って不快だが、漏れ出した声がドア先へと響いてないかしばらく体を止めて耳を澄ませる。

にゆるお………にゆるっ♡

右手をおもちやから離してしまったので、膣道の締めまりからゆつくりとシリコン製の男根が抜け落ちる。水たまりにベチャツと落ちて一瞬膣内に外気が入って変な刺激を感じ取った。

「はあっあ」

すぐにピツタリと閉じた秘裂は再度おもちやでこじ開けられる。

にちっにちにちぐちい

何度も動かして、滑りをよくして、膣壁も柔らかくほぐしてきたというのに、今だに挿入する時にすごい物理的な抵抗を感じるといふことはやはり生まれついた特性として締めまりがいいのであろう。

おもちやを反転させて反りが背中側、尾てい骨側に来るようにする。

先ほどとは違う膣壁の部位にカリが引つかかかって抉る。

今まで何度も絶頂してきたにもかかわらず、まるで溜め込んでいた元が一瞬で解放されたように下腹部から脳へ電撃が走る。

「んおっ♡いゝぐっイクイクっいっぐっ!!♡」

腰を反射的にベッドから浮かせて、ディルドを入れるだけ思いつきり膣内へ突き刺す。絶頂と同時に子宮口右横にディルドの硬い先端がこりゆっ!と当たって快楽を一気に増幅した。

角度を上げられた砲台から勢いよく透明な液体が吐き出され、部屋の壁にベシヤアア!とぶちまけられる。

同時に腰がガクガクと痙攣してさらに広範囲に潮が撒き散らされる。

後々どんよりとする羽目にはなるのだが、毎度毎度彼女、マシユ・キリエライトは学習しないのか、それとも絶頂を最大限楽しみにたいのか壁を汚し続けていた。

ひと通り潮吹きが終わって、ベッドの横にテラテラと光るディルドが投げ捨てられる。マシユは脱力した状態で天井を眺め、端末の立香をちらりと横目で覗いた。

「はっやく先輩のちんちん……欲しいなあ。」

その願いはすぐになかうことになるのだが、今はまだ日課を続けることしか頭になかったマシユだった。

緑色の透き通るような美しい髪を束ねた中性的な見た目の成人が少し楽しそうに部屋に佇んでいる。

彼、彼女、エルキドウは現在カルデア研究施設へと赴いていた。

聞くとところによると神造兵器のデータを取りたいとのことだった。暇だったこともあつて快く応じたのだが、データ協力から一ヶ月後再び呼び出されてみれば、「靈基を改良できる。」という旨を伝えられた。

しかしそれが可能であつたとしても、マスターである藤丸立香とよく話し合つてからと断つたのだが、当の藤丸立香は「ええ？危なくないならエルキドウが決めていいよ？」と軽く言つてしまったので、元に戻せるかどうかの確認だけしてモノは試しだに乗つたわけだ。

もちろん安全だと言われて、研究データも見て大丈夫だろうということは理解できているので改造の許可を出した。

「さて、始めてくれていいよ。」

エルキドウが全裸のままGOサインを出す。

彼の肉体は細身でありながらしっかりとした健康な体つきに見える。外見的特徴から男か女かを判断することはできない。どこぞの皇帝のように性別はないのはわかつ

ているのにもかかわらず男性スタッフも女性スタッフも股間や胸部を凝視してしまう。もつともエルキドウからしてみればそんな視線などいつものことだ。

マスターである藤丸立香には実際に股間を晒して確証を得させたこともある。

エルキドウが立っている場所を中心として、立体の魔法円のようなものが現れ始める。周囲はまるで嵐のように風が吹き荒れ、屋内なのに台風の中にいるようだ。

パリパリと電気が取り囲み、エルキドウの周りをまるでLHCのように光の輪が回転し始め空気を割る。

もはや人がいれば死は免れない場所でも、エルキドウは悠然と立ち、笑っていた。

床の発光した魔法円から光の柱が立ち、空中の魔法円と結合して、光輪とは逆回転し始める。

『準備ができました。』

『了解、シュレディンガーの匣解凍……物理的分岐特異点突破。』

『突破確認。……ヘンペルの白鴉……確定。』

『……ウイグナーの友達を発見……事象座標固定急げ！』

周囲に驚きと緊張が走る。

『……固定確認……成功！』

成功の声の研究施設最重要室に鳴り響き、己達の実験が正しかったこと、そして計画

のさらなる深淵へと至ろうとする道のりがまた一歩進めれたことに研究員達、カルデアスタッフ達は喜びを露わにした。

エルキドウのいる部屋を映し出す超大型ディスプレイに目を向ける。塵と埃が無い上がりしばらくエルキドウが見えることはなかったが、収まると、先ほどの嵐のような室内とは打って変わって静かな部屋にポツンと彼が立っていた。

「いや、彼女が。」

「つまるところ、この僕の外見を見て察するに実験は成功したようだね?」

『はいっご協力感謝します!』

「いやはや僕も人類がここまで進化していることを知れて嬉しく思うよ。」

『それで……………体は戻されますか?』

彼らが行った実験の結果、エルキドウは一回り小さくなっていた。痩せた男のような体系はなくムチムチとした女性的なラインをしており、胸部には大きくはないが美しい乳房があり、足と足の間には女性器がついている。

「うーん、そうだねせつかくだし親友に見せてみて驚かせたいからしばらくこのままでいようかな?」

『それはいいですね。』

「ああ、面白いことになりそうだ。クラスの変化や異常もないし霊基も心なしか洗濯したみたいない感じだね。感謝するよ。」

『それは良かった。……そういえばエルキドウさんお仕事探されていましたよね?』

「うん? ああそうだね。平和になって兵器のいるところなんてないから。」

『でしたらこちらで行ってるの別件の実験の協力などお願いできませんか?』

「もちろんいいとも。お礼だよ。」

『良かった! エルキドウさんがいれば1000人力です!』

「どんなお仕事?」

『搾精任務です。』

「……搾精任務?」

『はい、主に生物の雄種から取れる精液を取ってきてほしいんです。』

「わかった。僕でもできるのかな?」

『はい、今のエルキドウさんの見た目なら人族やそれに近い種は興奮するでしょうし。搾り取る器官といいますが、女性器もついていますから。』

「これか。」

エルキドウは自身の股間をまじまじとみる。

「これは人間の女性器と言われるものだろうか?どこまで作られているんだい?」

『全部ですよ。なのでエルキドウさんも気をつけてくださいね?エルキドウさんは宝具のようなものなので妊娠しづらいとは思いますが、絶対ではないです。繁殖に強い個体も確認されています。』

「わかった。……それにしても兵器である僕が妊娠するかもしれないなんて面白そう  
だ。」

『もちろんもしもの時はこちらで最大限バックアップします。それとこの任務のことで  
すが藤丸立香さんには言わないで欲しいんです。』

「どうして?」

『彼には普通の人生を送ってもらわなければならないと思いませんか?』

そこには当然、「彼をいたわる気持ち」や「彼には秘匿しておきたい何か」など様々な  
思惑があることを彼女は察した。

別段隠すことは良い。とエルキドウも思う。親友にはどうすべきか悩むが、聞かれ  
ば答える程度にしようということとで納得した。

「もちろん彼から聞いたただされたら、仕方ありませんが。」

「良いよ。わかった。できるだけ隠し通すよ。」

『ご協力ありがとうございます。』

エルキドゥは霊衣を顕現させ身に纏う。

一応女性体になったので白い蓑のサイズが合わなかったのだが、下着をつけていないのだしロングスカートのようなものかと割り切った。

エルキドゥはもはや美女といつて良い見た目で、当然その姿を見た親友は腰を抜かして倒れたのだが、それはまた別のお話。

ジャンヌ・ダルクは重い体を起こした。

しばらくの間精神が不安定になっていたのだが、何があつたのだろうか？

確か、と思い出そうとすると頭が痛む。

「そうでした……私は、妊娠したんですね。」

毎朝同じことを呟く。

どの精子が当たったのかなどわからない。誰の子なのかなどわからない。それでももし心当たりがあるとすれば緊急特異点で出会った少年ジール。

(あの子は異常な生殖能力を持ってましたし……きつと。)

自身が妊娠していることを知った後はとりあえずダ・ヴィンチに相談しに行き今後について話し合った。しかし人の口に戸は立てられないのかカルデア中に広まるにはあまり日を要さなかった。

(幸い……祝福はされていますが。)

幸いと言って良いのかわからないのだ。

周りはどうやらジークとの子供だと思っっているようで、ジークも「そういうものなのか……ルーラー、俺は父親になった。のか？」と少し困ったように、しかし覚悟を持った男の目つきだった。

ジャンヌはおそらく違うということを伝えるべきだと悩んだのだが、周りの空気と、妊娠の事実で気がすくみ否定できなかった。

ジークとの子供であればどれだけ嬉しかったかと、いまでは思う。

(私は冒瀆的ですな。……この子に罪はない。)

腹をゆっくりとさする彼女はまるで聖母のようだった。

ジャンヌダルクは立ち上がると、シャワーを浴びる。

少し太ったかという程度だが少しだけ腹が膨れているのを見て、通常の妊娠とはワケが違うことを理解していた。

というのも最近、とにかく母乳が出る。

母乳なんて出産してから出るものなので、最初は上着がジワリとシミを作って出血を疑ったほどだった。

「ルーラー入っても良いか？」

「あつ……………どうぞ。」

ジャンヌは罪悪感を感じながらも、ジークの入室を許可する。ジークは子供ができたことを喜んで、そこからは一人の父としてすごく男らしくなった。

あの特異点に行く前から数度体を重ねてはいたので、彼の仔ということにはしやすかったのだが、时期的なずれを誰かが気づく可能性もある。

シャワーを浴び終えるまで待つてもらい、ささつとすませて着替え、紅茶を準備する。

「ありがとう。」

「いえいえ、これも妻の務めってやつですよ。」

「そう……………かもしれないな。」

付き合うという過程をすつ飛ばして、もはや結婚しているのでは？というほどに二人の仲は進展していたのだが、

「ルーラーは今日、何か予定はあるのか？」

「これから少し用事があります。ただすぐ帰ってきますよ。」

「わかった。じゃあ14時ぐらいに俺の部屋にこれるか？」

「大丈夫です。それじゃあさきさつとおわしてきますね。」

そういうと、ジャンヌは第二再臨姿になって部屋を出て行く。

目的地は地下研究施設。

子供のことや妊娠の件を以前から打ち合わせており、子供に害がない方向で情報を集めている最中だった。

ジャンヌがしばらく歩いてエレベーターに乗ると、胸に違和感を感じる。

(まっまたですか。)

乳房の先端はピンピンに勃起して服の上からでもわかるほどだった。霊衣が乳首をこすつて甘い声が漏れるが本題はそこではない。

「はあっ……………んくっ」

乳頭に相当する霊衣がじんわりと黒ずみ、湿つていく。

ジャンヌは今自然に墳乳していた。

急いでエレベーターから降りて、駆け足で指定された部屋へと向かう。

時折研究員が目を向けてくるが、バレていないか心配だった。

部屋に到着すると、すぐに電子音が鳴り響いた。

『第4回搾乳実験を開始してください。』

実験とは名ばかりで特に動いたりすることはないので、目の前に床から突出して出てきた独特の器具が現れた。

搾乳するための牛用の搾乳器である。

体をベッドの上に楽に乗せて、搾乳器の透明なお碗を手に取る。

胸部の霊衣を解いて、大きく張った乳房に慣れた手つきで取り付ける。

途中お碗が乳首にかすって性的快感を感じるが、ここは自慰などをする場ではない。ベッドがゆっくりと回転してベッドごとうつ伏せになる。

ジャンヌの大きい2つの果実が重力に従ってぶるんと下へ垂れる。

まさに牛の乳のように搾乳機が取り付けられた状態で体を固定される。

『準備完了を確認。搾乳開始。』

機械的な音声を感じた後、胸が吸引される。

「ふあっあ、ああんくっ………ふっ！」

チュツコ！チュツコ！チュツコ！チュツコ！チュツコ！

ジャンヌは独特なリズムで吸引される乳首を敏感にさせながら、乳輪付近から出る母乳をみる。お碗から伸びた透明なホースをいっぱいにして搾乳器本体の容器に溜まっていく。

内容量のメモリが1ずつ増えるたびにジャンヌは絶頂に近い感覚を継続的に味わう。

びゆるっびゅっ

「ふう、っぎんっ………はあんっ！」

強制的に絞られる痛さと、乳腺から吐き出される母乳を出す快感、2つが彼女を攻め立てて白い部屋に木霊した。

搾乳し始めの頃は絵の具のような白さだった母乳も今や黄色味が深い栄養満天の母乳で、実際少し舐めて見たときは美味しさを感じた。

一日の母乳量は平均的に人種で800g未満ではあるが、ジャンヌは搾乳実験に赴くたびに量と質をあげ、いまでは1000gを超えることもある。

結局その日は1100gの母乳を出して終了した。

ちなみに13回絶頂した。

「お母さんっ！」

肌を露出した部分がかかなり多い白髪の幼女が顔に抱きついてくる。何度もお母さんじゃないことを伝えて「むしろジャックがお母さんになろっか？」と提案したまでである。



「おかしさ……あつ?!」

「じつとしてろ。」

ナインはそういうと、ジャックの口に唇を押し付けて、太い下を小さな幼女の口に押し込んで歯を舐め上げる。歯茎から舌の根元、唇と歯の間などくまなくなめとる。舌下から溢れ出るジャックの唾液をゴクゴクと飲み干す。

小さな下を口で摘み、ちゆるつと強く吸い上げる。

ジャックは舌を何度も犯されて涙目になりながらもじもじと股を動かす。

10分ほどして、下への攻めが終わった頃にはジャックの息は絶え絶えといったように、自然と小さな包帯で巻かれた手を秘部へと持つて行こうとするが、待ったをかけられる。

「おかあさつ……なんでえ……?」

「メアリーが帰ってきてから。」

「でもっ」

ジャックはたまらずナインのゴツゴツとした腕を秘部にあてがおうとするが拒絶される。腕を弾かれたジャックは絶望したような顔をして、謝り倒す。

もつともジャックに先に手を出したのはナインであることに間違いはないのだが。

「(めつなさい……)。」



ジャック、これは罰だから。ね？

## フローレンス・ナイチンゲールのいじめ解消

平日の火曜日。

藤丸立香は一般の高校生として生活していた。退屈な一限を終えつつも、この平穏な日々を送れなかったであろう子供達の為にも真面目に生きていこうと思う。もちろん本当なら高校に行く必要もないほどに様々な知識を持っており、すぐにでも時計塔などの魔術的機関に属しても良いのだが、保護者が「高校を出るのは当たり前だ。」という思考で説得を試みても難しかった。

保護者は魔術については全く知らないので当然といえば当然で、ほかサーヴァントたちやダ・ヴィンチも「高校くらいは出た方がいいかもしれない。」と口を揃えて言われたので甘んじてその生活を享受していた。

「よお藤丸、飲み物買いに行こうぜ。」

「そうだね。僕もちょうど……、喉乾いてた。」

実際はさほど喉は乾いていなかったし、水道水を飲む程度でもよかったのだが、断るといいうのも野暮だし、都会の水は、ね？

「さっきの前田の授業、なんであんな昔のやつ歴史なんざ覚えなきゃならないのかねえ？」

「テストに出るから、でいいんじゃない？」

「でもどこの誰がどういう経験をしたかなんてテストに出ようが高校卒業と同時に忘れるわっ。」

「だとしてもだよ、きつと。もしかしたら今まさに必要になるかもしれない。」

脳裏に焼きつくは「火」。

業火が全てを食らいつくした町。

何が役に立つのかなんて分からなくても、なんでもいいから答えが欲しかった。歴史の問題がそれに役に立つことなんてないかもしれないけれど、あるのとないのとは天と地ほどの差がある。

「……そーかもな。」

「まあ、事実眠たくなるけどねっははっ。あつすみまつ」

立香は誰かに当たったかと思うと、突然硬直した。

一緒に歩いていたら後藤は突然友人が硬直して顔を普段見ないくらいに歪ませている

のを見ておもむろに顔の写真をとる。

「おい、どうしたんだよ。面白い顔しすぎて写真とっちゃったぞ。おいっ！」

立香の視線の先にはピンク色の鮮やかな色合いをした髪を持つ、豊満な美しい女性が立っていた。

絶世の美女といってもいい顔立ちで、真っ赤な制服は歴史的権威のありそうな装飾を施されており。黒いスカートは白いレギンスと相まってひどく可憐さを強調していた。「うっおっ！すっげえ美人っ！藤丸が驚くのもわかるわあ。」

後藤は人生でこれほどの美人を見たことがなく、立香に向き直って美しさを語り合おうとするが立香は顔を青ざめていて、冷や汗を垂らしているようだった。

「どうした？」

「なっ……………ナイチンゲール。」

「あ？さっきの授業のやつがどうしたって？……………ああ、天使みたいに可愛いつてか？」  
「そんなっ……………なんで。」

「まあ天使というよりは女神だな。おのおっきなお胸！」

立香は急いで走り出し、屋上へと向かう。

一番電波の良い、一番連絡しやすい場所にだ。

急いでダ・ヴィンチになぜ学校に彼女がいるのか聞こうと思った次第だ。もちろん

怒っているとか、やめてほしいというわけではないのだが、もし彼女の行動が独断で、サーヴァントという存在が露呈する可能性があるのであれば止めなければならぬ。

「……変なやつだなあ。……あいつの分までコーヒー買っとくか。」

後藤は甘勃ちしたペニスをバレないようにずらして、売店へと向かった。

「ああ、間違いじゃあないよ。」

「ででも大丈夫なんですか!？」

「そもそも彼女が「私はナイチンゲールです。」って自己紹介して、「あつ歴史上の人が出てきたんだ、すごい。」って思う人がどこにいるんだい？」

ケラケラと笑って答える天才に顔を歪ませる。

「そーだけど……………」

「まあ気にせず普通にしていっていいよ。」

「ええええ……………」

「とにかく……………あつ今はあつ……………めつだつてばつ……………おゝいつ……………ともかく、気

にしないでっ楽しんでおいでっあ、っ」

プー、プー、と電話が切れたことを知らしめる音になる。

掛け直しても彼女が出ることはなかった。途中なにやら忙しそうだったので仕方ないと立香は諦めてそろそろ始まる授業のため教室に走った。

なんとか間に合うと机の上にも買っているコーヒーが置いてあり、「後で金返せよ。」と付箋が貼つてある。後藤の方を見るとサムズアップしていたので、こちらも返すことで了解の意を示す。

呼吸を整えて席に座ると、時間割を思い出す。

(確か次は……………保健体育……………)

立香が机に突っ伏していると、教室のドアが開かれたのでそちらに目を向ける。

「それでは授業を始めますっ!」

と、大きな声を出して入ってきたのは「クリミアの天使」。

可憐で苛烈、まさにパーサーカーといったトラブルメーカーであり、見るだけで発情しそうなパイスラ。

「え……………」

立香はなんとなく察していたのだが、それでもまさか本当にそんなことになるとは

思っておらず乾いた笑いとともに変な声も一緒に漏れ出た。

(まじかよ。)

「みなさん、本日から保健体育の授業を不定期で任されているフローレンス・ナイチンゲールというものです。」

クラス中が絶世の美女に唾然としていた。

情報が追いつかない、処理できないと脳みそが悲鳴をあげて、なんとかクラスで一番頭の回転の早い委員長が恐る恐る手をあげる。

「どうぞ。」

「あつえと、ナイチンゲール……さんってあの?」

「……そんなわけないでしょう。同姓同名ですよ。歴史上の彼女は死んでいます。」

「でっですよねえ。」

含みのある言い方で「死んでいます。」という彼女だったが意味合いを察することがこの場でできたのは立香のみだった。

ただ、申し訳なさそうに手を下ろす委員長にクラス内の全員が感謝をした瞬間でもある。誰もが「まさかね?」と思っていたことを真っ先に質問してくれたからだ。

そしてそこからは質問のしっぱなしだった。

授業が遅れることを何度か示唆したナイチンゲールではあったが、子供の好奇心も仕方なしと全てに対応していく様はまさにバーサーカー。

唯一立香だけは、「どうにでもなれ。」というスタンスで遠い目をしていた。

「ナイチンゲール先生!ご結婚はっ?」

「(生涯)未婚で(した。)す。」

「ナイチンゲール先生は彼氏はいらっしやいますか?」

「(今は)いません。」

おおお!!つとクラスない男子から歓声上がる。

「好きな男性のタイプはっ?!」

「……………特には。」

好きになった男性は幾人かは生涯でもいた。それでもこの身は神に捧げると結婚はしなかった。ただ別段特定のタイプというものはなく一緒に仕事をしたり、様々なことを話し続け好感を持ったことがあるというだけなので、なんとも答えに迷った彼女だった。

女子たちからも多くの質問が飛び交う。

「今はどんな化粧を!?!」

「化粧などしたことはありません。」

その言葉に「まじ？全部天然物？はあああつ!?」つというオヤジみたいな女子の奇声クラス中に響いたのだが、そんなこと気にすることもなく、男子たちは「化粧なし!？」と驚いていた。

「スリーサイズは!?何かツプですか!？」

「……………バスト97、ウエスト56、ヒップ85。Iカップです。」

またもや歓声、どさくさに紛れてなんてこと聞いてるんだと思つた生徒も多い中、嫌そうな素振りを見せることもなく答える彼女にも衝撃が走つた。そして何よりそれこそ漫画のようなスリーサイズを体現している彼女の存在にクラス中の男子が驚愕する。

これは立香も同じで計らずとも己のサーヴァントのスリーサイズを知ってしまったマスターだったのだが、そこには思春期男子の下世話な眼があるだけだ。

「さて、……………私の質問はとりあえず終わりにしましょう。まずは授業です。」

「……………はーい。」

不服そうではあるが、彼女のはつきりとした物言いと、セクハラと言われても仕方ない込み入った質問した罪悪感から男女ともに引き下がった。

立香は「まじかーIカップか。」と惚けていたのだが、教壇からの視線で冷静さを取り戻す。ナイチンゲールは立香を見てニヤリと口角をあげた。

まるで息子の成長を見た母親のような微笑みは立香へのものだということに気づか

ずクラス中の男女を魅了する。もちろん成長というよりは成（性）長だが。

立香はとつきに「魅了持ちかな？」と錯覚してしまうが、我に帰れば黒板に健康について板書していた。

授業自体はいたって普通で、健康的な生活や、適度な運動など普通の授業と変わらな  
い。しかし男子たちは、ナイチンゲールが黒板からこちらへ振り返るたびに大きく揺れ  
るIカップおっぱいに股間をたぎらせていた。

結局授業は普通に終わって、授業時間が終了してからはまた質問の嵐だった。

「その衣装は!?!」

「正式な私の制服です。」

「好きな人とかも!?!」

「いません。」

最後の質問だけは、ちよつとだけ傷心した立香ではあるが、そこは仕方がない。

確かに普段仲良くしている、胸も見てしまった仲ではあるが身近な女性が自身のこと  
を間接的に「好きではない。」と言っているのだから苦しいのわかる。

終始次の授業が始まるまで質問は続き、なんなら次の授業を押ししてまで質問しようと

する者までいたが、流石に「時と場を考えなさい。」とたしなめられてしまったのでその場は終わった。

ナイチンゲールはそのまま2週間、ずっと立香が通う学校で教鞭をとっていた。

彼女の授業は大変好評でわかりやすく、生徒たちの授業態度も大幅に改善されていたからでもある。

嫉妬が怖い女生徒からも「嫉妬することがおこがましいほどの美女」と仲良くコミュニケーションを形成していたので子供のしたたかさや成長力は凄まじいなと彼女も思っていた。

もちろん自身が美女であるとは全く思っていない彼女ではあったが。

しかし困ったこととしては、男子学生からの告白が多いことではある。むしろそれはイベントのように「試しに告ってみた。」というスタイルだ。

中では軒並み断ってしまったために、強気な男子生徒がいじめられっ子を強制的に告

白させる行為まで発展し始めていた。

そして今なおナイチンゲールの眼前に男子学生が立っていた。

その男子学生井上はまさに「ザ・いじめられっ子」といった感じで、身長も小さく、体は細く、気弱そうで、前髪で目は隠れて、根暗そうである。

ナイチンゲールの前に現れた時も体をビクビクと震えさせていた。

「それで？」

「あつあの……………その……………」

ずっと「あの」「その」を繰り返して5分、ナイチンゲールは授業の成績をまとめる仕事があるので早めにおわしたい気持ちはある。

「その……………」

「申し訳ありませんが、暇ではないのでそろそろ言っただけませんか？」

「はいっすみませつあ……………その……………好きですつづきあつてくださいっ!!」

「ごめんなさこ。」

「は……………」

井上ももちろんわかっていたのか少しシユンとしてから下を向く。

きつかけはいじめっ子たちからの強要だったのかもしれない、しかし本当にナイチン

ゲールのことを好きであるという気持ちはあつたのかもしれない、とナイチンゲールは落ち込みようから察する。

校舎の陰からはゲラゲラと笑う声。

(はあ……仕方ありません。)

ナイチンゲールとしては、いじめは唾棄すべき最低な行為だと捉えている。

というのもしじめは精神的な病気だ。その病気を見過ごすことはいくら万能の天才から止められていても許せるものではない。

ナイチンゲールは素早く後者の裏手に回ると、3人の男子学生が腹を抱えて笑つていた。

その男子生徒たちの首根っこを掴んで、すぐに井上の元まで戻る。

左手に2人、右手に1人だったので右手で井上の襟を掴んで加速する。

おおよそ淑女が出せる力でない、おおよそ淑女が出せる速度ではない。

しかし夕方であつたこともあつて、あたりに生徒はおらず、彼らが体育倉庫に運び込まれた姿を見るものはいなかった。

「なっなんですかっ俺たちは何もっ!」

自分をいじめていた人間がまるで打って変わったように覚えている様を井上はあざ割ることもなく、ただただ何が起こるのか、これもいじめの演出なのかと覚えるばかりだ。

「あなたたちは病気です。」

「はえ!?!」

「人を嘲笑い、いじめる行為は精神の弱さからくるものです。また、いじめを諦めて受け入れることもまた病気です。私は病気を許さない。殺してでもっ治す!」

その覇気ある言葉に誰も否定することはできない。

当然だ。

魔獣を殺し、死線をくぐり抜けてきたサーヴァント、そんなバーサーカーの意気込みと覇気そして「殺す」という殺意に耐え切れる一般の高校生がいるだろうか?

彼らの頭にあつた美しい女性像は崩れさり、ただただ生にしがみつきたい一心だった。

ナイチンゲールは男子学生たちに裸になるように命ずる。

最初こそやはり躊躇はしてしまいが、「私より脱ぐのが遅かったらどうなりかわかりますね？」路という言葉で急いでベルトを外し始める。

体育倉庫には4人の男子学生と1人の成人女性が裸になっていた。季節は秋だといふのに、寒さは感じられない。

それもそのはずだ。男子学生の目の前にはでっぷりとした大きなおっぱいが晒され、寒さからか陥没した乳首からゆっくりと顔を出そうとしている最中なのだから。

生にしがみつくと生きていたいという意味と、目の前の雌で男子学生たちは完全に勃起しており股間部こそが一番部屋で熱を持っていた。

しかし1人だけ、目を疑う性器。

井上の性器はは恐ろしく大きく、まさにグロテスクだった。

3人のいじめっ子たちだってなかなかのサイズではあるが平均値。しかし井上はま

さに生まれ持った誇っていいサイズ。18cmの血管の浮き上がったバキバキのちんぽはビクビクと震え別の生き物のようだ。

「長さ18cm強、太さ直径4cmの竿、カリ高8mm。睪丸の大きさも十分！このように、井上くんの性器は素晴らしいポテンシャルを秘めています。自信を持ちなさい。」

井上は普段褒められることもなく、人生を「ただ生きているだけ」と思いながら生活していた。しかし目の前の絶世の美女から褒められて、心がホワホワする。

ナイチンゲールはためらうことなく井上のちんぽを素手で掴む。

「ああっ！」

敏感な部位を荒々しくつかまれカリ首を指の腹でこすられたために反射的に腰をひく井上。そのままナイチンゲールは口を開いて唾液を垂らす。

にゅつぐつにゅつぐ

と、水音を立てて片手で外周をまわしきれないほどの太さのペニスをしごく。

倉庫には井上の喘ぎ声と、その性的な様を見せつけられた3体の雄の荒い吐息が反響しあう。

（非常に大きい。おそらく毎日自慰をし続けてきた鍛えられたちんぽなのでしょう。）

「さあ、自由にザーメン吐き出しなさい。それとも貴方はほんのチョッピリしか射精できない、ちんぽでも出来損ないのダメ雄のですか？」

わざといやらしい言葉を使う。そうしたほうが意思疎通できる生物相手の搾精は捗ることが多いと知っているからだ。

「普段どれほどオナニーを？」

「あ、おおうっしっ週にいっつかでっ！」

「嘘でしよう？」

ナイチンゲールは耳元に口を近づけて囁く。

これほどのグロチンポが週に3日程度のオナニーでできるわけがない。

ナイチンゲールの秘部前にはカウパーでドロドロのペニス未だしごき続けられていた。

「うう、嘘っ嘘ですっ！」

ギリツと強く竿と玉を掴まれ白状する。

「毎日っ毎日してますっ！日にいっ！2回することも、っお！」

「ほう、素晴らしい生殖能力です。」

ナイチンゲールは褒美といったように徐々に徐々に速く、強く握り、時折カリ首を人差し指と中指で挟み込んで骨で刺激し、玉袋を優しく撫で回す。

「だっめですっでちゃでちゃう射精しますっ！」

素早い速度でがっしりと握りながらしごくナイチンゲールの手は的確に井上を絶頂

へと導いた。

「でえっ!!!」

ぐびゆるつびゆるるぶびゅうう!!

肥大化したちんぽから勢いよく吐精される。精液は水圧でナイチンゲールの顔に飛び散り、顔を汚しつつ、そのまま彼女の口の中に排精された。

舌に精液の重みがズンと加わる。

(凄まじい濃さです。健康的な証ですね。)

「んぐくつ……………んつ……………ぎゅつ……………んつー!」

喉をなかなか下っついていかない井上の精液を無理やり飲み干し、未だ溢れ出る精液を透明な容器に入れる。

それを見ていた3人はそれぞれ14cmほどのペニスをさらに真っ赤にして、興奮をあらわにしていた。

井上は人生最大の射精を果たしたにもかかわらず、未だ硬さを保ったまま意識を朦朧とさせていた。

ナイチンゲールは、そのまま通常サイズと、ひとまわり大きいサイズを3人と井上に渡す。それを雄たちは言われるがまま自分の性器に取り付けた。

「みなさい、井上くんのペニスをつー!一度射精したにもかかわらずまだ硬い!」

3人は井上の体力と、精力におののく。

自分たちが見下していた相手が男として優れていた。

悔しい。

ナイチンゲールはそのままマットの上に立ち、跳び箱に手をかけて、尻を強調する。

「さあ、井上くん。挿入してください。」

びくつと肩を震わせる。

視線の先には美しい女性器。まさに理想の肉壺は少しだけ愛液を垂らし、誘っている

ようだった。

井上は「いいいいんですか？」と聞いたと自分で思っていたが実際には半ば狂乱する

ようにナイチンゲールに走って行き、秘部にペニスを押し付けていた。

しかし、あまりにも急いたせいでカリ高ちんぼはナイチンゲールのまんこの下を通り

過ぎ、肉芽を抉る。

「ん、ひっ……ふく……ここです。」

ナイチンゲールは突然の刺激に首をしならせるが、立て直して井上の男根の根元を支

え、秘部へとあてがった。

メリニユルツぐろん

「お、あああつあああつー！」

絶叫する井上は初めての女性器内部の感覚に我を忘れていく。まるで精神を吸い取られるような気持ちだった。

体格差からふわふわかと思いきや、考えられない締め上げと、火傷するかのような体温の高さ、それでいて亀頭の先をせき止めるコリコリとした部分。うねうねと動き、血管を押しつぶしたり吸ったりとまるで他の生き物が中に住んでいるような感覚。

「ふっ……………くう……………」

(圧迫感が……………凄まじい。……………血管を血液が循環して脈動するのが振動のようで……………)  
ナイチンゲールも異物感を如実に感じ取っており、肺から息が溢れる。

井上はもう獣となり腰を引き、突き入れる。

ずばんつぶちよんっ！

「お……………んふおっあ」

ナイチンゲールは数多の男根を加えてきたが性器ごとに違いを大きく感じ取る。井上のちんぽもまた今までのペニスに引けを取らない「女を鳴かせるペニス」だ。

「ああっふっ！」

ごりつと膣壁をえぐられる。

今の今まで童貞だった者のがむしやらかな腰使いは、慣れている彼女でさえ余裕をなくし、膣道をごじ開けて貪る。

その様はまさに獣と獣の交尾であり、大きすぎる胸がピストンに合わせ大きく前後し、ボツキした乳首がマットに触れ、ナイチンゲールをさらに攻め立てる。

あの硬い生地が当たるなど考えたくはない。

「ふう……ひいつ……さっあ、あなたたちも……おー！」

ナイチンゲールが声をかけると、目を血走らせて2人の交尾を見ていた3人は我に帰り、そして許可が出た獣のようにナイチンゲールを貪る。

ナイチンゲールの顔にむかって勃起した己が化身を差し出し、無理やり口淫させる者。

ナイチンゲールの腰に張り付き、アナルを舐め、無理やり男根を挿入する者。

もう1人は行くべきところを見つけられなかったのだが、無理にでも童貞を捨てたかったのか、ナイチンゲールのすでに挿入されている秘部に無理やり挿入し始める。

悲しきかな、愛液ででろでろになっていた井上に貪られ続けている女性器はもう1つの平均サイズズちんぽを受け入れてしまう。

「ふぎっ!?!……あ、おおおっ!?!お、んっ」

ナイチンゲールは口はともかく、突然広げられた尻穴と、二穴挿入された秘部からく

る刺激で背筋を雷に打たれたように震わせて嬌声を出す。

メリメリっミリっ

どこの悲鳴かはわかる。

彼女の秘裂だ。

男子高校生2人のペニスを合わせても、今まで入れられた「ある種の性器」よりは細い。しかしそこまで濡れていない状況下であり、なおかつ均等に押し広げられたわけではなく、縦に押し広げられたのだ。

膣口は楕円形の口を開き、圧力や張力の違いから新たなせいの刺激が彼女を犯す。

「あおつまっちなさっふぎっ♡おっ♡」

同時に膣道を押し広げたり、ピストンの速度の違いから交互に膣壁を抉られたり、様々な感覚を膣に強いる。

ぐちゅんっ♡ぐりゅんっにゆる♡ぶちゅんっ♡ぐりゅんっ♡

「ふおっ、おっふぎっ待っあああ……ぎっ……おっ♡」

ゆっくりと、雄々しい井上の睾丸から種子が込み上げてくる。

それは今の今まで女を知らない3人も同じで、1人はすでに射精を我慢して耐えている状況にすらあった。

「だあっ射精るっでますっああだすっ射精すっ」

「俺っれもっ射精すっ！」

「でるでるっ射精るっでるうっ!!」

その中でも井上は一際射精管を膨らませて精液を吐き出す準備をしていた。

(そっお、んなっ………同時っにつお、♡)

「だめえっ射精るっさつきよっりっでるでるっ射精る！」

3人が射精欲の海に苛まれようとしていた時、井上の言葉を聞いて耳を疑う。

3人とも「さつきより射精るのか!？」と驚愕する。

先ほどの手淫での前戯で出された精液はとても濃く、多かった。それこそ3人が日に出す精液を統合したとしても足りないほどに。それを超えるの射精を2度目で出すというのか。

しかしそんな冷静なことを考える暇もなく、口はカリ首を舐め上げてくるし、腸内は異物を出そうと腸壁を押し付けてくる。そして何より、井上と同じ穴に入れている生徒は、井上の男根の硬さをゴム越しに感じつつ、それを加えるところのまんこの愛撫に耐えきれない。

3人の宣言が重なり、それを押しつぶしながら井上も普段はあげない男らしい声量で叫ぶ。

「でるっ射精るっ!!!!!!」

(待っっ♡)

ぐびゆるっばびゆる！びゆるっぶびゅっびゆるびゆるっ！

「ん、ん、おおおお、♡ああ、おっおおっ♡」

ナイチンゲールは口内、膣内、腸内に吐き出される精液をゴム越しにも関わらず如実に感じ取り、濃い液体で無理やり敏感な部分をこじ開けられて喘ぐ。

口内で射精した学生は咄嗟にゴムを外し、ナイチンゲールの後頭部を強く押さえて喉奥で射精した。

「っっほおっ♡ぶっっ♡」

他3人の射精で前方に体を押され、限界まで喉奥に14cmちんぼが入り、食堂で射精される。全員が過去最高の射精量でナイチンゲールは咄嗟にむせ返り鼻から精液を垂れ流した。

中でも膣内で爆発した2つのペニスはまるで1つの性器のように、1人分の射精のようには完璧なタイミングで射精。

子宮口を射精の水圧でゴム越しにパシッとはたき、子宮口付近を膨らんだゴムで圧迫する。

4人とも脱力して、体重移動から同時に引き抜かれる性器とゴム。

ぐろろりゆにゆろっ

「ん、お、っあああお、♡」

無理やり二本挿しを抜かれて、膣口付近をこじ開けられついにナイチンゲールは達してしまふ。

「ああっ♡イクつい、ぐい、ぐっ♡！……♡おほっお、おっ」

プシュツプシイイイツ

ピンピンに勃起したクリトリスの下から勢いよく吐き出された潮。

まさに獣といった野太い余裕のない嬌声。

井上は初めて見た潮吹きに「自分たちがこの雌をイかせたんだ。」という一体感を感じた。

そしてゆっくりと2度の大量射精でくたびれたと首をもたげていたペニスを再度硬くする。

息も絶え絶えな3人は井上の並々ならぬ精力に「嘘だろ…」「まじか…。」とおののいていた。

未だ絶頂の波から降りれないのかマットに突っ伏して、愛液と透明な潮を秘部から垂れ流し続けるナイチンゲールはまさに塩漬けされた肉。

獣にとっては、目覚めさせられた獣にとっては格好の餌だ。

白いきめ細やかな肌を持つ柔らかい尻肉を乱暴に掴むと、

「ん♡」

とナイチンゲールが反射的に答える。まさに返事のように、井上はもはやガチガチに再勃起した息子についた精液入りゴムを外して、寝ているナイチンゲールの秘部へ勢いよく突き入れる。

夜の帳が落ちようとしている学校に鳴き声が木霊した。

## フローレンス・ナイチンゲールと第七特異点の悪魔

ナイチンゲールは目を疑う。

正直今日は執刀でそれなりに疲れており、やっとマイルームに戻ることができ、この疲れた体をアルコールですすぐつもりでいた。

もう1週間は寝ていないので、そろそろ眠いということもあり、酒の力を使おうと少しだけ、ほんの少しだけ足早に移動していたのだ。

ただサーヴァントがその枠組みに入るかどうかはさておき、急いでいるときこそ人は何かに巻き込まれて目的を達成することが難しくなる。

いざマイルームの扉をあけてみれば部屋にはどう考えてもありえないものがいた。

例えば藤丸立香がいるのなら、まあ何か用があるのだな。と思える。

他のサーヴァントがいたとしても「お邪魔しますー。」という感じで別段何か手を貸して欲しいのかもしれないと察することができる。

まあ最近の研究施設以外で搾精任務を遂行することも増えたので、廊下や大きな部屋に魔獣や動物、魔物などいてもサーヴァントという手前別段慌てることはない。

この間は彼の騎士王の愛馬などがカルデアの廊下を普通に歩いていたのを見かけたこともある。

そんな経験を持ってしても驚愕を禁じえない存在が彼女の、フローレンス・ナイチンゲールの自室にいた。

黒に近い紫色をしたボディ特徴的な縦に角度を変えた大きな口らしきもの。

あまりにもおぞましい見た目のそれは、過去に藤丸立香たちを最大限に苦しめたまさ「最悪のエネミー」であり、名をラフムという。

「……………」

ナイチンゲールは流石にすぐに戦闘準備に入れる状態で、使い慣れた端末を操作する。

非日常的なことを日常的にしてくる機関をナイチンゲールは知っていた。

電子的なコール音を部屋に響かせていても、目の前の虫のような皮膚をしたモンス

ターは意に解することなく佇み、まるで彼女を観察しているようだった。

『……………こちらカルデア研究施設緊急問い合わせ窓口です。』

「いち搾精任務を預かっているフローレンスナイチンゲールです。自室にラフムと思われる個体がいるのですが。」

『……………把握しています。』

やはりか。とナイチンゲールは一度ため息をつく。

厄介ごとではあるが、逆に管理下におかれているのなら今すぐに攻撃を仕掛ける必要もない。マスターである藤丸立香の身の危険を考える必要はないらしい。

「どういった見で？」

『第七特異点「絶対魔獣戦線バビロニア」で観測されたラフムを秘密裏に数体確保し、研究をずつと行ってきたのですが、交配実験で何体か同じ部屋に住まわせて繁殖行動などを記録しようと試みました。』

『しかし、ラフムは無性生殖で繁殖するので、雌雄の差はありません。そんな中1体だけ男性器のような生殖器を保持したラフムがいました。』

『曰く、「メソポタミアで女を犯しているところを捕獲された。」と記録にある個体で、希少種として保存していたのですが一向に射精もしなければ勃起もせず、困り果てていたところ、あなたに白羽の矢が立ったのです。』

「私に？」

ナイチンゲールは黙って聞いていたのだが、なぜ突然自分の話になったのか疑問を覚えた。

『はい、ナイチンゲールさんは多くの魔獣や魔物、スタッフなど「男性特効」か何か持っているかのように精液を集めるのがお上手なので、試しに。という話が持ち上がりました。』

ナイチンゲールが相手にして来た魔獣は本来人間に危害を与えるものも多かった。

しかしサーヴァントであることと、医療に精通していることが重なって危険のある搾精任務もやり続けることができた。

そういう意味ではエキスパートである。

「私が担当するのは理解しました。……………危険は？」

『それがそのラフムかなり変わった希少種で、ケイオスタイドなどを発することもなく、また残虐性もありません。非常におとなしく、しかし力は強い。』

特に何か危害を加えてくるのでなければ、いいか。とナイチンゲールも割り切って部屋  
のラフムをみる。

彼……と表現していいのかわからないが、おおよそ男性の生殖器っぽいものをまたからぶら下げつつダンスからナイチンゲールの下着を漁っているラフム。

「わかりました。ではいつも通り。」

『はい、ご協力感謝します。』

いつも通り、というのがなんなのかはいうまでもないが、端末の電源を落とす。

部屋に入り電子錠をロック。

ナイチンゲールはとある機能を起動させる。

それは多くの精液を集めて来た彼女だからこそ、そういう特殊な改造を施してもらえた結果であり普通の部屋ではありえない機能だ。

といっても別段おかしい機能というわけではなく、部屋のサイズをそのまま大きくするだけの機能である。

空間を拡張しているとかそういうファンタジーな意味合いではなく隣の部屋とナイチンゲールの自室を自動でつなげるだけの機能だ。

部屋が広くなることは彼女にとって結構な意味を持つ。

まず最近では自室で魔物や魔獣の体液を採取することが増えた。

それゆえに部屋が広いのは助かる。

他にも簡単な激しい運動もしやすい。

そういうメリットがある。

そして部屋をいつものように拡張してまたも彼女は驚愕する。

スツと端末の電源を入れる。

『……はい、こちらカルデア研究施設緊急問い合わせ窓口です。』

「部屋にバイコーンと魔猪もいるのですが。」

そう彼女の目の前にはおとなしく座っている2匹のエネミーが鎮座していた。さも「ああ帰って来たんですね。」という視線を送って誰がおいたのかわからない餌を漁っている。その肉がなんなのかは彼女は追求しないが。

『……確認しました。つい先ほど入った搾精任務ですね。ラフムの件は後回しにしてください。ただい結構なので本日の任務を優先でお願いします。』

「……手違いではなく?」

『申し訳ありません。担当であったジャンヌ・ダルクさんが今は難しい時期であることや、ちょうど研究材料が切れかかってまして。』

「……わかりました。では3体同時でも?」

『確かに3体とも濃厚なタイプですが……大丈夫なのですか?』

「…………やってみます。」

と端末の電源を再度落として、部屋を見据える。

獣特有の臭さと、仄かに香る雄の匂い。

ナイチンゲールは少しだけため息をつくと言悟を決めた。

ナイチンゲールは白いレギンスを脱ぐと部屋の隅に投げ捨てる。

彼女の健康的な体軀はまさに男を誘惑するであろう見た目をしていた。

棚から指輪の箱のような黒いボックスを取り出して開く。中にはバ〇ドエイドのような肌色の四角いシールのようなものが入っていた。

それを取り出して下腹部右側に貼る。

多少肌の色が違うので、シールが貼ってあることはわかるが違和感を感じられない。

次に棚の上に置かれているリモコンを操作して壁に取り付けられた端末を起動する。しばらく四角い黒い画面が表示されて「更新中」と現れるが、読み込みが終わったのか水色の画面に特有の絵が表示された。

(正常に動作していますね。)

これは以前ダ・ヴィンチが開発したものをさらに改良されて作られた特殊器具で、貼り付けるだけで体内情報を正確に取得することを可能にするものだ。

もちろん搾精任務に転用しているのはナイチンゲールの独断ではあるが。

ナイチンゲールはそれぞれの魔物がある程度位置的に固定する。これも部屋の機能の1つでその場所に拘束するわけではないのだが、基本的に気性が荒くなければそこから動こうとはしない。

(さて、まずはラフムをメインに。)

ナイチンゲールの視線の先、赤紫の体を持つおぞましい見た目をしたエネミーはケタケタと笑うように大きな口を開けながら体を時折震わせていた。

ただやはり垂れ下がっている男性器は異様だった。

(これは男性器?と言っているのでしょうか……。)

もちろんカルデアの研究員が命をかけてスキャンなど情報収集した結果それが生殖機能を持つ性器であることは確定している。

ナイチンゲールはまず手に取る。

ケイオスタイドの心配はないのでためらうことはない。

(重い……肉質的な重量感ある男根ですね。いくつもカリが竿に連なっていて……)  
そつと竿のカリ首に指を這わせる。

すると先端の穴から、おそらく尿道球腺液と思われる透明な液体がこぼれ出す。しかし溢れると言っても粘度が桁違いなのかジェルのようにつぶつぶだった。

それを潤滑剤として手と竿の間に塗りたくって扱く。

最初こそそれなりに柔らかくちくわのようにぶらぶらと揺れていた性器ではあったがゆっくりと硬さを増し始めた。

(基本はやはり……男性器。刺激をうまい具合に……与えれば……なっ。)

ラフムの完全に勃起した雄の象徴はまさにグロテスクだった。

青や緑といった色が紫のアクセントとして性器をかたどっており、細い血管がびつりと竿部分を覆っていた。

そして何より段差がたくさん連なってきたノコギリのような凸凹の竿表面はまさに凶器。女を、雌を絶対に離すことはないとする生物？の主張が垣間見える。

(これを……挿入……ですか。)

流石に気がひけるナイチンゲールだが、任務は任務。たとえ怪我を追っても回復しながら遂行すればいいだけのこと。

(長さ……30cmほど……直径は4cm以上。甲虫のような硬さと、滑らかな表面に血管が……。)

ナイチンゲールが今回の任務でコンドームを使おうとしないのは、単純にラフムに取り付けることができるコンドームを所持していないことと、最近では女性器内で排出された精液でも研究材料として機能する手順が生み出されたので、後から容器に入れる方向で行くことにしたのだ。

ナイチンゲールは性器の観察を終え、まず口淫に移る。

「はむっ……………んふー。」

(くっ顎がっ……………大きすぎる。)

ラフムの男根は大きすぎてとてもではないが啜えることは出来ない。せいぜい亀頭と思われる一番でかいコブにキスをして舌で舐め回す程度だ。

口の中に広がる生臭さとしよっぱさ、そして苦味。

「おえ……………」

衛生さのカケラもない生殖器を舌で丁寧に舐めまわし綺麗にしていく。幸い恥垢などは溜まることがないのかそういう汚れは見つからなかった。

くちよっねろっ

まるで性器に忠誠を誓うかのような優しいキスや、逆にねっとりしたいやらしいキスを先端にし、右手で彼女自身の性器をよくほぐす。

冷静で淡白な彼女と打って変わって、陰核や膣口付近をいじり始めればすぐにいやらしい音が部屋に木霊した。

多くの男性器や男性器でなくとも様々なものを加えてきたナイチンゲールのまんこは普通なら大きく緩くなり、浅黒く、使い込まれた性器へと変貌していただろう。

絶対に女性はグロマンにならない世界線というわけではない。

しかし最高の状態を維持され続ける彼ら彼女らに変化を期待するのは難しい。精神的変化は多く見られるが、肉体的変化は微量だ。

搾精任務を始めた頃の頃は、全然濡れることのなかった彼女の性器であるが、今はしばらくすればとろとろになる点は唯一の変化といってもいいだろう。

しかし未だ毛も生えず、子供のような女性器は触れてはならない神聖さを醸し出していた。

くちゅつくちゅおつ

それでもその幻想を打ち壊す女を感じさせるフェロモンに終始黙り込んでいた2体の魔獣も雄を刺激されそれぞれの性器を硬くし始める。

(そつろそついいい……具合につ濡れつ。)

ナイチンゲールの判断通り、彼女の完全に受け入れ体勢万全なまんこは彼女の真面目な性格とは裏腹に「早く男根を。」と主張が激しい。

「これより搾精任務、対象おつらフム。開始します。」

ナイチンゲールはデータの記録宣言をしてラフムの男性器を口から放す。

ラフムのグロテスクな性器はカウパーとナイチンゲールの大量の唾液で滑りを良くしていた。

ラフムも性的快感を感じ取り、体をより顕著に震えさせて屈む。

カチカチと大きな歯を噛み合わせて喜んでいるようだった。

ナイチンゲールはそのままラフムに背を向けて、男根を濡れそぼった鞆にあてがう。体格差から見ても挿入できるわけではないサイズ比。

誰が見ても挿入できるわけではない。

「ふぎっ……そうにゆっ……うっ！開始い……いっ！」

（おおつきすぎるっ……ですがっバイコーンですらっ挿入ったのですしっぐっ！）

ナイチンゲールは右手にガチガチに勃起したバイコーンの性器、左手にまるでドリルのような赤黒い魔猪の性器を持ち、腰を体重をかけて落とす。

めりっみちめりっむりゅっ

ラフムの性器が若干歪んで、ナイチンゲールの膣口をこれでもかと押し広げながら亀

頭部分が膣内に挿入った。

「ぐっあ……このまっま。……はふー。」

恐ろしいほどの圧迫感と痛みがナイチンゲールを襲う。

彼女の前戯と潤滑液がなければ絶対に避けていたであろう秘部は、悲鳴をあげつつもゆっくりとラフムちんぽを飲み込んでいく。

ミチツぐりゆんっ！

何度かカリ首に膣壁が引つ張られて激痛を伴うが、ナイチンゲールの膣道を完全に埋め尽くしラフムの性器がナイチンゲールの子袋を押しつぶした。

「ふいぎっ!?!……あっぐあ……ふお……お。」

(まっだ半分……も残って……痛っ……)

耐久力のあるナイチンゲールをここまで責め立てるのはやはり竿のたくさんあるカリだった。

カリは一般的に他の雄の精液を掻き出すために生まれたとされているが、まさにラフムは他の生物を差し置いて生殖するためにこういった生殖器になったのかもしれない。

しかしそのカリ高な突起はナイチンゲールのグチュグチュの膣壁を削り抉り削ぎ落とす。ように刺激する。

「あつああ、つうぐつ。」

ナイチンゲールは顔には出さないものの過去の過去に見ないほどに切羽詰まった様子で腰をできうる限り落とし、そして引き上げた。

ずりゆりゆりよろろつりゆつ！

「ふぎっいいいっぐつ！」

息は荒く、顔を真っ赤にする。

部屋は薄暗く彼女の顔ははつきりと見えないが、どう見ても鉄仮面が時折揺らぐ。

亀頭を膣口付近まで持つてくると、恥丘が大きく盛り上がり、外側から見てもすぐわかるほど。

(完全に引き抜いてっは……………また挿入でっ……………苦労しますし。)

ナイチンゲールはそのまままた全体重をかけて腰を下ろす。

硬質な張り型で膣壁をえぐっているような感覚。

しかしまだ挿入はいいのだ。

カリが連なった男根は引き抜くときが一番きつい。

ごちゅんっ!!

子宮口に硬い尿道口が当たり、子宮を大きく持ち上げながらそれでもなお押しつづす。

「お……………ろっ……………」

ナイチンゲールは咄嗟に左手を魔猪の性器から離して口元へ向けた。

内臓が強制的に押し上げられ、昼に食べた、料理が逆流しそうになったのだ。幸い彼女の医学的見知から吐くことはないが、ピストンで子宮をぶん殴られるたびに吐きそうになる。

（子きゅつが……………振どおつが……………卵巣に響いてえっう……………）

性交渉による振動と、ラフム特有のピクピクとした震えが相待って、たまに子宮を前後左右にも押し上げて子宮付近の内臓を刺激する。

中でも膀胱と卵巣は潰れそうな勢いだ。

そんな中でもバイコーンの性器を右手でしごきながら人差し指でカウパーがダダ漏れの尿道に指をニユクニユクと入れ、刺激し続ける。

魔猪のドリルペニスも螺旋状に沿って指の腹で撫で回し、時折爪で引つ掻いてアクセントのように刺激し続ける。

「もつもつもちまつせん……………早くっう……………！」

自身に意識があるうちに精液を採取して、搾精任務を終えなければならぬと義務感

を加速させるナイチンゲール。

彼女はずっと休憩を取っていなかった反動からか疲労もピークでとにかく、痛みを我慢してピストンを加速させる。

ぐちゅんつにゆるろつ♡つぐりゆるろろつにゆるんつ♡

もはや余裕はない。

必死に絶頂にだけは達しまいと耐え続ける。

彼女は痛みもそうだが、やはり膣壁の肉を何度も何度もえぐられ続けることによつて、独特の新快楽を感じていた。まるで凝り固まった部分を強制的にほぐされ続けるイメージ。

「ふっぎつあぁっあ、っ!」

ラフムもまたガチガチと歯を鳴らし喜んでいようだった。まさに目の前で雌が鳴いている姿を楽しんでいるようだ。

その姿はもはやバビロニアの人を殺し楽しんでいた彼らとやはり変わらない。

「……ハハハツ二人間ツオンナツエロイツ! キモチイイ! ハハハハ!!」

「ほお、!?!」

突然聞くのがきつい声が部屋に響く。

それは当然ナイチンゲールの聞こえの良い美しい声音ではなく。化け物の声だった。

ラフムが喋ったのだ。

ただ、第七特異点においては喋るラフムも観測されているので、長く研究員といったラフムがそういう進化を遂げたことはおかしくない。

ただし、突然喋り始め、なおかつそのまま思いつきり腰を打ち上げてナイチンゲールの胎を押しつぶしたことで彼女が下品な声をあげ、唾を口から飛ばしながら白目を剥く。

(らっフムっが喋ってっふぎっ！)

彼女が状況を理解する時間も与えず、ラフムが独特のリズムでピストン運動をし始める。

それはまさに女を泣かせ鳴かせるための動きだ。そこに慈しみや優しさは感じられない。

「ふお、おっ♡あっああ、っ！」

「孕マセツコドモツ！メスツ！妊メツ！」

どこでそんな言葉を覚えたのか、男性職員が女性型エネミーを犯す際にでもいたのかもしれない。なんにせよナイチンゲールはピークを迎える。

乱暴に穿たれた肉棒は正確に彼女の弱点を攻撃し、嬌声が聞こえる。

ぐちゅんっぐにゅっ！ぐりゅっ！

「あぐっうっお、ふぎっ！っいっイ、ッグっイギますっ♡」  
「イケッ！イケッ！」

先ほどの抵抗を微塵も感じさせない高速のピストンは彼女の理性を刈り取るには十分で、もはや息も絶え絶えといった様子になっていた。

眼は上へぐるんと回転し、顔を真っ赤に紅潮させて愛液を大量に垂れ流す。

(も、げんかっいっ………でっイくっ！)

「い………イくイくイ、っぐっ！」

ナイチンゲールは我慢していた絶頂をいともたやすく迎え、透明な液体を部屋に撒き散らす。そして同時にラフムのペニスが大きく盛り上がる。

それは射精故の膨張で、おびただしい量の黄ばんだ精液を吐き出した。

ぐびゆるっぶびゆる！びゆるびゆるっごびゆるっ！ぐびゅっばびゅー！！

一気に子宮内はラフムの精液で満たされる。

それはまさに雌を犯し尽くすために生成された精液で、止まることを知らず、止めどなく流し込まれていった。子宮から悲鳴が上がるが、そのまま卵管を無理やり押し広げ、そのさきのもつとも重要な器官を犯し尽くすラフムの精液、精子。

ナイチンゲールの卵巣が絶叫する。

ナイチンゲールは絶頂の白き海にいたのだが、腹部を殴りつけられる勢いある射精で



「ふい!?……んっふー……お……ふっ。」

最後の一押しというわけではないが、所々尿道で詰まっていた。ゼリー状の固いラフムの精液がナイチンゲールの子宮に注がれ、その場の絶頂の空間が収まる。

ナイチンゲールはヨダレを垂らして失神し、下腹部を大きく膨らませたまま、ラフムの未だ硬い男根を加えつつ仰向けに倒れた。

今の彼女は身体中にバイコーンと魔猪とラフムの生臭い精液をぶっかけられ淑女とはかけ離れたまさに路地裏の娼婦のように淫らで唆る姿であった。

結局その後半日ラフムに犯され続け、緊急事態ということで暗部が駆けつけてナイチンゲールはぐっすり3日間寝続けたらしい。

エルキドゥのとある日々 前編 (エルキドゥ)

\*\*\*\*年5月4日

「良いねっ！」

エルキドゥが地面から5本の鎖を射出し、まるで動く蛇のようにしなやかに空中を蛇行しながら魔獣へと刃を突き立てる。

かの黄金の切っ先は血液で汚れようと、すぐさま美しいからだを取り戻しフツと光の残滓を残して消えさった。

しかしすぐさま背後から凄まじい速度で爬虫類に似た魔獣がエルキドゥの背中を、頭部の鋭利なツノで貫く。だが彼にはそんなものは通じなかった。背中からの不意打に自身の感知スキルの目を掻い潜った魔獣に賞賛を贈るも、そのまま力に身を任せて飛ばされる。

「エルキドゥー！」

彼は凄まじい速度で岸壁に叩きつけられそうになるがその口はにこやかでどこ吹く風のようにだった。

「ボクと……性能を競い合うんだね？」

エルキドゥはそのまま岸壁にぶつかる直前、地面に鎖を射出し刃を突き立てた。垂直方向への力が固定されたためそれを引っかかりにして体を仰向けにしたまま回転し、顔の向きは空を見上げる姿勢へとなっていた。

そのまま足から岩へ接触、タイミングよく力を反発力へと変える。

「甘いっー」

そう叫ぶと同時に強力な一撃を食らったかのように、足場になっていた崖が円形に破砕されていく。衝撃波だ。エルキドゥは先ほど飛ばされた軌跡をそのままより素速く逆に飛び、一直線に魔獣へと向かう。

右手には光の剣。

大爆発と粉塵。火薬はないがまるで隕石の衝突のように周りのものを含め衝撃が辺りを包む。硬いものと硬いものがぶつかる時どちらが壊れるかといえば、物理的に速度が大きいものが遅いものを打ち砕く。

土煙が晴れたのはたつぷり10秒後。

「いやはや、少し汚れてしまったね。」

「エルキドゥー！」

塵の森からゆつくりと影を表したのは、鮮やかな緑の髪をした兵器「エルキドゥ」。(彼女)に駆け寄るマスター藤丸立香は彼とは打って変わって心配そうな顔つきでいた。エルキドゥも戦闘直後ということもあつて普段着ている乾燥地帯特有の乳白色の衣は土や泥で汚れていた。

ところどころほつれ、破れている部分もある。

頭から魔物に突つ込んだためか服の前側はもはやボロボロのようだった。

「いつ急いで魔力をつ！」

スキルで修復することもできるエルキドゥであつたが数分前に使つてしまつていた。

「その必要はないよ。」

美しい透き通つた声が慌てる藤丸を制する。

彼は宝具が人格を持ったようなもので、魔力さえあれば無限に活動でき自然と修復もされる。サーヴァントというより兵器そのものであり彼自身そこに執着する旨は兼ねてから皆に伝えていた。

「ここらの魔獣は一掃したし、そろそろお昼だ。マスターも一度カルデアに戻るべきだ。」

現在は修練場での訓練でよほどのことがない限り死ぬことはない。

しかし怪我もするし、恐怖も実際にあるもので、油断はできない。

エルキドゥは現代の人間が1日3食食えることを知っている。別段急いで訓練する必要もないので帰還を提言したのだ。

カルデアに帰ればそのまま傷ついた装いは修復される。わざわざ今すぐ直す必然性はなかった。

「そっそっか……ってあつ!？」

藤丸が突然顔を背ける。

エルキドゥからしてみれば突然顔を背けられたのだがすぐには理由を思いつかなかった。

(後ろの魔獣の死体かな?)

知的生命体は時に死を忌避し、それを連想するものすら目を背ける傾向にある。というのは知っている。およそ魔獣の死体は一次的なものではあるものの内臓がむき出しで横たわっていることも多くある。

エルキドゥは後ろをちらりと確認すると先ほど爆散した魔獣の死骸はもう紫色の粒子へと変わっており見えなくなる寸前であった。

(ということは……、ああそういうことか。)

エルキドゥはマスターである藤丸立香がなぜ目を背けたのかをゆっくりとだが理解

した。

「ボクの服か。失敬。」

現在エルキドゥは普段の中性的な見た目より少し女性的な見た目へと変化している。以前行われたカルデアの実験からだいぶ時間がたっており、かつこの体の理解も進んできた頃合いだった。

彼にとって女性的な体つきになったことのメリットはやはり友人を驚かすことができたことに由来する。あの顔は見ものであったし、しっかりとクラウドと外部記録メディアに保存してあった。

他にも例えば周りの反応でもそうだった。

やはり中性的、または性別がない相手に対してどういう対応を取ればいいか慣れていないものは多い。エルキドゥとしてはどんな対応でも構わないのだが相手方に負担をかけることは極力減らしたいものではある。

そこで女性体になってみる、いわゆるどちらかの性別に属してみると思いの外会話がスムーズになりやすく、円滑なコミュニケーションが取れて大変助かっていった。

ただデメリットもあって、例えば人間の体と似たような体になったので排泄という無駄な時間を過ごすことなど増えたし、うまく出力を維持するまで時間がかかったりすることもあった。しかし有事ならともかくとして今は緊急出動することもほとんどない

ので人間を知るいきつけになると考えていた。

「ボクの乳房に性的興奮を覚えたんだね？……気遣ってくれてありがとう。」

エルキドゥはそのまま服の切れ端を肩から胸囲に引つ掛けて応急処置をする。

彼のオブラートに包まない物言いは少し慣れたと思っていた藤丸でもさらに顔を真つ赤にさせる要因だった。

「まあ気にしないで。生物としては当たり前のことだとボクは認識しているよ。」

「やつでもそのごめんっ！」

謝罪の理由も最初こそわからなかったがいまでは相手を傷つけないための意図だと知っている。エルキドゥは少しにこやかにになると、立香の肩に手を置いた。

「大丈夫。ボクは兵器だ。兵器に興奮するのなら別だけど、せつかくならより美しい女性陣たちにその真摯な対応をするといいよ。」

「でっでも。」

「それに、ボク自身調子に乗って戦いすぎたとも思っているんだ。ただなにぶんこの体では生理というものがあってね。今日は些か出力が安定しない。」

「せいっ!？」

藤丸は目をそらす。

普段会話している相手がデリケートな異性の話題を突然語ったらやはり恥ずかしい

し、どこか気になるところは出てくる。しかし立香そんな気持ちを押さえ込んでエルキドゥから反転。プレスレットで連絡をとって帰還することとした。

そんな姿をエルキドゥは苦笑しながら、普段の穏やかな表情に戻ってマスターの後ろについていった。

---

同年5月15日

「おはよう、エルキドゥ。」

藤丸がカルデアで廊下を歩いていると、先の方からエルキドゥが歩いてくる。

エルキドゥは左右にカルデアの男性スタッフを伴って悠々と歩いていた。

「ああマスター、おはよう。」

「何かあったの？」

基本的にカルデアスタッフが2人がかりでサーヴァントに対応することはまさしく何か一室で行うものしかない。歩きながら会話しているというのは物珍しかった。

ほんの少しだけ心配そうな顔をするマスターを見てエルキドゥは苦笑し、

「心配することはないよ。神造兵器である僕の機能を彼らは知りたいようだね。これからデータを取るんだ。」

「そうなんだ。」

それならよくあることだと藤丸は考えて、安心していた。以前ナイチンゲールも仲良くスタッフと話しながら別館に行っていたことを思い出してサーヴァントたちがより多くの人たちと交流するのはいいことだと思えたからだ。

「それじゃあまた後で。」

エルキドゥはそういうとスタッフたちと一緒にその場を後にした。藤丸にとつてはカルデアの技術には信頼をおいているので特に何も思うことない。エルキドゥもとても強く公正でいいサーヴァントなので心配はいらないと自分は食堂へ急ぐのだった。

少ししてカルデアの端の方にあるあまり人がわざわざくるところではない場所にエルキドゥはいた。

彼はいつものように飄々としてはいたもの普段きている白い衣装はなく、生まれたままの姿へと移っていた。

もちろん彼が人の腹から生まれた事実はないが、彼風にいえば土人形として神々に作られた時といったところだろうか。

「それで？」

「はい、その……エルキドゥさんの身体情報を図らせて欲しいんです。」

男性スタッフは旧式の巻尺などデータ入力端末を備えて佇んでいた。

すでに部屋に入った段階で服を脱いで欲しい旨を伝えたとこころ。「いいよ。」とすぐに返事をして彼は脱いでいた。

「もつと正確な測り方でなくていいのかい？」

「いえ、まだ自分は新入りで……その訓練に。」

「訓練？」

エルキドゥは少しだけ頭を傾ける。

「はい、機器で正確に測ることも重要ですが人の手で身体情報を確認して入力する作業はカルデアの全スタッフが各々誰でもできるようにならないといけないんです。」

常に機械が正常に動くわけではない。

例えば水泳選手になるとしよう。

水泳選手になるので泳ぐことを練習するべきではあるが、練習環境や道具の正しい使い方、水中での息の止め方など泳ぐこと以外にも習得することはたくさんある。

特にデータ分析を少しでも間違ってしまうと命、果ては世界の命運にも匹敵する重大な仕事であるカルデアの管理はより洗練された迅速で正確なデータの採集と入力が必要

要である。

彼はまだ新人で、経験も少ない。

本来であれば入社直後の研修ですべき内容ではあるが、たまたま人手が足りなくなりサーヴァントの協力を頼んだのだ。

男性サーヴァントはすでに終えていた。1人の赤い髪をした筋骨隆々のライダーに頼んだところ大きく笑って新人スタッフの肩を叩き全裸になってくれた。

余談だがその時の王の王はまさしく王であり、男として尊敬とそして若干の自信喪失を覚えた。

話は戻るが、問題は女性体の測定で、まさか人間の女性に「体を見せてください。」とも言えず、女性の英霊に言おうものなら消しとばされるという未来すらあり得た。

「そこで兵器であること誇りに思っておられるエルキドゥさんに……お願いしたく。」

ついでに言えば部屋に入ってからすぐに服を脱ぐように言ったのは半ば冗談でやけくそではあった。彼自身真面目な性格で悩みに悩みついには今日で訓練最終日までできていた。だからこそどうにでもなれという精神で呟いたら予想外に快諾されてしまった。

「いいよ。」

「いいんですかあ!？」

「うん。」

別段嫌そうな顔もせず軽い感じで了承されたことに新人スタッフは驚いた。

「もちろんさ。兵器は誰かに必要とされなければ意味はない。そして何より君は勇気を出して僕にそんなことを頼んでいる。その覚悟に敬意を表そう。」

エルキドゥは優しく彼の肩に手を置く。

彼は突然の接触と美しい女性の見た目をしたエルキドゥに少しだけドギマギしながらも感謝を述べた。

「あつありがとうございますー！」

エルキドゥにとつて例えば「マスターを殺せ。」とか「カルデアを破壊しろ。」だとかそういう非生産的行動をねだる輩には半殺し程度にとどめるが、基本的にどんな願いでも覚悟を持つて利益につながるのならエルキドゥはなんでもする。

それは兵器であり物であり彼自身の全体主義のような世界観によるものだ。

人間の感情や善悪を彼は長い間見てきた上でそれ自体に興味を見出してはいなかった。人類全体の幸福を考えた時未来がどうなるにせよ何かが発展するのであれば手伝うのは構わない。そういったスタンスである。

ある意味では自分を兵器だと確信するエルキドゥらしい捉え方だった。

その後しばらく新人スタッフによる身体情報の把握が続けられていた。エルキドゥは服を脱いだまま手を左右に伸ばしTのようなポーズで静止していた。

目だけは動かしてせっせと動く新人スタッフを興味深く観察している。

身長や体重、座高、足の長さ、頭の大きさ、スリーサイズなどなどのデータを集めて入力していく。

そんな中、時折男性スタッフの体温が上昇しているのが伺えてエルキドゥは数日前の藤丸を思い出していた。

人通りデータの入力が終わってから彼は口を開いた。

「君たちはこの体に興奮するのかい？」

「はえいつ!？」

新人スタッフは研修に集中しようと努力してはいるように見受けられたがその実、時折胸部や臀部に視線が集中したりしていてエルキドゥは不思議な気持ちだった。

彼が職務を全うしようと努力している点はすごく評価できていたのだが。

「いやね？以前マスターも君のように僕の、人間の女性で言うところの乳房を見て恥ずかしそうにしていたからね？おかしなものだとは思ってしまっんだ。君らは人形にいた脂肪の塊に興奮するのかい？」

エルキドゥにとってはどこまでも自分の体は兵器で、この体もあくまでしばらく親友をからかうためのもので別段何か性的なものであるという捉え方はしていなかった。

「そつそのお……エルキドゥさんの身体は綺麗ですし……。」

恥ずかしそうにスタツフは言う。

（綺麗……悪い気はしないね。）

エルキドゥも自身のハードを褒められれば嬉しさというものはあった。神と袂を分かつたとはいえやはり自身の機体が最高であるという自負と誇りを持っている故のものだ。

「それに、人形に興奮する人もいるとは……、思いますが私は少なくともあなたを異性の体だと認識してしまいます。すみません。」

その謝罪は知っていた。

以前マスターも同じ謝罪を口にしていた。相手を傷つけないための低姿勢。

それでいて争いにならないための謝罪でもある。しかしそんな打算的な謝罪というよりはより真摯に向き合う謝り方だった。

エルキドゥにとつても雄という個体が雌に興奮を覚えるのは自然の摂理でありそうやって種族は繁栄していくのだから何も謝ることのない当然の行為であると考えている。

この機体を女性のように思えるのなら興奮するのは道理だ。

「謝らなくていいよ。………君は僕と生殖行為をしたいのかい？」

「なっ!？」

ストレートな物言いは時に相手を怯ませると以前親友にも言われたが、悪意をもつてしているわけではない。ただスタッフの反応を見るに今回もどうやら失敗したらしいとエルキドゥは悟った。

「君の男性器は勃起しているだろう？」

その指摘ですぐに端末でズボンの間を隠すスタッフ。

彼の股間はエルキドゥが裸になった当初からすでに硬くなっており、エルキドゥも最初から気づいていた。

エルキドゥはTのポージングから緩やかな動きでカルデアスタッフの制服を剥がす。

何が起こっているのかよくわからないスタッフは抵抗する間も無く裸にされてしまう。

外気に触れてさらに硬度とサイズを増す魔羅はエルキドゥの美しい顔の前に出された。

全く別の生き物が主張するかのようにいきり立ったそれは少し汗の匂いを発しながらビクビクと震えている。

「人間の男性は男性器が勃起している時、うまく仕事をしづらいと聞いているよ。」  
「どつどつこでつ」

「元より僕のこの見た目はある一人の聖娼を模して作られたものでね？彼女から仕事のことでも多く聞いた。今と昔は違う上にそこからアツプデートはされていないから基本的なことしかボクは知らないけれど、ある程度心得ているつもりだよ。」

エルキドゥは若干皮を被った先端に左手の手のひらを優しく押し当てる。そのまま右手で皮をゆつくりと向いていき、敏感なカリ首にあや指と人差し指で輪っかを作つて刺激する。

「ふうおっ!?!」

スタツフはたまらず腰と膝を折つて崩れ落ちそうになるが、なんとか耐える。

否定はできない。

「随分と敏感だね？童貞というやつかい？」

「そつお……それもつありますけど最近全然つしてなくなつてつ」

「精液が精巢に溜まつていたわけだ。精液は余剰分をタンパク質に分解して吸収されるが、君は若い個体だろう？もつと排出した方がいいと思うな。」

エルキドゥは尿道から溢れる尿道球腺液をうまい具合に手に絡ませ、滑りを良くし、カリ首から素早く根元まで痛くない絶妙な力加減で動かす。すぐにゆつくりと先端へ

皮ごと手をひっぱりまた根元まで、という動きを繰り返した。

左手は鈴口を軽くつぶした後五本の指でエラを刺激し先端を包んだ後、裏筋を撫で睾丸を撫でる。

スタツフは圧倒的な愛撫に息をするので精一杯だった。

機械的とも言える的確なタイミングで童貞が刺激を受ければ当然、

「おっゆつくりと前立腺付近に精液が集まっているね。」

エルキドウの感知スキルでタイミングよく射精しないよう管理されて15分。亀頭は赤黒く晴れ上がり、血管は大きく盛り上がって、最大の硬さと大きさになっていた。

射精しそうになるとゆつくりと動きを止められて射精の準備に入らずタイミングを逃した感じになる。

精液は射精管前の前立腺付近に睾丸から移動しどんどん溜まる。時折精液混じりのカウパーが溢れてしまうことはあるが、やはり射精はできない。

「あ、あつあの、っしや射精をつ！」

「うんわかつているよ。君をいじめたいわけではないんだ。ただ君が一番気持ち良くなるタイミングで射精させてあげようと思つてね。」

エルキドウに快楽を感じる機能はない。少なくとも事実上ない。

しかし男性が一番快楽を感じる時に射精をさせるといふのがかつて教えてもらった

一番の方法であり、兵器として最良を求めるのは当然のことだった。

4度目の射精準備をかわされて、男性スタッフはついに膝を折る。

尻餅をつき、臀部をひんやりとした床が支えた。

エルキドゥも男性器から手を離すことはなく、そのままかがんで愛撫を続けた。

「面白いね。本来ボクと君では子孫を残すことはできないのに君はこんなにも生殖を望んでいる。」

エルキドゥはそのままスタッフを床に寝かせた上で体の向きを変えてお互いの性器を愛撫できるような体位をとる。スタッフの眼前にはエルキドゥの性器が出される。

全くと言っていいほど濡れることはなく、それでいて美しい肌から淡く変わるピンク色のスジはスタッフをさらに興奮へと導く。理性を失うほどではないにせよ、目の前に極上の女性器を出されて我慢できるはずもなくスタッフはエルキドゥの臀部を遠慮することなくがっしりとつかんで性器に口をつける。

「おや？ 積極的だね。」

スタッフの標準的なサイズの舌が、できるだけエルキドゥの奥へ奥へと入りたいと感じられるような動きだった。

陰核や大陰唇、小陰唇を舐め上げられてもエルキドゥには何も感じない。

つぶつぶの肉ひだと一直線でない膣道を舐め上げるスタッフ。

ただそれで彼が興奮するのであればそれもまた良しと抵抗することはなかった。

「ボクのような人形の偽物の性器で興奮できるんだね。……悪くない。」

兵器としては体を好んでもらえるのは冥利につきる。

エルキドウの眼前にはガチガチに硬くなった男性器はよだれを垂らして刺激を欲していた。

5度目の絶頂をまたもかわされた後、エルキドウはふつくらとした大きな唇を分け、口を開けて男性器を咥え込む。

(これが男性器か。しよっぱさ?とにがさ……大きいな。)

エルキドウはやり方を知っては言えど一度も行為に及んだことはない。

そもそもこの体になったのはつい最近のことです。今までは性器すらなかったのだから当然と言えば当然だった。

「ふぐおっ!?!」

男性の敏感になった部分に柔らかい口内が接触する。

尿道に舌をあてがい刺激し、唇を強く締め上げて吸引する。

本来本気の力を出せば男性器を引きちぎることもできてしまうのだが、ある意味ではそれに気をつけつつエルキドウは男性器を射精準備に導く。

しかし6度目の射精準備直前でやはり口から男性器を取り出されてしまい失敗して

しまう。スタッフはそろそろ本当に気が狂いそうだった。

しかし同時に女性器を愛撫することにも集中していて、文句など言えようもなかった。

ちろつぬぐりゆ

(そろそろ限界かな。)

もちろんエルキドゥはスタッフの限界をそろそろ悟り7回目できるようやく射精させることにした。

唇をすぼめて、唾液とカウパーの混ざった液体で濡れた唇を無理やりかき分け男性器はエルキドゥの口内へと進入する。

ザラザラとした舌の腹でカリ首を何度も舐め上げる。

喉奥で亀頭を潰して圧迫しながら素早く唇付近まで竿を引き抜き、またゆつくりと飲み込んでいく。

右手は竿の根元を支えながら左手でふぐりを優しく撫であげる。

精液でパンパンな精管膨大部はもはや蓄えることができず、精管へと精液を溢れさせていた。

最後のスパートをかけてエルキドゥも口淫を激しくしあたりを水音がいやらしくこだまし始める。

しゆるずるっじゅぞっ

スタッフは顔中を埋め尽くすいい匂いのするエルキドウの股間で興奮を最高潮にした後、射精準備の段階を通過して射精し始める。

精管膨大部が精液を送り出す直前、エルキドウは左手の細長い白く美しい指をスタッフの肛門へ強引につき入れられた。中指で肛門から数センチの前立腺を怪我をせず痛みを感じないギリギリのレベルで潰す。

ぐりゅんっ

普通にやればサーヴァントの力で前立腺は使い物にならなくなってしまうだろう。しかし的確な動作と制御で前立腺は潰された。

「おぐうおっ!!?!」

あまりの衝撃にスタッフはエルキドウの女性器を舐める余裕もなく首をのけぞらせた。

膨大な精液が一気に射精管を通る。

通常の数倍の粘度と量で普段のようにスムーズな射精には至らず、一泊置いた射精だった。男性スタッフもはや恐怖を感じた。しかしそれもつかの間、ポコポコと尿道を無理矢理かき分けて精液が尿道口から爆発的に射精される。

ぼびゅっ!びゅぐっ!びゆるるぐっ!びゆる!

スタッフはたまらず勢いよく腰を打ち上げた。

エルキドゥの誤算としては、スタッフの腰が予想以上に動いて喉奥へと亀頭が侵入しそのまま食道付近で爆発射精が始まったことだった。

ぐぼっん！

(「ぐえっ！おごれっはっ!?)

流石に射精やフェラチオを体験することなどは今までになかったので精液がどう言ったものなのかも知らなかつた。食道へ吐き出された汚液はそのままエルキドゥの擬似的な胃袋直前にたまり、今度は射精しながら男性器が反射的に引き抜かれる。

「ぐほっおゝ！」

咳き込むエルキドゥ。

彼も一応呼吸するサーヴアントであるがゆえに、気管へ精液が入れば咽せるのは道理だった。そのまま素早く口外にペニスは吐き出され、エルキドゥの顔に精液がばらまかれる。

彼の美しい陶器のような頬や唇、額、前髪が汚される。

白濁液は大量に出され、エルキドゥは鼻から逆流した精液をたらりと落とす。

「ふっ！うゝっうゝ！」

息を荒く、意識を朦朧とさせたスタッフは最高の、まさに人生で最高の射精を味わい

ながら数度大きく男性器を痙攣させながら仰向けに脱力していた。

エルキドゥはそんな彼を見ながら、口の中に広がる苦味と食感を多少楽しみながら立ち上がる。

「あつ……すみつま」

スタツフは辛うじて立ち上がるとうとするが腰は引けており膝には力が入らない。エルキドゥはそんな貧弱な人間を見ながら、口の中にある大量の精液を飲み込む。

「んっんぐ。………喉越しはあまりよくないけれど独特な味だね。」

そんなエルキドゥを見ても流石にスタツフは再度興奮することはできなかったがそれでも自分の精液を飲み込んでくれたエルキドゥに何か思うところがあった。

「ボクの中で君の何億もの精子が活動しているのを計測できるよ。若くて生きがいい、人間の女性相手ならいい子が生まれそうだね。」

エルキドゥは立ち上がって髪や顔に未だ張り付いた白濁液を気にする事もなく、服を着始める。すでにデータ収集の訓練は終わっており後は帰るだけと言ったところだ。

「ただもちろんあくまで服を着ただけですぐに立ち去ろうとしたわけではなかった。」

「君は立てるか？」

「も……まつ……ふう。」

「おおよそ凄まじい射精をした後で本来であれば意識を未だ保つので精一杯ではある

ものの、若さからかなんとか上半身だけ起こして手で支える。

「いいね。」

「あつの。」

「ん？なんだい？」

「ありが………とうございました。」

スタッフはなんとなくピロートーク中のような状況でお礼をいうのはどうかとも考えたがそれはある意味では最善の選択でもあった。

「いや僕も君たち人間を知りたい機会だった。」

エルキドゥにとつても新鮮な体験が数多くあった。やはりシヤムハトから聞いていたこととはいえ実際に体験し感じることは違かった。別段マスターとこう言った行為をすることを考えたことはないが彼が望むならともかく今はこういう経験で十分だろうと思う。

そういう意味ではこの体のメリットはまた一つ増えたのかもしれない。

「君たちカルデアのスタッフはマスターの援護をする大事な価値ある人材だ。だから君たちを助けるはボクにとつて当然の事さ。」

「もしまた何かあったら自由に言ってくれていいよ。他のスタッフでもボクは構わない。」

スタッフはそれを聞いて驚きと少しの残念さを感じた。

もちろん驚きといえばこれつきりなイメージを持っていたからだ。それが「性欲処理を快諾」してくれるとは考えても見なかった。残念というのは単に個人的な感覚で、独占欲からくるものだ。誰だって特別な存在と特別なことをしたら、自分は選ばれたのではないかと思ってしまうものだろう。しかしいまはどちらかといえば未来への期待感が彼を支配した。

「それってっ！」

「ん？……ああ生殖行為もいいよ。今は君のストレスの解消を手伝うだけだったに過ぎないけれどそれで仕事が効率よく回るのならボクは構わない。もちろんマスターとの約束や戦闘が入っている時には優先順位をつけさせてもらうけれどね。」

エルキドウはひたひたと歩いてドアの方へと行く。

「まあボクと生殖行為と言ったってボクは兵器だから子供を作ることはできない。気軽におもちやで性処理をしていると考えると考えてくれればいいさ。」

「そんなことは。」

少し浮かない顔をしたスタッフを見てエルキドウは何を思ったのか理解できなかった。彼が何を気にしてそんな表情になったのかわからないままそれでも飄々と話を続ける。

「ああそれとこのことは基本マスターには伝えないでくれないかな？　そういう風に頼まれているんだ。」

まだ新人スタッフはカルデアの裏の研究については知らない。

よってマスター自身や他のサーヴァントとのことだと勝手に勘違いする。

「わかりました。」

「じゃあボクは行くね。」

エルキドゥは顔や髪についた精液を拭うことなくその場を後にする。

彼にとつては精液も等しく人間の正しい生殖器から出たものであり汚いものという認識はなかった。ただサビに繋がったりするのは困るので霊体化してすぐに部屋へと戻りシャワーを浴びた。

その日結局新人スタッフはなんとか職務に戻って、深夜まで仕事に勤しみ、その後2時ごろエルキドゥの個室を尋ねたのだった。

# エルキドウのとある日々 後編

同年5月20日

部屋には小さな、されどリズムのいい水音が響き渡っていた。

時刻は夕食の時刻を過ぎて20時半。

カルデアでは基本的に全員で夕食をとるようにしている。もちろん何か用事があるものや体調が悪いものは別として、マスターと一緒に夕食をとるのを楽しみにしているサーヴァントたちは多かった。

別段エルキドウはマスターと一緒に夕飯を取りたいわけではないものの、多くの英霊や人間が集まるその時間帯は彼の知的好奇心を満たすには効率が良く、その時間に食べるようにしていた。

もつとも本来飲食不要なサーヴァントが多いのだが、皆異文化の料理を楽しんだり様々だ。最近はどういうわけかものを食べ、魔力を生成し、排泄を行うサーヴァントも

また増えた。

話が逸れてしまったが、結局そういうカルデアの習慣があるという話だ。

エルキドゥが女性サーヴァントに囲まれたマスターを食堂の端で見ながら羊のミルクを飲んでいると対面に座るものが現れた。

「お前はいつまでその姿でいる気だ？」

「ギル……。」

英雄王ギルガメッシュ。偉大な賢王であり、エルキドゥを唯一の親友と語る英雄の中の英雄。

そんな彼がぶすつとした表情で麦酒をあおる。

「別に、まだしばらく楽しくんでいたくてね。」

「俺は面白くない。」

そんなはつきりとした意見にエルキドゥはまるでいたずらをし終わった子供のよう  
に口角をあげて語る。

「ボクはギルのそういうところを楽しんでいるよ。」

ふんつと英雄王は顔を逸らし面白くなさそうな顔をする。彼はなおのこと面白くない回答と同時に「兵器が楽しむ。おかしなことだ。」と考えてちらりと目の前の神造兵器を流し見する。

小さくはない豊満な胸囲。

丸みを帯びた体つきとどこか愛らしい雰囲気。それでいて女を感じさせないいつもの立ち振る舞い。

「……………ま、ほどほどにな。」

英雄王はいまきたばかりだというのに早々に立ち上がって食堂を立ち去る。

エルキドゥはそんな親友を後ろから眺めながらミルクを口に含んだ。

(なんだらうね……………いや、ギルとボクはそんな関係ではないし。)

英雄王が女の外見をした親友に欲情することがあるか？

否。

彼は当然欲情したわけではない。しかし何も思わなかったわけでもない。女性という慣れない性別にエルキドゥの危うさを察じたのもあるし、同時にカルデアにも不信感を持ったからである。未来を見ることのできる英雄王ギルガメッシュでもカルデアというイレギュラーを全て把握できるわけではないということだ。

エルキドゥはしばらく食堂でミルクを飲みながら読書が続けると、またも対面に座るものが現れた。最初のコンマの間ギルガメッシュが戻ってきたのかと思いきや、見慣れぬ平凡な若者だった。

彼はカルデアに勤めてすでに5年になるが未だスタッフの中では若輩に位置する者だった。軽い自己紹介を経て、彼は口火を切る。

「その……大変恐縮なんですが。」

「何かな？」

エルキドゥは爽やかに言葉を待ち、読んでいた本に葉のしおりを挟む。

あたりは様々な英霊が入り乱れ、お祭りのように盛り上がっていた。

「噂を聞いて……………」

「どんな噂だい？」

エルキドゥにとつて噂という概念は少し楽しめるコンテンツとかしていた。英雄王と親友であるエルキドゥは昔から様々な噂で包まれ続けていた。

古代メソポタミアの人々はエルキドゥの美しい見た目を女性と疑うこともあり、英雄王の側室だとか妾だとかそういう噂が耐えなかったのだ。

もちろん自動防御機構の様にギルガメッシュが即断して処されていたが、当のエルキドゥからすればこれまた「人間は面白いことを考えるんだね。」と笑って楽しんでいたのだ。

「エルキドゥさんと……………できるっていう。」

彼は尻すぼみになりながら言葉を紡ぐ。

当然だ。もし仮にその話が噂でなく本当に嘘の塊なら脆弱な人間である彼は即刻殺されてもおかしくない。

だがもちろん「嘘」ならだ。

「おや、君もボクを使いたいのかい？ いいよ。」

「ほつホントですか？」

スタツフは興奮のあまり長椅子から立ち上がり机に手をつけて身を乗り出す。

沐浴しているかのようないい香りがエルキドウから発せられて彼はとつさに秘部に血が集まるのを感じ取った。

「もちろん。それで君のストレスが解消されて仕事が効率化されるならいいことだと思うよ。……しかしわからないなあ。人間の女性と生殖すればいいじゃないか。」

あたりは依然として騒がしく2人の会話にきにもなれば、誰も聞いてすらいなかった。

エルキドウにとっては生殖は自然の摂理であり、当然のものだと考えている。もちろん人間というある程度知性を発達した生命体があらゆるしがらみを抱えているのは理解した上でだ。

「そつそんな俺は……エルキドウさんがいいんです。」

「そうかい？役に立って嬉しいよ。」

スタッフは熱のこもった目をエルキドゥに向ける。その目に何を宿しているのか彼は理解できなかったが、おいおいわかればそれでよしとエルキドゥは本を光の粒子に変えて、収納した。

空のコップを返却口に返すと、スタッフに目を向けながら手を拱いて一緒に食堂を出る。

そこからは冒頭の通り、エルキドゥの一室に直行だった。

エルキドゥは強力な感知能力を持っているので廊下に誰かが来ればすぐにわかる。その上運よく食堂からはだいたい離れた場所にある個室なのでわざわざくるのはそもそもエルキドゥに用事のあるものだけだった。

ぐつちゅつちゅくつぐつちゅ

エルキドゥは若いスタッフの屹立したペニスを口に含み舌を使って的確に刺激を与えらる。

(以前のスタッフより一回り大きい。)

(人間の個体差はこんなところにも出るんだね。)

エルキドゥは鼻の奥の方から抜ける雄臭さと発酵臭に何も思うことなく口淫を続けた。

「うっおお！」

男性スタツフはベッドに座りながら容赦ないテクニツクで舐めまわしてくるエルキドウに足をピシツと伸ばしてのけぞる。

両手は先ほどの遠慮しがちな性格を塗り替える様になつしりとエルキドウの頭をつかんで離さない。

サラサラで柔らかい緑の髪が男の欲望の指に絡みつく。

エルキドウの舌には大量の雄汁が唾液と絡まって集まっておりそれを舌先で皮の間に塗り込んで攻めあげる。

すでに先ほど1度目の射精を迎えているにも関わらず、彼の性器はパンパンに膨れ上がり、エルキドウの喉奥を抉ろうと奥へ奥へと進んでいた。

「もっただっああっ！」

大量の白濁液が迫り上がるのを感じ取り、ラストスパートをかける。

痛くない程度に睾丸を軽く揉み、口をすぼめてピストンを加速させる。  
ちゅっぽっ！ちゅんっ！ちゅっぽっ！ちゅんっ！

美しい唇は酸っぱい液体をあふれ返しながら、男の隠毛に埋れ、中はまるで真空かと思ふほどに吸引される。

スタツフはエルキドウがそんなことを考えるわけがないとわかつていつつも、精液を

ねだられている様でさらに興奮し、ついに絶頂を迎える。

「だつてるっ射精ます!!」

2度目の絶頂はぼこぼこ尿道をこじ開けて爆発した。

大量の白濁液がエルキドゥの先ほどまで清潔だった口内に吐き出され、頬の内側の壁をザーメンで汚していく。

スタツフは夢中でエルキドゥの頭を引き寄せて、かつ腰を前に突き出すので案の定イラマチオの状態で細い喉と食道をこじ開けた。

(おっ)えっ!ふう。っ……につんげんは好きだねこれ。)

何度かスタツフを相手取って2桁。

半数以上が反射的に絶頂時こういった射精していた。

本能がさせるのか、何か共通点などないかエルキドゥは考えていたが今のところ見つかっていない。

大きく嚙下する。

ごくりという音を鳴らしながら、精液が胃の中へ収まる。

喉の動きでスタツフはまだ敏感な龟头を擦られて嬌声を漏らす。

汗と雄臭い陰茎の根元が鼻にぶつかって鼻も口も無茶苦茶に犯され続けているにも関わらずエルキドゥは顔をしかめることなくゆっくりと射精が終わるのを待つてペニ

スを口から引き抜く。

ぐろろおっ

しつかりと口をすぼめて、陰茎が唾液や胃液、精液で汚れたままにならない様に口先でこそぎ落としてから完全に口を離す。

スタツフは息も絶え絶えといった様子でぐったりとベットに倒れこんだ。

「……………大丈夫かい？」

「ふっ……………ふう……………すっごかったです。」

ゆつくりと脱力していく陰茎を見ながら、エルキドウは横においてあるタオルで口元を拭く。

「でも君……………僕と生殖行為したいんだよね？」

「そっうです。」

まだ直球で言われるのに慣れていないのか目をそらす若いスタツフ。

「まあ2回出したし今日はやめとく？」

「いえっ！」

先ほどの脱力具合から打って変わって、ベッドから立ち上がりエルキドウに対面する。

裸のエルキドウは明かりのない部屋でも月明かりで美しさをなくすことなく、むしろ

増すように立たずんでいた。

勃起はしていない乳首も淡い赤い色で性欲を掻き立てる。スレンダーな見た目に反して大きいおっぱいに、一切茂りのないどこか幼さを感じさせる秘部。

スタツフは思い切つて、抱きしめる形でエルキドゥの臀部を手で掴み体を寄せる。

「セックスさせてください！」

「はいよ。」

エルキドゥの即答した口をスタツフはすぐに口で塞ぎ、舌を絡ませる。

自身の精液の味など気にすることなく、考えることもなく、エルキドゥの唾液を味わいながら右手をエルキドゥの股間に持つていく。

しかし全くといっていいほど濡れていない。

「……………まあボクは兵器だからね。」

それでも諦めきれなかったのか、そのままベッドにエルキドゥを寝かせて、近くの箱に手を伸ばす。

「ああ気にすることはないよ。ボクは妊娠しないし、周期的に見れば安全日だからね。」

エルキドゥは足を曲げてM字開脚の体勢をとる。

光の粒子を右手に集めると、手にはローションが握られていた。

キャップを開けて先端の口をエルキドゥ自身の下の口に強くあてがう。



ずぶちゅんっ！

冷たさすら感じる常温の膣道はこじ開けられ、スタッフの性器を飲み込む。

一気に秋がなくなつた事で接合部からローションはあふれる。

エルキドゥは先ほどまでなよなよしたスタッフが一人のオスとして腰を振っていることに驚きつつも彼が気持ちよくなるよう、腹圧をあげる。

ずつちゅんっ！ずつちゅんっ！とちゅ！

エルキドゥのフラットな感覚とは裏腹に全く愛液を出さない膣も激しいピストンでせつせと頑張っているように見える。

膣壁は大きい肉ヒダや小さい肉ヒダをランダムに兼ね備え、一直線でない蛇行した膣道を一本の棒が一直線へと塗り替える。

(いついねっ。これが君の生殖行為か。)

エルキドゥは何度かすでに性交渉をスタッフと終えているが、それでもスタッフごとに様々な性癖や趣向があるのを知って多少驚いていた。

生物の生殖なんて決まり切つた習性でしかないと思つていたので。

今までの遠慮など感じさせないほどに、エルキドゥの白い美しい曲線の胸を歪ませ、最奥の秘められた都をノックし続ける。

時折子宮口付近をかすめ膣壁をえぐる動きは彼の長所ではないかとエルキドゥは性

能を見定める。

「もっも、うっでまっ！」

エルキドゥが一つのオナホとして自身をたとえているならば彼はまさしく人理最高のオナホである。そんなものにきつく締め上げられながら吸引されるように動かれれば限界などすぐにきてしまう。

ピストン運動が早まり、エルキドゥは最後の締めだと足をスタッツの腰に巻きつける。

サーヴァントの力で腰をこの上なく密着させられたままの射精。

ぶびゅっびゅるるっ！ぶびゅっ……………びゅるっ……………びゅっ！

エルキドゥの膣で精液がまかれる。

(結構……………膣内射精……………でるね。)

エルキドゥの子宮内にスタッツの精液が流し込まれる。白濁液はそのまま子宮の内壁を汚しながら溜まる。

数度にわたる痙攣の後、尿道に残った精液すら、膣道の蠕動で搾り取り、陰茎を引き抜く。

今の今まで平均より少し上のサイズの男性器を飲み込んでいた美しい淫らな恥丘はまたびつちりと閉まった。

しかし一拍おいて膣道の締りからから、精液が少量、とろりとあふれ落ちる。

エルキドゥの白い透き通った肌に乗る汚液はなんともそそのるものだったが流石に三度大量射精したスタッフはそのまま眠りについた。

「今日はここで寝るといい。あしたの仕事も頑張ってくれたまえ。」

そういいながら体をずらしてスタッフを持ち上げ布団をかぶせる。

もちろんローションと精液で汚れた陰茎は綺麗にしてあった。

浴室へと歩いていく彼の股間からはどろりとザーメンが垂れ落ち、点々と床に跡を残していた。

同年6月1日

エルキドゥは修練場へと赴いていた。

マスターである藤丸立香と他サーヴァントたちで構成されている。

ただ一つ致命的なところといえば、その日のローションで敵クラスはセイバー、よってアーチャークラスのサーヴァントを連れて訓練にいくべきはずが、一騎、エルキ

ドウを編成に組み込んだ状態で開始してしまっていた。

「気にすることないよ。ボクは強いからね。」

「でも相性不利だし……。」

藤丸が申し訳なさそうな顔をしてエルキドウに語りかける。

編成ミスは確かに藤丸のミスではあるが、それを覆すことができるほどにエルキドウもまた強い。

「他のアーチャーもたくさんいるし、ボクはいい訓練になると思っているからさ。」

エルキドウ自身運悪くあまり体調のいい日ではないものの、所詮は修練場。

藤丸もいつまでもよくよくしてはいけないと腹をくくって、他のアーチャーたちに援護を頼んでいた。

「マスターっ!」

誰の掛け声か、しかしその一言でエネミーを感じ取りエルキドウは藤丸の前へと出て、骨の刃を光の剣で止める。

(重いっ!)

正面から受け止めるのを棄却し、力を受け流す。エネミーは竜牙兵。エルキドウはすぐさま戦闘演算を開始し、左足を軸に前蹴りを入れる。

反発を利用して後方バク転をし距離をとる。

「……………無事かなマスター。」

「あつありがとう。でも一体どこから…………。」

アーチャーの一騎が遠隔射撃で竜牙兵にダメージを与える。一撃ではやれなかったが3撃ヒットしたところでよるめいたところにエルキドゥが距離を詰める。

地面からの鎖の射出でとどめを刺した。

黒い粒子へと消えるエネミーを確認するも、すぐに直上より膨大な魔力反応を検知する。

(この魔力量つ……………なんだっ!?)

エルキドゥは珍しく戦慄する。

およそ修練場で感じ取ることのないありえないレベルの魔力量は当然アーチャーたちも流石に気づいた。

轟音とともに藤丸たちの目の前に嵐が現れた。

それは、見上げるほどにでかい巨躯と、殺気を纏い、叫ぶ。

「VaaaaaGaaaBaGAa!!」

咆哮による恐怖と音の振動で足の力が抜ける藤丸。しかし膝をつくことはなかった。人理を修復した男のなせる技かもしれない。

「うっぐ……………」

ゆっくりと息を整え、覚悟を携える。

もはやパニックになる暇などないのだ。

すぐにアーチャーたちに攻撃の指示を出す。藤丸自身もガンドを放ったり援護して一時的に距離をとる。

「エルキドゥ……あれなんだかわかる？」

小さな声で呟く藤丸は目をエルキドゥに向けることなく目の前の化け物から目を離すことはなかった。最古の文明からやってきた兵器のデータベースに何かないか問う選択は間違っていない。しかしながらエルキドゥは首を振った。

「あんな魔獣は神代でもほとんどいませぬね。」

撤退を考える藤丸だが、今日最大のミスに気づく。

カルデアとの通信ができるブレスレットが彼の腕にはなかった。

「……………マスター。アーチャーの皆さんにバフをボクにかけるように言ってくれませんか？」

「エルキドゥに？」

「ええ、相手のクラスがなんだかわかりませんが、しかし強力な宝具であるボクは神と人類の脅威に対する特攻があります。」

目の前の生物がなんなのかわからないが間違いなく脅威ではある。他のアーチャー

もまた様々な宝具を持ち合わせてはいるが、多数のエネミーに対するレンジを備えたサーヴァントばかりで単体のエネミーを落とすには少し心もとない。

強力な単体宝具を持ったエルキドゥが一番可能性を持ち合わせている合理的な判断だった。

「……………わかった。でも無理はしないでね。」

「もちろん。」

エルキドゥは即座に駆け出す。

すぐに周りのアーチャーたちは強化のバフをかけ始める。対象は移動する宝具。本来止まっている相手にかけてほうがバフをつけやすいのだがそんなことを言っている余裕はなかった。

高速で移動するエルキドゥに特定の魔術を用いるのは至難の技だがさすが各々英霊といったところでエルキドゥがちょうど攻撃態勢に入る瞬間の地点を読んで行使する。

しかしその時、戦闘方向の右手側から新たな勢力が湧き出る。

大量の竜牙兵が、駆け出したエルキドゥとマスターたちの間に入り襲いかかる。

感知能力の高いエルキドゥが見落とすなんて何かの間違いかと思ってしまうが、事実見落としてしまったのだからどうしようもない。

背後のマスターたちが危機だと一瞬目標から目を話した瞬間、前に顔を向けるとそこ

には巨大な「牛」がいた。

(なっくに……!!)

エルキドゥはもう少しで宝具展開に入るタイミングの地点だった。未だ距離はあつたはずなのに一瞬のすきで距離を詰められたのか。

そして災厄はさらに降りかかる。

本来エルキドゥを支援するための攻撃に特化された魔力が「牛」に当たる。エルキドゥが宝具に入るタイミングの地点にアーチャーたちが打ったバフ。

それはあろうことかすでに脅威なエネミーをさらに強化してしまう。

弾き飛ばされるエルキドゥ。

最悪かこの牛のクラスはセイバー。

エルキドゥは意識を失った。

エルキドゥが目を覚ますと、そこは洞窟だった。

大きな空洞。暗闇の中とても静かだった。

最初こそマスターの気配を探したが、半径2kmに反応はない。

いやむしろ、近くの魔力反応に気づく羽目になる。膨大で強力な魔力反応。光を灯す。

目の前には角。

大きなねじ曲がった角があり、4本の蹄を携えた牛がエルキドゥを見ていた。

「君は………なにものなんだい。」

不思議と落ち着きがあるのは、戦力比を冷静に分析しているからである。敵はセイバー、先ほどのアーチャー総出の強化魔術でさらに強くなっており、もとより魔力量が多い。

援護なしでは勝てるか怪しいものだ。

牛は無言でエルキドゥを見つめると、突然猛り狂ったように突進してくる。

なんとか身をよじって回避しようとするが間に合わない。

弾き飛ばされ壁に叩きつけられる。

「いっつはあつ!!」

エルキドゥは急激な圧力で潰れた肺から空気を強制的に抜かれる。重力に従い床にどざりと転がった。体に傷はないものの、マスターと距離があるからか、はたまた場所に関係するのか力が出ずらい。

べちやりと美しい緑の髪に何かが落ちる。  
嗅いだことのある臭いだ。

(これ……は。)

顔を上げるとそこには陰茎があった。

長く大きい赤黒い陰茎はまさに雄の頂点のように立派であり、状況を忘れ見入るほどだ。

血管はエルキドウの指ほども太さがあり、竿全体に張り巡らされていた。

先端に向かって細くなっていきまるで触手のようだったが硬さは人間の比でなくまるで岩だ。

根元には輪っかのようなコブがあり、その先にとつともなく大きい睾丸がぶらさがっていた。

(こっこんんな性器もあるの……か。)

エルキドウも流石に初めて見る牛の生殖器。もしかすると何か特別な牛なのかもしれない。

彼の髪に落ちたのは先端からいまもなおとろりと垂れている尿道球腺液。

そんな中エルキドウは先週言われたことを思い出していた。

「エルキドゥさん少しいいですか？」

カルデアの女性スタッフと廊下ですれ違った時のこと。

「最近仕事をお願いできていなかったのですが。」

「ああ、なんでも言ってくれて構わないよ。」

エルキドゥは女性スタッフも惚れ惚れするようなすがすがしきで聞く前から快諾する。

本来廊下で言うつもりがなかったスタッフではあったが、とっさをお願いのような形で言ってしまう。

「では……最近よく戦闘に出られているエルキドゥさんには精液の採取をお願いしたいんです。」

「ああ、搾精任務っていうやつだね？」

「はい、できるだけ様々な生物の精液が必要でして。ご迷惑おかけします。」

「わかってるよ。大丈夫。」

エルキドゥはそういいながらにこりと笑顔で返事をした。その後藤丸に呼ばれてそ

の場を後にする。

そんなことを今思い出してエルキドゥは自重気味に笑った。

（まるで願ったり叶ったりな状況ではあるね。マスターは心配だけど他のサーヴァントがいるだろうし、隠さなければならぬならむしろマスターはいないほうがいい。）

（それにこの個体。普通の生物ではない。何か特別な個体なのだと思えば大いにカルデアの研究とやらに貢献できそうだ。）

（兵器は役に立たなければ意味がないんだ。）

エルキドゥはまるで言い聞かせるように思考する。

すでにエルキドゥの頬にはガチガチに固まった牛のペニスが擦り付けられていた。ゆつくりと服を脱ぎ、大きい乳房をあらわにして岩に腰掛ける。

裸で岩に体を預けるなんて普通は怪我をするが彼には関係はない。

おおよそ牛のペニスの先端がエルキドゥの秘部にあてがわれるが、挿入できるか微妙なラインである。まるでもう一つの足が股の間にできたかのようにサイズ差がありす

ぎるのだ。

ぶびつとびゆごぶつ

しかしそう考えるうちに、先端からはまるで尿のようにカウパーが漏れ出す。

エルキドゥの全く濡れていない膣口を水圧でこじ開けなかに膣内に浸透していく。

(ものすごい量だ……これなら)

エルキドゥは右手で竿を支えるとゆっくりと挿入させる。

ぐぼりゆつ!!

がしかし野生がそんなゆっくりとした丁寧な動作を待つことなく、全てを一気に

貫いてしまう。

「ぐあうっ…ふぎっ!」

普段飄々としたエルキドゥの表情とは打って変わって激痛と驚嘆が混ざった声が漏れる。体は衝撃で仰け反り逃げようと反射的に腰を引くが後ろは壁で難しい。

蛇行した膣道をかき分けて一気に子宮口を突破する。

ごりゆつ!

「あぐあああつ!」

痛みというよりはまさに衝撃。

振動だ。

(おおきすぎるっ！)

エルキドゥは大きな胸を揺らしながらすぐに始まるピストンに耐える。

どごちゅつぽちゅ!!

いくら宝具、いくら兵器といってもこんなものを受け入れる事など想定していない。  
擬似子宮は押しつぶされ、入口をこじ開けられる。

(なっなにがっ!?)

普段冷静沈着なエルキドゥも新感覚を味わって混乱し、エラーを弾き出す。

(下半身っから来るっこれっはなんっ!?)

不規則にcomingの信号はエルキドゥの脳をみだし、そのエラーが体を燃え上がらせる。

牛は凄まじい勢いと速度で腰を振り、番いを意識して種付けの準備に入りつつあった。

エルキドゥは感じ取る。

これが「雌」という種の喜びなのかもしれないと。

ずっと分からなかった。なにがそんなにいいのか。子を残すこと以外に生殖行為の意味などないと思っていたのだ。

だがまぎれもなくこの牛に、まるで道具のようにエルキドゥは食られていた。

(下腹部がっあがっあぶっいっ!!)

今までスタッフを相手取ってきて感じてくることのなかった感覚を野生の獣との生殖……交尾で初めて知る。

(ぐっうっこれは人類がっ好むのも、っわがっる！)

エルキドゥの下腹部が疲れるたびにボコッと盛り上がり、先ほどまでぴっちり閉じていた秘所はもはやだれを垂らしながら大口を開けて雄を貪っている。

(ぐっ比べ物にならないっな。全っちよう……62cmっ！直径12cmっふっとい！)

少しずつでも衝撃には慣れ、学習していく。

未だ擦り付けられる陰茎からくる謎の信号は頭をパンクさせるに値するが、それでも兵器としての任務遂行。データ収集を怠ることは許されない。

(高魔力っ反応……あのサイズの睾丸……生物はすごいな。)

本来であればこの牛はそこまで大きくなかった。睾丸もそこまで化け物じみたものではなかったのだ。しかしアーチャーたちの強化のバフで生命力そのものを強化され、精子は大量に生産され続け、海綿体へと送られる血液量は数倍に膨れ上がり、果ては強制的な発情期へと移ったのだ。

もちろんこれは幸運なこと、これがなければ普通にエルキドゥは破棄され座に返されていたかもしれない。

「ごちゅつどちゅんっ！どぼちゅつ！

「ぐっふぎっ……あっぐああっあああ！」

長いストロークで性器を突き入れ、引き抜き、また突き入れる動作を延々と繰り返しながらエルキドウの頭ほどもある睾丸を大きく揺らす「牛」。

(あっ)

睾丸がひととき大きく脈打つのを感じ取る。

血管がより浮き出て、性器を包む皮膚を盛り上がらせて中で何かが移動しているのを悟らせる。

凄まじい魔力反応。

その魔力がゆっくりと迫り上がるのを感じ取る。

牛のピストンが速くなり、エルキドウはさらに大きくなるエラーで混乱する。

(こんな高魔力っ……普通の女性サーヴァントならっ受精確実だねえっ！)

「だっだすのっかい？」

牛は返事などせずとも、動きでわかるものがある。

それはスタツフもそうだった。射精直前に叫びをあげて雌を屈服させようとする。

「いいよっ！射精すといいいっ！」

エルキドウは体を支えながら射精に備える。

最初こそカルデアのスタッフに渡されていた搾精手順に従ってコンドームと呼ばれるものを使う気であったのだがそんな余裕もなければ、「僕自身がゴムみたいなものだよな。」とそのまま生でするに至っていた。

最後の一押しだと牛がぬろろろっ！と腰をひく。

エルキドゥはまるで内部機構が引つ張り出されるような感覚になりながら覚悟した。  
どつごちゅんっ!!!

人間の女性なら内臓破裂で即死する突きを子宮で受け止める。

「おっおぎおっ!!!」

エルキドゥは過去最大の衝撃を内部から敏感な部分に受けて普段は絶対に出さないであろう嬌声をあげて目を回す。

「V a a a G a a A A v V a a A A A A a a a a a!!!」

咆哮による振動を加算しながら、牛の陰茎はひときわ大きく膨張し、エルキドゥの膣道をさらにこじ開けながら拡張する。

しかし射精と同時に咆哮をあげたわけではなかった。

射精管を通り、尿道を登る高密度な魔力を含んだ牛ザーメンは、あまりの濃度で詰まってしまう。それでも射精の勢いが尋常でないためゆっくりと尿道から発射される。

ぼびゆりゆっ??むりゆりゆりゆっ??ぶりゆっ??むりむり??びゆりゆっびゆぶう??

ぶっ??

寒天のような黄ばんだクリーム色のザーメンが尿道を押し広げながらエルキドウの子宮口にぶち当たる。射精の勢いもあるが、物理的に押し広げられながらエルキドウの小さな子宮を満たしていく。

(ま、魔力がたっぷりよく濃度がつ?)

高い感知スキルを持つエルキドウは自分の機体内でなにが起こっているのか正確に感じ取ることができる。すでに10mlで3発の宝具を撃てるほどの魔力。

それが子宮内へ注がれる。

エルキドウの子宮内容量は3.4mlが限界であり、当然ゆっくりと拡張されていく。

液体ではない、ゼリー、いやもはや固形の高魔力高濃度ザーメンがエルキドウの重要器官を汚していく。

「ふう、っ!」

ありえない信号が乱雑に強く悲鳴のように脳に届く。

回路を焦がし、エルキドウはエラーで埋め尽くされた海を溺れるように耐え凌いでいた。

びしゅっ!とうしゅっとううっ!

エルキドゥの尿道から潮が吹き出す。それは初めての絶頂であり初めての潮吹きだった。やがて透明な潮が黄色い尿へと代わりそれでもまだまだ出続ける。

初めての失禁すら終えて、まだ射精は続いていた。

エルキドゥ自身の絶頂も延々と続き、尿道から吐き出すものがなくなっても吐き出そうとヒクヒクしていた。

「ごっこれがっ！ぜっちよおっお。お。お。お。っ？」

小さな陰核をめいっばい勃起させ、あれほど動くことのなかった乳首が天を向いて誇張していた。

ぶりゅりゅっ??びゅぼっ??びゅぐうっぐびいっ??ぶびゅっ??どびちっ??ぐびゅううう??  
う??

もうエルキドゥの数時間前の子宮サイズは超えており数倍に膨れ上がって、彼の美しい腰のラインをいびつに曲げていた。

腹部が盛り上がり、かといって妊婦のような全体的な膨らみでもない。

まさに子宮が膨張している不自然な膨らみ方。

なんども痙攣を繰り返し射精しつづける牛。

その下に全てを蓄えつづける兵器。

(ごっごんあっ……なっ?!?45億っ!?)

成人男性の精液に含まれる精子の数は1mlあたり1億前後なのはエルキドゥでも知っている。それはスタツフとの交合でも把握済みだった。しかしこの「牛」はその45倍の濃度を持った精液をエルキドゥの膈内で排出し続けている。

(453……512……600mlをつ超えてっ！)

エルキドゥは自身の子宮がどれほど飲み込むのか知的好奇心と損傷によるデメリツトを想像してエラーと一緒にゆつくりと意識を手放す。

そこから結局10分間ずっと射精されつづけ、エルキドゥはぐったりとしていた。

ゆつくりと先ほどより少しだけ縮んだ牛のペニスが引き抜かれる。

それでも人間の数倍あるサイズのペニスは引き抜く際、人と違って傘がないのでスムーズに抜けた。

ずろろおっどりゆるんっ！

「うぐっひあっ！」

突起が敏感になつている膈道を撫で上げ、エルキドゥは朦朧とした意識を叩き起こされる。

まるで子宮に栓をしたかのように逆流した精液が溢れるというようなことはなく、尿道球腺液などがぽっかりと空いた膈口からたらりと垂れるのみだった。

ゆつくりと時間をかけてまた一筋の淡いピンクの線に戻るエルキドゥの性器はたら

ふく飲み込んだ精液を戻すことはなかった。

いつの間にか牛は消え失せ、エルキドゥは小一時間エラー処理と身だしなみを直すのに時間をかけることとなる。

「エルキドゥー！」

藤丸がエルキドゥに駆け寄る。

藤丸たちははぐれた後1時間かけて大量の竜牙兵を撃退していたのだが、2時間経つても一向にエルキドゥが見えずだいぶ心配していたらしい。もちろん修練場で最悪な状況に至ってもマスター以外はカルデアで復活できるので大丈夫であるのだが。

搜索途中になくしたブレスレットも故障のないまま見つけることができて、カルデアと連絡をとってエルキドゥの霊基反応が消えていないことは確認できていたらしい。

ただ途中大きな魔力反応がゆっくりと消滅して、エルキドゥの魔力反応が桁違いに増えたことから苦戦していたわけではないことは察せていたらしい。その後本当に誤差レベルの微妙な霊基も新しく確認されたらしいがそれは無視して搜索に専念していたところ合流できたようだった。

エルキドゥは近くマスターに一瞬引いて距離をとる。

「エルキドウ？」

「やあマスター。無事でよかったよ。僕もこの通り怪我はない。すごぶる順調さ。」

「ならよかった。カルデアに戻ろう！」

「そうだね。」

エルキドウは差し出された手をとることなくすつとマスターと距離をとって合流した。

藤丸はそんなエルキドウにさほど違和感を感じることなく、そのことは忘れたが、ついで彼から発せられた濃い臭いには気づかなかつた。